松井田町埋蔵文化財調査報告書第12集

人見大谷津遺跡

――県営畑地帯総合土地改良事業横野平地区に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書――

2002

群馬県松井田町教育委員会

松井田町埋蔵文化財調査報告書第12集

人見大谷津遺跡

――県営畑地帯総合土地改良事業横野平地区に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書――

2002

群馬県松井田町教育委員会

序　　文

群馬県の西部に位置する碓氷郡松井田町は、奇峰妙義山・清流碓氷川等を有する緑豊かな町です。古来より交通の要衝として栄えた松井田町には、古代律令制下の官道である東山道、近世の中山道、そして近代にはアプト式鉄道等により、様々な文化がもたらされてきました。それらが礎となり、現在の松井田町が築かれているわけであります。

さて、ここに報告いたします「人見大谷津遺跡」は、松井田町の南東部の西横野丘陵上に位置しています。今回の発掘調査は、この地域に現在の機械化農業に適合する優良耕地を生み出すための土地改良事業に伴うものです。遺跡地からは、妙義山をはじめとする西上州の山々、遠く上信越の山々を望むことができます。現在では、こんにゃくを中心に町内有数の畑作地帯となっているこの地において、縄文時代より多くの先人たちの生活が営まれていたことが明らかになりました。特に調査区西端で確認された古墳時代前期の住居群は、質・量ともに町内随一と言っても過言ではありません。今回の発掘調査により、松井田町の原始・古代の歴史に新しい１ページを加えることができました。このように一つ一つの調査を積み重ね、私たちが生きている現在までの道筋を確認し未来に伝えていくことが、今の私たちにとっての責務であると考えます。調査された遺跡は二度と元の姿に戻すことができません。本報告書が人見地区の歴史を解明する一助となり、幅広く活用していただければ、誠に幸いと存じます。

最後になりましたが、調査に参加された皆様、報告書刊行に至るまでご指導・ご協力をいただいた多くの方々に、厚く御礼申し上げ序文と致します。

平成14年３月25日

松井田町教育委員会
教育長　小　林　一　郎

例　　言

1　本書は、県営畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　調査地は群馬県碓氷郡松井田町大字人見字大谷津3,190-18他である。調査面積は約6,420㎡である。
3　調査は高崎土地改良事務所の委託を受けて、松井田町教育委員会が実施した。
4　費用は原因者である高崎土地改良事務所が９割、松井田町が１割を負担した。
5　調査期間　　○発掘調査　平成12年度　平成12年９月28日～平成13年３月30日
　　○整理作業　平成13年度　平成13年７月11日～平成14年３月25日
6　出土遺物・資料類は松井田町教育委員会が保管している。
7　発掘調査・整理作業ともに壁伸明（松井田町教育委員会社会教育課指導主事）が担当した。
8　発掘調査に従事していただいたのは、次の方々である。（敬称略）

石井　俊介	岩島　　勝	梅本きゐ子	片貝　誠二	片貝　好雄	神戸　数子
斉藤　澄子	坂田　千鶴	桜井　きん	佐藤なみ江	塩谷　京子	須藤　　進
高橋　　武	高橋　　稔	田中　吉男	長井　　明	中里　徳子	中島　佐吉
新津　昭一	蓮見　利光	長谷　純則	原田　季子	松本　　芳	武者　　勉
山越　梅子	湯本　雪江	吉沢ミサ子	吉本　律子		

9　整理作業の分担は以下のとおりで、壁がこれを補った。
石井　俊介 …… 遺構図作成
斉藤　澄子 …… 遺物復元・遺物実測・拓本・トレース
塩谷　京子 …… 遺物復元・遺物実測・拓本・トレース
中里　徳子 …… 遺物復元・遺物実測・拓本・トレース
壁　　伸明 …… 遺物観察・遺物写真・編集他
10　発掘調査及び整理作業にあたっては、次の方々・機関よりご教示・ご協力をいただいた。（敬称略）
大工原　豊　　井上　慎也（安中市教育委員会）　　片野　雄介（妙義町教育委員会）　　谷藤保彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団）　　安中市教育委員会　　妙義町教育委員会　　群馬県教育委員会文化財保護課

凡　　例

1　各遺構図方位記号は国家座標の北を表している。座標系は国家座標第Ⅸである。
2　遺構断面図、等高線に付した数字は標高を表す。
3　遺構番号は、現地の調査時のものをそのまま用いている。よって、番号がとんだり欠番が生じたりしている。
4　遺構実測図の縮尺は基本的に次のとおりである。
住居１/60・土坑１/40・溝１/200
これら以外については、図中に縮尺を記した。
5　遺物図版中の縮尺は、１/１・１/３・１/６を基本としている。これら以外については、図中に縮尺を記した。
6　図中のスクリーントーン▒は、焼土・炭化物の範囲を示している。
7　縄文土器のうち、図中の土器断面に●を付してあるものは繊維土器を表している。
8　遺物の観察については、縄文時代のものは文章による記述を行い、古墳時代以降のものは遺物観察表を用いて記した。石器については計測表を用いて記した。

目　　次

巻頭写真
序　　文
例　　言
凡　　例
目　　次

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 1

第３章　調査の方法と経過 …… 3

第１節　発掘調査…… 3
第２節　整理調査…… 4

第４章　遺構と遺物 …… 4

第１節　概　　要…… 4
第２節　基本層序…… 5
第３節　縄文時代…… 9
（１）　竪穴住居跡…… 9
（２）　土　　坑……31
（３）　遺構外出土遺物……45
第４節　古墳時代……50
（１）　竪穴住居跡……50
（２）　土　　坑……84
（３）　溝状遺構……91
（４）　遺構外出土遺物……92
第５節　奈良・平安時代……92
（１）　土　　坑……92
（２）　溝状遺構……97
第６節　中　　世……97
（１）　土　　坑……97
（２）　溝状遺構……98

第５章　ま と め ……99

写真図版
抄　　録

挿　図　目　次

第 1 図　周辺の遺跡位置図 …… 2
第 2 図　基本土層模式図 …… 5
第 3 図　人見大谷津遺跡全体図 …… 7
第 4 図　2 号住居跡平面図（1）……10
第 5 図　2 号住居跡平面図（2）……11
第 6 図　2 号住居跡出土遺物（1）……12
第 7 図　2 号住居跡出土遺物（2）……13
第 8 図　2 号住居跡出土遺物（3）……14
第 9 図　4 号住居跡平面図 ……15
第 10 図　4 号住居跡出土遺物 ……16
第 11 図　7 号住居跡平面図（1）……17
第 12 図　7 号住居跡平面図（2）……18
第 13 図　7 号住居跡出土遺物（1）……19
第 14 図　7 号住居跡出土遺物（2）……20
第 15 図　7 号住居跡出土遺物（3）……21
第 16 図　7 号住居跡出土遺物（4）……22
第 17 図　8 号住居跡平面図（1）……23
第 18 図　8 号住居跡平面図（2）……24
第 19 図　8 号住居跡出土遺物（1）……25
第 20 図　8 号住居跡出土遺物（2）……26
第 21 図　8 号住居跡出土遺物（3）……27
第 22 図　8 号住居跡出土遺物（4）……28
第 23 図　10号住居跡平面図 ……29
第 24 図　10号住居跡出土遺物（1）……30
第 25 図　10号住居跡出土遺物（2）……31
第 26 図　1 号土坑平面図 ……31
第 27 図　2 号土坑平面図 ……32
第 28 図　3 号土坑平面図 ……32
第 29 図　4 号土坑平面図・出土遺物 ……33
第 30 図　5 号土坑平面図・出土遺物 ……33
第 31 図　6 号土坑平面図・出土遺物 ……34
第 32 図　7 号土坑平面図・出土遺物 ……34
第 33 図　8 号土坑平面図・出土遺物（1）…35
第 34 図　8 号土坑出土遺物（2）……36
第 35 図　9 号土坑平面図 ……37
第 36 図　10号土坑平面図 ……37
第 37 図　11号土坑平面図・出土遺物 ……38
第 38 図　12号土坑平面図・出土遺物 ……38
第 39 図　13号土坑平面図 ……39
第 40 図　14号土坑平面図・出土遺物 ……39
第 41 図　15号土坑平面図 ……40
第 42 図　18号土坑平面図 ……40
第 43 図　22号土坑平面図・出土遺物 ……41
第 44 図　24号土坑平面図 ……41
第 45 図　26号土坑平面図 ……41
第 46 図　29号土坑平面図 ……42
第 47 図　30号土坑平面図 ……42
第 48 図　東区縄文前期土坑群周辺出土遺物……43
第 49 図　遺構外出土遺物（1）……46
第 50 図　遺構外出土遺物（2）……47
第 51 図　遺構外出土遺物（3）……48
第 52 図　遺構外出土遺物（4）……49
第 53 図　1 号住居跡平面図 ……50
第 54 図　1 号住居跡出土遺物 ……51
第 55 図　5 号住居跡平面図 ……52
第 56 図　5 号住居跡出土遺物（1）……53
第 57 図　5 号住居跡出土遺物（2）……54
第 58 図　6 号住居跡平面図 ……55
第 59 図　6 号住居跡出土遺物 ……56
第 60 図　9 号住居跡平面図 ……57
第 61 図　9 号住居跡出土遺物（1）……57
第 62 図　9 号住居跡出土遺物（2）……58
第 63 図　11号住居跡平面図 ……59
第 64 図　11号住居跡出土遺物 ……60
第 65 図　12号住居跡平面図 ……61
第 66 図　13号住居跡平面図 ……62
第 67 図　13号住居跡出土遺物 ……63
第 68 図　14号住居跡出土遺物 ……63
第 69 図　14号住居跡平面図 ……64
第 70 図　15号住居跡平面図 ……65
第 71 図　15号住居跡出土遺物（1）……65
第 72 図　15号住居跡出土遺物（2）……66
第 73 図　16号住居跡平面図 ……67
第 74 図　16号住居跡出土遺物 ……68
第 75 図　17号住居跡平面図 ……69
第 76 図　17号住居跡出土遺物 ……70
第 77 図　18号住居跡出土遺物（1）……71
第 78 図　18号住居跡出土遺物（2）……72
第 79 図　18号住居跡平面図 ……73
第 80 図　19号住居跡平面図（1）……75
第 81 図　19号住居跡平面図（2）……76
第 82 図　19号住居跡出土遺物（1）……76
第 83 図　19号住居跡出土遺物（2）……77
第 84 図　19号住居跡出土遺物（3）……78

第85図　19号住居跡出土遺物(4)……79
第86図　20号住居跡出土遺物……82
第87図　20号住居跡平面図……83
第88図　23号土坑平面図……84
第89図　27号土坑平面図……84
第90図　28号土坑平面図・出土遺物……85
第91図　32号土坑平面図……85
第92図　33号土坑平面図……86
第93図　西区古墳時代住居群全体図……87
第94図　2号・3号溝平面図……89
第95図　5号溝平面図……91
第96図　遺構外出土遺物……92
第97図　16号・17号土坑平面図……93
第98図　19号土坑平面図……93
第99図　20号土坑平面図……93
第100図　21号土坑平面図……94
第101図　31号土坑平面図……94
第102図　1号・4号溝平面図……95
第103図　25号土坑平面図……97
第104図　6号溝平面図……98

表　目　次

第1表　周辺の遺跡一覧……2
第2表　2号住居跡出土石器計測表……14
第3表　4号住居跡出土石器計測表……16
第4表　7号住居跡出土石器計測表……22
第5表　8号住居跡出土石器計測表……28
第6表　10号住居跡出土石器計測表……31
第7表　8号土坑石器計測表……36
第8表　遺構外出土石器計測表……49
第9表　1号住居跡出土遺物観察表……52
第10表　5号住居跡出土遺物観察表(1)……54
第11表　5号住居跡出土遺物観察表(2)……55
第12表　6号住居跡出土遺物観察表……56
第13表　9号住居跡出土遺物観察表……58
第14表　11号住居跡出土遺物観察表……60
第15表　13号住居跡出土遺物観察表……63
第16表　14号住居跡出土遺物観察表……63
第17表　15号住居跡出土遺物観察表……66
第18表　16号住居跡出土遺物観察表……67
第19表　17号住居跡出土遺物観察表……70
第20表　18号住居跡出土遺物観察表……74
第21表　19号住居跡出土遺物観察表(1)……80
第22表　19号住居跡出土遺物観察表(2)……81
第23表　19号住居跡出土遺物観察表(3)……82
第24表　20号住居跡出土遺物観察表……83
第25表　28号土坑出土遺物観察表……85
第26表　遺構外出土遺物観察表……92

写真図版目次

巻頭1　遺跡遠景（東上空より）
巻頭2　西区古墳時代住居群全景
巻頭3　1号溝・4号溝全景
PL1　2号住居跡セクション
2号住居跡遺物出土状況
2号住居跡完掘状況
4号住居跡セクション
4号住居跡遺物出土状況
4号住居跡完掘状況
7号住居跡セクション
7号住居跡遺物出土状況
PL2　7号住居跡完掘状況
8号住居跡セクション
8号住居跡遺物出土状況
8号住居跡完掘状況
10号住居跡遺物出土状況
10号住居跡完掘状況
1号土坑セクション
1号土坑完掘状況
PL3　2号土坑セクション
2号土坑完掘状況
3号土坑断ち割り土層断面
4号土坑セクション
4号土坑完掘状況
5号土坑セクション
5号土坑完掘状況
6号土坑セクション
PL4　6号土坑遺物出土状況
6号土坑完掘状況
7号土坑遺物出土状況(1)
7号土坑遺物出土状況(2)
7号土坑完掘状況

8号土坑セクション
8号土坑遺物出土状況(1)
8号土坑遺物出土状況(2)
ＰＬ５　8号土坑完掘状況
9号土坑完掘状況
10号土坑セクション
10号土坑完掘状況
11号土坑セクション
11号土坑遺物出土状況(1)
11号土坑遺物出土状況(2)
11号土坑完掘状況
ＰＬ６　12号土坑セクション
12号土坑完掘状況
13号土坑完掘状況
14号土坑セクション
14号土坑完掘状況
15号土坑セクション
15号土坑完掘状況
18号土坑セクション
ＰＬ７　18号土坑完掘状況
22号土坑セクション
22号土坑遺物出土状況
24号土坑セクション
24号土坑完掘状況
26号土坑完掘状況
29号土坑セクション
29号土坑完掘状況
ＰＬ８　30号土坑セクション
30号土坑完掘状況
遺構外一9出土状況
1号住居跡セクション
1号住居跡遺物出土状況(1)
1号住居跡遺物出土状況(2)
1号住居跡完掘状況
5号住居跡セクション
ＰＬ９　5号住居跡遺物出土状況
5号住居跡完掘状況
6号住居跡セクション
6号住居跡遺物出土状況(1)
6号住居跡遺物出土状況(2)
9号住居跡セクション
9号住居跡遺物出土状況
9号住居跡完掘状況
ＰＬ10　11号住居跡セクション
11号住居跡遺物出土状況
11号住居跡完掘状況
12号住居跡セクション
12号住居跡遺物出土状況
12号住居跡完掘状況
13号住居跡セクション
13号住居跡遺物出土状況
ＰＬ11　13号住居跡完掘状況
14号住居跡セクション
14号住居跡遺物出土状況
14号住居跡完掘状況
15号住居跡セクション
15号住居跡遺物出土状況
15号住居跡完掘状況
16号住居跡セクション
ＰＬ12　16号住居跡遺物出土状況(1)
16号住居跡遺物出土状況(2)
16号住居跡完掘状況
17号住居跡セクション
17号住居跡遺物出土状況
17号住居跡完掘状況
18号住居跡セクション
18号住居跡遺物出土状況(1)
ＰＬ13　18号住居跡遺物出土状況(2)
18号住居跡完掘状況(1)
18号住居跡完掘状況(2)
19号住居跡セクション
19号住居跡遺物出土状況
19号住居跡完掘状況
20号住居跡セクション
20号住居跡遺物出土状況
ＰＬ14　20号住居跡完掘状況
27号土坑セクション
27号土坑完掘状況
28号土坑セクション
28号土坑遺物出土状況
28号土坑完掘状況
32号土坑セクション
32号土坑完掘状況
ＰＬ15　33号土坑セクション
33号土坑遺物出土状況
2号溝セクション
5号住居跡・2号溝全景
6号住居跡・3号溝全景
5号溝セクション
5号溝完掘状況

16号土坑完掘状況
ＰＬ16　17号土坑完掘状況
19号土坑セクション
19号土坑完掘状況
20号土坑セクション
20号土坑完掘状況
21号土坑セクション
21号土坑完掘状況
23号土坑完掘状況
ＰＬ17　31号土坑セクション
31号土坑完掘状況
１号溝・４号溝、６号溝全景
４号溝セクション
25号土坑セクション
25号土坑完掘状況
６号溝セクション
６号溝完掘状況
ＰＬ18　２号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ19　２号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ20　２号住居跡出土遺物（３）
４号住居跡出土遺物
ＰＬ21　７号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ22　７号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ23　７号住居跡出土遺物（３）
８号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ24　８号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ25　８号住居跡出土遺物（３）
ＰＬ26　８号住居跡出土遺物（４）
10号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ27　10号住居跡出土遺物（２）
４号土坑出土遺物
５号土坑出土遺物
６号土坑出土遺物
７号土坑出土遺物
ＰＬ28　８号土坑出土遺物
ＰＬ29　11号土坑出土遺物
12号土坑出土遺物
14号土坑出土遺物
22号土坑出土遺物
ＰＬ30　遺構外出土遺物（１）
ＰＬ31　遺構外出土遺物（２）
ＰＬ32　遺構外出土遺物（３）
ＰＬ33　遺構外出土遺物（４）
１号住居跡出土遺物
ＰＬ34　５号住居跡出土遺物
６号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ35　６号住居跡出土遺物（２）
９号住居跡出土遺物
11号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ36　11号住居跡出土遺物（２）
13号住居跡出土遺物
14号住居跡出土遺物
15号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ37　15号住居跡出土遺物（２）
16号住居跡出土遺物
17号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ38　17号住居跡出土遺物（２）
18号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ39　18号住居跡出土遺物（２）
19号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ40　19号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ41　19号住居跡出土遺物（３）
ＰＬ42　19号住居跡出土遺物（４）
20号住居跡出土遺物
28号土坑出土遺物
遺構外出土遺物

第１章　調査に至る経過

群馬県碓氷郡松井田町は、奇峰妙義山・清流碓氷川を有する風光明媚な地である。妙義山の麓に端を発し、碓氷川に並行し南東に延びる西横野丘陵上には起伏の少ない台地が広がっており、一般に横野平と呼ばれ、こんにゃく・うど等の栽培を中心とする町内有数の畑作地帯である。この横野平に現代の機械化農業に適応できる優良耕地を生み出すため、隣接する安中市中野谷地区では、昭和63年より対象地域の埋蔵文化財発掘調査及び調査終了後の土地改良事業が行われてきた。この土地改良事業が松井田町人見地区に広がるのは、時代の流れからして当然の事であろう。

平成12年５月、高崎土地改良事務所より松井田町教育委員会へ、平成12年度に字大谷津地区の土地改良事業を計画中との連絡があった。数回該当地域の遺物分布調査を行ったところ、調査区東部（後に東区と称する。）において、縄文時代土器・石器が10数点、調査区西部（後に西区と称する。）において、弥生～古墳時代のものと考えられる土器片約40点が採集でき、開発対象地区が縄文時代から古墳時代にかけての集落跡である可能性が高くなった。その後、５月15日、６月９日と高崎土地改良事務所との話し合いを持ち、今後の対応について協議した。結果、対象地区全域における調査の必要性が認められ、９月28日埋蔵文化財発掘調査契約を締結した。これを受け、同12月１日より松井田町教育委員会による埋蔵文化財試掘確認調査が行われた。既に作物の収穫が終了した東南端部分と西端部分の試掘調査の結果、平安時代の溝・古墳時代初頭の住居の存在が確認された。対象地域全体が北に緩やかに下る傾斜地であり、土地改良事業により南部分で約２ｍの切り土、北部分で約0.6ｍの盛り土となるため、土地改良事業対象全区域に任意に試掘トレンチを入れ、遺構が確認されたら表土を掘削し本調査を行うという方法で調査を開始した。

第２章　遺跡の位置と環境

松井田町は関東平野の周辺部である群馬県の西部に位置している。長野県との県境付近に源を発する増田川・九十九川・碓氷川の３本の河川は、ほぼ平行に町内を北西より南東方向へ流下する。それぞれの河川の間には河岸段丘が発達し、河川に沿う方向に丘陵地帯が延びている。本遺跡が位置するのは西横野丘陵と呼ばれている松井田町南端部の丘陵上であり、碓氷川と妙義町を流れる高田川に挟まれた台地の南端部である。遺跡の所在地は松井田町大字人見字大谷津3,190-18他であり、JR信越線磯部駅から南南西へ約2.0㎞、標高約260ｍの比較的起伏の少ない台地である。遺跡の西方には妙義山が偉容を示し、北には上信越の山々、南には甘楽から奥多野の山々を一望できる。本遺跡付近が碓氷川と高田川の分水嶺を成し、南の高田川との比高は約60ｍを測り、比較的急な断崖を形成している。北はこの丘陵上を縦断するように流れる碓氷川支流の小河川猫沢川へ向かい緩やかに下る。遺構はこの分水嶺と猫沢川の間の緩やかな北斜面上に展開している。

周辺の遺跡

本遺跡が位置する西横野丘陵上では、縄文時代・弥生時代を中心に多くの遺跡が確認されている。また西横野丘陵より一段低い碓氷川右岸段丘上には、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡が多く確認されている。（括弧内数字は第１表及び第１図に対応する。）

本遺跡（１）に近い西横野丘陵上では、人見東原遺跡（２）・人見谷津遺跡（３）・人見1,313号遺跡（４）・別所遺跡（５）等が確認されている。人見東原遺跡は本遺跡との距離も近く、規模こそ小さいが、本遺跡西部で検出された住居群とほぼ同時期の古墳時代の集落跡である。

碓氷川右岸段丘上では塚原古墳群（６）・松井田工業団地遺跡（７）・人見大王寺遺跡（８）・人見中の條遺跡（９）・人見正寺田遺跡（10）等が確認されている。松井田工業団地遺跡は、古墳時代から奈良・平安時代の大集落跡である。また、人見正寺田遺跡では町内唯一の方形周溝墓が確認されている。

第１表　周辺の遺跡一覧

No.	遺　跡　名	所　　在　　地	縄文	弥生	古墳	奈・平	備　　考	参考文献No.
1	人見大谷津遺跡	松井田町大字人見字大谷津3,190-18他	○		○	○	本書報告遺跡	
2	人見東原遺跡	松井田町大字人見字東原1,946			○		古墳時代前期住居３軒	1
3	人見谷津遺跡	松井田町大字人見1,693他	○	○			報告書未刊行	2
4	上人見1,3313号遺跡	松井田町大字人見2,247		○			報告書未刊行	3
5	別所遺跡	松井田町大字二軒在家1,213	○				縄文時代前期の遺物包蔵地	2
6	塚原古墳群	松井田町大字人見字塚原			○		終末期の古墳群	2
7	松井田工業団地遺跡	松井田町大字人見１-10他	○	○	○	○	古墳～奈良・平安の大集落	4
8	人見大王寺遺跡	松井田町大字人見字大王寺1,492他				○	Ｂ下水田	5
9	人見中の條遺跡	松井田町大字人見字中の條1,361-１他				○	奈良・平安時代住居群	5
10	人見正寺田遺跡	松井田町大字人見字正寺田1,270-１他			○	○	方形周溝墓１基	5

（参考文献）

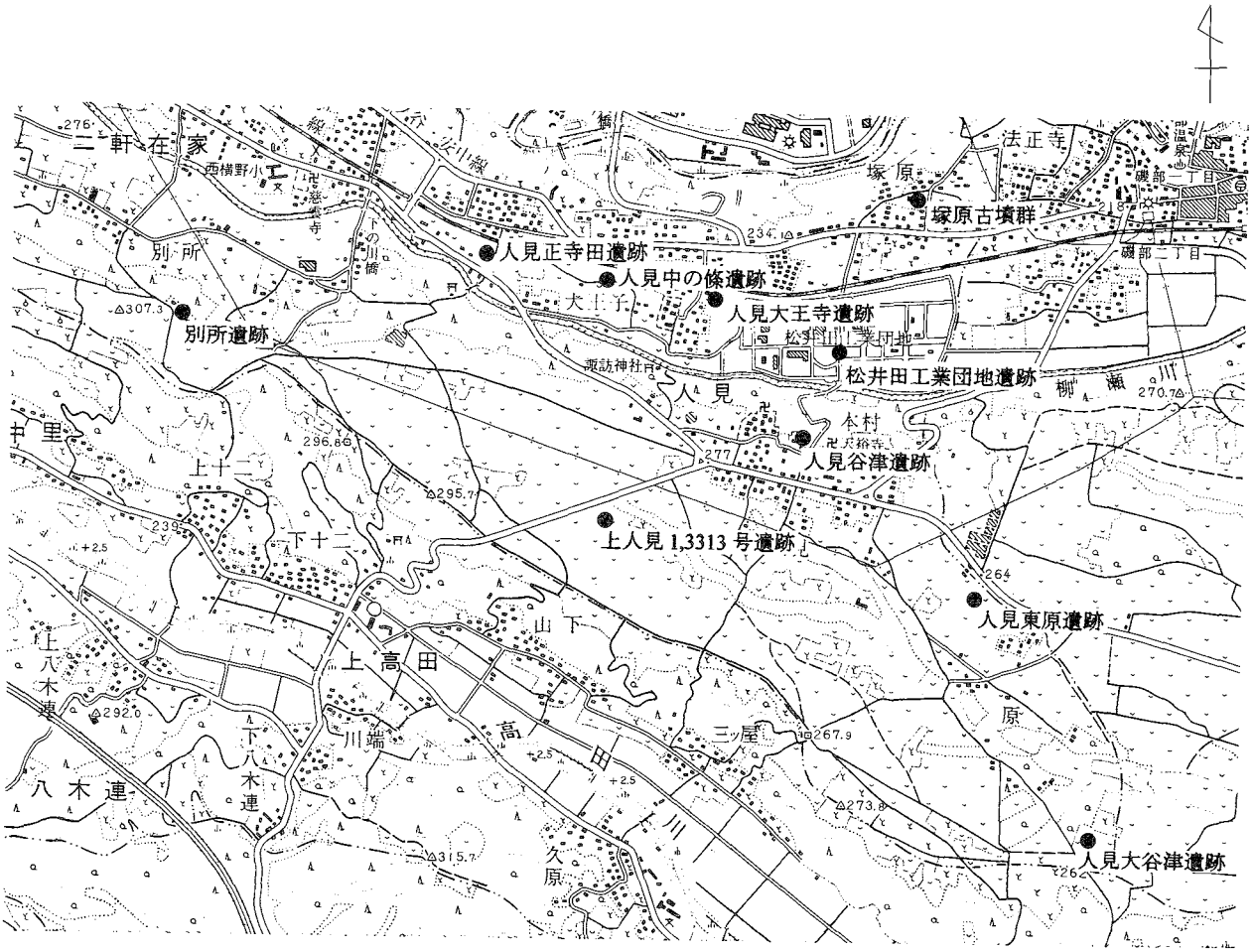
1　『人見東原遺跡』1998　松井田町埋蔵文化財調査会

2　『松井田町誌』1985　松井田町誌編さん委員会

3　『群馬県立博物館研究報告第14集　～群馬県地域における弥生時代資料の集成Ｉ～』1978　群馬県立博物館

4　『松井田工業団地遺跡』1990　松井田町教育委員会

5　『人見大王寺遺跡・人見中の條遺跡・人見正寺田遺跡』2001　磯部停車場妙義山線遺跡調査会



第１図　周辺の遺跡位置図

第３章　調査の方法と経過

第１節　発掘調査

本遺跡は、試掘調査前に表面採集された遺物より、縄文時代・古墳時代前期の集落を中心とする複合遺跡と想定されていた。当該地域が北に向かい緩やかに下る傾斜地であり、土地改良事業により南が切り土、北が盛り土となるため、遺跡の記録保存のためには対象地域全域の調査が必要と考えた。よって対象地域全域に試掘トレンチを入れ、遺構の有無を確認することから始めた。発掘調査契約を９月に締結したものの、対象地域の作物の収穫が完了せず、12月より収穫の完了した部分に試掘トレンチを入れた。トレンチで住居跡が確認できた場合、その周囲の区域を拡張し、集落単位での調査を行うようにした。溝が確認できた場合は、原則的にはその溝が確認できる限り拡張し調査した。顕著な包含層が確認できた場合は、位置を記録しながら遺物を取り上げた。記録は平板測量を基本とし、スケールは原則的に住居・土坑・セクション図を１/20、溝・包含層を１/40、全体図を１/100とし、必要に応じて１/10で残した。遺構の記録写真は、35ミリカラーリバーサルフィルム・白黒フィルム、６×4.5カラーフィルムで壁が撮影を行った。作業風景等も適宜撮影した。また、ヘリコプターによる空撮で遺跡全体写真を記録した。

発掘調査経過の概略は下記のとおりである。

平成12年

12月１日：本日より南東部分のプレハブ建設予定地(東区南端)に、バックフォー(0.7)で試掘トレンチを入れる。１号溝（平安時代）検出。　３日：西区北端にバックフォーを移動し、西区の試掘開始。　４日：１号住居(古墳時代)検出。　７日：東区南東部分にプレハブ建設。　11日：作業員本格稼働開始。西区包含層・１号住居精査。　13日：東区試掘。２号住居（縄文時代)検出。　20日：４号住居(縄文時代）検出。　21日：東区表土掘削。土坑（縄文時代）数基検出。　26日：東区北部表土掘削。５号住居（古墳時代）検出。東区包含層を伴う土坑群精査開始。29日：東区北部表土掘削。12年の作業終了。

平成13年

１月４日：13年の作業開始。東区北部表土掘削。

６号住居（古墳時代）検出。　10日：東区北部にて７号・８号住居（いずれも縄文時代）検出。　10日：東区南部にて１号溝に並行する４号溝（平安時代）検出。４号溝に切られる加曽利Ｅ式土器片集中部検出。(後に10号住居とする。)　14日：西区１号住居西側表土掘削。住居３軒検

出。古墳時代前期の集落となる模様。 16日：東区北部にて９号住居（古墳時代）検出。東区の遺構の確認はほぼ終了する。 25日：安中教委大工原さん・境町教委坂爪さん来訪。１号溝・４号溝は道路遺構の区画溝である可能性を指摘いただく。 26日：１号溝・４号溝の間の表土を掘削。南東方面へ溝の続きを追う。安中との境界線に添うように、１号・４号溝を切る６号溝検出。覆土はAs－B混土。中世の所産と考える。

２月２日：１号・４号溝平面図・コンタ図終了。写真撮影。 ３日：東区南半埋め戻し完了。工事業者へ引き渡し。 10日：東区北端部古墳時代の遺構調査完了。縄文時代遺構の確認調査に入る。 17日：ヘリコプターにより遺跡全景を撮影する。 20日：東区北半調査終了。埋め戻し。工事業者へ引き渡し。 21日：西区古墳時代住居群精査。確認できた住居は11軒。住居群はさらに西へ展開する模様。

３月10日：西区住居群調査終了。プレハブ撤去。 11日：道具片付け・遺物洗浄開始。 19日：道具片付け・遺物洗浄終了。

第２節　整理調査

整理作業は、発掘調査で得られた図面・写真・出土遺物を整理し、各遺構・遺物の状態が客観的に把握できるように資料化することを主目的として実施した。

報告書における遺構・遺物の記載方法は、ほぼ通例に準じている。

出土遺物は全て水洗いを行い、小破片を除いて注記した。ただし、石鏃等は遺跡名・出土地点等を明記したパッケージに収納した。注記には下記のような略記号を使用した。

人見大谷津遺跡→HO　住居跡→H　土坑→土　包含層→包

接合・復元は可能な限り行った。接合にはセメダインＣを、復元には必要に応じて石膏・エポキシ系樹脂修復剤（バイサム）を用いたが、基本的には補強を目的としているので、一部を除いて必要最小限の復元にとどめている。

遺物写真は報告書掲載遺物について壁が撮影し、基本的に白黒６×4.5判フィルムに記録した。遺物実測も報告書掲載遺物について１／１縮尺で作図を行い、その一部は専門機関に委託した。また必要に応じて拓本図を作成した。遺物実測図・遺構図のトレースにはロットリングを用いている。

第４章　遺構と遺物

第１節　概　　要

今回の調査では、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺構が検出された。

縄文時代では、前期関山期の住居が４軒、中期加曽利Ｅ期の住居が１軒検出された。但し中期の住居は明確なプランが確認できず、柱穴により範囲を推定したのみである。また前期後葉（諸磯ｃ）の土坑が10数基確認された。さらに後期の称名寺期・加曽利Ｂ期の土器片が散見されたが、遺構の確認には至っていない。

古墳時代では、調査区の西端で11軒の住居が集落を形成しているのが確認された。時期はいずれも古墳時代前期と推定され、今回の調査地西の地形・表採できる遺物が、さらなる集落の広がりを予想

させる。また調査区の北東部分で、古墳時代の住居が３軒、住居よりやや古いと考えられる溝が３条検出された。

奈良・平安時代では、直線の溝が２条検出された。この２条の溝は約9.5mの距離を保ちながら、ほぼ平行に南東から北西へ調査区を横断する。確認できたのは100m程であったが、さらに北西方向へ延びているものと推定される。その形状・規模・時期より、古代律令期の東山道より分岐した伝路の可能性が考えられ、２条の溝がその区画溝であると推定される。

中世では、調査区の東端、現在の安中市との境界線にほぼ重なるように溝が１条検出された。前述の道路状遺構を破壊して構築されており、覆土にはAs―Ｂが含まれる。

第２節　基本層序

本遺跡地の土層は大きく５層に分類できる。即ち

第Ｉ層　暗褐色土

現在の耕作土であり、天明３年（西暦1783年）の浅間山爆発時の軽石（As―Ａ）を全体に含む。

第II層　暗褐色土

天仁元年（西暦1108年）とされる浅間山爆発時の軽石（As―Ｂ）を全体に含む。II層の下部にAs―Ｂの一次堆積が認められる場所もある。

第III層　黒褐色土

粒子が細かく、やや粘性を持つ。古墳～奈良・平安時代の遺物を包含する場合がある。

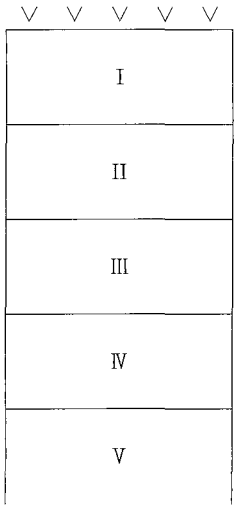
第IV層　暗褐色土

粘性があり、固く締まっている。縄文時代の遺物を包含する場合がある。

第Ｖ層　黄褐色土

やや粘性を持つローム土。

前述したように、本遺跡は北へ緩やかに下る傾斜地に位置している。その為か、場所により各層の厚さが異なる。Ｖ層上面までの深さは、平均で１ｍ前後。北の猫沢川に近い場所で約1.5m、南の妙義町との境界に近い部分で約0.6mを測る。顕著な包含層が無い限り、古墳時代以降の遺構をIV層上面で、縄文時代の遺構をＶ層上面で確認した。



Ｉ層　暗褐色土　As―Aパミスを全体に含む。やや砂質。

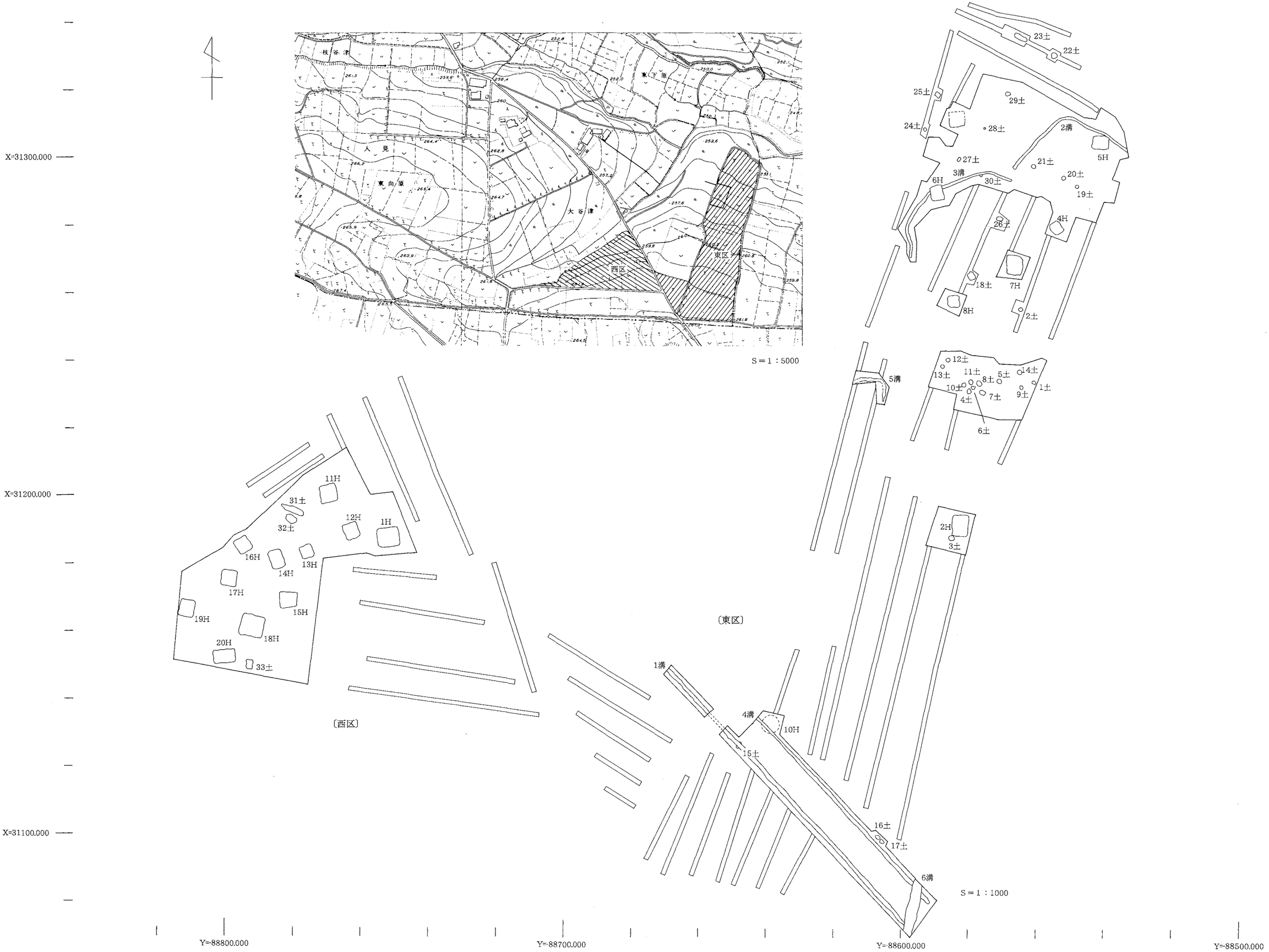
II層　暗褐色土　As―Ｂパミスを全体に含む。

III層　黒褐色土　やや粘質で締まっている。

IV層　暗褐色土　粘性があり、固く締まっている。

Ｖ層　黄褐色土　やや粘質のローム土。

第２図　基本土層模式図



第３図　人見大谷津遺跡全体図

第３節　縄文時代

（１）　竪穴住居跡

２号住居跡

位置　本住居跡は東区の東端、緩やかに北に下る台地上に位置する。南西には３号土坑（縄文時代、落とし穴と考えられる。）が位置する。

概要　本住居は基本土層のＶ層上面まで試掘トレンチを入れた際、北東隅の部分が確認され、トレンチを拡張し調査を行った住居である。覆土はやや粘質の黒褐色土であり、比較的多くの遺物が検出された。壁周溝は全周する。南側においては0.8～1.2m内側に壁周溝と同規模の溝があるため、拡張住居の可能性が高い。拡張住居であると考えると、新旧各住居の中央付近に焼土の集中する浅いピットが検出されているので、それが炉跡であると推定される。

構造　床面としての硬化面は確認されなかったが、遺物の出土レベルから、床面は基本土層Ｖ層のローム土を30～40cm程掘り込んでいると考えられる。主柱穴と考えられるピットが３基ずつ２列検出されている。壁周溝内に径10～20cm、深さ10～20cmのピットが多数検出された。これらは土留めに使用した杭の跡と考えられる。

規模　前述したように、本住居は拡張住居である可能性が高い。旧住居は東側に比べて西側がやや短い台形状を呈する。拡張後の住居は南北方向に長軸を持ち、やや隅丸の長方形を呈する。壁周溝から計測した住居規模は、旧住居の西側で3.8m、東側で4.2m、南北が4.0mを測る。拡張後の住居が長軸方向で5.5m、短軸方向で4.0mを測る。壁はやや開き気味に立ち上がり、確認面までの壁高は４辺とも約70cmを測り、残存度は良好である。壁周溝は幅・深さともに20cm程度を測る。主柱穴と考えられる６基のピットの径は約30cm、深さは40～90cmを測る。

遺物　住居内全体から遺物が出土しているが、床直遺物は比較的少ない。また、土器は小破片が多い。以下、個別に説明する。

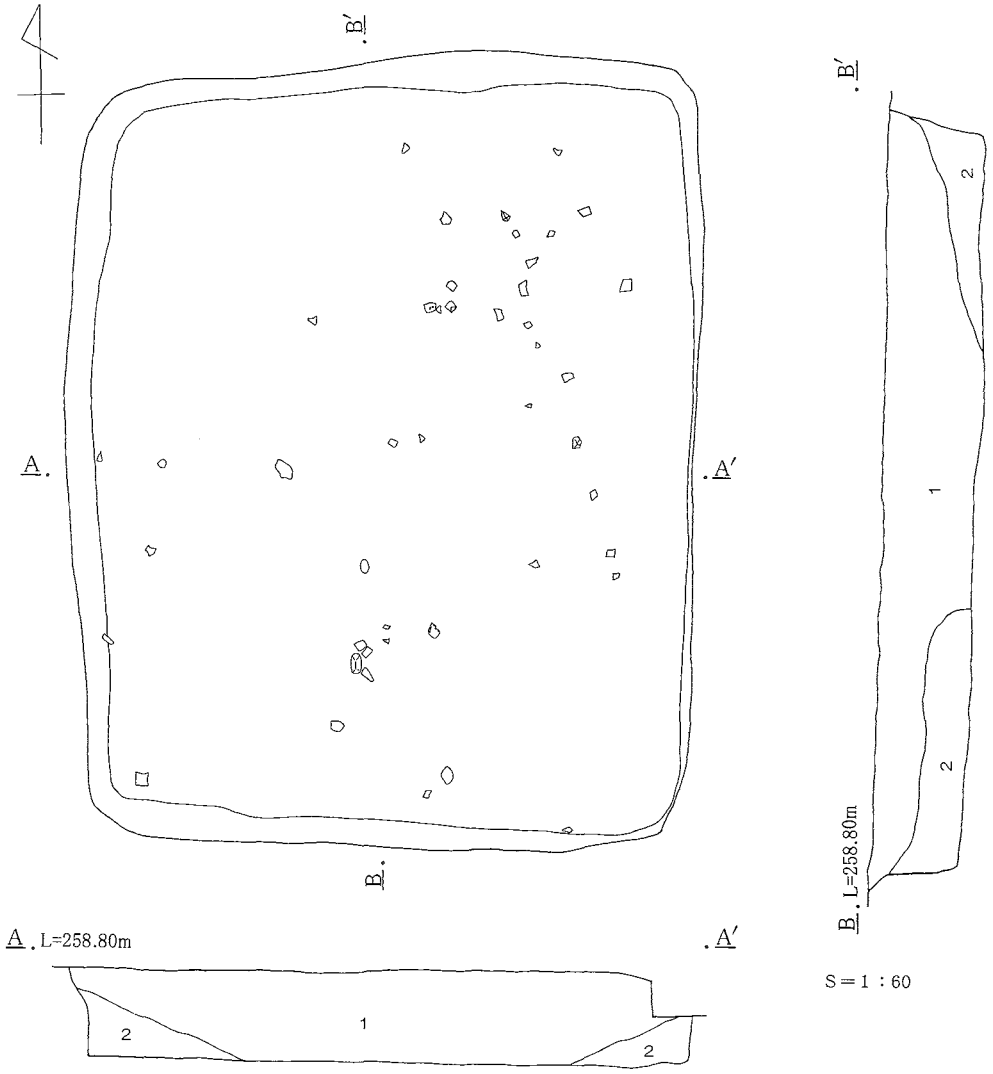
〈土器〉

１は深鉢の口縁部である。双頭の波頂部を持ち、やや内反している。異条斜縄文（正反の合）を地文とし、半裁竹管状工具凹部により直線・曲線の幾何学文様が施されている。２は１と同様の文様が施されており、同一個体であると考えられる。３・４は深鉢の口縁部である。縄文（０段多条）を地文とし、長めのコンパス文が施されている。３・４も同一個体と考えられる。５は小波状縁の深鉢の口縁部である。ＲＬ縄文を地文とし、半裁竹管状工具により刺突文と太い沈線文が施されている。６は深鉢の口縁部であり、棒状工具により縦位･斜位の沈線が施されている。７は深鉢の口縁部であり、口唇部に三角形の小突起を有している。胴部には、棒状工具により不整な斜位の浅い沈線が施されている。８は深鉢の口縁部であり、棒状工具により斜位を基調とする浅い沈線が施されている。９～11は深鉢の口縁部であり、いずれも口縁部下にループ文（閉端環付縄）が施されている。９は小突起を有し、頂部から粘土紐を垂下させている。11はループ文（閉端環付縄）の下にＲＬ縄文が施されている。12・13は深鉢の口縁部である。12は波状縁、13は平縁と考えられる。いずれも縄文が施されている。14・15は平縁の深鉢の口縁部であり、異条斜縄文（正反の合）が施されている。16・17は深鉢の口縁部である。16は波状縁であり、胴部にはＬＲ縄文が施されている。17は平縁であり、胴部にはＲＬ縄文が施されている。18～20は深鉢の胴部である。18はＲ縄文を地文に、長めのコンパス文が施されている。19は半裁竹管状工具による横位区画の下に、短めのコンパス文が施されている。20は異条斜縄文（正反の合）を地文とし、長めのコンパス文が施されている。21～23は深鉢の胴部である。21はループ文（閉端環付縄）、半裁竹管状工具による縦位平行沈線文、異条斜縄文（正反の合）が施されている。22はループ文(閉端環付縄)、半裁竹管状工具による縦位平行沈線文が施されている。23は組紐文、縦位条線文、異条斜縄文（正反の合）が施されている。24～26は深鉢の胴部であり、ループ文（閉端環付縄）が施されている。27・28は深鉢の胴部であり、異条斜縄文（正反の合）による羽状縄文を地文としている。28は上位に櫛歯状工具による連続刺突・横位条痕文が施されている。また、ボ

タン状貼付文も施されている。29は深鉢の胴部であり、異条斜縄文（正反の合）を地文とし、ボタン状貼付文が施されている。30〜34は深鉢の胴部であり、組紐文が施されている。30にはボタン状貼付文が施されている。35〜38は深鉢の口縁部であり、櫛歯状工具による連続刺突文が施されている。35・37は小波状口縁、36・38は平縁と考えられる。35は波頂部から垂下させた粘土紐上にも櫛歯状工具による連続刺突文が施されている。36は口縁部下に櫛歯状工具による横位条線文が施されている。37は口縁部下にＲＬ縄文が施されている。39〜42は深鉢の胴部であり、櫛歯状工具による連続刺突文が施されている。同工具により、39は長めのコンパス文、40は横位条痕文が施されている。41は連続刺突文が山形に施されている。43・44は深鉢の胴部であり、束の縄文が施されている。43は櫛歯状工具による長めのコンパス文が施されている。45〜48は深鉢の底部であり、いずれも上げ底状を呈している。45・46にはＲＬ縄文、47には組紐文、48にはＬＲ縄文が施されている。これらの内、35〜44は神ノ木式土器であり、それ以外は関山II式土器である。

〈石器〉

図示した遺物は、石匙４点、石錐２点、石鏃２点、凹石３点の計11点である。これらの石器の石材には、石匙に珪質頁岩・黒色頁岩、石錐に黒曜石、凹石に粗粒輝石安山岩が使用されている。なお、59は凹石としたが、表裏に非常に顕著な磨面を有している。

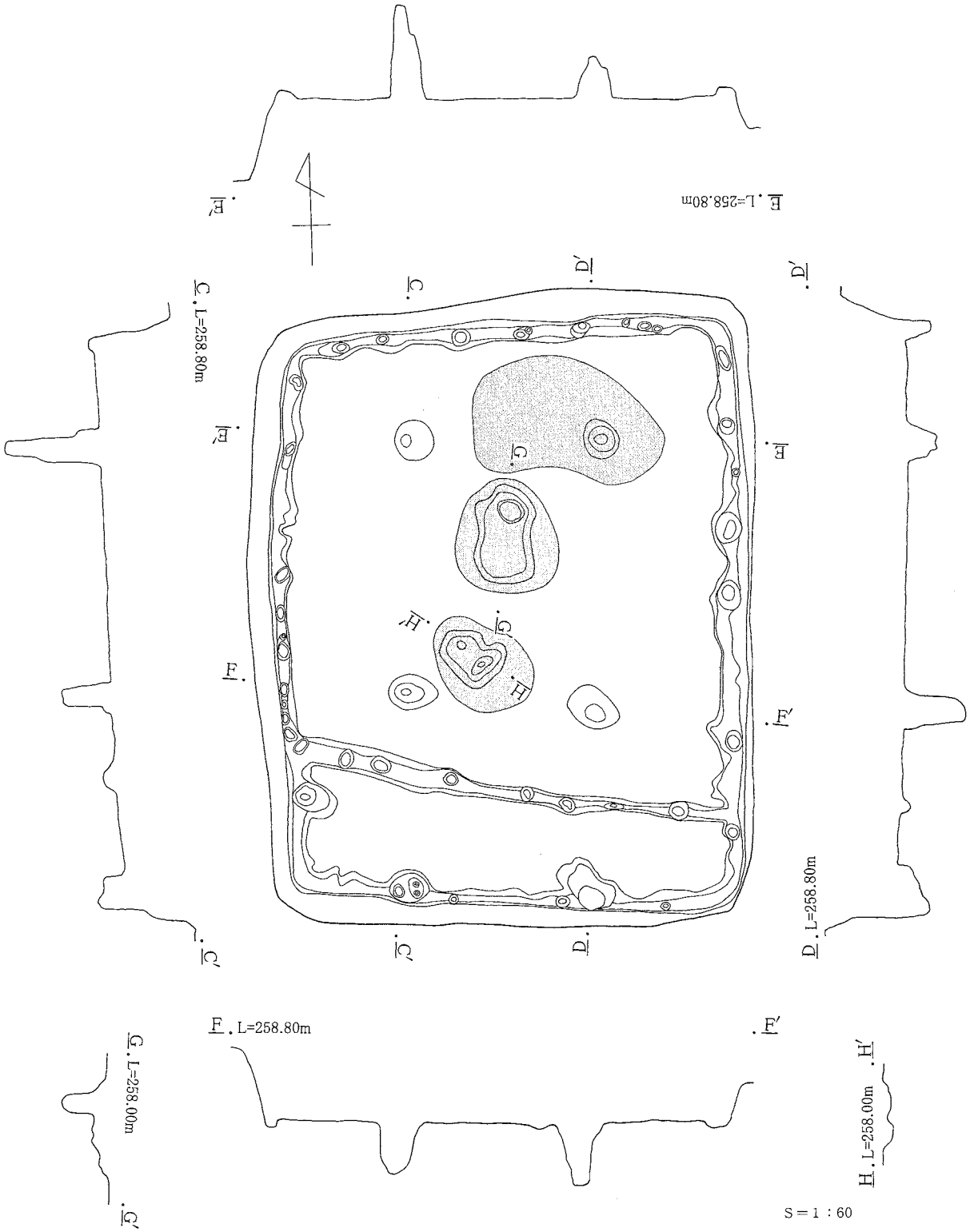


２号住居セクション

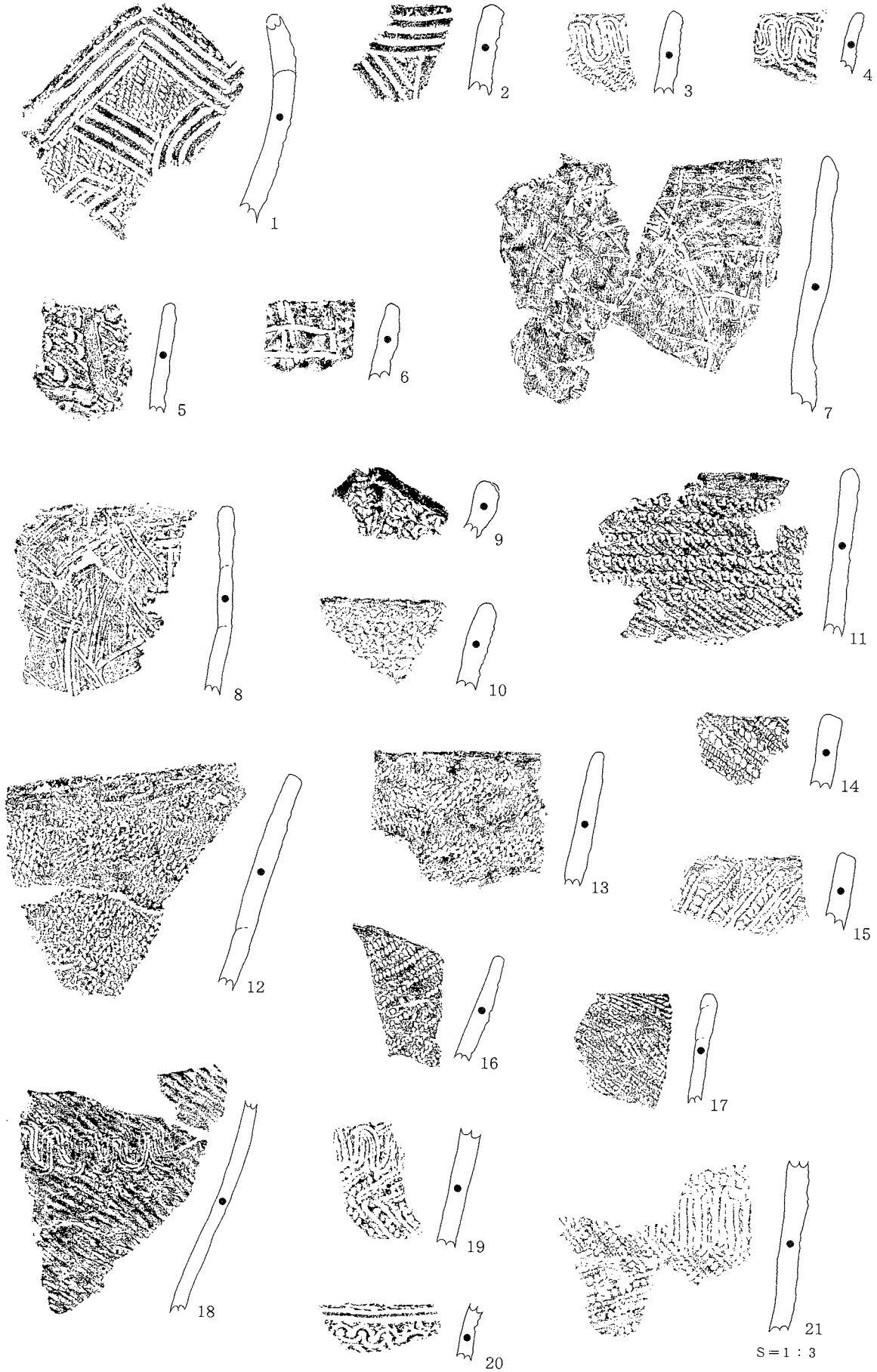
第１層：暗褐色土。φ数mm〜数cm程度の黄色パミスを全体に含む。非常にかたくしまっている。

第２層：暗褐色土。φ数mm〜10mm程度の黄色パミスを全体に含む。

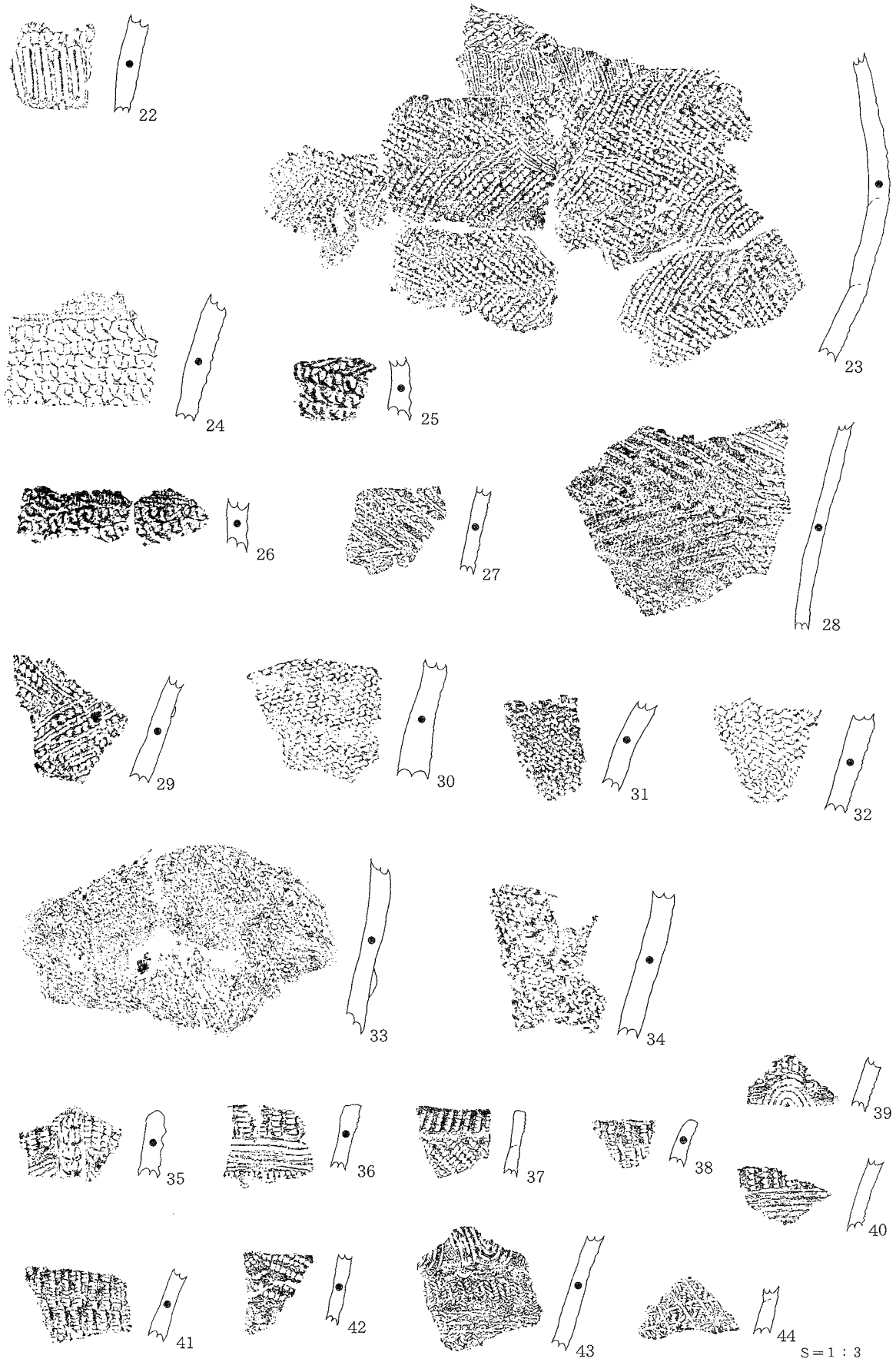
第４図　２号住居跡平面図（１）



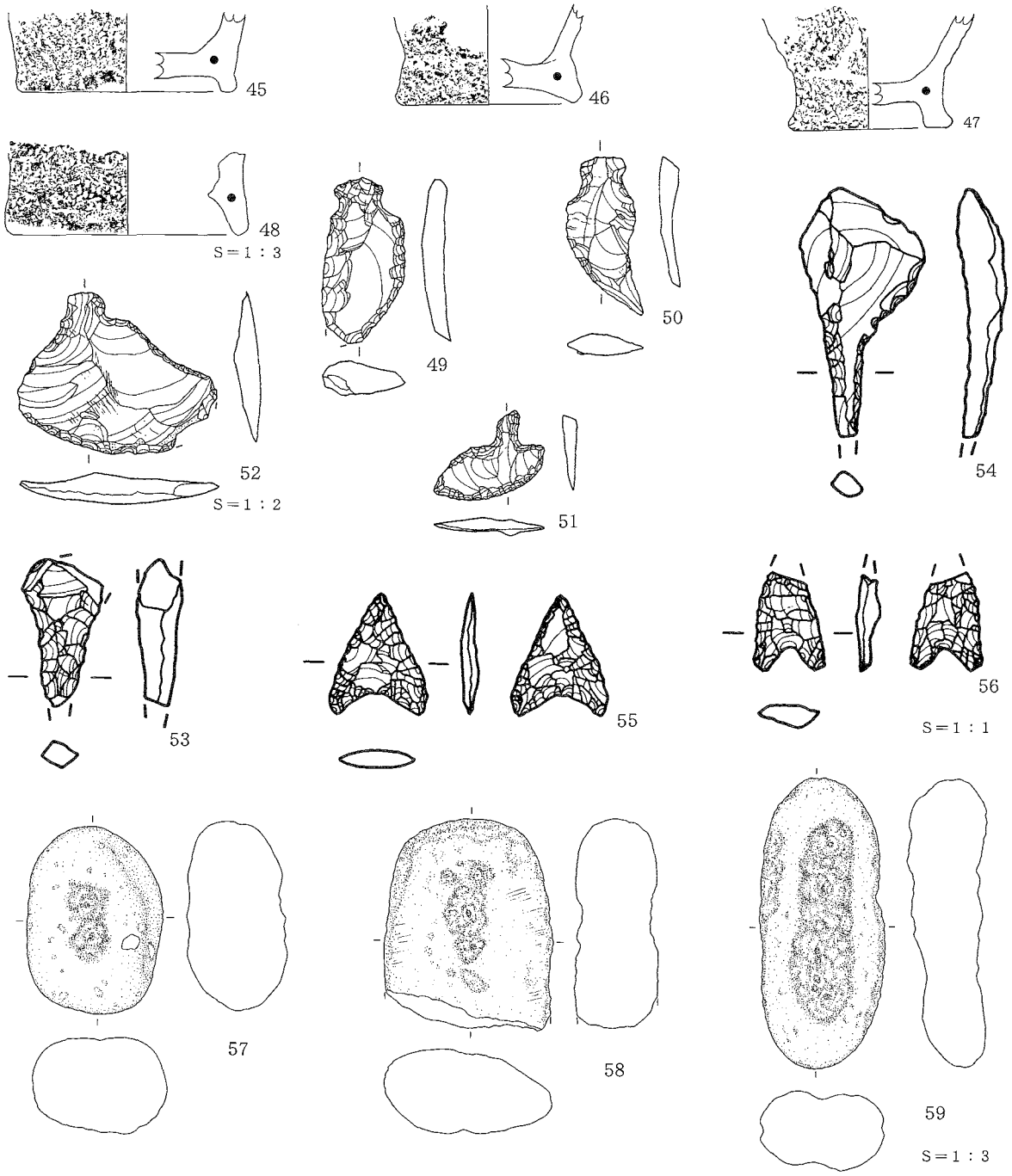
第５図　２号住居跡平面図（２）



第６図　２号住居跡出土遺物（１）



第７図　２号住居跡出土遺物（２）



第８図　２号住居跡出土遺物（３）

第２表　２号住居跡出土石器計測表

挿図番号 図版番号	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
49	石匙	珪質頁岩	(5.1)	2.5	1.0	12.9	
50	石匙	珪質頁岩	4.9	2.3	0.6	4.7	
51	石匙	珪質頁岩	2.7	3.4	0.5	2.6	
52	石匙	黒色頁岩	5.0	(6.1)	0.9	22.6	
53	石錐	黒曜石	(2.2)	1.2	0.7	1.4	
54	石錐	黒曜石	(3.8)	1.9	0.7	2.7	
55	石鏃	黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.5	
56	石鏃	黒曜石	(1.5)	1.1	0.4	0.4	
57	凹石	粗粒輝石安山岩	8.7	6.2	4.7	338.2	
58	凹石	粗粒輝石安山岩	13.3	5.7	3.5	376.5	
59	凹石	粗粒輝石安山岩	(9.6)	7.8	4.0	451.7	表裏に顕著な磨面を有する。

4号住居跡

位置　本住居跡は東区の北東端、猫沢川に近い台地上に位置する。南西方向約12mの所に7号住居がある。

概要　本住居は基本土層のV層上面まで試掘トレンチを入れた際、西隅の部分が確認され、トレンチを拡張し調査を行った住居である。覆土は固くしまった粘質の黒褐色土である。出土遺物が少なく、炉跡・壁周溝等も確認できなかったため、住居と考えるかどうかの判断に迷ったが、遺構の形状・規模、遺物の出土レベルより住居と判断した。

構造　炉跡・ピット・壁周溝は確認されていない。

規模　住居は北西から南東方向に長軸を持つ隅丸の長方形を呈する。北西と南西のコーナーが特に丸味を帯びている。住居の規模は長軸方向で3.7m、短軸方向で3.0mを測る。確認面までの壁高は4辺とも約30cmを測る。

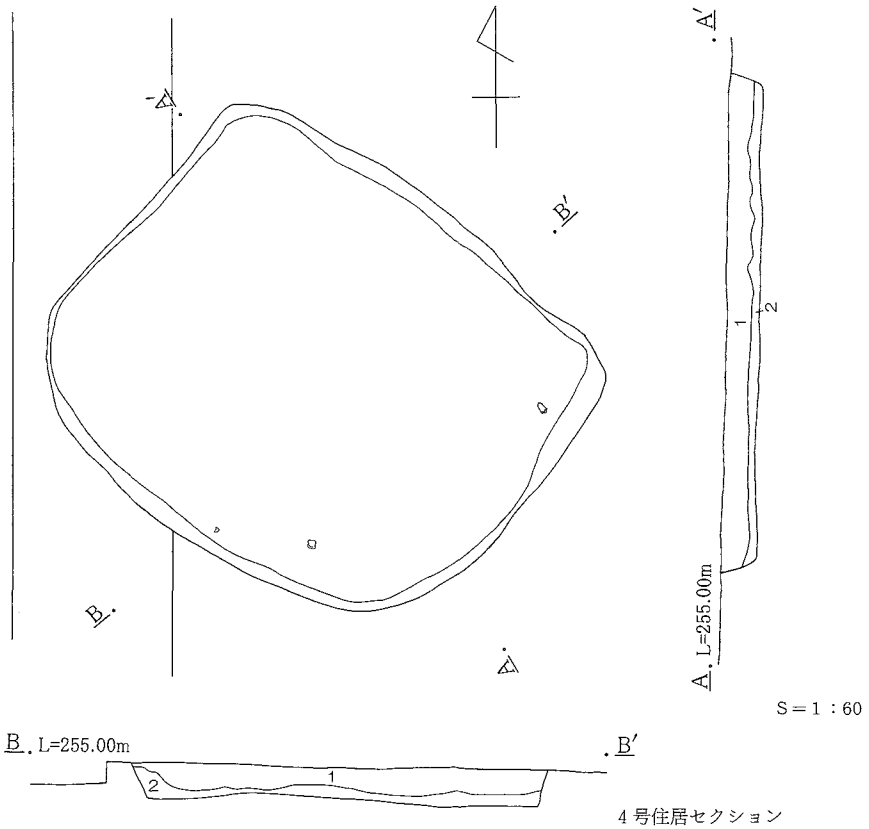
遺物　出土遺物は合計19点のみであり、同時期と考えられる2号住居跡・7号住居跡・8号住居跡と比較して極端に少ない。土器5点、石器1点を図示した。

〈土器〉

1は平縁の深鉢の口縁部であり、ループ文（閉端環付縄）が施されている。2は平縁の深鉢の口縁部であり、縄文（0条多段によるループ文か。）が施されている。3は組紐を地文に、半裁竹管状工具により斜位の幾何学文様が施されている。4は縄文（0条多段）、5は縄文（撚り戻し）が施されている。いずれも関山II式土器である。

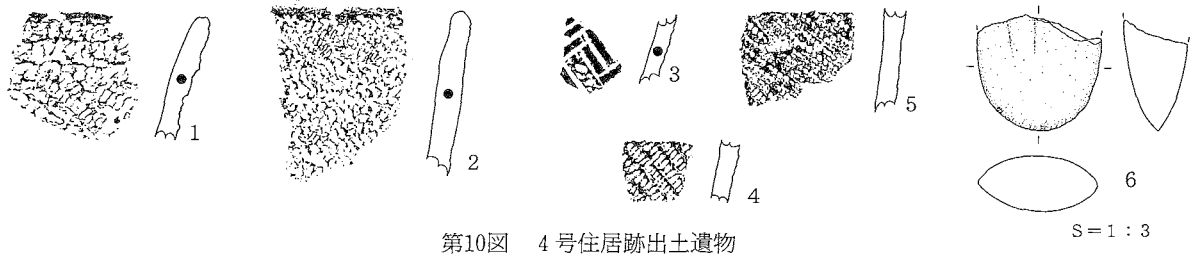
〈石器〉

6は変輝緑岩を石材とする磨製石斧の刃部である。丁寧な研磨が施されている。



4号住居セクション
第1層：暗褐色土。φ数mm程度の白色・黄色パミスを全体に含む。かたくしまっている。
第2層：黄褐色土。地山のIV層のブロックを全体に含む。

第9図　4号住居跡平面図



第10図　4号住居跡出土遺物

第3表　4号住居跡出土石器計測表

挿図番号 図版番号	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
6	磨製石斧	変輝緑岩	(4.6)	(4.9)	(2.4)	64.3	刃部のみ。

7号住居跡

位置　本住居跡は東区の北東端、猫沢川に近い台地上に位置する。北東方向約12mの所に4号住居、南西方向約16mの所に8号住居があり、いずれも同時期の住居と考えられる。住居の北西が倒木痕により一部破壊されている。

概要　本住居は基本土層のV層上面まで試掘トレンチを入れた際、西北隅の部分が確認され、トレンチを拡張し調査を行った住居である。覆土はやや粘質の黒褐色土であり、多数の遺物が検出された。壁周溝は変則的にほぼ二重に巡るため、2回以上拡張している住居である可能性が高い。壁周溝内には多数のピットが検出されているが、主柱穴と考えられるピットは確認できない。住居中央付近に焼土を伴う浅い楕円のピットがあり、炉跡の可能性が考えられる。

構造　前述したように、本住居は拡張住居である可能性が高い。内側に巡る溝を旧住居、壁周溝に囲まれた部分を新住居と考えると、どちらも南北方向に長軸を持つ、やや隅丸の長方形を呈する。

規模　住居規模は、旧住居が長軸方向2.8m、短軸方向2.4mを測る。拡張後の住居が長軸方向4.7m、短軸方向3.9mを測る。壁周溝は幅20～30cm、深さ30～50cmを測る。壁はやや開き気味に立ち上がり、確認面までの壁高は南側で約70cm、北側で約40cmを測り、残存度は良好である。壁周溝内に径20cm前後、深さ30～40cmのピットが多数検出されている。

遺物　住居内全体から比較的多くの土器・石器が出土している。以下、個別に説明する。

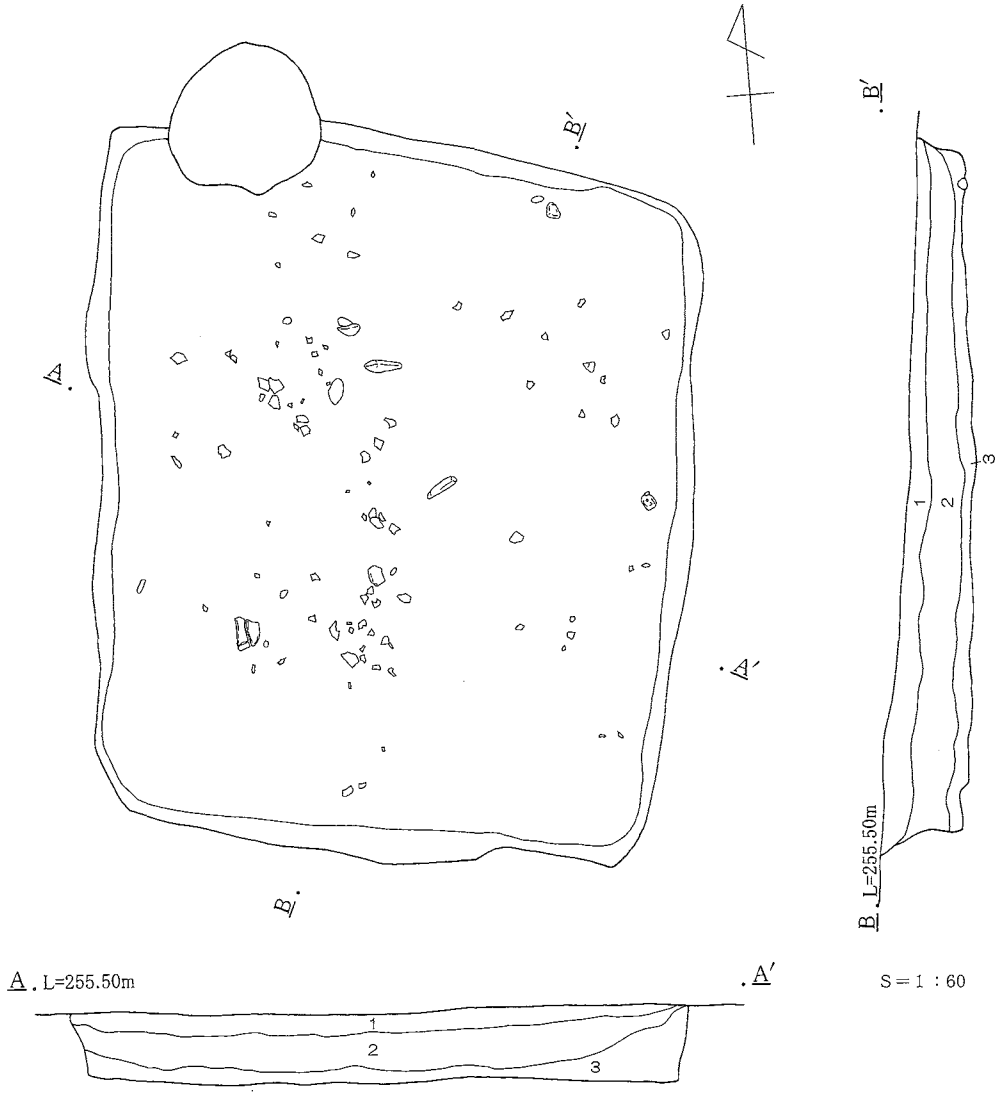
〈土器〉

1は4単位の波状縁の深鉢、2は片口の注口土器であり、いずれもＬＲ縄文が施されている。3～6は深鉢の口縁部である。3・4・6は波状縁、5は平縁と考えられる。いずれも半裁竹管状工具により、横位・斜位・曲線の沈線・条線を組み合わせての区画文を施している。3は地文不明瞭、4～6は地文組紐文である。7～9は深鉢の口縁部であり、ループ文（閉端環付縄）を施している。7は口唇部に斜位の並行短沈線、下位に斜位の沈線を有する。7は波状縁、8・9は平縁と考えられる。10～13は平縁の深鉢の口縁部、または口縁部から胴部であり、いずれも縄文を施している。10はＬＲ・ＲＬによる羽状縄文、11はＬＲ縄文、12はＬ縄文、13は附加条（ＲＬ＋Ｌ）縄文が施されている。14～17は深鉢の胴部である。いずれも半裁竹管状工具により、横位・斜位・曲線の沈線を組み合わせての区画文を施している。地文は14がＲＬ縄文、15・16が組紐文である。17にはループ文（閉端環付縄）が施されている。18～21は深鉢の胴部である。18～20には櫛歯状工具によるコンパス文が施されている。地文は18・19がＲＬ縄文、20が異条斜縄文（正反の合）である。20には半裁竹管状工具による横位沈線文も施されている。21にはＬＲ縄文、ループ文(閉端環付縄)、半裁竹管状工具によるコンパス文が施されている。22は深鉢の胴部である。ループ文（閉端環付縄）を地文とし、半裁竹管状工具による縦位沈線文・Ｖ字状文が施されている。23は深鉢の胴部である。異条斜縄文(正反の合)、ループ文(閉端環付縄)、半裁竹管状工具による縦位沈線文が施されている。24・25は深鉢の胴部であり、異条斜縄文（正反の合）が施されている。26は深鉢の胴部であり、ＬＲ・ＲＬによる羽状縄文が施されている。27～30は深鉢の胴部であり、組紐文が施されている。31は平縁の深鉢の口縁部である。櫛歯状工具に

よる連続刺突文を縦位に施している。32は深鉢の胴部である。櫛歯状工具による連続刺突文を山形に施している。33は深鉢の胴部である。束の縄文による文様が施されている。束を組む時の縄の方向に誤りがあったため、文様の規則性が整っていない。34～36は深鉢の底部である。34にはＬＲ・ＲＬによる羽状縄文が施されている。35はやや上げ底状を呈し、ＲＬ縄文が施されている。36は側面の調整は不明瞭、やや上げ底状の底面にはＲＬ縄文が施されている。これらの内、31～33は神ノ木式土器であり、それ以外は関山II式土器である。

〈石器〉

図示した遺物は、石錐２点、石鏃１点、石槍１点、打製石斧１点、凹石２点、磨石１点の計８点である。これらの石器の石材には、石錐に珪質頁岩・チャート、石鏃に黒曜石、石槍に硬質泥岩、打製石斧に黒色頁岩、凹石・磨石に粗粒輝石安山岩が使用されている。44の磨石は表裏に非常に顕著な磨面を有している。



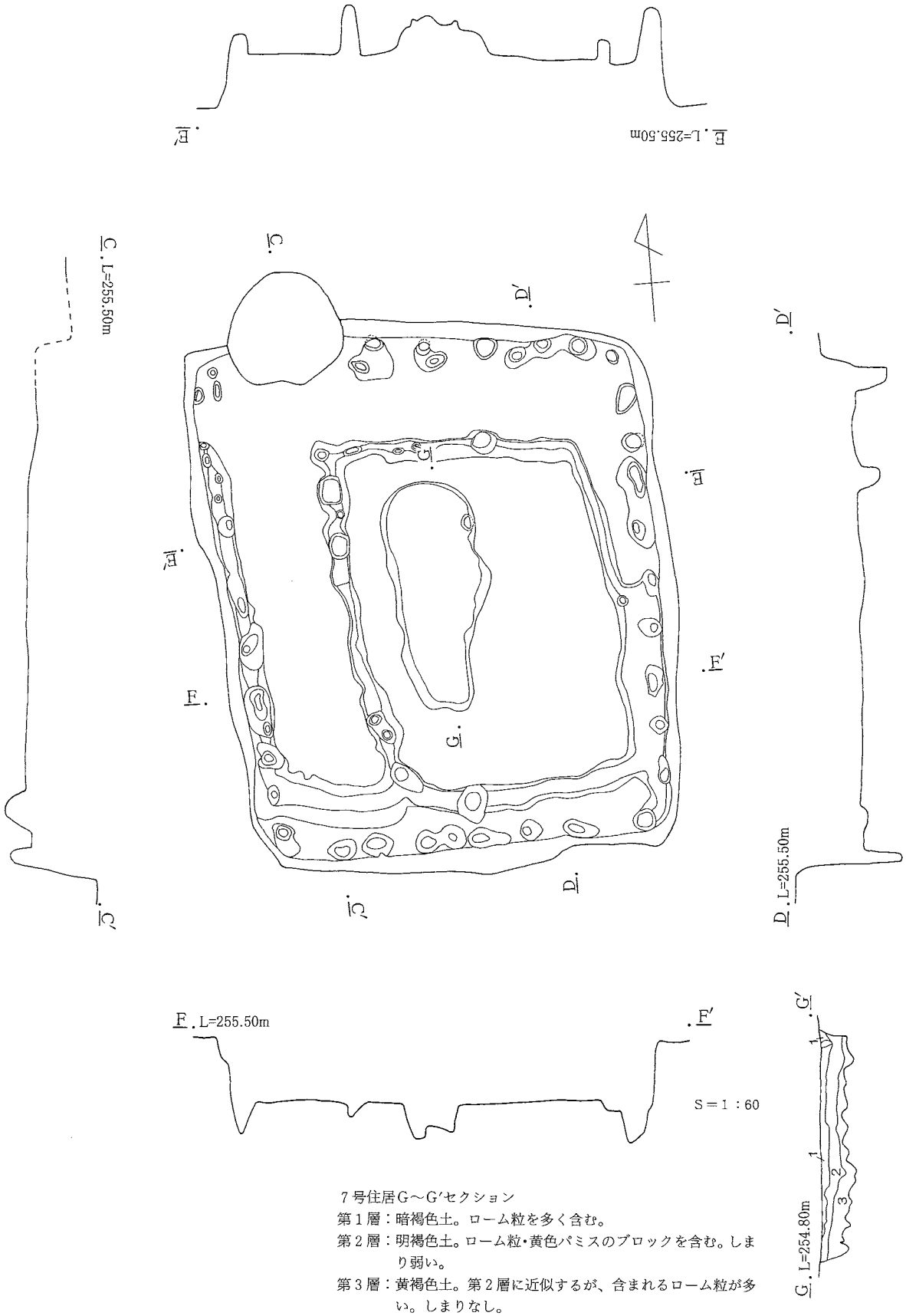
７号住居セクション

第１層：暗褐色土。φ数mm程度の白色パミス、φ５～10mm程度の黄色パミスを全体に含む。かたくしまっている。

第２層：暗褐色土。１層に近似。含まれる黄色パミスの量が全体に多い。

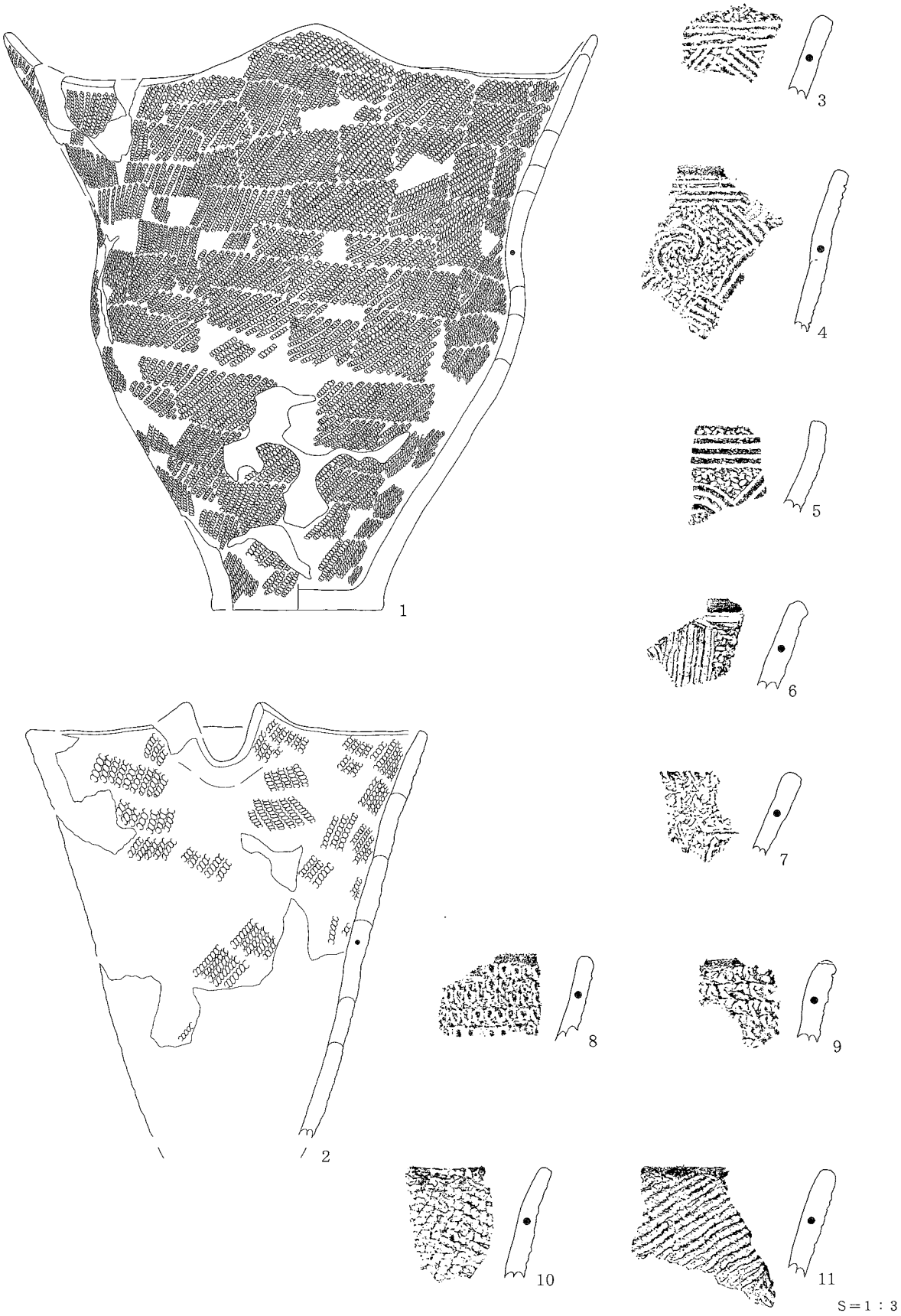
第３層：褐色土。ローム粒を全体に含む。

第11図　７号住居跡平面図（１）

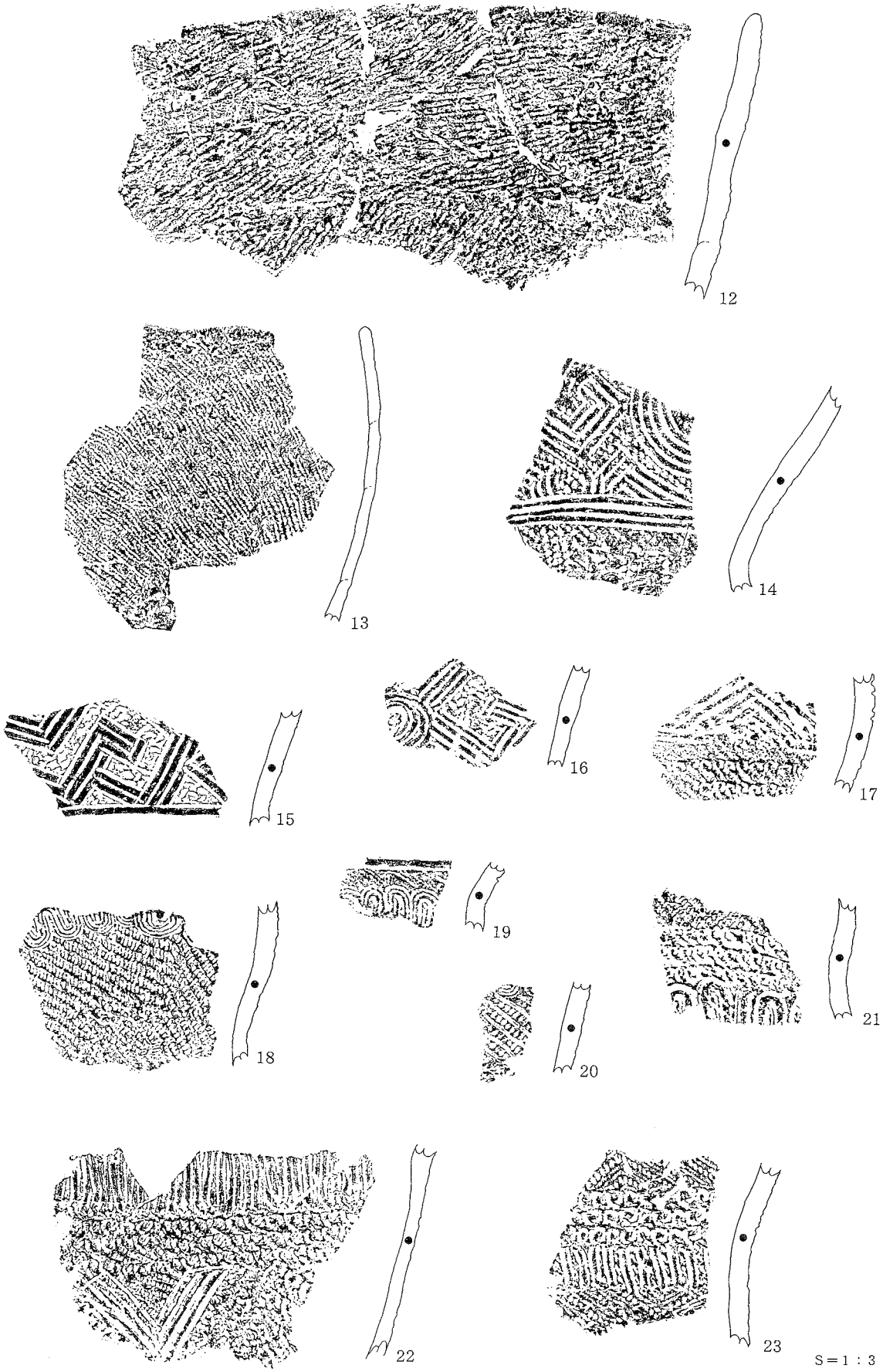


7号住居G～G′セクション
第1層：暗褐色土。ローム粒を多く含む。
第2層：明褐色土。ローム粒・黄色パミスのブロックを含む。しまり弱い。
第3層：黄褐色土。第2層に近似するが、含まれるローム粒が多い。しまりなし。

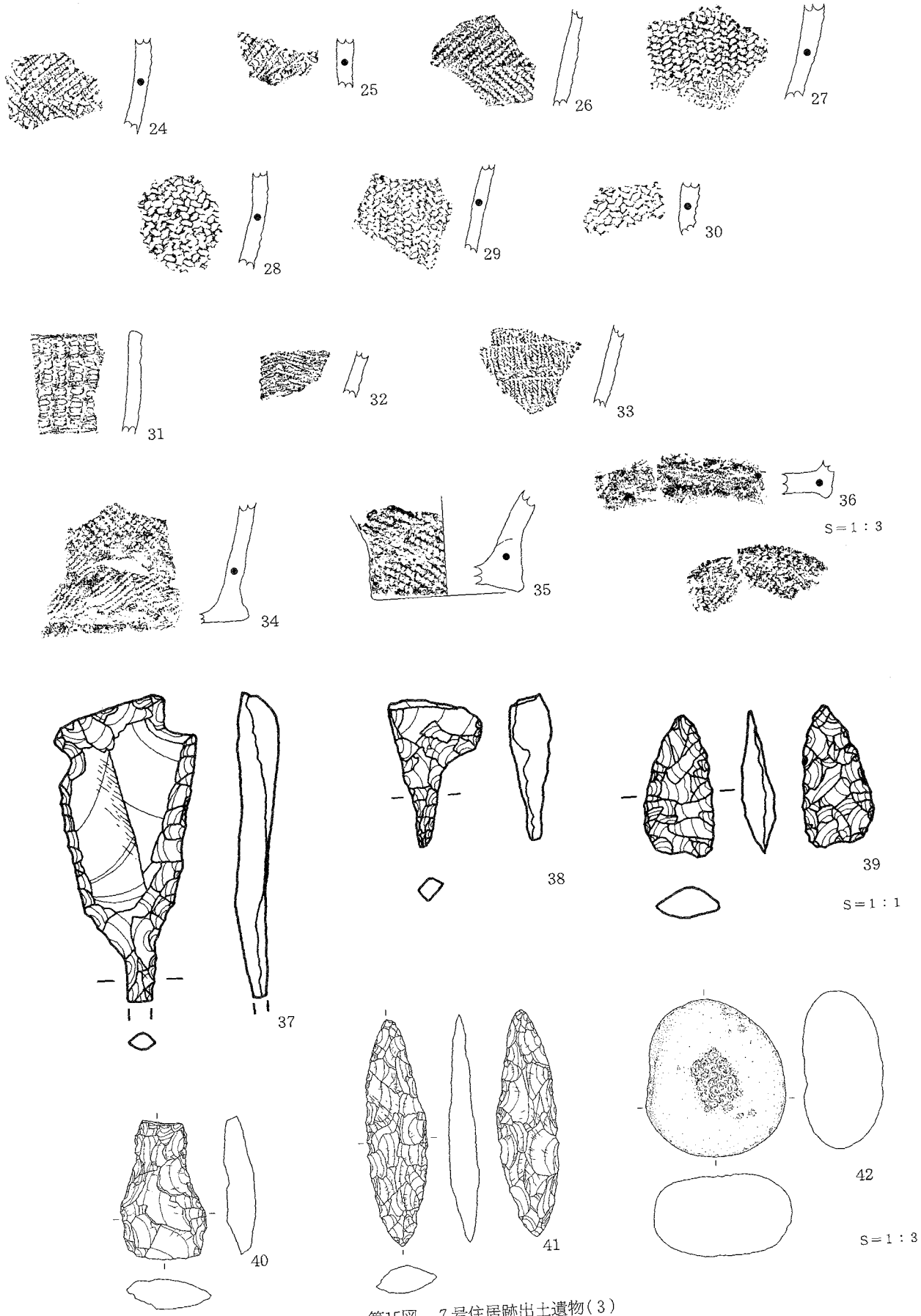
第12図　7号住居跡平面図（2）



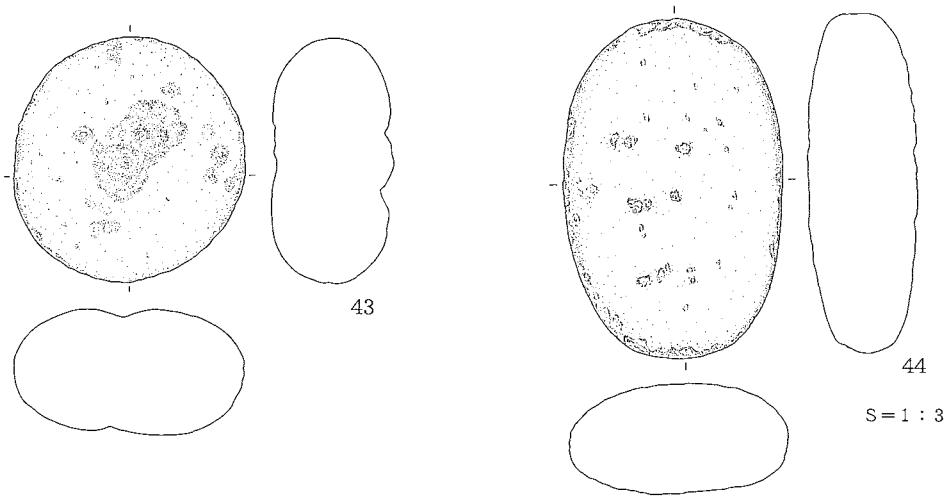
第13図　7号住居跡出土遺物（1）



第14図　7号住居跡出土遺物(2)



第15図　7号住居跡出土遺物(3)



第16図　7号住居跡出土遺物（4）

第4表　7号住居跡出土石器計測表

挿図番号 図版番号	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
37	石錐	珪質頁岩	(5.5)	2.5	0.7	9.5	
38	石錐	チャート	2.6	1.6	0.8	2.3	
39	石鏃	黒曜石	2.6	1.2	0.6	1.5	
40	打製石斧	黒色頁岩	7.1	4.5	1.6	63.1	
41	石槍	硬質泥岩	12.3	3.3	1.6	58.8	
42	凹石	粗粒輝石安山岩	8.5	7.6	4.3	411.0	
43	凹石	粗粒輝石安山岩	9.7	9.2	5.0	640.8	
44	磨石	粗粒輝石安山岩	13.5	8.7	4.3	781.9	表裏に顕著な磨面を有する。

8号住居跡

位置　本住居跡は東区の北東端、猫沢川に近い台地上に位置する。北東方向約16mの所に同時期の住居と考えられる7号住居がある。4号住居、7号住居、8号住居はほぼ一直線上に位置している。

概要　本住居は若干南北方向に長い隅丸方形を呈している。覆土はやや粘質の黒褐色土であり、多数の遺物が検出された。

構造　壁周溝が全周し、その内部にピットが検出されているが、主柱穴は確認できていない。住居のほぼ中央に焼土を伴う浅いピットがあり、炉跡である可能性が高い。

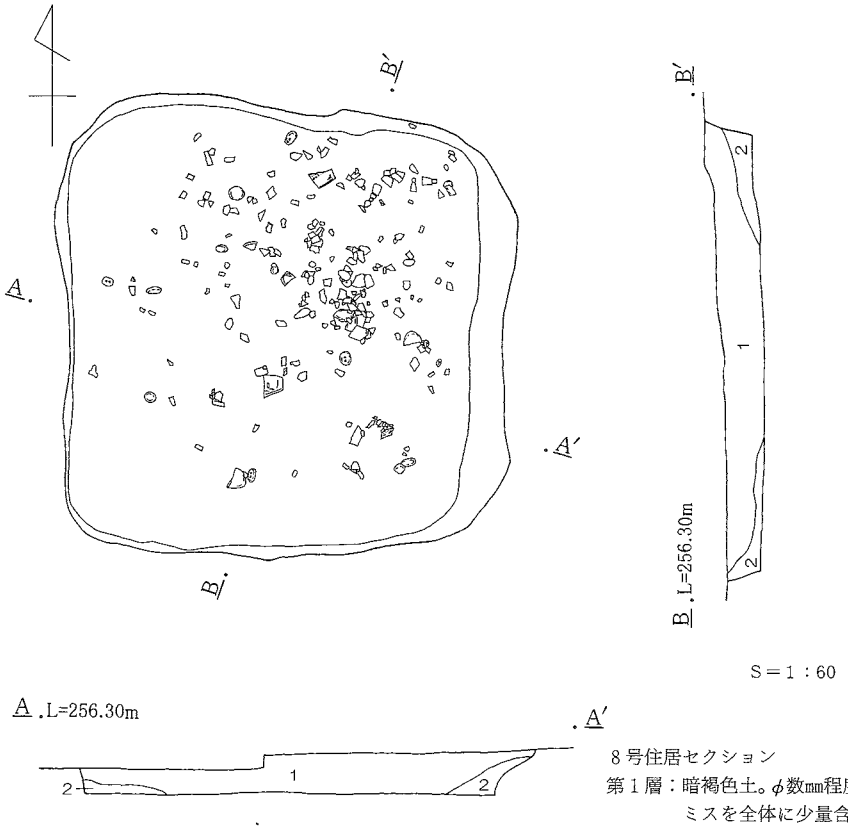
規模　隅丸のほぼ正方形を呈する住居である。東西約2.9m、南北約3.0mを測る。壁は開き気味に立ち上がり、確認面までの壁高は西側で約40cm、東側で約20cmを測る。住居ほぼ中央の炉跡と考えられるピットは、東西方向約65cm、南北方向約40cmの変則的な長方形を呈する。このピットの中央付近に焼土が検出されている。

遺物　住居内全体から多数の土器・石器が出土している。また、出土レベルは床直のものが比較的多い。以下、個別に説明する。

〈土器〉

1・2は深鉢であり、RL縄文が施されている。3は深鉢の胴部である。異条斜縄文（正反の合）を地文とし、半裁竹管状工具による長めのコンパス文が施されている。4～8は深鉢の口縁部であり、半裁竹管状工具による平行沈線文が施されている。地文は4は不明瞭、5・6は組紐文、7・8はRL縄文である。4は波状縁であり、口縁に沿うように施されている。5・6はやや内反する平縁である。5は横位と曲線を、6は斜位と蕨手状を組み合わせている。小波状縁と考えられる7は横位に波状を、8は横位と斜位を組み合わて区画している。9・10は深鉢の口縁部である。9には櫛歯状工具による長めのコンパス文が、小波状縁と考えられる。10には半裁竹管状工具による縦位・弧状の沈線文が施されている。11～14は深鉢の口縁部であり、櫛歯状工具による沈線文が施されている。11には

横位・縦位を基調とした弧状が、12には横位の弧状・波状が、13には斜位の不整長円形状が、14には横に連結する弧状、横位の曲線・波状が施されている。地文として、12には縄文（不明瞭）が、14には無節Ｌ縄文が施されている。15はやや外反する平縁の深鉢の口縁部から胴部上半である。口縁部下にはループ文（閉端環付縄）が、器形変換点より下位には地文として組紐文が施されている。ヘラ状工具撫でによる横位に連結する長楕円区画を配し、区画内及び区画の下に、竹管状工具による円形刺突文を施している。さらに長楕円区画の連結部には貼付文が施されている。16は片口注口土器の注口部であり、ＲＬ縄文が施されている。17～19は深鉢の口縁部である。17は台形状の小突起を持つ口縁で、ループ文（閉端環付縄）が施されている。18・19は平縁で、18には異条斜縄文（正反の合）が、19にはＲＬ縄文が施されている。20は平縁の深鉢の口縁部から胴部上半である。口縁部に比較的広い無文帯を有し、その下位にはＲＬ縄文が施されている。21は波状縁の深鉢の口縁部であり、ＲＬ縄文が施されている。22～24は深鉢の胴部であり、いずれも地文は組紐文であり、半裁竹管状工具により、横位・斜位・蕨手状に平行沈線文を配し区画している。25は深鉢の胴部であり、地文にＬＲ縄文が施されている。器形変換点に櫛歯状工具により長めのコンパス文が施されている。26～29は深鉢の胴部である。いずれも櫛歯状工具による平行沈線文が施されている。26は横位の波状を基調に、27は弧状・蕨手状に、28は同心円状の弧状に、29は横位・斜位の直線状に施されている。30～33は深鉢の胴部である。いずれも縄文を地文とし、半裁竹管状工具または棒状工具による沈線文が施されている。30は棒状工具による縦位基調の沈線文が施されている。31はＬＲ・ＲＬによる羽状縄文を地文とし、半裁竹管状工具で横位の区画を作り、区画内を縦位沈線で充填している。32はＬＲ・ＲＬによる羽状縄文を地文とし、半裁竹管状工具または棒状工具により横位の区画を作り、区画内を縦位沈線で充填している。33はＲＬ縄文を地文とし、半裁竹管状工具により縦位の沈線文を施している。34～36は深鉢の胴部である。34は異条斜縄文（正反の合）が、35は組紐文が、36はＬＲ・ＲＬによる羽状縄文が施さ



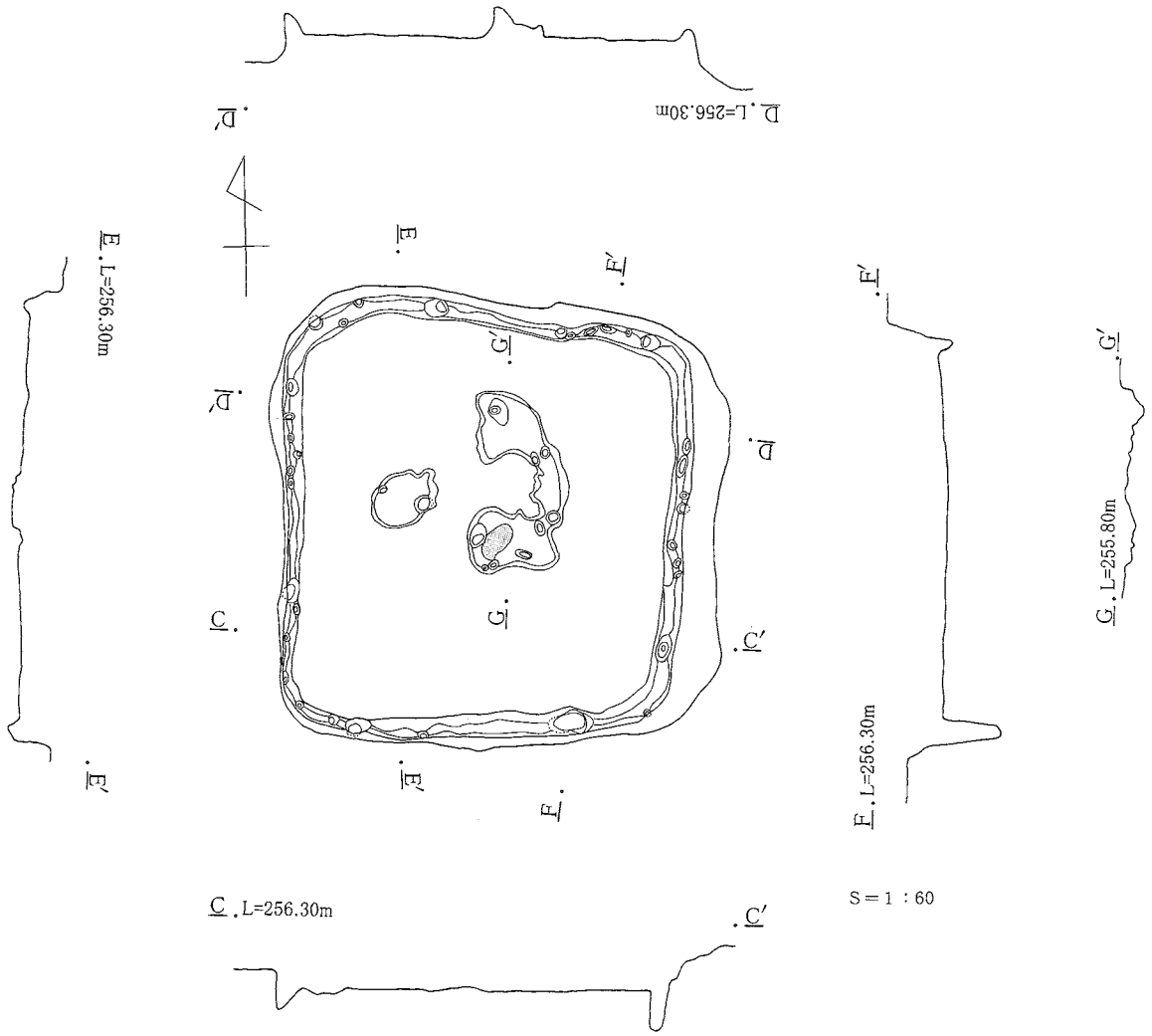
８号住居セクション
第１層：暗褐色土。φ数mm程度の白色パミス、φ10mm程度の黄色パミスを全体に少量含む。
第２層：暗褐色土。１層に近似。地山のⅣ層のブロックを含む。

第17図　８号住居跡平面図（１）

れている。37は平縁の深鉢の口縁部から胴部上半である。口唇部に近い部分を外側に肥厚させ、櫛歯状工具により縦位の連続刺突文を施している。胴部はＲＬ縄文を施している。38は束の縄文による文様が施されている。束を組む時の縄の方向に誤りがあったため、文様の規則性が整っていない。隣接する７号住居跡の33と同一個体、あるいは同一原体により施文されている可能性が極めて高い。39・40は深鉢の胴部である。39は隆帯を垂下させ、隆帯上とその左右に櫛歯状工具による横位刺突文が施されている。40は櫛歯状工具による縦位の連続刺突を施し、同一工具による刺突文を山形に配置している。41～44は深鉢の底部である。41はやや上げ底状を呈し、側面に半裁竹管状工具による弧状の沈線文を施している。42・43は上げ底状を呈している。42の側面は地文ＲＬ縄文に、半裁竹管状工具による縦位の沈線文が施されている。底面は非常に丁寧なヘラ磨き。43の側面にはＲＬ縄文が施されている。44の側面には縄文が施されているが、残存部分が少なく不明瞭である。底面には櫛歯状工具による条線文が施されている。これらの内、37～40は神ノ木式土器であり、それ以外は関山Ⅱ式土器である。

〈石器〉

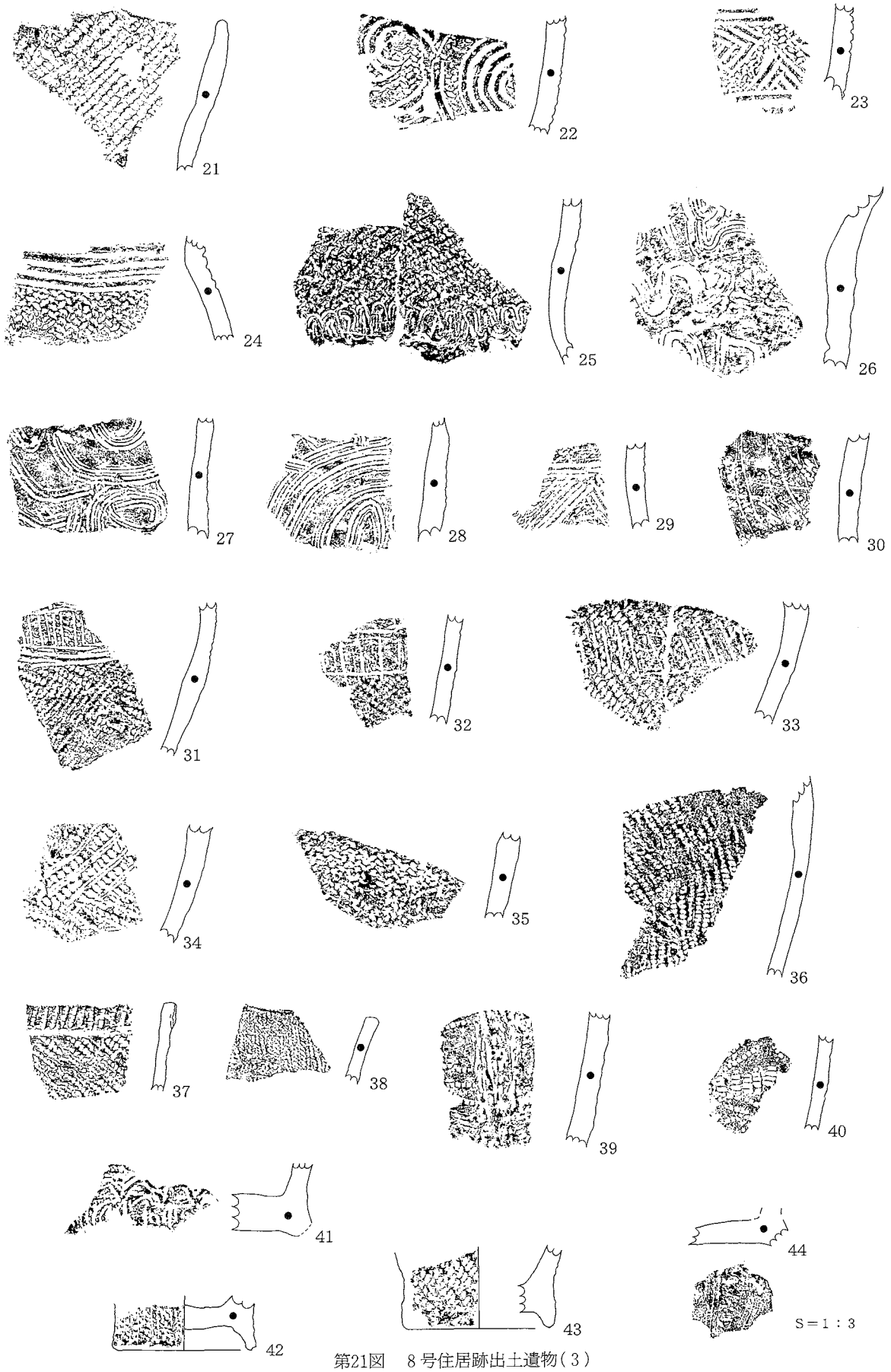
図示した遺物は、石鏃１点、凹石５点、石皿１点の計７点である。これらの石器の石材には、石鏃にチャート、凹石に粗粒輝石安山岩、石皿に緑色片岩が使用されている。凹石とした５点のうち46は裏に、47～49は表裏に磨面を有する。



第18図　８号住居跡平面図（２）

第19図　8号住居跡出土遺物（1）

第20図　8号住居跡出土遺物(2)



第21図　8号住居跡出土遺物（3）

第22図　8号住居跡出土遺物（4）

第5表　8号住居跡出土石器計測表

挿図番号 図版番号	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
45	石鏃	チャート	2.2	(1.1)	0.3	0.5	
46	凹石	粗粒輝石安山岩	11.5	9.1	5.7	789.3	
47	凹石	粗粒輝石安山岩	9.2	8.1	5.5	473.6	裏に磨面を有する。
48	凹石	粗粒輝石安山岩	(9.3)	7.5	4.1	393.1	表裏に磨面を有する。
49	凹石	粗粒輝石安山岩	12.2	8.7	4.8	735.7	表裏に磨面を有する。
50	凹石	粗粒輝石安山岩	9.8	7.0	4.2	339.1	表裏に磨面を有する。
51	石皿	緑色片岩	(14.2)	(19.7)	(7.3)	3020	

10号住居跡

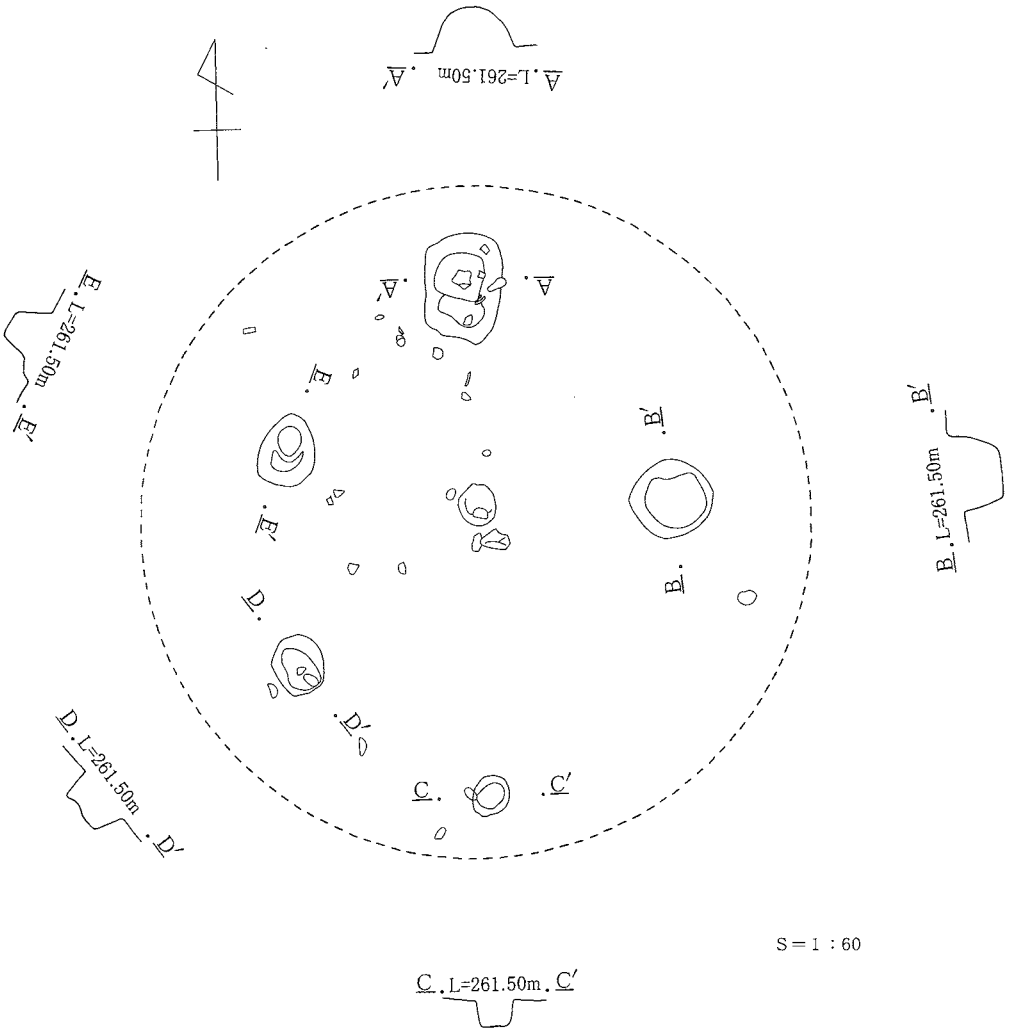
位置　本住居跡は東区の南端に位置する。住居のほぼ中央が４号溝（平安時代）により切られている。

概要　本住居は試掘トレンチを入れていた際、基本土層Ⅳ層中にて縄文時代中期の土器や比較的大型の自然礫が集中していたため、トレンチを拡張し調査を行ったものである。出土する遺物を残しながら、少しずつ面を下げていき住居プランを確認しようとしたが、Ⅴ層上面まで下げても、また残したベルトの断面においても確認できなかった。この遺物集中部分を住居と考えるかどうかの判断に迷ったが、Ⅴ層上面まで面を下げた段階で、南北にやや長い楕円状に並ぶ５基のピットが検出され、遺物や石がほぼこの範囲内で検出されているため、縄文中期後葉の円形住居跡であると判断した。

構造　前述したように、５基のピットが検出されているだけであり、壁周溝・炉跡等は確認されていない。よって詳細は不明である。ピットの径は30～60cm程度、深さは30～40cm程度である。

規模　ピット間の距離は南北方向で約4.0m、東西方向で約3.3mを測る。遺物の範囲を住居範囲と想定すれば、直径５m程の円形の住居が考えられる。

遺物　出土遺物は、想定した住居範囲の中央付近に集中する傾向がある。また、中央付近より比較的大型の自然礫が数点出土している。自然礫に被熱痕は確認されなかったが、炉に伴う礫である可能性も考えられる。以下、個別に説明する。



第23図　10号住居跡平面図

〈土器〉

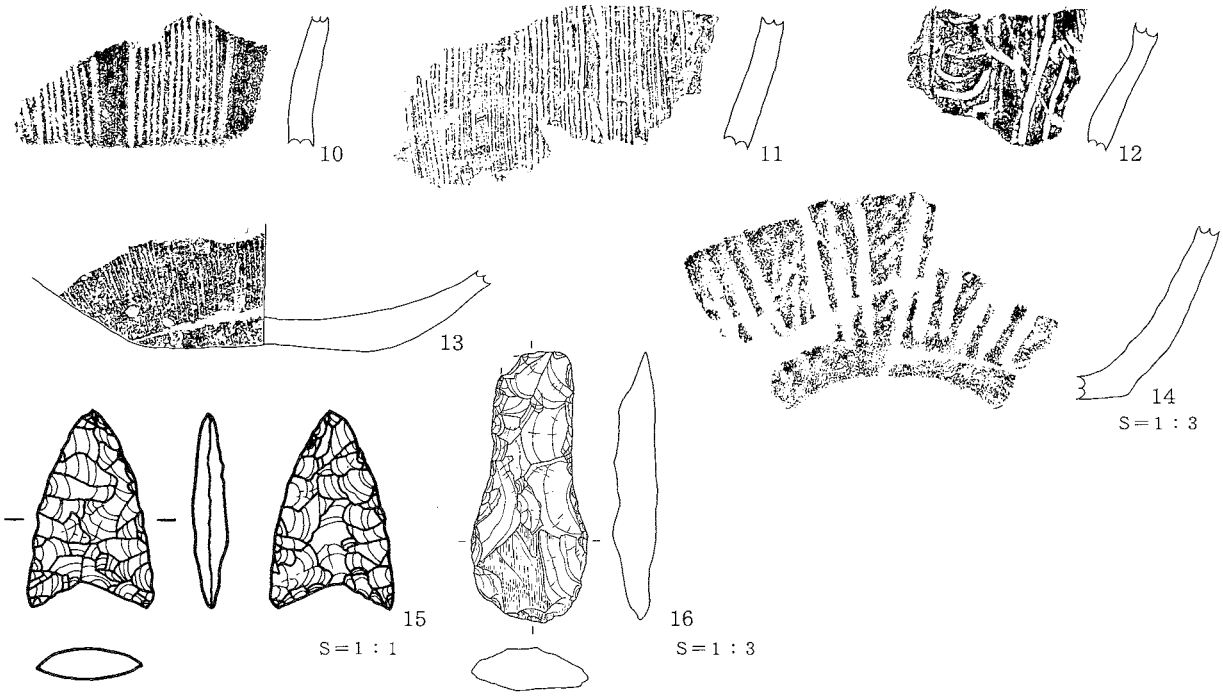
1は深鉢の内反する口縁部である。口縁部文様帯を隆帯で楕円形に区画し、胴部には地文にＬ縄文を施し、２本の懸垂文を垂下させて内部を無文としている。２は深鉢の内反する口縁部である。口縁部文様帯を隆帯で楕円形に区画し、渦巻き状の文様を描いている。地文は縦位の沈線である。３は内反する口縁部であり、縦位の沈線を施している。４は内反する口縁部であり、広い無文帯を有し、胴部に縦位の沈線を施している。無文帯と縦位沈線部分の間の明瞭な段差に、１条の横位沈線を巡らせている。５は深鉢の口縁部付近である。地文にＬ縄文を施し、隆帯により楕円形に区画している。６・７は深鉢の胴部である。地文は６がＬＲ縄文、７がＬ縄文を施し、ともに２本の懸垂文を垂下させ区画している。８は深鉢の胴部である。地文にＬ縄文を施し、２本の懸垂文を垂下させ区画している。さらに、区画の中央に懸垂蛇行文を施している。９・10は深鉢の胴部である。２本１単位とする懸垂文と縦位の沈線を組み合わせて区画している。11は深鉢の胴部であり、縦位の沈線を施している。12は懸垂文で区画し、連弧文を施している。13・14は底部である。13は縦位の浅い沈線を施している。14は地文に縄文（不明瞭）を施し、３本１単位の幅の広い縦位沈線で区画している。いずれも加曽利ＥⅢ式土器である。

〈石器〉

図示した遺物は、石鏃１点、打製石斧１点の計２点である。石器の石材は、石鏃に黒曜石、打製石斧に硬質泥岩が使用されている。打製石斧は先端部に使用に伴う磨面を有する。

第24図　10号住居跡出土遺物（１）

Ｓ＝１：３



第25図　10号住居跡出土遺物（２）

第６表　10号住居跡出土石器計測表

挿図番号 図版番号	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
15	石鏃	黒曜石	2.6	1.7	0.5	1.6	
16	打製石斧	硬質泥岩	10.8	4.6	1.7	95.7	刃部に使用痕を有する。

（２）土　坑

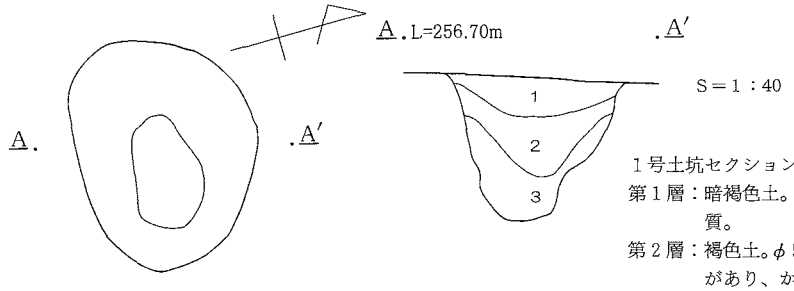
１号土坑

位置　本土坑は、東区中央部の縄文前期土坑群の東端に位置する。

概要　本土坑は試掘トレンチを入れていた際、基本土層Ⅴ層上面にて東半分が確認されたものである。本土坑の西側でも、同時期と考えられる土坑が数基確認されたため、付近一帯の表土を全面的に掘削し調査を行うこととした。結果、約600m²の中に12基の土坑が確認された。本土坑は、この土坑群の中の１基である。覆土は固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。他の遺構との重複関係はない。出土遺物がなく時期の特定はできないが、遺構の確認面・覆土より縄文時代の所産と考えられる。

規模　東半分が試掘トレンチにより深めに掘削されているために、西半分の確認面と標高差が20cm程ある。西半分の確認面で全体を調査したと仮定すると、長軸約125cm、短軸約95cmを測る楕円形を呈し、長軸方向を東西に持つと考えられる。西側確認面から底面までの深さは85cmを測る。

遺物　出土遺物なし。



１号土坑セクション
第１層：暗褐色土。φ５mm程度の黄色パミスを少量含む。やや粘質。
第２層：褐色土。φ５～10mm程度の黄色パミスを全体に含む。粘性があり、かたくしまっている。
第３層：明褐色土。第２層に近似するが、黄色パミスの量が多く全体にローム粒を含む。

第26図　１号土坑平面図

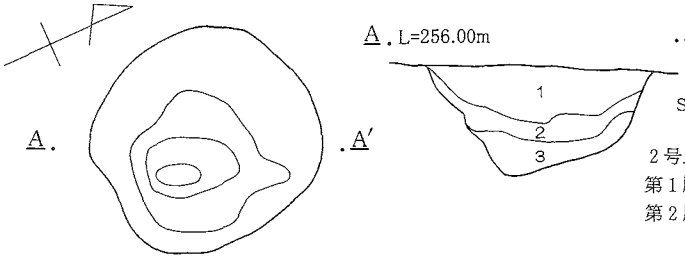
2号土坑

位置　本土坑は、東区中央部の縄文前期土坑群の北方約20mに位置する。

概要　本土坑は試掘トレンチを入れていた際、基本土層Ⅴ層上面にて東半分が確認されたものである。断面はやや浅いすり鉢状を呈する。覆土は固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。出土遺物がなく時期の特定はできないが、遺構の確認面・覆土より縄文時代の所産と考えられる。

規模　東半分が試掘トレンチにより深めに掘削されているために、西半分の確認面と標高差が20cm程ある。西半分の確認面で全体を調査したと仮定すると、径約130cmのほぼ円形を呈すると考えられる。西側確認面から底面までの深さは約60cmを測る。

遺物　出土遺物なし。



2号土坑セクション
第1層：暗褐色土。φ5㎜程度の黄色パミスを少量含む。
第2層：暗褐色土。φ10㎜程度の黄色パミス、ローム粒を全体に含む。やや粘性あり。
第3層：明褐色土。ローム粒、ロームブロックを全体に含む。やや粘性あり。

第27図　2号土坑平面図

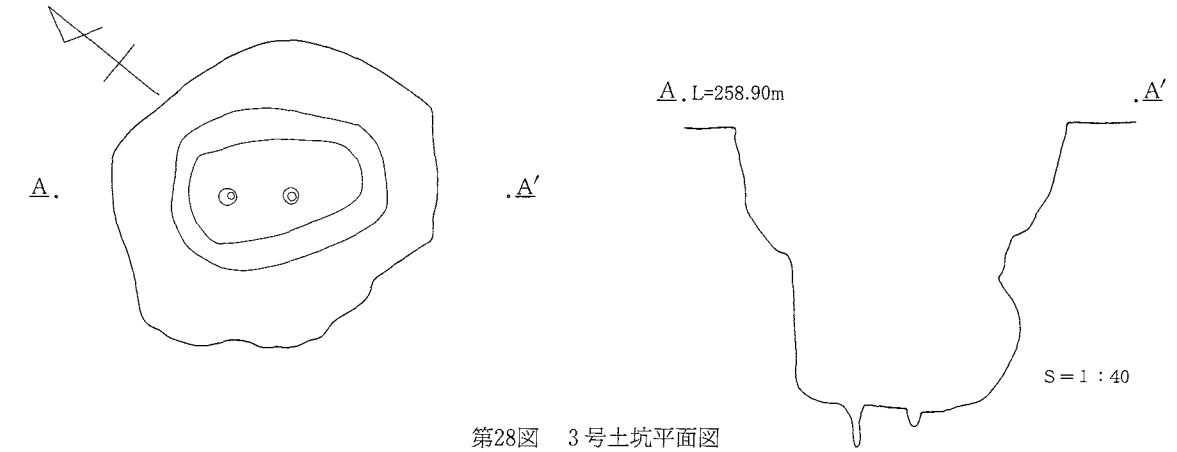
3号土坑

位置　本土坑は東区の東端、緩やかに北に下る台地上に位置する。すぐ北東に2号住居（縄文時代前期）が位置するが、重複関係はない。

概要　東西方向に長軸を持つ楕円形の、非常に深い土坑である。土坑の底部にピットが2基確認された。土坑が狭く深いため、そのままでは2基のピットの調査が不可能だったので、図面・写真の処理後に2基のピットがかかるように半裁した。土層断面図より、本土坑は落とし穴であり、2基のピットが逆母木の痕跡である可能性が考えられる。時期の特定はできないが、遺構の確認面・形態・覆土より縄文時代の所産と考えられる。

規模　確認面における規模は長軸170cm、短軸160cmを測る楕円形を呈する。確認面から約60cm下方において壁面の形状が著しく変化し、やや緩やかな傾斜であった壁面が、垂直あるいはオーバーハング状になる。底面は長軸90cm、短軸50cmを測る楕円形を呈する。確認面も底面も長軸方向を北西に持つ。確認面から底面までの深さは150cmを測る。底面で確認された2基のピットは、南東側のものが径8cm、深さ10cmを測り、北西側のものが径10cm、深さ25cmを測る。

遺物　出土遺物なし。



第28図　3号土坑平面図

4号土坑

位置　本土坑は、東区中央部の縄文前期土坑群の中央付近に位置する。

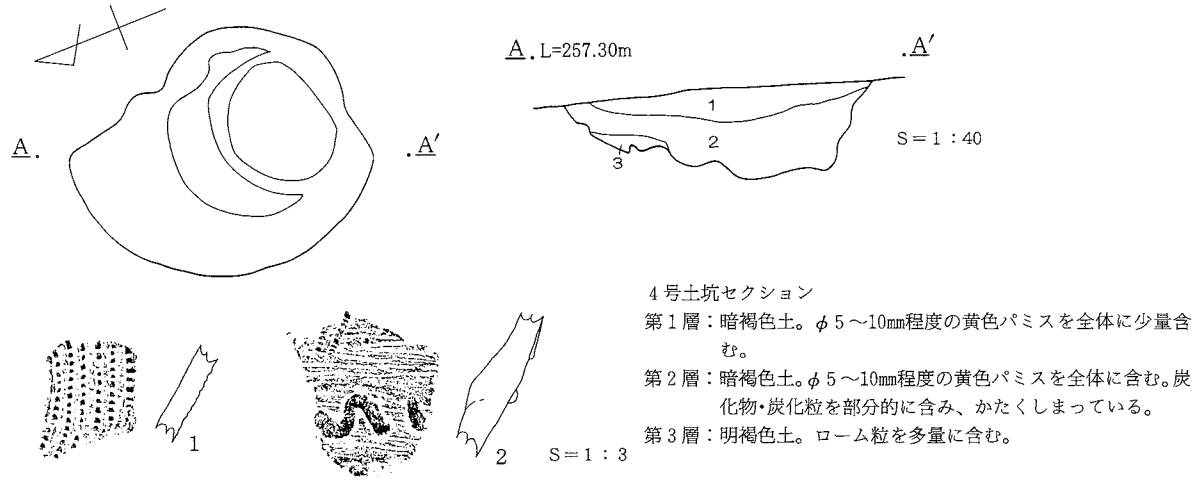
概要　平面はほぼ円形を呈し、断面は浅いすり鉢状である。覆土は固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。

規模　径は130cm前後、確認面から底面までの深さは45cmを測る。

遺物　覆土中より土器2点、石器剥片3点が出土している。土器2点を図示した。

〈土器〉

1・2とも細い横位沈線を地文とし、粘土紐を貼付。半裁竹管状工具押し引きにより刻み目が施されている。2の結節状浮線文には、本体と異なる粘土が使用されている。また、2は波状に粘土紐を貼付している。いずれも諸磯c式土器である。



第29図　4号土坑平面図・出土遺物

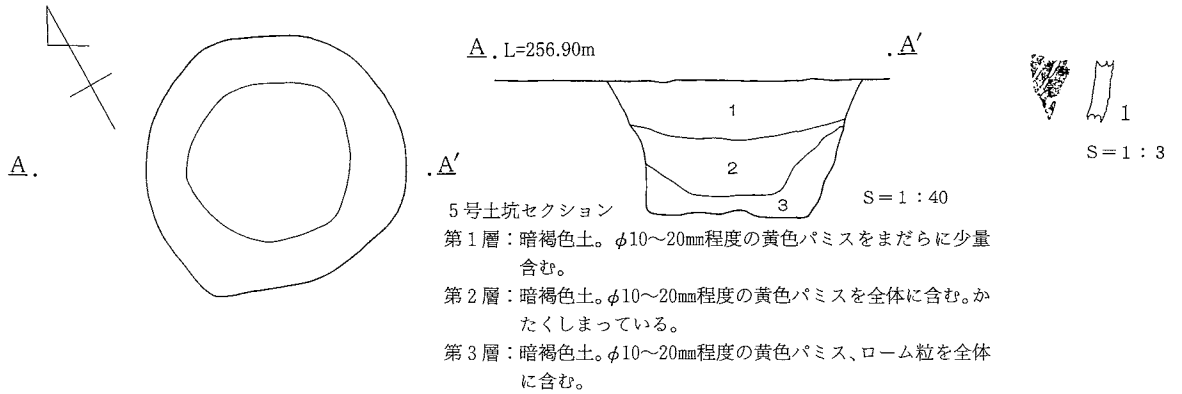
5号土坑

位置　本土坑は、東区中央部の縄文前期土坑群の中央付近に位置する。

概要　確認面、底部ともにほぼ円形を呈する。壁はやや開き気味に立ち上がる。覆土は固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。

規模　確認面の径は135cm前後、底部の径は85cm前後、確認面から底面までの深さは70cmを測る。

遺物　覆土中より、沈線文が施された諸磯c式土器の小破片が出土している。



第30図　5号土坑平面図・出土遺物

6号土坑

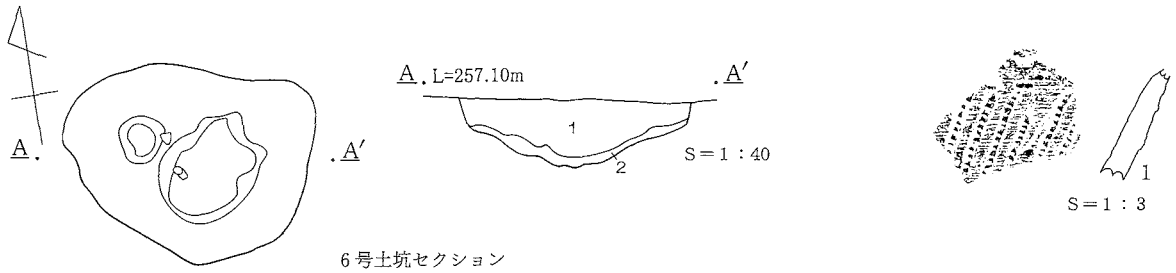
位置　本土坑は、東区中央部の縄文前期土坑群の中央付近に位置する。

概要　長軸方向を北西に持つ不整楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底部は平坦でなく凹凸が激しい。覆土は固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。出土遺物より縄文時代前期

の所産と考えられる。

規模　長軸130cm、短軸110cmを測り、長軸方向を北西に持つ。確認面から底面までの深さは35cmを測る。

遺物　覆土中より出土した土器１点を図示した。細い横位沈線を地文とし、粘土紐を弧状・横位に貼付。半裁竹管状工具押し引きにより刻み目が施されている。諸磯ｃ式土器である。



６号土坑セクション
第１層：暗褐色土。φ５㎜程度の黄色パミスを少量含む。
第２層：暗褐色土。φ５㎜程度の黄色パミス、ローム粒を全体に含む。

第31図　６号土坑平面図・出土遺物

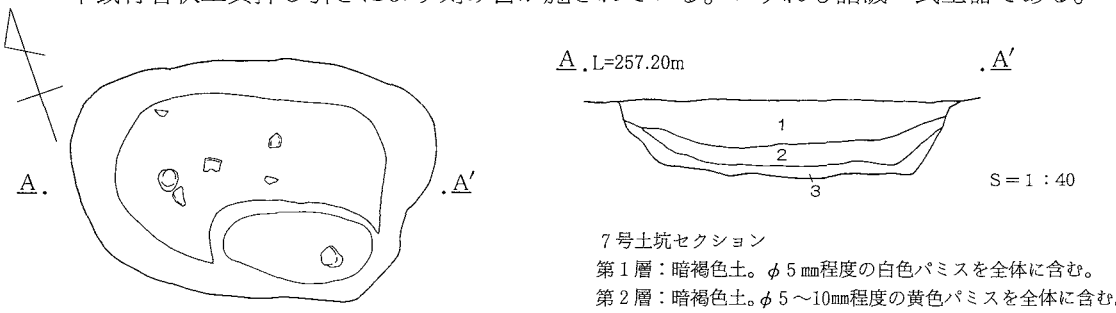
７号土坑

位置　本土坑は、東区中央部の縄文前期土坑群の中央付近に位置する。

概要　長軸方向を北西に持つ楕円形を呈する。断面形はすり鉢状であり、比較的多くの遺物が検出された。覆土は固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。出土遺物より縄文時代前期の所産と考えられる。

規模　長軸195cm、短軸125cmを測る楕円形を呈し、長軸方向を北西に持つ。確認面から底面までの深さは40cmを測る。

遺物　土器４点を図示した。１は深鉢の胴部から底部である。半裁竹管状工具による縦位・斜位の沈線を地文とし、ボタン状・横位の蛇行貼付文が施されている。２は横位の綾杉文を地文とし、２個１対のボタン状貼付文が施されている。３は半裁竹管状工具による斜位の沈線を地文とし、ボタン状・横位の蛇行貼付文が施されている。４は細い横位沈線を地文とし、粘土紐を弧状に貼付。半裁竹管状工具押し引きにより刻み目が施されている。いずれも諸磯ｃ式土器である。



７号土坑セクション
第１層：暗褐色土。φ５㎜程度の白色パミスを全体に含む。
第２層：暗褐色土。φ５～10㎜程度の黄色パミスを全体に含む。炭化物・炭化粒を含む。
第３層：褐色土。第２層に近似するが、全体にローム粒を含む。

第32図　７号土坑平面図・出土遺物

8号土坑

位置　本土坑は、東区中央部の縄文前期土坑群の中央付近に位置する。

概要　壁面上部を一部掘り過ぎたので正確な平面形は不明であるが、径150cm前後のほぼ円形を呈すると考えられる。覆土は固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。壁はやや開き気味に立ち上がり、比較的多くの遺物が検出されている。出土遺物より縄文時代前期の所産と考えられる。

規模　前述のように径150cm前後の円形を呈すると考えられる。確認面から底面までの深さは60cmを測る。

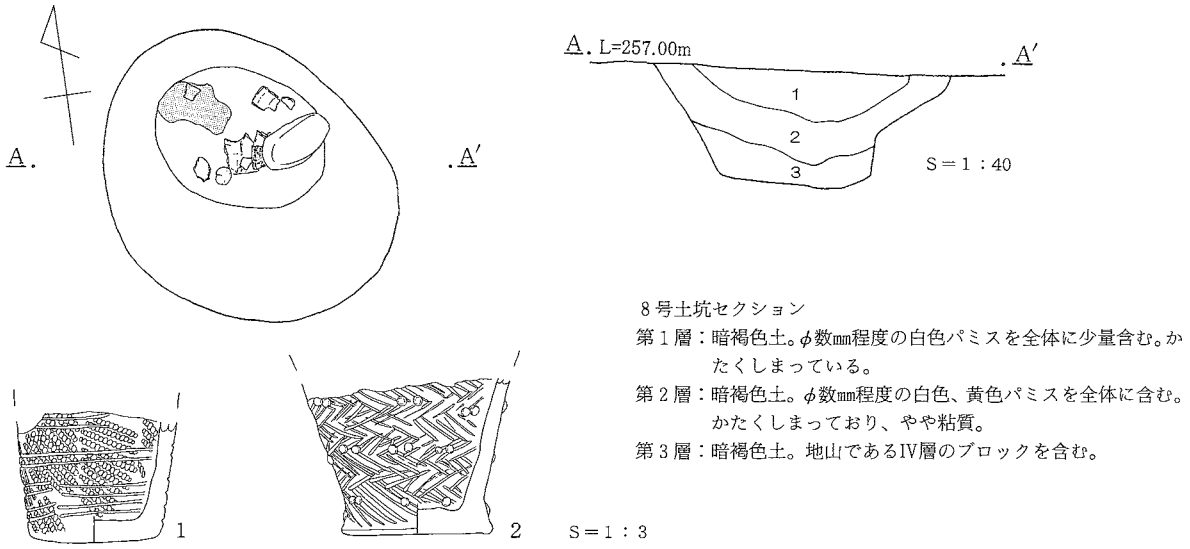
遺物　比較的多くの遺物が、土坑底部付近から出土している。同じく底部付近において炭化物・焼土も確認されている。以下、個別に説明する。

〈土器〉

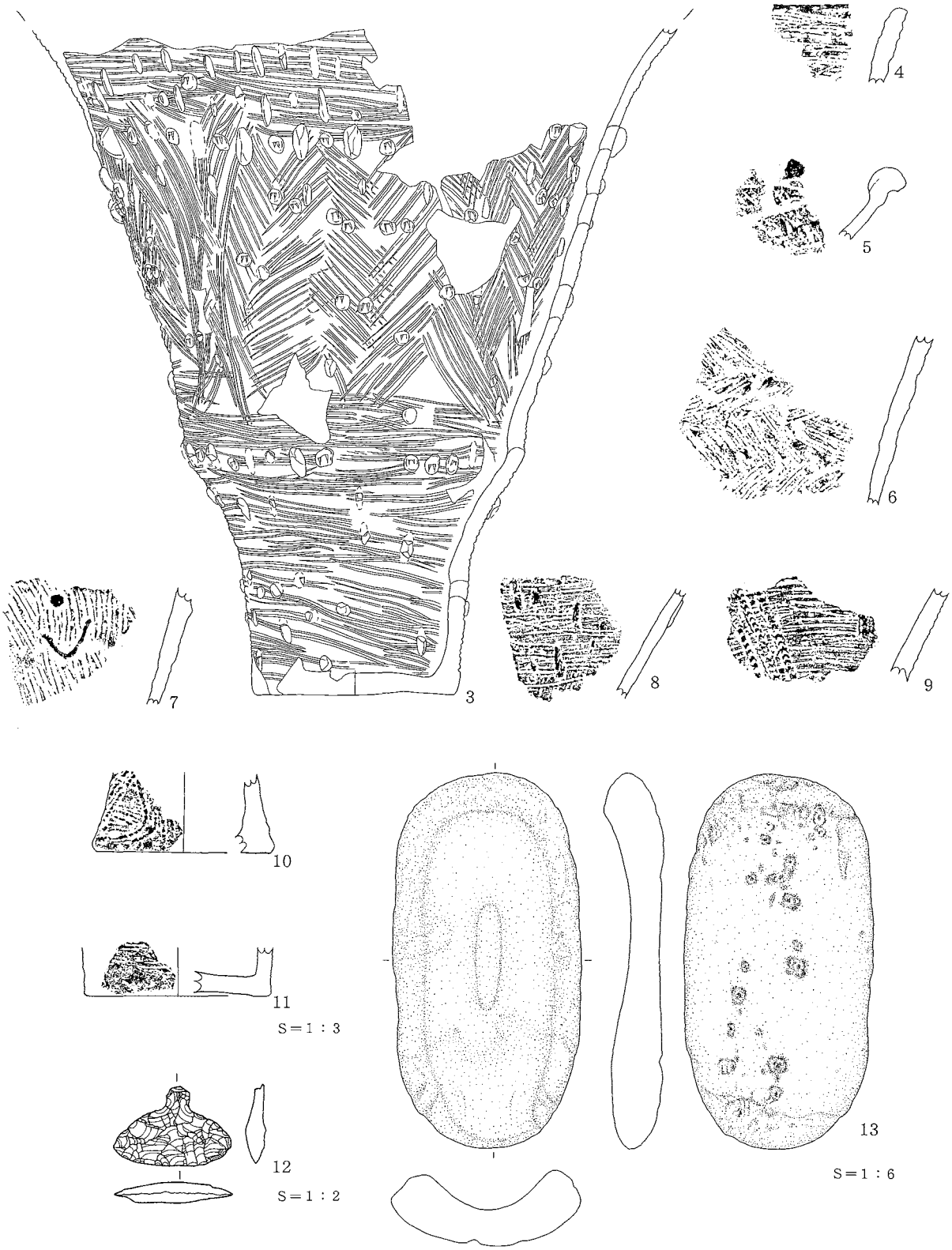
1は小型の深鉢の胴部から底部である。ＲＬ縄文を地文とし、半裁竹管状工具により平行沈線を螺旋状に施している。2は小型の深鉢の胴部から底部である。横位の綾杉文を地文とし、2個1対を基本とするボタン状貼付文を施している。3の深鉢は胴部下位において「く」の字状の膨らみを有している。地文は半裁竹管状工具による集合沈線文。胴部上部においては横位平行沈線文。中位はＸ字状または綾杉文。下位は横位平行沈線文。下位に縦位・斜位の沈線を組み合わせた区画文を1単位有する。大きめの長円形貼付文を、上位・中位・下位の文様帯の境界に並べ区画している。さらに沈線の上に、上位では小さめの長円形貼付文を、中位では刺突を施したボタン状貼付文を2個1対で多用している。4は深鉢の口縁部である。半裁竹管状工具により、横位・斜位の平行沈線を施している。5は深鉢の口縁部である。口唇部に粘土貼付による小突起を有し、半裁竹管状工具により斜位の平行沈線を施している。6は深鉢の胴部であり、横位の綾杉文を施している。ボタン状貼付文の剝離した痕跡が認められる。7は半裁竹管状工具による縦位基調の平行沈線を地文とし、ボタン状・横位波状貼付文を施している。8は横位の細い沈線を地文とし、縦位の短い貼付文を施している。9は横位の細い沈線を地文とし、直線的な結節状浮線文を並行に施している。10は深鉢の底部である。横位基調の細い沈線を地文としている。直線と曲線の粘土紐貼付により区画を配置し、半裁竹管状工具押し引きにより刻み目が施されている。11は深鉢の底部である。半裁竹管状工具により横位の平行沈線が施されている。いずれも諸磯ｃ式土器である。

〈石器〉

図示した遺物は、石錐1点、石皿1点の計2点である。石器の石材は、石錐にチャート、石皿に緑色片岩が使用されている。裏面に多孔を有している2の石皿は、土坑底部付近において、1の土器の上に重なるように逆位で出土している。また、図示しなかったが黒曜石の剝片が17点出土している。



第33図　8号土坑平面図・出土遺物（1）



第34図　8号土坑出土遺物(2)

第7表　8号土坑出土石器計測表

挿図番号 図版番号	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
12	石匙	チャート	2.6	4.0	0.7	6.2	
13	石皿	緑色片岩	37.61	19.1	5.8	7750	裏面に多孔を有する。

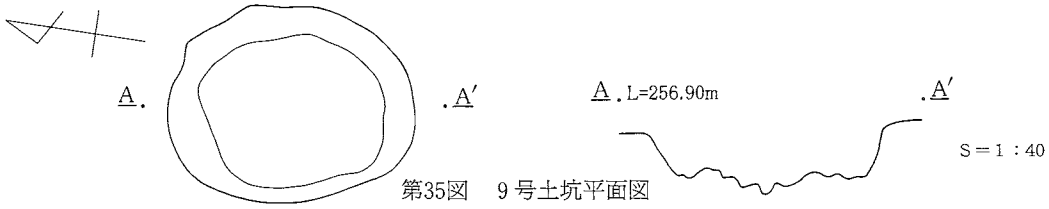
9号土坑

位置　本土坑は、東区中央部の縄文前期土坑群の東端付近に位置する。

概要　長軸方向を南北に持つ楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。底部は平坦でなく凹凸が激しい。時期の特定はできないが、遺構の確認面・覆土より縄文時代の所産と考えられる。

規模　長軸130cm、短軸105cmを測る楕円形を呈し、長軸方向を南北に持つ。確認面から底面までの深さは約50cmを測る。

遺物　出土遺物なし。



第35図　9号土坑平面図

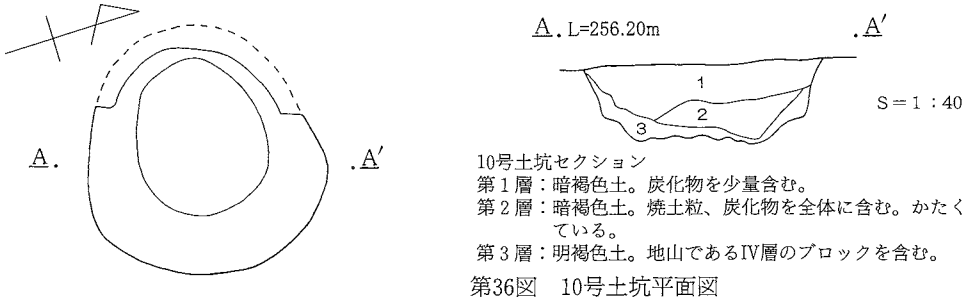
10号土坑

位置　本土坑は、東区中央部の縄文前期土坑群の中央付近に位置する。

概要　本土坑は試掘トレンチを入れていた際、基本土層Ⅴ層上面にて西半分が確認されたものである。断面はすり鉢状を呈する。覆土は固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。時期の特定はできないが、遺構の確認面・覆土より縄文時代の所産と考えられる。

規模　西半分が試掘トレンチにより深めに掘削されているために、東半分の確認面と標高差が25cm程ある。東半分の確認面で全体を調査したと仮定すると、径約140cm程度のほぼ円形を呈すると考えられる。東側確認面から底面までの深さは約45cmを測る。

遺物　わずかに土器が出土しているが、小破片のため図示できなかった。



10号土坑セクション
第1層：暗褐色土。炭化物を少量含む。
第2層：暗褐色土。焼土粒、炭化物を全体に含む。かたくしまっている。
第3層：明褐色土。地山であるⅣ層のブロックを含む。

第36図　10号土坑平面図

11号土坑

位置　本土坑は、東区中央部の縄文前期土坑群の中央付近に位置する。

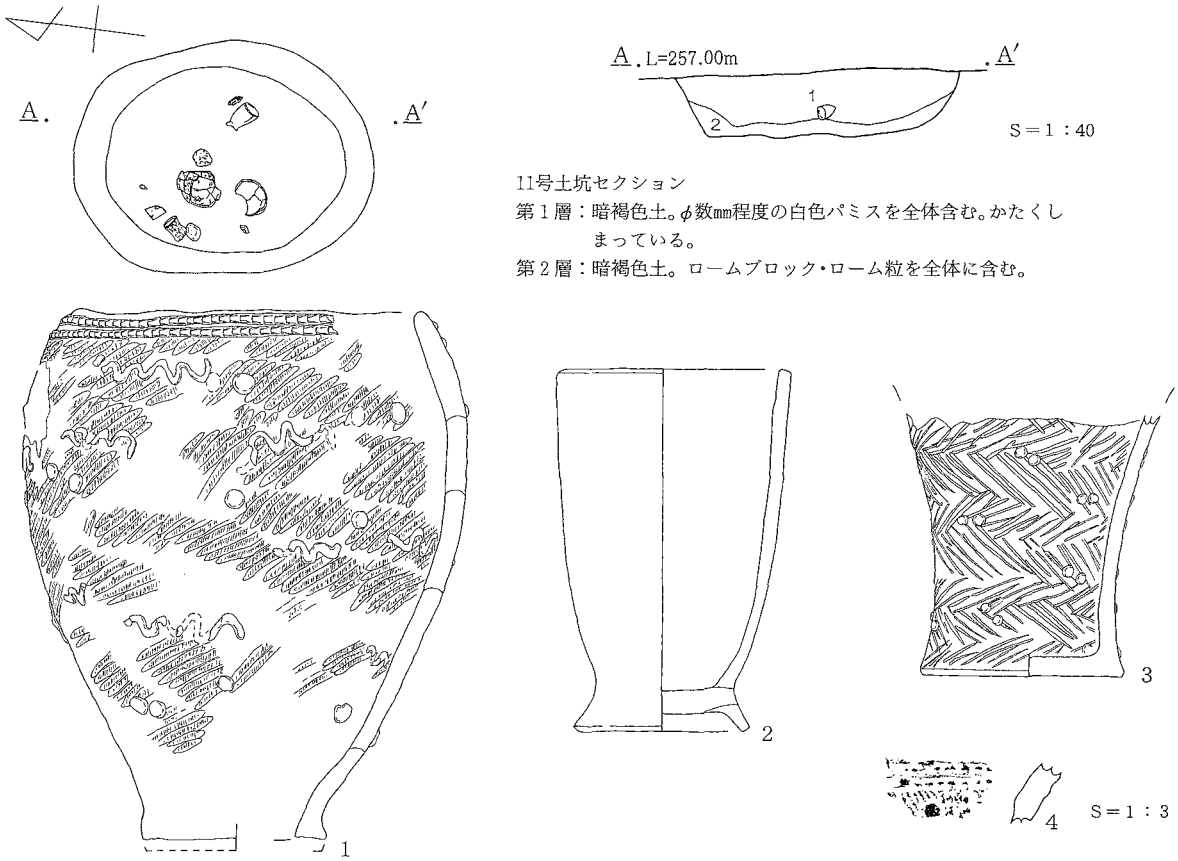
概要　長軸方向を南北に持つ楕円形を呈する。断面形はすり鉢状であり、比較的多くの遺物が検出されている。覆土は固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。出土遺物より縄文時代前期の所産と考えられる。

規模　長軸160cm、短軸120cmを測る楕円形を呈し、長軸方向を南北に持つ。確認面から底面までの深さは35cmを測る。

遺物　ほぼ完形のものを含め、比較的多くの土器が出土している。以下、個別に説明する。

〈土器〉

1の深鉢は、胴部上位に最大径を持ち、口縁部が内反する。無節縄文を器面全体に施し地文とし、口唇部に2条の結節状浮線文、胴部に波状と2個1対を基本とするボタン状貼付文が施されている。2はコップ形の深鉢であり、内外面ともに非常に丁寧に磨かれている。3は深鉢の胴部から底部である。横位の綾杉文を地文とし、2個1対を基本とするボタン状貼付文を施している。4は深鉢の胴部である。上位は横位の結節状浮線文、下位は縦位・斜位の沈線を地文とし、ボタン状の貼付文を施している。いずれも諸磯c式土器である。



第37図　11号土坑平面図・出土遺物

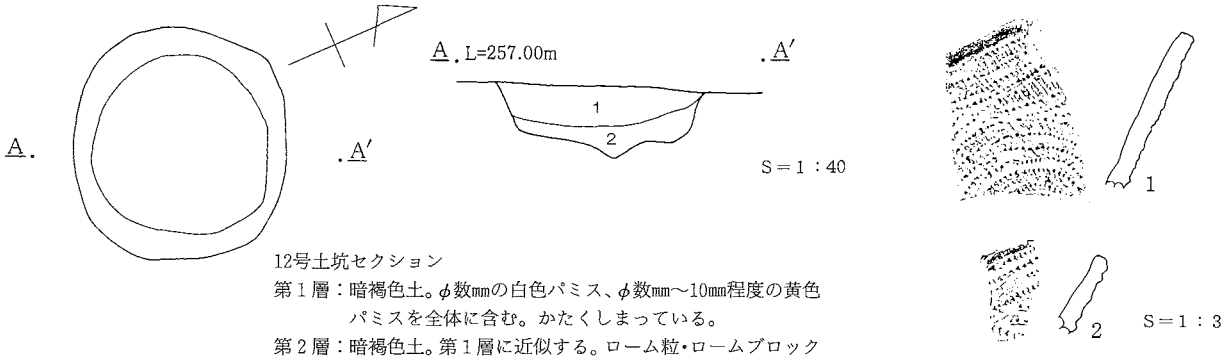
12号土坑

位置　本土坑は、東区中央部の縄文前期土坑群の西端付近に位置する。

概要　ほぼ円形を呈し、断面形はすり鉢状である。覆土は固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。僅かに出土した土器から縄文時代前期の所産と考えられる。

規模　径約120cmの円形を呈する。確認面から底面までの深さは35cmを測る。

遺物　波状口縁の深鉢と考えられる土器片が２点出土しており、同一個体の可能性が高い。２点とも口縁部であり斜位の沈線を地文とする。上位に横位の粘土紐を４条貼付。下位は弧状に粘土紐を貼付。半裁竹管状工具押し引きにより刻み目が施されている。いずれも諸磯ｃ式土器である。



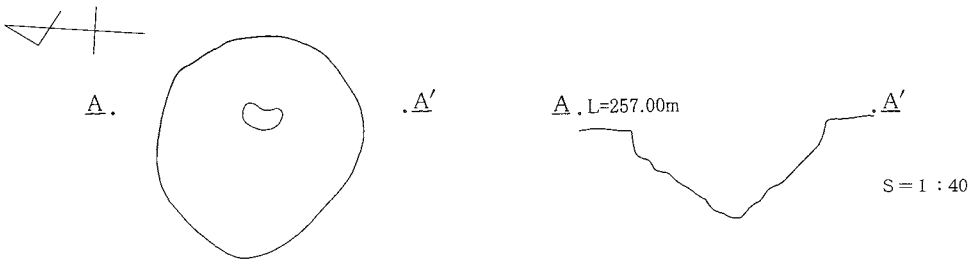
第38図　12号土坑平面図・出土遺物

13号土坑

位置　本土坑は、東区中央部の縄文前期土坑群の西端付近に位置する。

概要　西側を一部掘り過ぎたため、正確なプランは不明であるが、残存部分よりほぼ円形を呈するものと推測される。断面形は漏斗状を呈する。

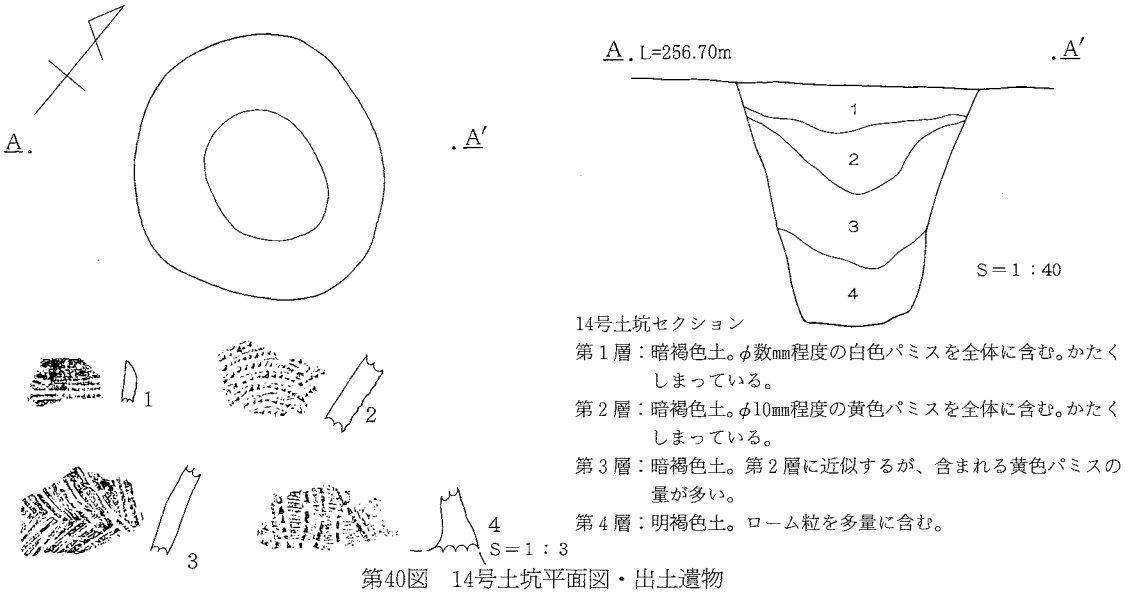
規模　径約110cm程度の円形を呈する。確認面から底面までの深さは45cmを測る。
遺物　出土遺物なし。



第39図　13号土坑平面図

14号土坑

位置　本土坑は、東区中央部の縄文前期土坑群の東端付近に位置する。
概要　ほぼ円形を呈し、壁はやや開き気味に立ち上がる。覆土は固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。出土遺物より縄文時代前期の所産と考える。
規模　径約140cmの円形を呈する。確認面から底面までの深さは125cmを測る。
遺物　小破片が多いが、25点の土器が出土している。４点を図示した。以下、個別に説明する。
〈土器〉
１の口縁部は横位に細い粘土紐を貼付し、半裁竹管状工具押し引きにより刻み目が施されている。２は深鉢の胴部で、細い横位沈線を地文とし、粘土紐を横位に連結する弧状に貼付。半裁竹管状工具押し引きにより刻み目が施されている。３は深鉢の胴部で、横位の綾杉文が施されている。４は深鉢の底部で、横位の沈線を地文としている。粘土紐を弧状や直線上に貼付し、半裁竹管状工具押し引きにより刻み目が施されている。いずれも諸磯ｃ式土器である。



14号土坑セクション
第１層：暗褐色土。φ数mm程度の白色パミスを全体に含む。かたくしまっている。
第２層：暗褐色土。φ10mm程度の黄色パミスを全体に含む。かたくしまっている。
第３層：暗褐色土。第２層に近似するが、含まれる黄色パミスの量が多い。
第４層：明褐色土。ローム粒を多量に含む。

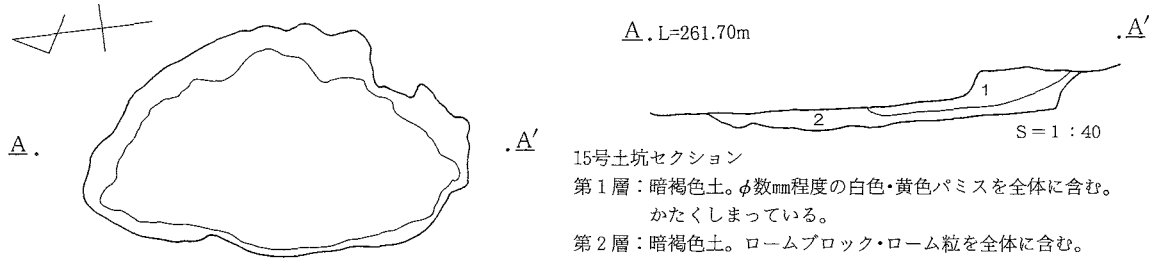
第40図　14号土坑平面図・出土遺物

15号土坑

位置　本土坑は東区の南に位置する。１号溝（奈良･平安時代）により北側半分以上が壊されている。
概要　本土坑は１号溝の調査時に溝の底部で確認された。１号溝の調査終了後、土坑周辺を基本土層Ⅳ層途中まで掘削し調査を行ったものである。したがって遺構の残存状況は悪い。南北に長軸を持つ不整楕円形を呈する。覆土は非常に固くしまった暗褐色土である。出土遺物がないため時期の特定はできないが、遺構の確認面・覆土より縄文時代の所産と考えられる。
規模　前述の理由により、本来の規模についての詳細は不明である。残存する部分の長軸205cm、短軸120cmを測る不整楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは、残存状況が比較的良好な南側で

35cmを測る。

遺物　出土遺物なし。



15号土坑セクション
第１層：暗褐色土。φ数mm程度の白色・黄色パミスを全体に含む。かたくしまっている。
第２層：暗褐色土。ロームブロック・ローム粒を全体に含む。

第41図　15号土坑平面図

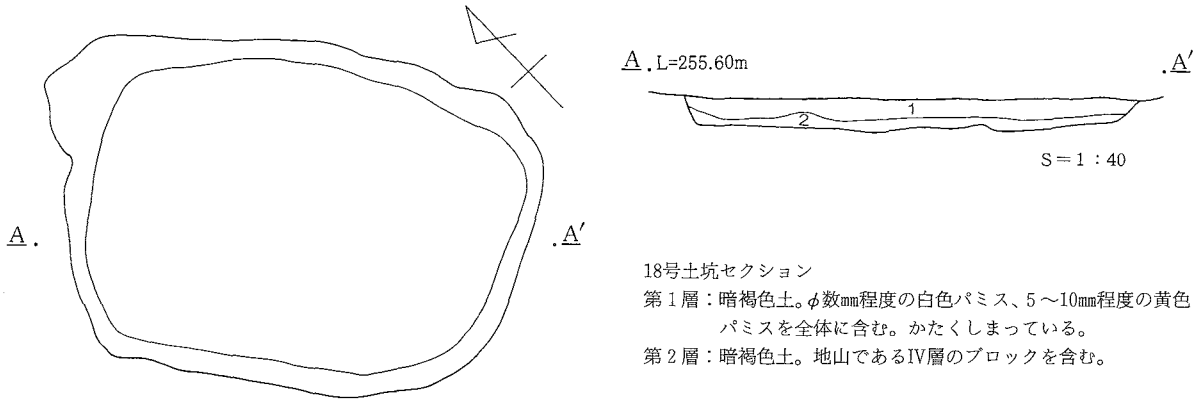
18号土坑

位置　本土坑は、東区の北寄りに位置する。南方約６ｍに８号住居がある。

概要　本土坑は試掘トレンチを入れていた際、基本土層Ｖ層上面にて西側一部が確認されたものである。覆土は非常に固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。当初はある程度の規模があること、底部が比較的平坦であることから、住居跡の可能性も考えた。しかし、遺物が出土してないこと、規模や形状から最終的には土坑と判断した。時期の特定はできないが、遺構の確認面・覆土より縄文時代の所産と考えられる。

規模　長軸方向を北西に持つ隅丸の長方形を呈し、長軸255cm、短軸170cmを測る。確認面から底面までの深さは20cmを測る。

遺物　出土遺物なし。



18号土坑セクション
第１層：暗褐色土。φ数mm程度の白色パミス、５～10mm程度の黄色パミスを全体に含む。かたくしまっている。
第２層：暗褐色土。地山であるⅣ層のブロックを含む。

第42図　18号土坑平面図

22号土坑

位置　本土坑は東区の北端に位置する。

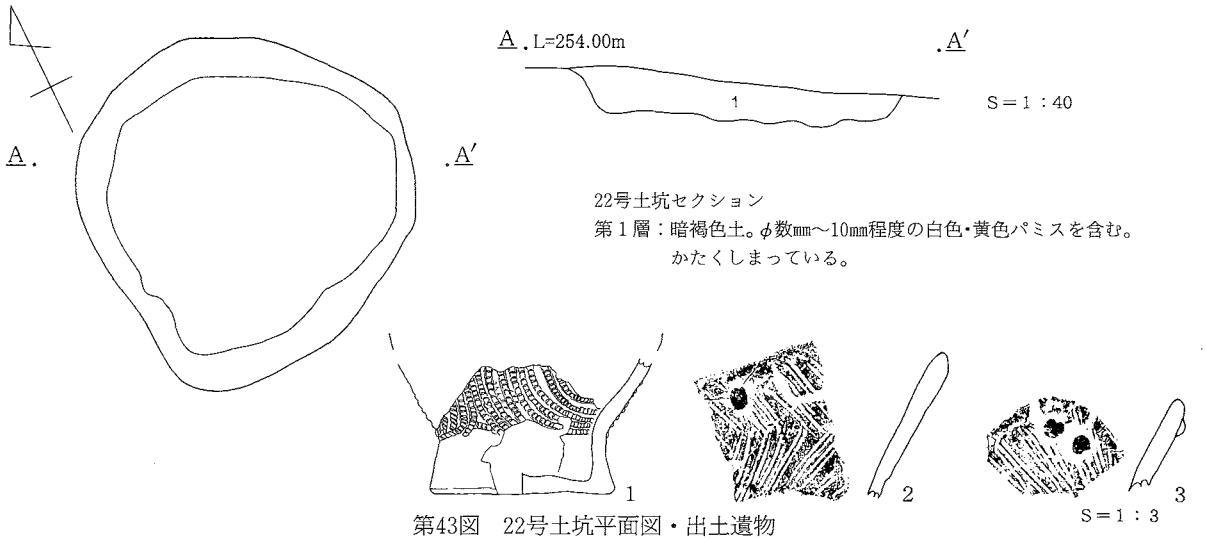
概要　本土坑は試掘トレンチを入れていた際、基本土層Ｖ層上面にて確認されたものである。覆土は非常に固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。南側の一部を除いて土坑範囲がトレンチと重なるため、残存状況が悪い。西側一部を掘り過ぎているが、ほぼ円形を呈すると考えられる。壁は開き気味に立ち上がり、比較的平坦な底部を持つ。出土遺物より縄文時代前期の所産と考えられる。

規模　径170cm前後のほぼ円形を呈し、確認面から底面までの深さは25cmを測る。

遺物　小破片が多いが、９点の土器と石器の剝片１点が出土している。土器３点を図示した。以下、個別に説明する。

〈土器〉

１は深鉢の胴部下位から底部である。「く」の字状の器形変換点より上位に結節状浮線文が渦巻き状に施されている。２・３は接点はないが同一個体である可能性が高い。波状口縁を持つ深鉢の破片であり、横位の綾杉文を地文とし、２個１対のボタン状貼付文を施している。いずれも諸磯ｃ式土器である。



第43図　22号土坑平面図・出土遺物

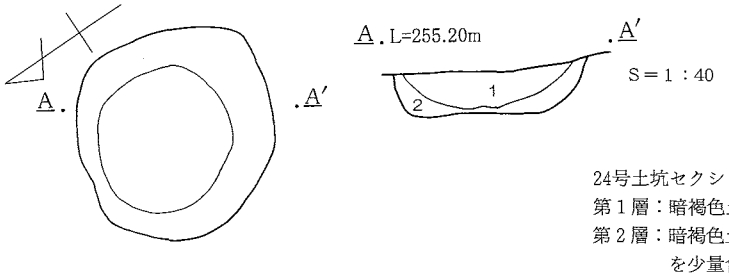
24号土坑

位置　本土坑は東区の北寄に位置する。北東方向約４ｍに９号住居（古墳時代）がある。

概要　本土坑は試掘トレンチを入れていた際、基本土層Ｖ層上面にて確認されたものである。覆土は固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。ほぼ円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、比較的平坦な底部を持つ。出土遺物がなく時期の特定はできないが、遺構の確認面・覆土より縄文時代の所産と考えられる。

規模　径110cm前後のほぼ円形を呈し、確認面から底面までの深さは30cmを測る。

遺物　出土遺物なし。

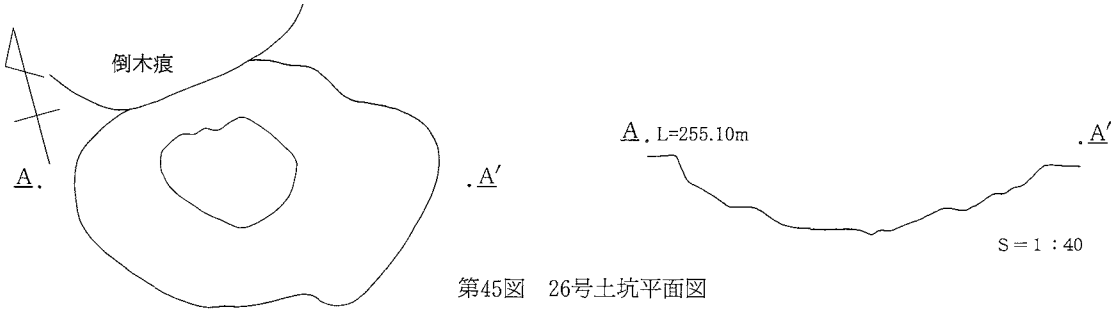


第44図　24号土坑平面図

26号土坑

位置　本土坑は東区の北寄りに位置する。南約10mに７号住居（縄文時代）がある。北西に隣接し、土坑より新しい倒木痕が確認されている。倒木痕により、北西側の壁の上部が壊されている。

概要　本土坑は試掘トレンチを入れていた際、基本土層Ｖ層上面にて確認されたものである。当初８の字状の不整形の土坑と考えていたが、調査する過程で北西部分は後世の倒木痕であることが分かった。遺物が出土していないため時期の特定はできないが、遺構の確認面・覆土より縄文時代の所産と考えられる。



第45図　26号土坑平面図

規模　長軸195cm、短軸130cmを測る楕円形を呈し、ほぼ東西に長軸方向を持つ。確認面から底面までの深さは35cmを測る。断面形はすり鉢状である。

遺物　出土遺物なし。

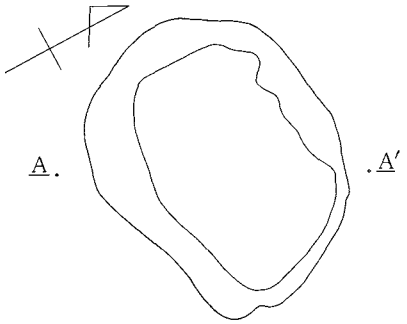
29号土坑

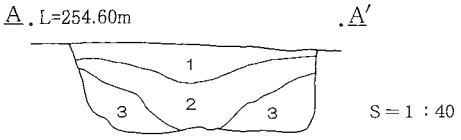
位置　本土坑は東区の北寄りに位置する。

概要　本土坑は試掘トレンチを入れていた際、基本土層Ⅴ層上面にて確認されたものである。覆土は固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。ほぼ東西に長軸方向を持つ楕円形を呈する。壁はやや開き気味に立ち上がり、比較的平坦な底部を持つ。土器が出土していないため時期の特定はできないが、遺構の確認面・覆土より縄文時代の所産と考えられる。

規模　長軸160cm、短軸120cmを測る楕円形を呈し、長軸方向を東西方向に持つ。確認面から底面までの深さは45cmを測る。

遺物　石器の剥片が１点出土している。





29号土坑セクション
第１層：暗褐色土。φ数mm程度の白色パミスを全体に含む。かたくしまっている。
第２層：暗褐色土。φ数mm程度の白色・黄色パミスを全体に含む。かたくしまっている。
第３層：暗褐色土。第２層に近似。地山であるⅣ層のブロックを含む。

第46図　29号土坑平面図

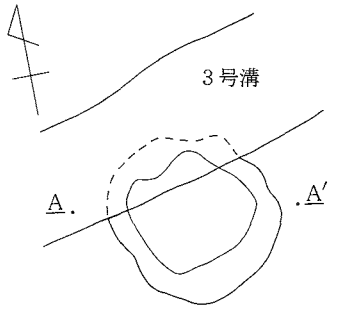
30号土坑

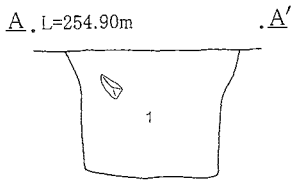
位置　本土坑は東区の北寄りに位置する。北の一部が３号溝（古墳時代）と重複する。

概要　本土坑は試掘トレンチを入れていた際、基本土層Ⅴ層上面にて確認されたものである。覆土は固くしまった暗褐色土であり、やや粘質である。前述のように北側が３号溝と重複するが、３号溝が浅いためにほとんど壊されてはいない。ほぼ円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、平坦な底部を持つ。遺物が出土していないため時期の特定はできないが、遺構の確認面・覆土より縄文時代の所産と考えられる。

規模　径約90cm、確認面から底面までの深さは65cmを測る。

遺物　出土遺物なし。

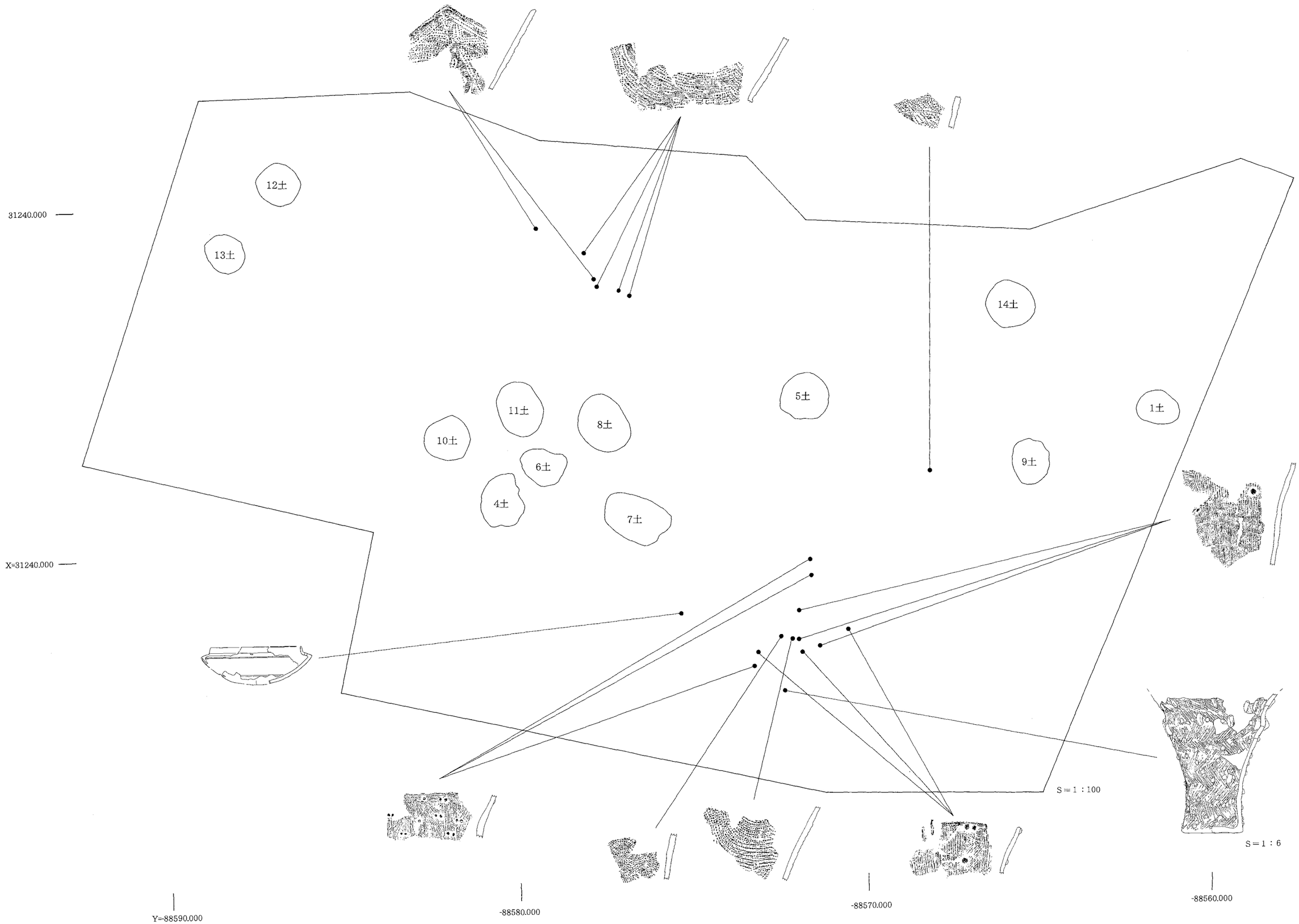




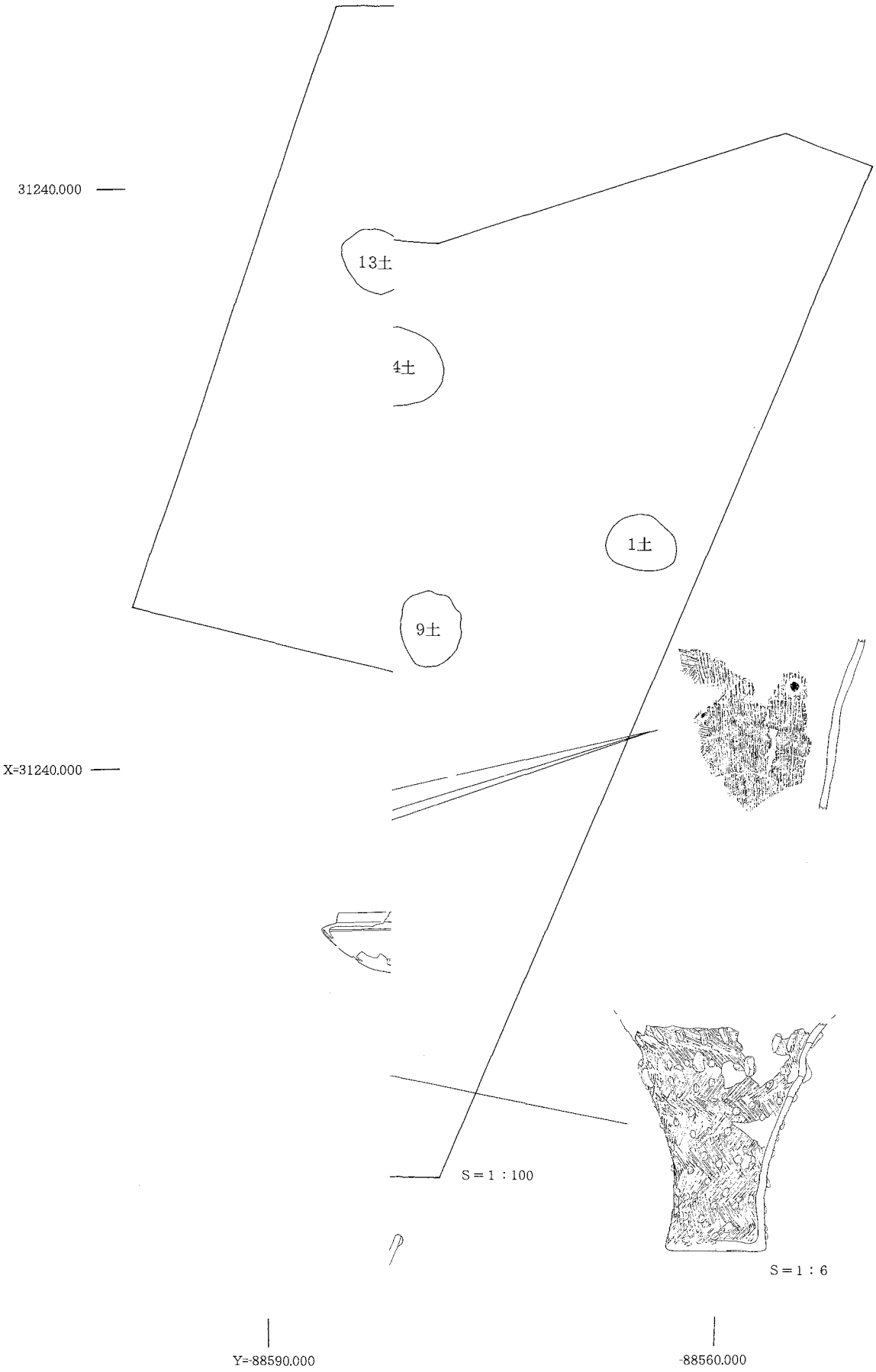
S＝1：40

30号土坑セクション
第１層：暗褐色土。φ数mm程度の白色パミス、10mm程度の黄色パミスを含む。かたくしまっている。

第47図　30号土坑平面図



第48図　東区縄文前期土坑群周辺出土遺物


31240.000
13土
4土
1土
9土
X=31240.000
S＝1：100
S＝1：6
Y=-88590.000
-88560.000

（３） 遺構外出土遺物

遺構外からの遺物の出土量は、調査面積の割りに比較的少なく、遺物収納箱で土器が約５箱、石器が約２箱である。出土状況の傾向は、調査区南側の高田川と碓氷川の分水嶺付近において中期末葉の遺物が多く、東区の縄文前期土坑群及び住居群付近において前期中葉から後葉の遺物が多い。前期後葉の遺物は、西区古墳時代住居群の東側でも出土している。土器の出土量を時期別にみると、前期諸磯ｃ式期と中期加曽利Ｅ式期が多い。次いで前期関山式期である。前期諸磯ｂ式期と後期称名寺式期・加曽利Ｂ式期は僅かである。以下、出土遺物について時期毎に個別に説明する。

〈土器〉

前期中葉（１～３）

いずれも鉢の胴部片と考えられる。１は組紐により、２は異条斜縄文（正反の合）により文様が施されている。３は櫛歯状工具の連続刺突により文様が施されている。いずれも、東区前期土坑群付近から出土している。１・２は関山Ⅱ式土器、３は神ノ木式土器である。

前期後葉（４～19）

４は波状縁の深鉢である。粘土紐を貼付し、刻みが施されている。また、波頂部下にこぶ状の貼付を有している。５は地文にＲＬ縄文、横位に並行する直線的貼付文に刻みが施されている。６は地文にＲＬ縄文、下位は横位に並行する直線貼付文、上位は同心円状に弧状貼付文が施されている。７は地文にＲＬ縄文、横位に並行する直線貼付文にＲＬ縄文が施されている。８は半裁竹管状工具による連続刺突文が施されている。９の深鉢は、半裁竹管状工具による横位の綾杉文を地文とする。上部の器形変換部付近に長円形貼付文、器形変換部下位にボタン状貼付文、器形変換部上位に棒状貼付文が施されている。10は平縁の深鉢の口縁部である。半裁竹管状工具による縦位・斜位の平行沈線を地文とし、長円形・ボタン状の貼付文が施されている。11は深鉢の胴部である。半裁竹管状工具による縦位・斜位の平行沈線を地文とし、ボタン状の貼付文が施されている。10と11は、文様構成・胎土より同一個体の可能性が高い。12は深鉢の胴部である。半裁竹管状工具による横位・縦位・斜位の直線の平行沈線と、縦位の曲線の平行沈線を組み合わせて区画している。そして、２個１対を基本とする小さめのボタン状貼付文が施されている。13は波状縁の深鉢の口縁部である。横位の細い沈線を地文としている。波状縁に平行するように４条の粘土紐を、その下位に直線・曲線の粘土紐を貼付し、半裁竹管状工具押し引きによる刻みが施されている。14～18は深鉢の胴部である。横位基調の細い沈線を地文とし、直線・弧状・渦巻き状の結節状浮線文が施されている。17は上半部に横の区画を構成し、区画内に羽状の結節状浮線文が施されている。13～17は同一個体の可能性が高い。19は浅鉢である。外面には丁寧な磨きが施されている。胎土に金雲母が混入している。４～７は諸磯ｂ式土器、８は浮島式土器、９～19は諸磯ｃ式土器である。

中期末葉（20～21）

20は両耳壺の胴部上位である。上半部に橋状把手を有し、把手上に逆Ｓ字状の凹線文が施されている。把手の左右にはＬＲ縄文を施した楕円区画を有している。下半部は縦位基調の条痕文が施されている。21は深鉢の胴部であり、縦位の浅い凹線文が施されている。いずれも加曽利ＥⅢ式土器である。

後期初頭（22）

22は深鉢の胴部であり、無節Ｒ縄文を地文とし、緩い曲線の凹線で区画を構成している。称名寺式土器である。

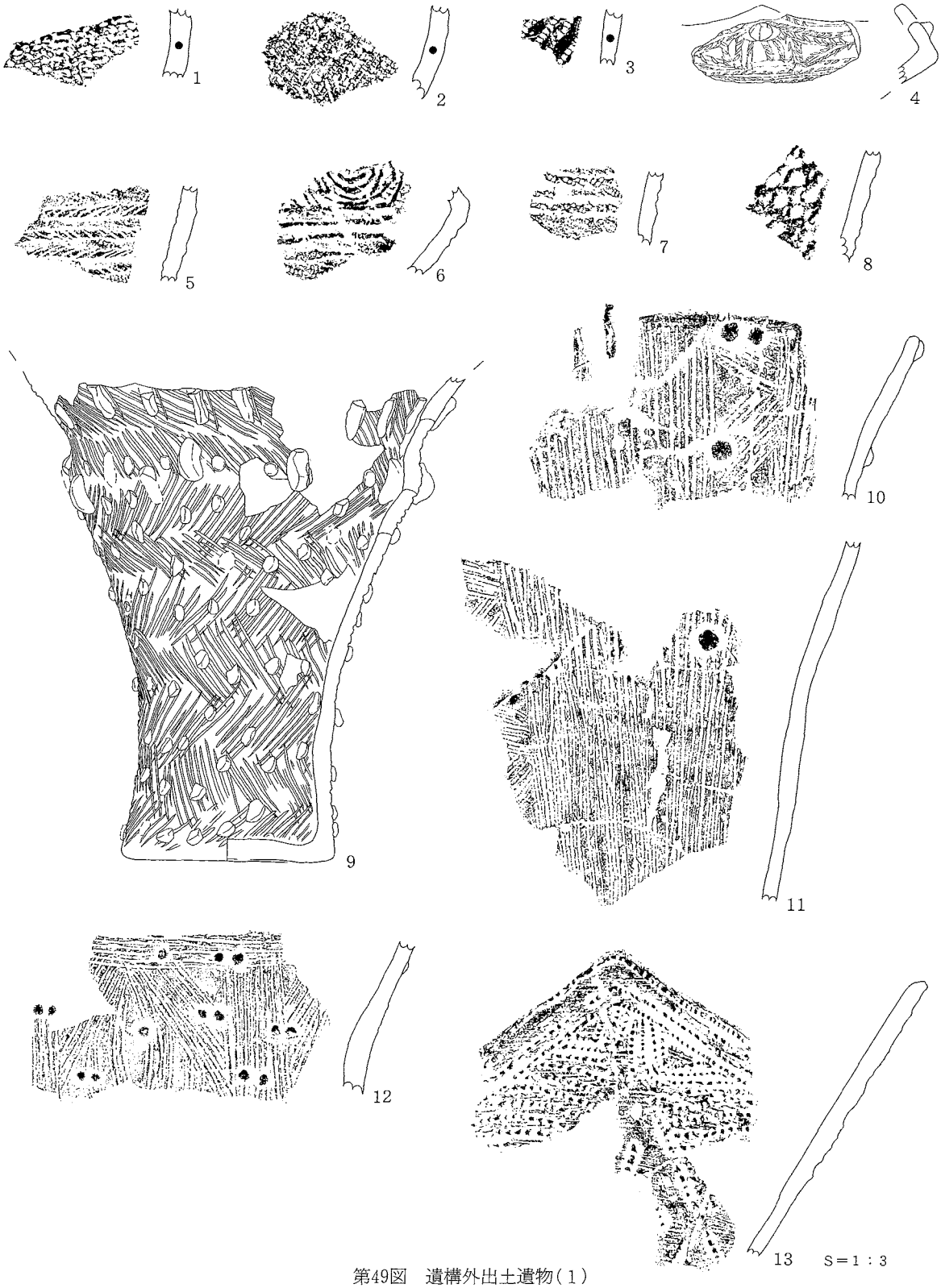
後期中葉（23～25）

いずれも深鉢の口縁部である。23・24は同一個体と考えられ、４単位の波状縁で器形変換点上部を、横位・縦位の沈線文で区画し、大小の円形の刻みが施されている。内面は、口縁下に２条の並行沈線が巡る。24は波頂部に沿うように上位の沈線が分岐している。25は平縁で、横位の貼付文に円形の刻みが施されている。いずれも加曽利Ｂ２式土器である。

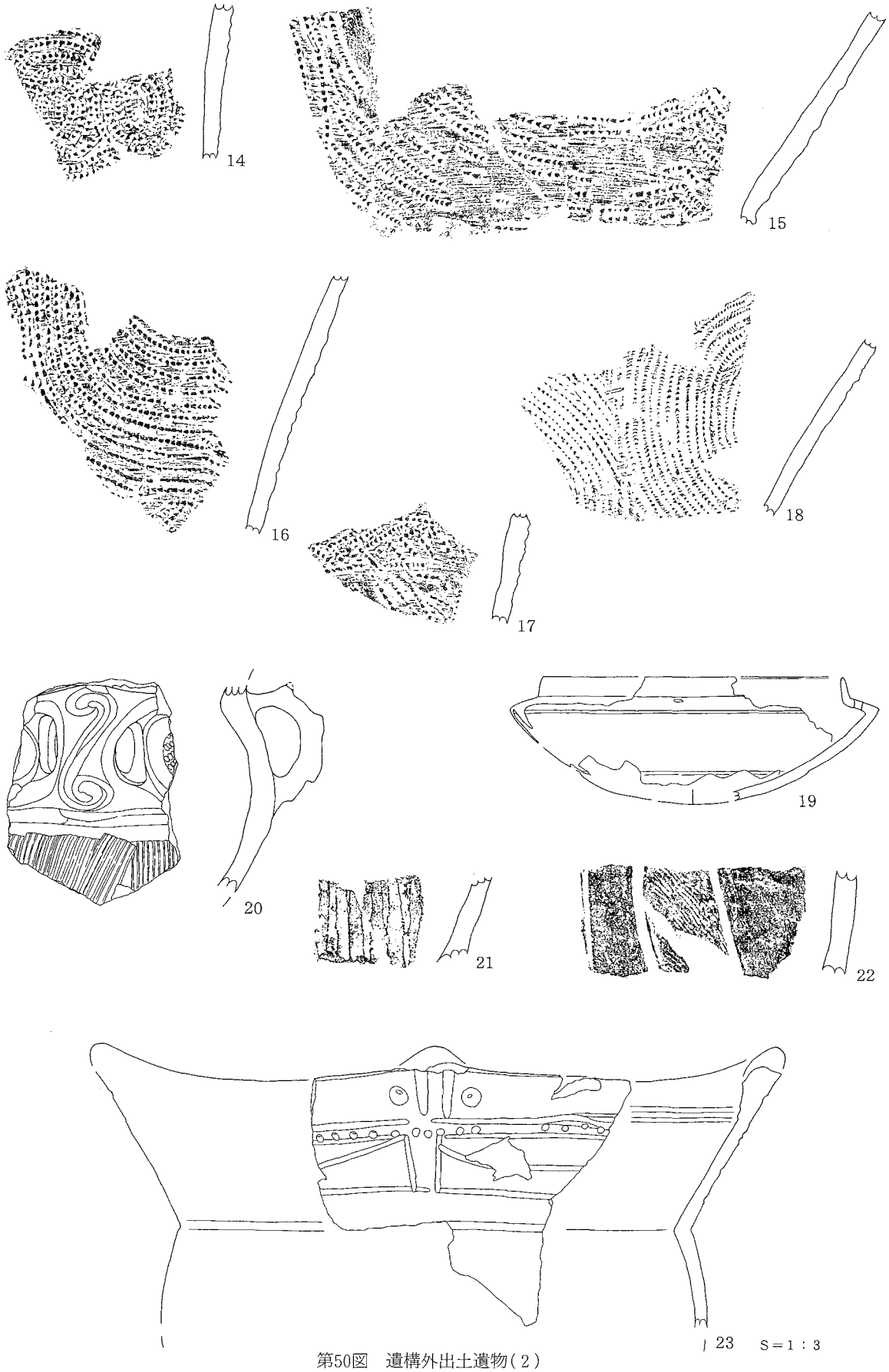
〈石器〉

図示した遺物は、石錐１点、石鏃１点、打製石斧４点、磨製石斧２点、磨石４点、石皿３点の計15

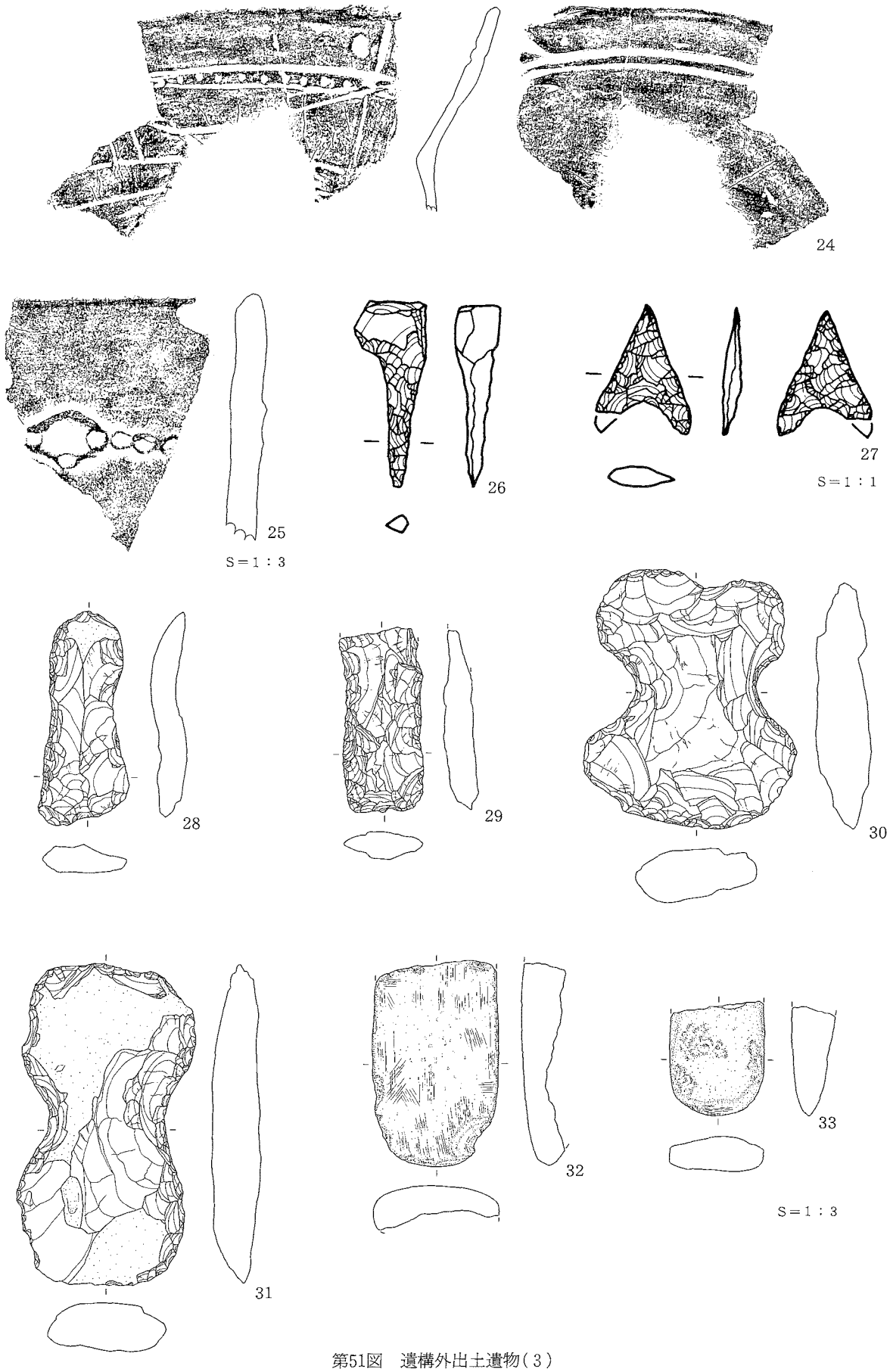
点である。これらの石器の石材には、石錐・石鏃に黒曜石、打製石斧に珪質頁岩・粗粒輝石安山岩・硬質泥岩、磨製石斧に変玄武岩、磨石に粗粒輝石安山岩・デイサイト、石皿に緑色片岩が使用されている。26は一部に自然面を有している。39は5号住居跡（古墳時代）覆土中より出土しているが、5号住居に伴うものではないと判断し、ここに掲載した。



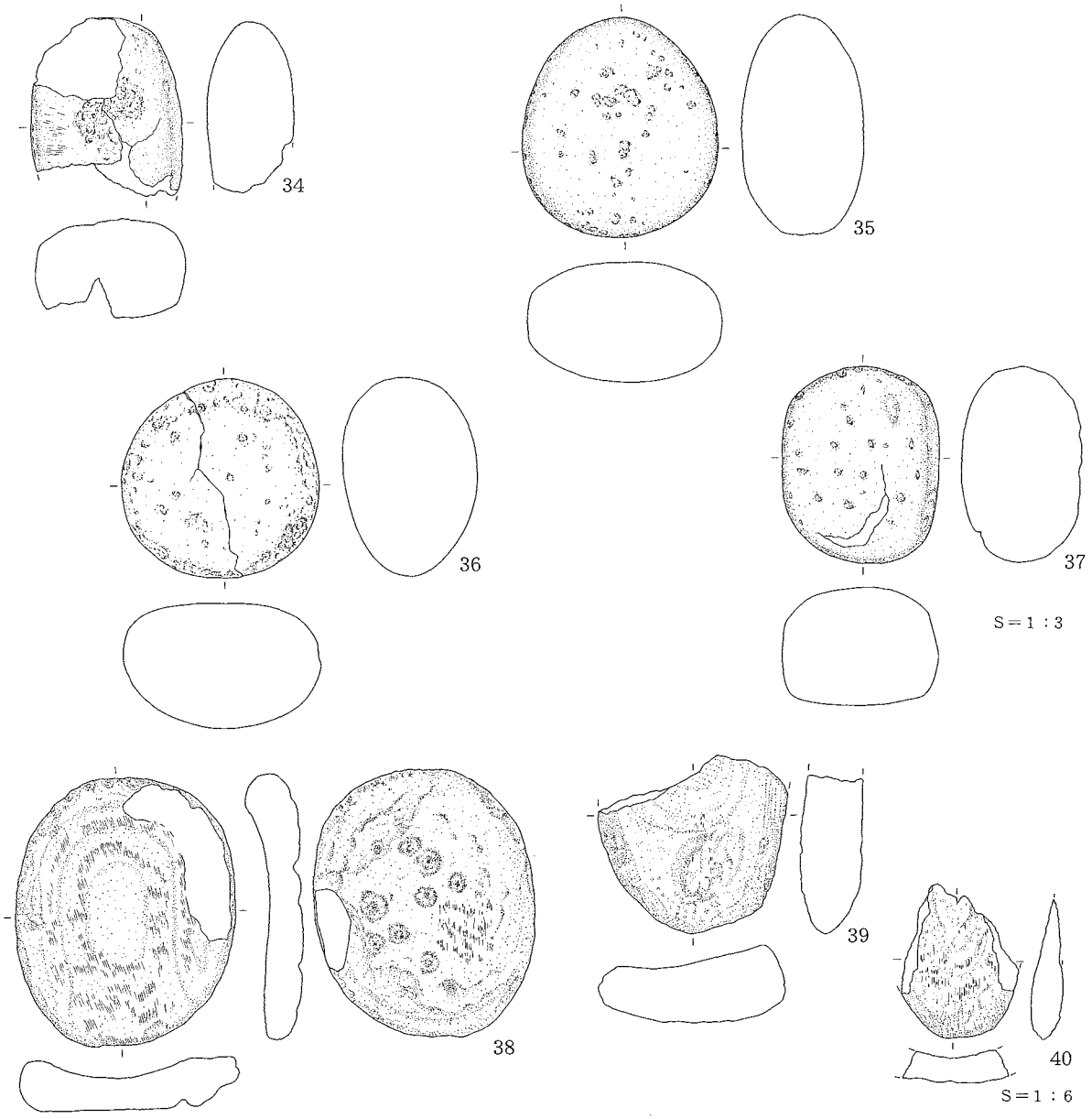
第49図　遺構外出土遺物（1）



第50図　遺構外出土遺物（２）



第51図　遺構外出土遺物（３）



第52図　遺構外出土遺物（4）

第8表　遺構外出土石器計測表

挿図番号 図版番号	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
26	石錐	黒曜石	3.2	1.3	0.8	1.8	前期土坑群付近より出土。
27	石鏃	黒曜石	2.2	1.7	0.3	0.6	前期土坑群付近より出土。
28	打製石斧	珪質頁岩	11.2	9.5	1.7	96.6	
29	打製石斧	粗粒輝石安山岩	(9.2)	4.2	1.5	77.3	西区南端付近より出土。
30	打製石斧	珪質頁岩	13.6	11.2	2.6	485.7	東区北端付近より出土。
31	打製石斧	硬質泥岩	16.9	9.1	2.8	518.0	東区北端付近より出土。
32	磨製石斧	変玄武岩	(10.5)	(6.6)	(2.4)	286.6	西区南端付近より出土。
33	磨製石斧	変玄武岩	(6.0)	4.9	2.2	115.5	西区南端付近より出土。
34	磨石	粗粒輝石安山岩	(7.8)	6.6	4.3	264.3	前期土坑群付近より出土。
35	磨石	粗粒輝石安山岩	9.5	8.5	5.3	587.9	前期土坑群付近より出土。
36	磨石	デイサイト	8.6	8.6	5.6	510.8	前期土坑群付近より出土。
37	磨石	粗粒輝石安山岩	8.5	6.9	5.2	504.9	被熱による剝離が認められる。
38	石皿	緑色片岩	23.1	19.1	4.6	3125	裏面に多孔を有する。
39	石皿	緑色片岩	(15.3)	(16.3)	(5.9)	2150	5号住居跡覆土中より出土。
40	石皿	緑色片岩	(13.5)	(10.0)	2.8	488.6	6号住居跡下層より出土。

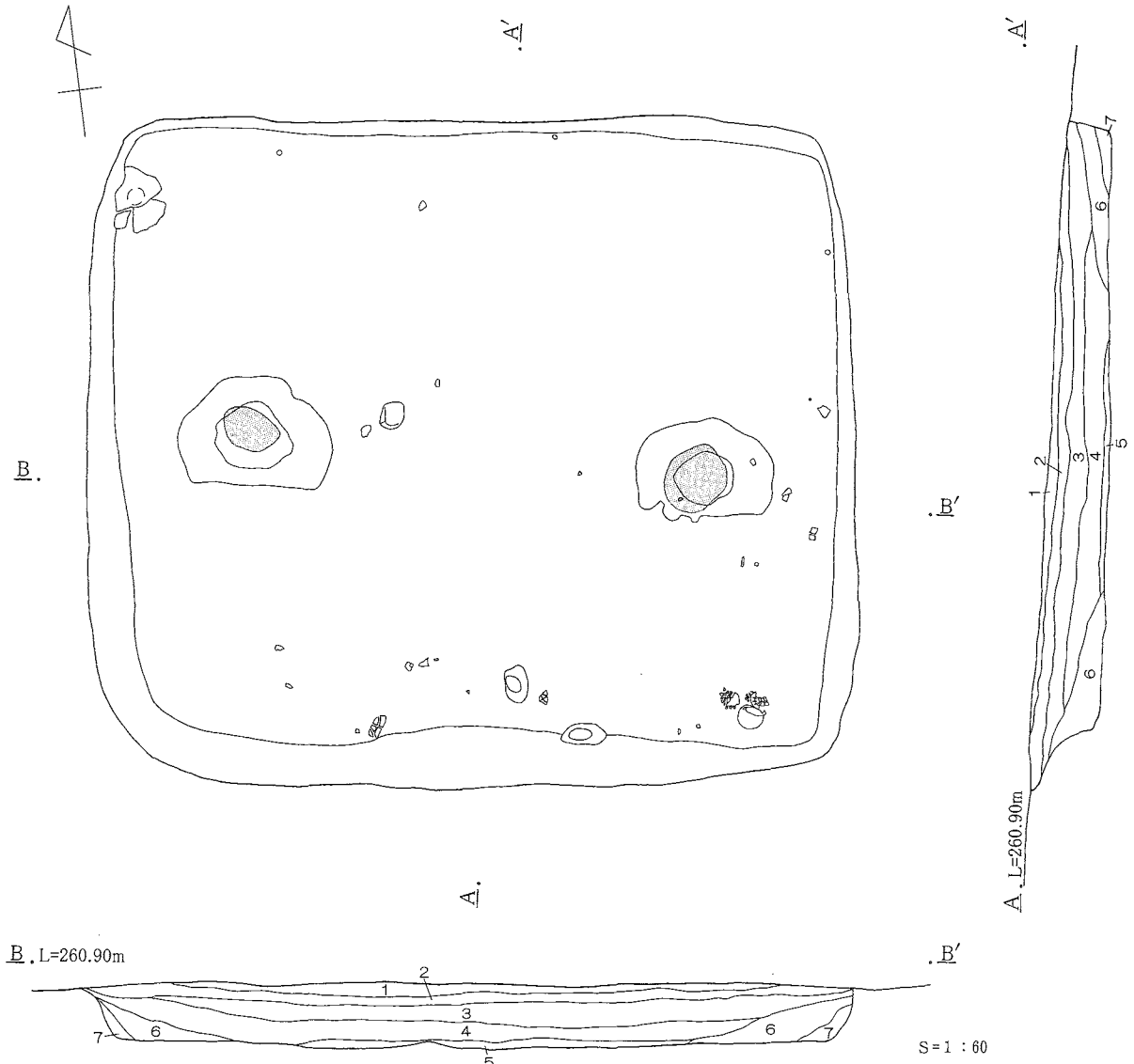
第４節　古墳時代

（１）　竪穴住居跡

１号住居跡

位置　西区のほぼ中央では古墳時代前期の住居群が検出されている。この住居群は高田川との分水嶺から猫沢川支流の小沢に向かって下る北西斜面に立地する。本住居は、猫沢川支流に並行するように北東から南西へ帯状に展開する住居群の東端に位置する。尚、この住居群は今回調査を行った部分よりさらに南西方向へ展開していく可能性が高い。

概要　本住居は基本土層のⅣ層まで試掘トレンチを入れた際確認され、トレンチを拡張し調査を行った住居である。覆土はやや粘質の黒褐色土であり、最上部にAs—B軽石（1108年、浅間山給源）がレンズ状に堆積する。



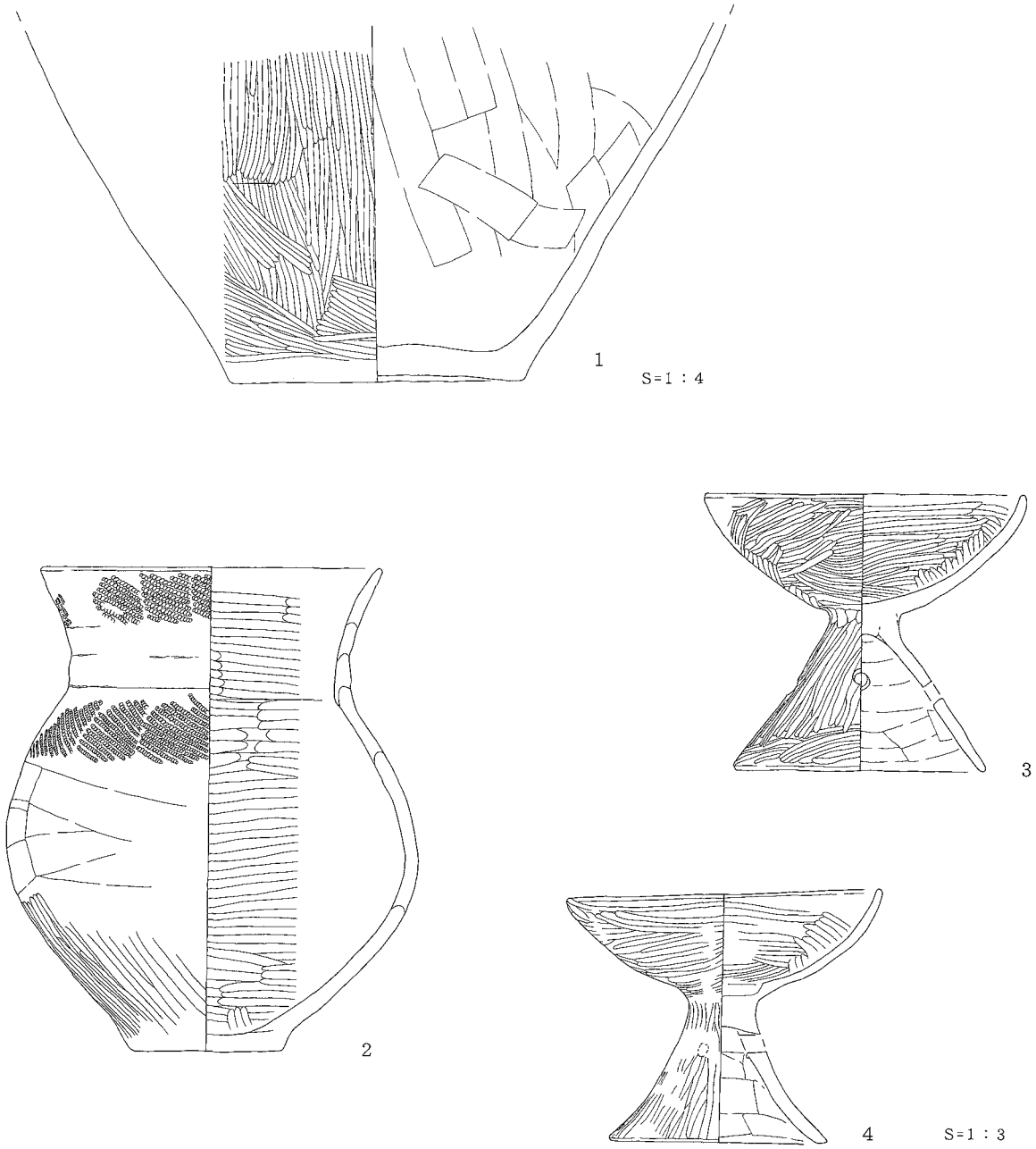
１号住居セクション
第１層：明褐色砂質土。As-B。
第２層：黒褐色土。φ３～５㎜程度の白色パミスを全体に含む。
第３層：暗褐色土。φ３～５㎜程度の白色パミスを全体に少量含む。
第４層：黒褐色土。φ３～５㎜程度の白色パミスをごく少量含む。やや粘質。
第５層：暗褐色土。ローム粒を全体に含む。
第６層：暗褐色土。ローム粒を全体に多く含む。やや砂質。
第７層：明褐色土。ローム粒・ロームブロックを全体に多量に含む。

第53図　１号住居跡平面図

構造　基本土層Ⅴ層のローム土まで掘り込んで構築された住居である。主柱穴・壁周溝は確認されていない。住居は東西方向にやや長い長方形を呈し、長軸方向の壁際２カ所に焼土が確認でき、炉跡の可能性が考えられる。

規模　住居床面から計測した規模は、長軸方向が6.0m、短軸方向が4.9mを測る。壁はやや開き気味に立ち上がり、確認面までの壁高は山側である南側が70cm、谷側である北側が50cmを測り、残存度は良好である。東西の壁際に炉跡と考えられる焼土を伴う浅いピットが確認されている。西側のピットは東西方向130cm、南北方向90cm、深さ10cmを測る。東側のピットは東西方向110cm、南北方向80cm、深さ10cmを測る。

遺物　出土した点数は比較的少ないが、床面付近で出土している遺物が多い。また、遺物が南の壁際付近に集中する傾向が認められる。



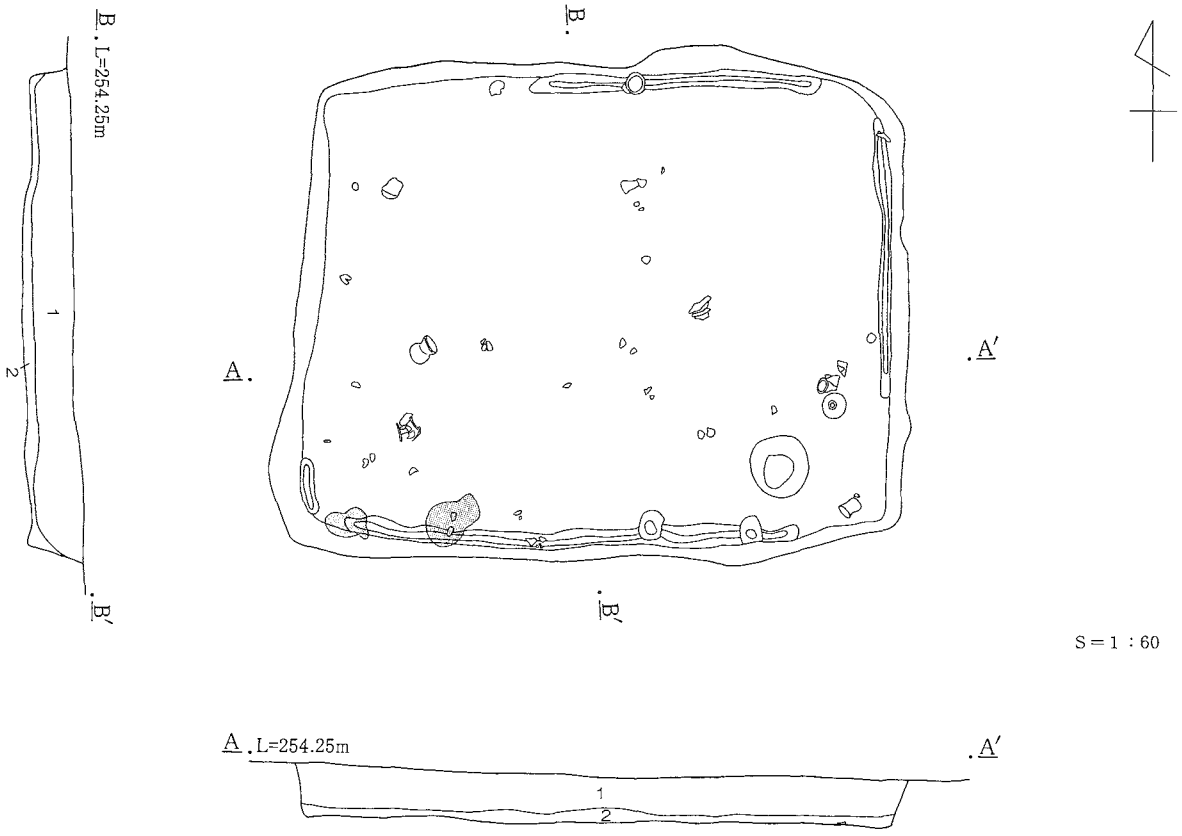
第54図　１号住居跡出土遺物

第９表　１号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残度)	法量（cm）	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	甕	胴部～ 底部 30%	口― 底―17.0 高― 最―	①褐色粒・黒色粒・角閃石混入 ②良好 ③黄橙色	外面：胴部縦位基調篦磨き。下位のみ斜位篦磨き。 内面：篦撫で。
2	甕	口縁部～ 底部 70%	口―(15.0) 底―6.5 高―21.4 最―18.3	①白色粒・白色礫混入 ②良好 ③橙色～褐色	外面：口縁部～胴部上位に縄文（RL）施文。胴部中位篦撫で。下位縦位基調篦磨き。頸部に輪積み痕。 内面：横位基調篦磨き
3	高坏	ほぼ完形	口―14.2 底―11.2 高―12.2 最―	①黒色粒混入 ②良好 ③橙色～褐色	脚部４ケ所に透かし。 外面：篦磨き。 内面：坏部篦磨き。脚部篦撫で。
4	高坏		口―(13.9) 底―9.8 高―11.3 最―	①角閃石混入 ②良好 ③黄橙色～褐色	脚部３ケ所に透かし。 外面：篦磨き。 内面：坏部篦磨き。脚部篦撫で。

５号住居跡

位置　本住居跡は東区の北端、緩やかに北に下る台地上に位置する。住居のすぐ北に２号溝（古墳時代）があり、住居の北東隅がこの溝の一部を壊して構築されている。ほぼ同時期と考えられる６号住居が西南西方向約50mに、９号住居が西方向約40mにある。



５号住居セクション
第１層：暗褐色土。Ⅲ層に近似する。やや粘質。
第２層：暗褐色土。第１層に地山のⅣ層が混入する。しまりあり。

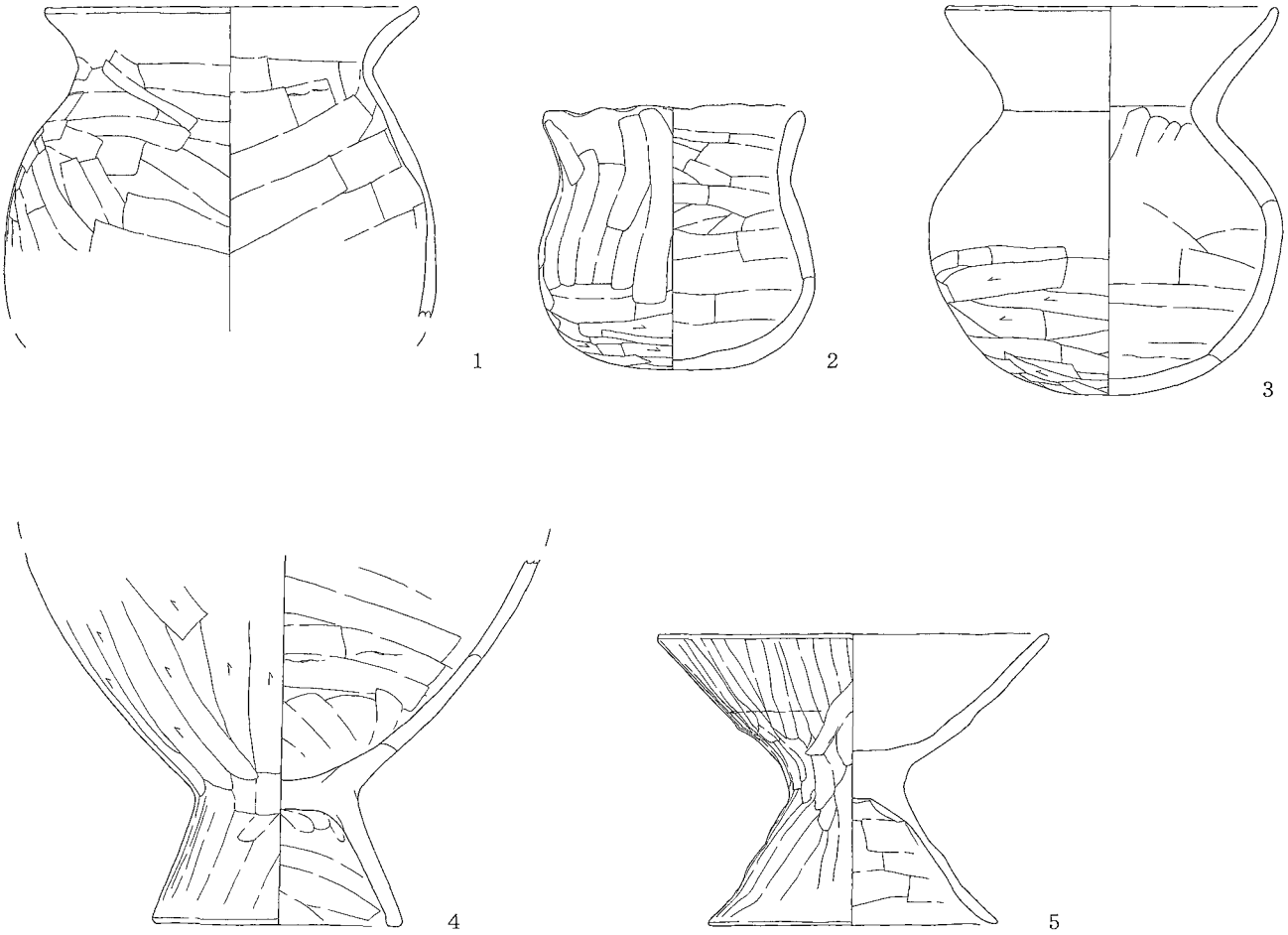
第55図　５号住居跡平面図

概要　本住居跡は、東区北端に試掘トレンチを入れた際、基本土層Ⅳ層上面で検出された。この住居に切られている２号溝も検出されたため、この付近約1800㎡の表土を同面まで掘削した結果、同じ古墳時代と考えられる６号住居・９号住居・３号溝・土坑やピット類が検出された。住居は東西方向に長い隅丸の長方形を呈する。覆土はやや粘質の黒褐色土である。

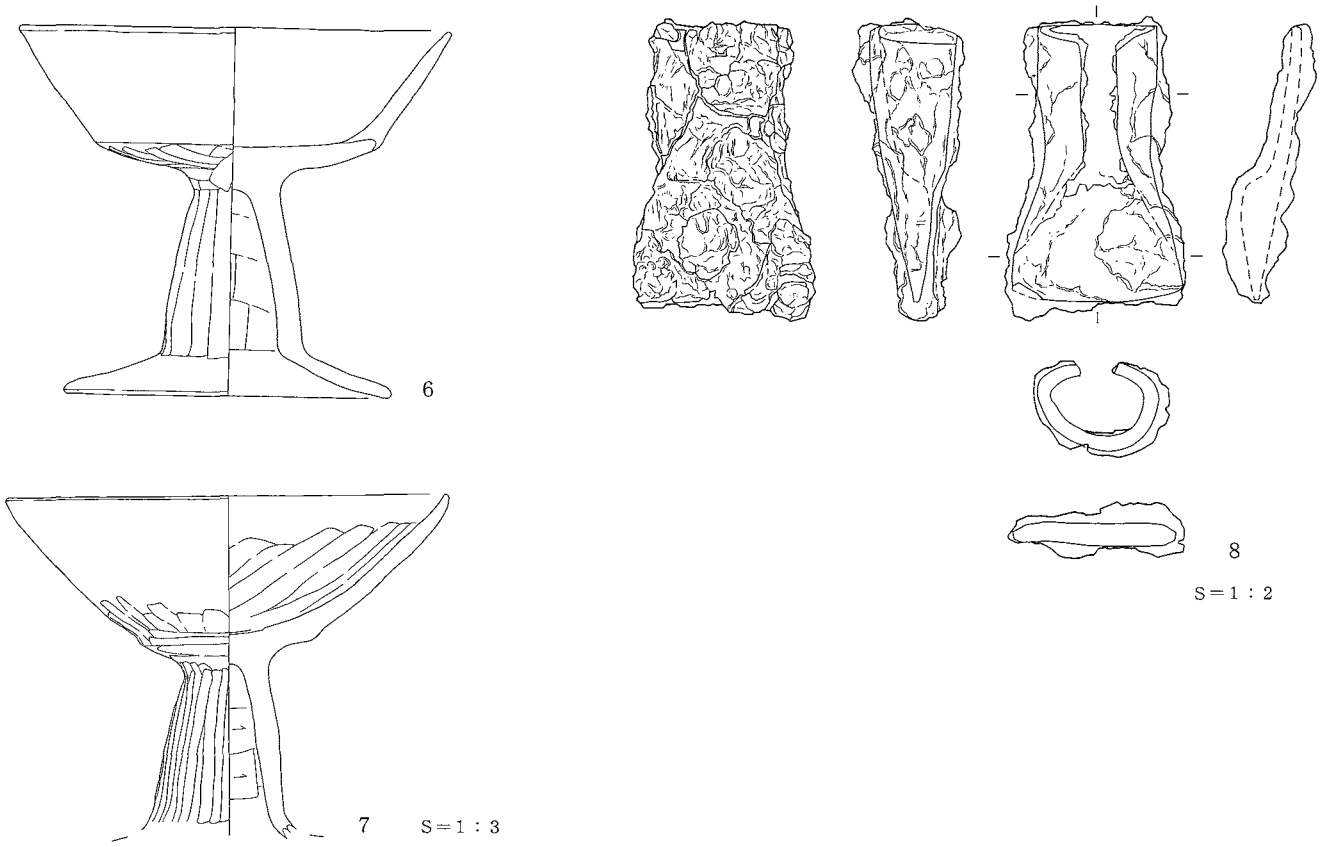
構造　基本土層のⅤ層のローム土まで掘り込んでいない住居なので、地山と覆土の差が小さく、調査時においては平面プラン・床面の確認に苦労した。床面は顕著な硬化面を持っていないが、壁周溝や遺物のレベルから判断した。壁周溝は南西コーナーより南側、東側、北側に断続的に確認された。南側の西寄りと東側の南寄り壁際に焼土・炭化物が確認されている。また、南東コーナー付近にピットが検出されており、貯蔵穴の可能性が考えられる。

規模　壁周溝から計測した住居規模は、東西方向で約4.2m、南北方向で約3.3mを測る。壁はやや開き気味に立ち上がり、確認面までの壁高は南側で約50cm、北側で約30cmを測る。壁周溝は幅10～20cm、深さ５cmを測り、南側の周溝には径約20cmのピットが２基確認されている。南東コーナー付近で確認されたピットは、径50cm、深さ40cmを測る。貯蔵穴の可能性が考えられるが、ピット内から遺物は検出されていない。

遺物　住居内全体から比較的多くの遺物が出土している。床面付近において、完形の土器が数点出土している。



第56図　５号住居跡出土遺物（１）



第57図　5号住居跡出土遺物(2)

第10表　5号住居跡出土遺物観察表(1)

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残度)	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	甕	口縁部～ 胴部中位 40%	口―14.8 底― 高― 最―17.3	①白色粒混入 ②良好 ③にぶい橙色～暗褐色	外面・内面ともに口縁部横撫で、胴部篦撫で。
2	小型甕	完形	口―10.2 底― 高―10.7 最―11.1	①角閃石・石英混入 ②良好 ③にぶい黄橙色～暗褐色	外面：口縁部～胴部中位縦位基調篦撫で。胴部下位～底部篦削り。 内面：篦撫で。
3	小型甕	完形	口―13.0 底― 高―15.5 最―14.1	①白色粒・褐色粒・角閃石混入 ②良好 ③赤褐色～暗褐色	外面：口縁部横撫で。胴部上半縦位刷毛目後撫で。胴部下半篦削り。 内面：口縁部横撫で。胴部篦撫で。
4	台付甕	胴部下位 ～底部 30%	口― 底―9.7 高― 最―	①石英・黒色粒・礫混入 ②良好 ③にぶい褐色	外面：胴部縦位基調篦削り。台部縦位基調篦撫で。 内面：篦撫で。
5	高坏	60%	口―(15.6) 底―(11.6) 高―11.7 最―	①白色粒・礫混入 ②良好 ③にぶい赤褐色～褐色	外面：篦撫で。 内面：坏部横撫で。脚部篦撫で。
6	高坏	80%	口―17.0 底―13.0 高―14.5 最―	①白色粒・褐色粒・礫混入 ②良好 ③橙色～褐色	外面・内面ともに坏部上位～中位横撫で、下位篦撫で。 脚部上位～中位篦撫で、下位横撫で。
7	高坏	坏部～脚 部中位 80%	口―17.4 底― 高― 最―	①白色粒・褐色粒混入 ②良好 ③赤褐色～暗褐色	外面：坏部上位～中位横撫で、下位篦撫で。脚部上位～中位篦磨き、下位横撫で。 内面：坏部口唇部のみ横撫で、他篦撫で。脚部上位～中位篦削り、下位篦撫で。

第11表　5号住居跡出土遺物観察表（2）

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	部　位 （残度）	計測値（cm／g）	特　徴　等
8	鉄器 鉄斧	完形	長さ：7.3　幅　：4.5 厚さ：0.5　重さ：116.9	

6号住居跡

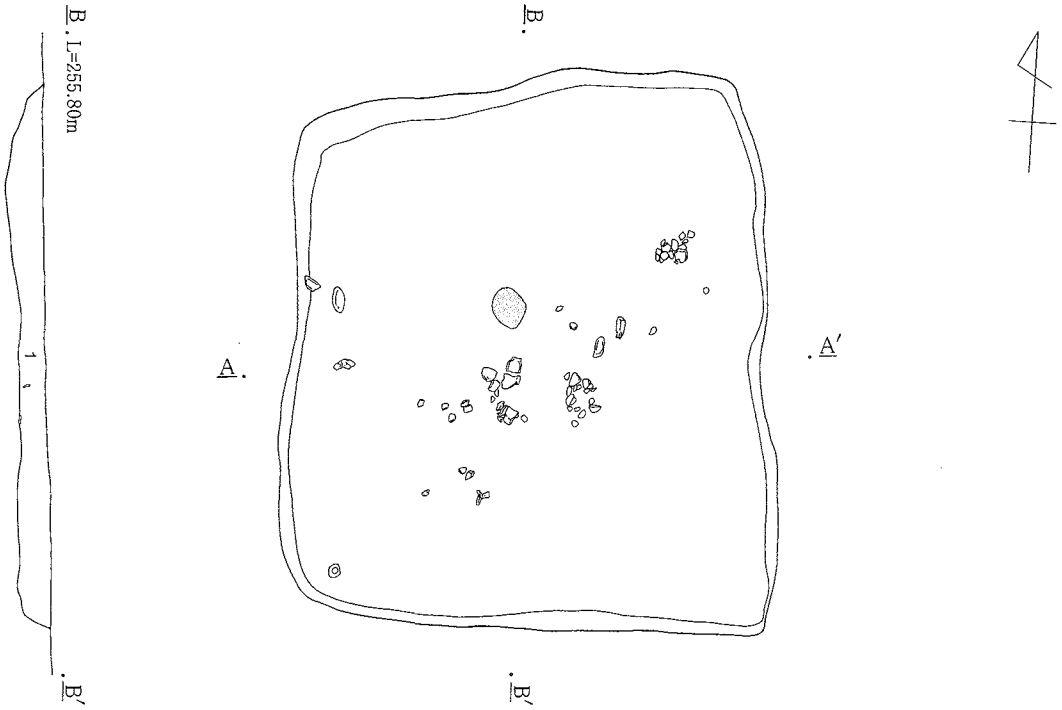
位置　本住居跡は東区の北端、緩やかに北に下る台地上に位置する。古墳時代の所産と考えられる3号溝の一部を壊して構築されている。

概要　基本土層のⅤ層のローム土まで掘り込んでいない住居なので、地山と覆土の差が小さく、調査時においては平面プラン・床面の確認に苦労した。特に床面は調査時には確認できず、結果掘り過ぎてしまい、下方から縄文時代前期の土器・石器がまとまって検出されている。残したベルトの断面図から考えると、確認面から30～40cm程下方に床面が想定できる。尚、2号住居の調査終了後、住居周辺をⅤ層上面まで下げ、縄文時代前期の遺構の検出を試みたが検出できなかった。

構造　前述のように、床面を確認できずに掘り過ぎてしまっている住居のため、構造についての詳細は不明である。

規模　本住居跡は、西側に較べ東側がやや長い隅丸の台形を呈す。断面図より想定する床面の規模は、西側で約3.5m、東側で約4.4m、東西方向に約3.7mを測る。想定される確認面までの壁高は、南側と西側で30～40cm、北側と東側で20～30cm程度と考えられる。

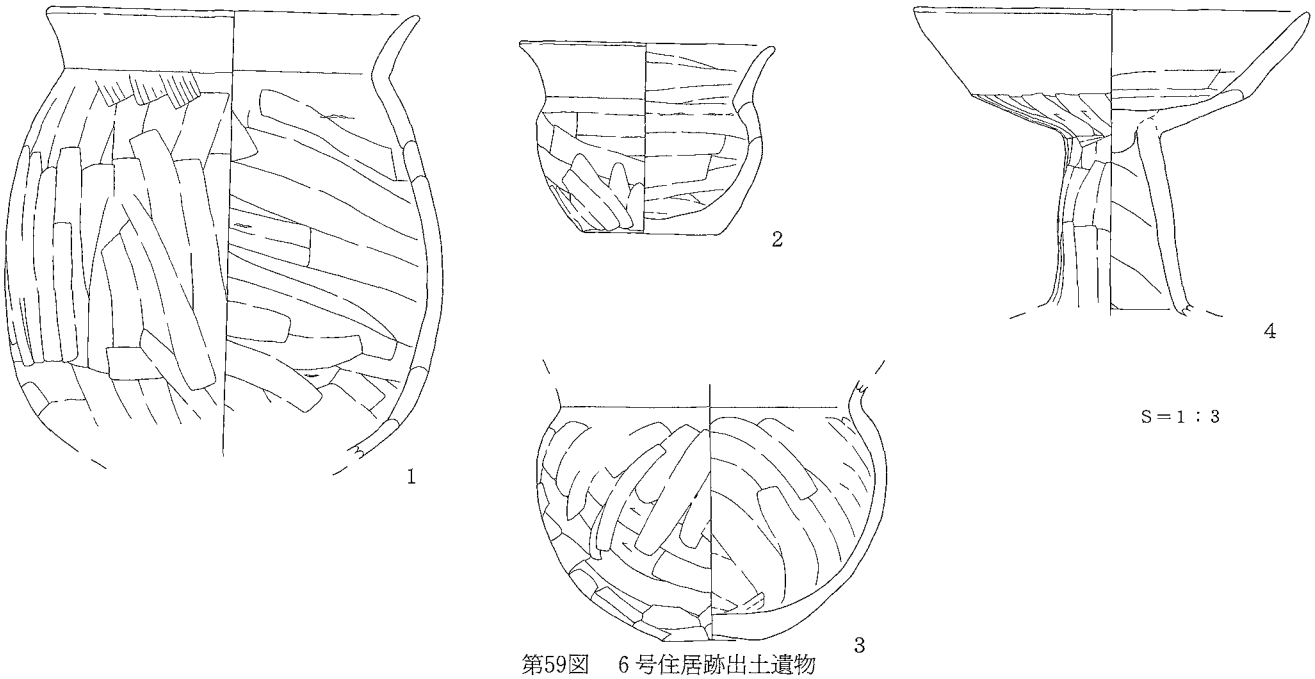
遺物　出土遺物は、住居中央付近に集中する傾向が認められる。



6号住居セクション
第1層：暗褐色土。やや粘質。基本土層Ⅲ層に近似する。

S＝1：60

第58図　6号住居跡平面図



第59図　6号住居跡出土遺物

第12表　6号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残度)	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	甕	口縁部～ 胴部中位 70%	口—14.6 底— 高— 最—17.4	①角閃石・石英・礫混入 ②良好 ③黄橙色～赤褐色	外面：口縁部横撫で。胴部縦位基調の雑な箆撫で。胴部下位は横位箆撫で後縦位箆撫で。 内面：口縁部横撫で。胴部不整方向箆撫で。
2	小型甕	ほぼ完形	口—10.0 底—5.4 高—7.5 最—	①白色粒・黒色粒・礫混入 ②良好 ③橙色～黄橙色	口縁部が「く」の字状に開く。胴部最大径より口径が大きい。 外面・内面ともに口縁部横撫で。胴部雑な箆撫で。
3	小型甕	口縁部下位～底部 40%	口— 底—4.0 高— 最—(13.9)	①白色粒・褐色粒・黒色粒混入 ②良好 ③橙色～黒褐色	外面：口縁部横撫で。胴部箆削り後箆撫で。底部上げ底状に中央が窪む。 内面：口縁部横撫で。胴部箆撫で。
4	高坏	口縁部～ 脚部中位 80%	口—15.6 底— 高— 最—	①白色粒・褐色粒・礫混入 ②良好 ③橙色～赤褐色	外面：坏部上位横撫で。下位中心より放射線状に箆削り。脚部縦位箆撫で。 内面：坏部横位箆撫で。脚部斜位箆削り。

9号住居跡

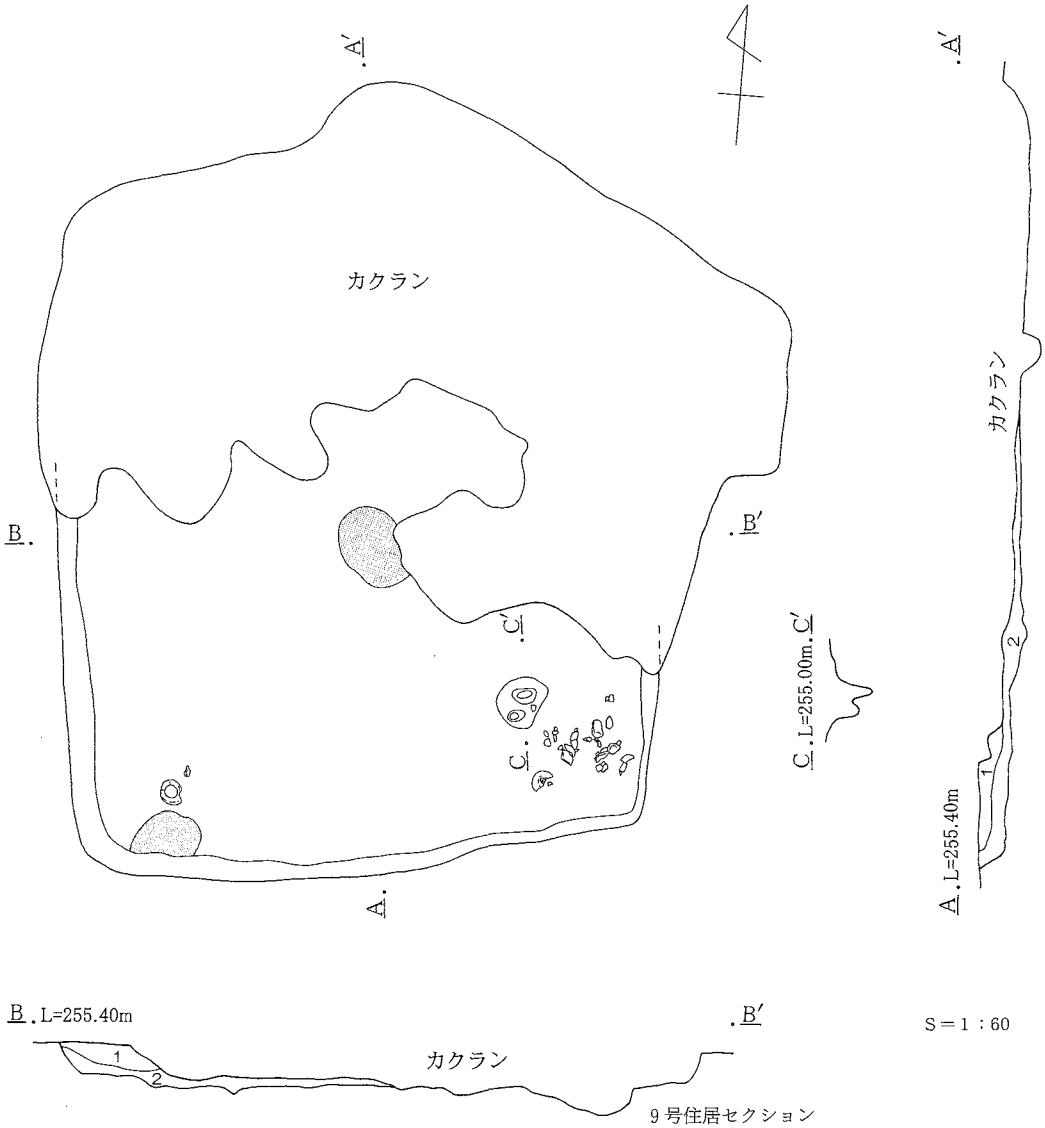
位置　本住居跡は東区の北端、緩やかに北に下る台地上に位置する。住居の北から東にかけて後世の攪乱により壊されている。この攪乱の覆土はAs—B軽石を全体に含むので、住居が壊されたのは中世以降であると考えられる。

概要　前述のように、本住居跡は攪乱により大きく壊されているため、全体のプランは不明である。残存する南の部分から推測すると、長軸方向をほぼ南北あるいは東西に持つ、やや隅丸の方形または台形である可能性が高い。覆土はやや粘質の黒褐色土である。残存部分は少ないが、遺物は比較的多く検出されている。残存部分の床面もしっかりしている。

構造　残存する部分においては、壁周溝・貯蔵穴・柱穴等の施設は検出されていない。南西コーナー付近と中央付近から焼土が検出されている。その他詳細は不明である。

規模　残存する部分から計測できる住居規模は、東西方向で2.7m程度と推測される。南北方向については不明である。壁は開き気味に立ち上がり、確認面までの壁高は南側で約30cmを測る。

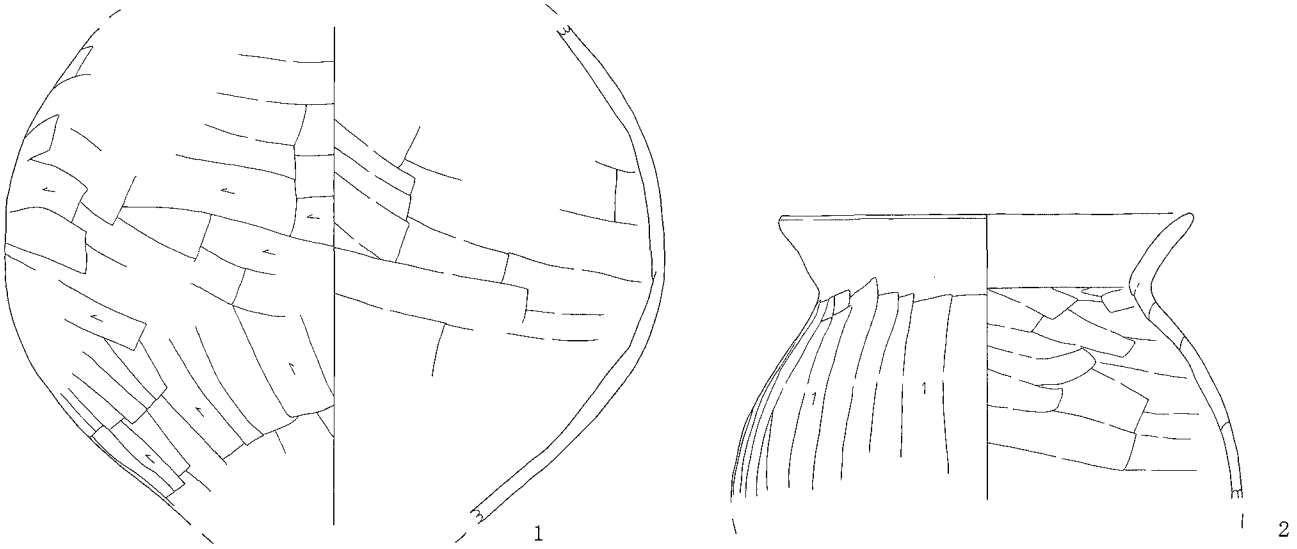
遺物　出土遺物は、南東コーナー付近に集中する傾向が認められる。



S＝1：60

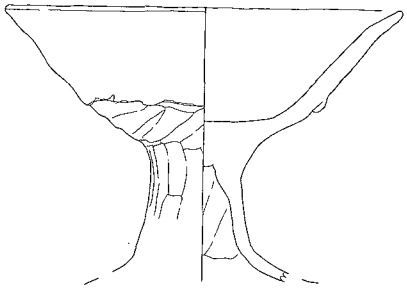
9号住居セクション
第1層：暗褐色土。φ数mmの白色パミスを少量含む。やや粘質。
第2層：暗褐色土。地山であるⅣ層のブロックを含む。

第60図　9号住居跡平面図

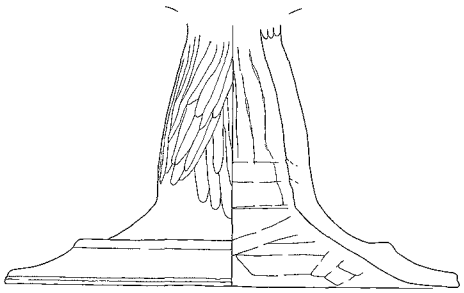


S＝1：3

第61図　9号住居跡出土遺物（1）



3



4

S＝1：3

第62図　9号住居跡出土遺物（2）

第13表　9号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 （残度）	法量（cm）	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	甕	胴部上位 ～下位 30%	口一 底一 高一 最一	①褐色粒・黒色粒・礫混入 ②良好 ③橙色～暗褐色	外面：胴部上半部横位基調篦撫で。胴部下半部縦位篦削り。 内面：横位基調篦撫で。下半部の調整は不明瞭。
2	甕	口縁部～ 胴部中位 30%	口一16.2 底一 高一 最一	①白色粒・褐色粒・黒色粒混入 ②良好 ③赤褐色	外面：口縁部横撫で。胴部縦位篦撫で。 内面：口縁部横撫で。胴部横位～斜位篦撫で。
3	高坏	坏部～脚 部下位 70%	口一15.6 底一 高一 最一	①褐色粒・礫混入 ②良好 ③橙色	口唇部外反。坏部中位に輪積み痕状の顕著な段差。 外面：坏部顕著な段差より上部横撫で、下部縦位の雑な篦撫で。 脚部縦位の丁寧な篦撫で。 内面：坏部横撫で。一部横撫で後斜位撫で。脚部篦撫で。
4	高坏	脚部 50%	口一 底一18.0 高一 最一	①白色粒・褐色粒・礫混入 ②良好 ③明褐色～褐色	脚部下位が大きく開き、中間部に顕著な段差。脚部下位末端に浅い沈線が巡る。脚部末端下面に低い高台状突起が巡る。 外面：上半部縦位基調篦磨き。下半部横撫で。 内面：篦撫で。脚部下位のみ横撫で。

11号住居跡

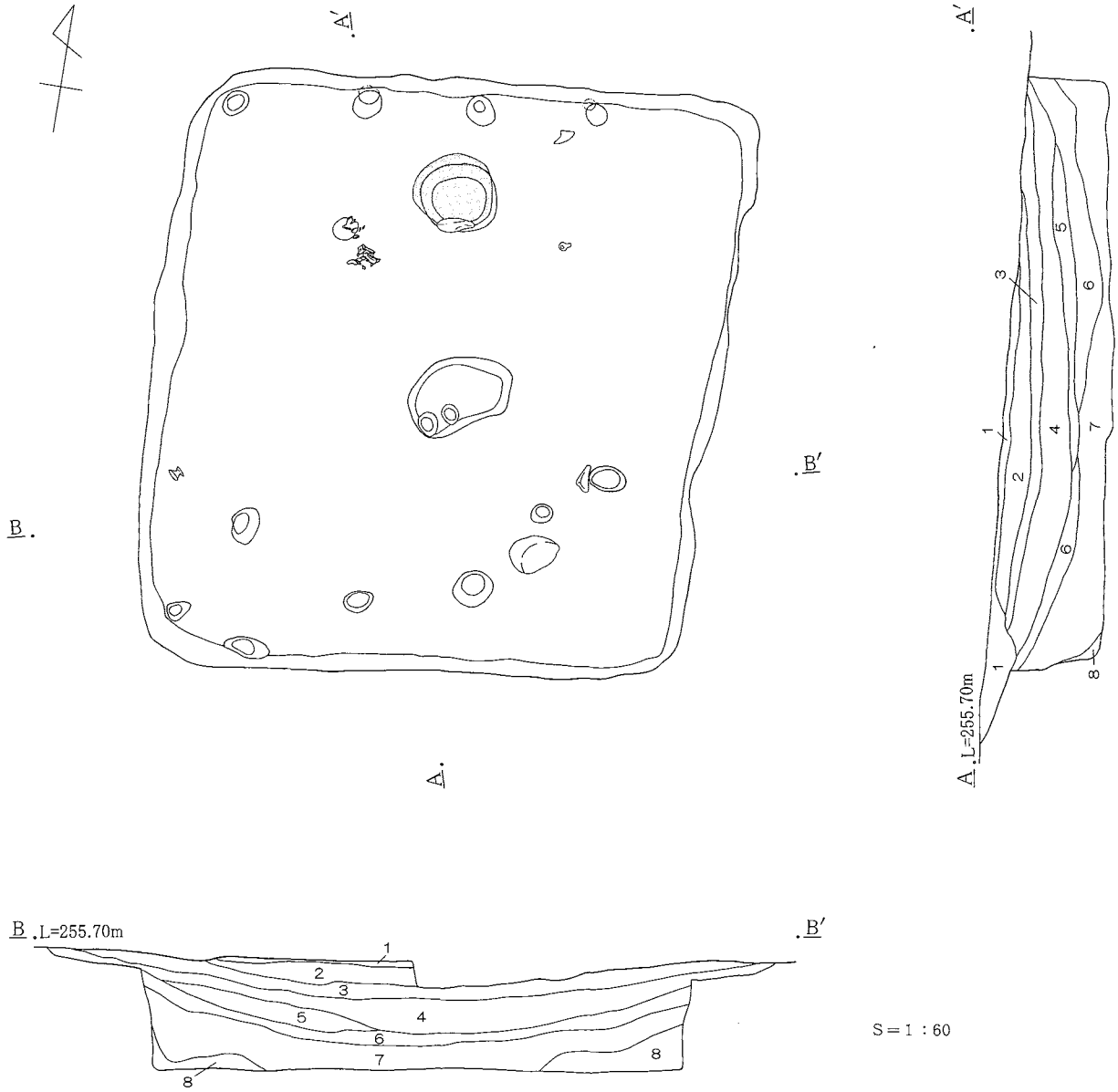
位置　本住居跡は西区住居群の東寄り、猫沢川の支流に向かい緩やかに下る北西斜面上に位置する。西区中央で確認された住居群の北端に位置する。

概要　本住居は基本土層のⅣ層まで試掘トレンチを入れた際確認され、トレンチを拡張し調査を行った住居である。覆土はやや粘質の黒褐色土であり、最上部にAs—B軽石（1108年、浅間山給源）がレンズ状に堆積する。

構造　本住居跡は、北東と南西のコーナーが直角より狭く、南東と北西のコーナーが直角よりやや広い。隅丸の長方形と言うより、やや平行四辺形に近い形態を呈する。住居北側の壁際に直線に並ぶピットが4基、南側の床面に弧状に並ぶピットが4基確認されている。これらのピットの性格は不明である。また住居中央付近とその北側に比較的浅いピットが検出されている。北側のピットは焼けた石を伴っており、炉跡の可能性が考えられる。壁周溝は確認されていない。

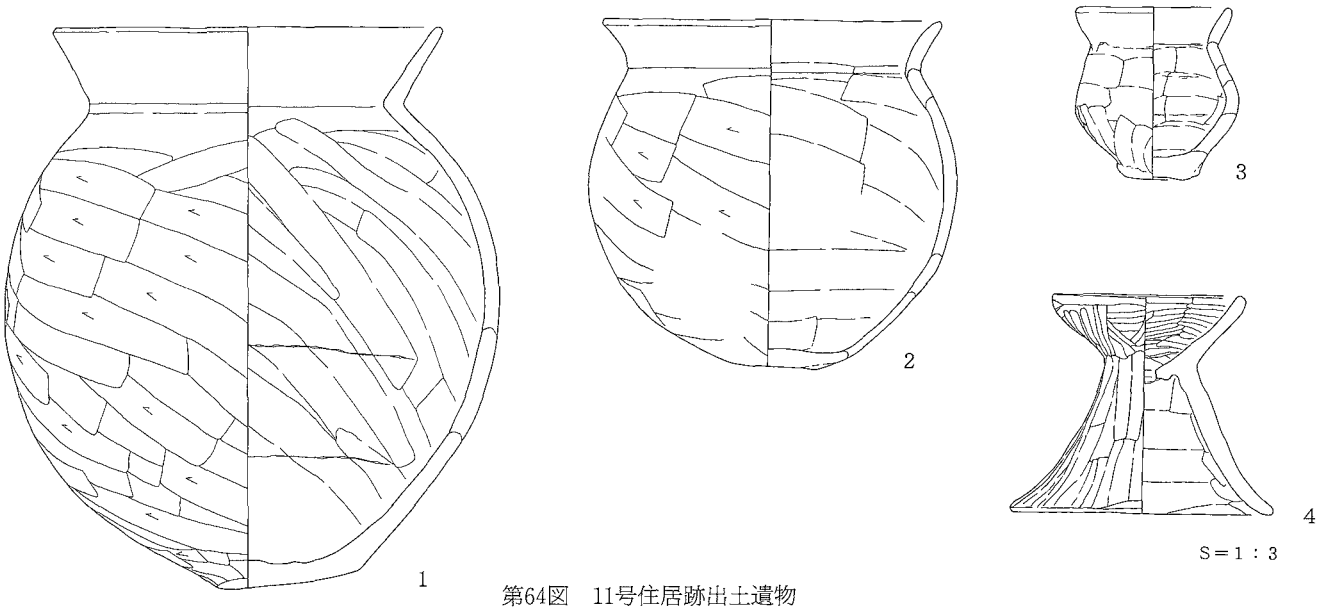
規模　前述のように、本住居跡は長軸を南北方向に持つ、平行四辺形に近い形態を呈する。住居の規模は長軸である南北が約4.6m、短軸である東西が約4.3mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面までの壁高は、山側である南側が約100cm、谷側である北側が約70cmを測り、残存度は非常に良好である。住居内の直線状、弧状のピットの径は約20cmである。西区の他の住居にも見られるが、壁際のピットが住居範囲から出ていく方向に斜めに穿たれている場合がある。炉跡と考えられる浅いピットの径は約70cmである。

遺物　出土遺物は比較的少ない。完形に近い土器も出土しているが、床面付近で出土した土器は少ない。



11号住居セクション
第１層：暗褐色土。As-B混。くずれやすい。
第２層：明褐色砂質土。As-B。
第３層：黒褐色土。φ数mmの白色パミスを全体に少量含む。やや粘質。
第４層：暗褐色土。第３層に近似。色調がやや明るい。
第５層：黒褐色土。第３層に近似する。やや粘質。
第６層：暗褐色土。φ数mm～10mm程度の黄色パミスを全体に含む。ローム粒を全体に少量含む。
第７層：暗褐色土。φ数mm～10mm程度の黄色パミスを全体に多く含む。ローム粒を全体に含む。
第８層：褐色土。地山であるⅣ層のブロックを含む。

第63図　11号住居跡平面図



第64図　11号住居跡出土遺物

第14表　11号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 （残度）	法量（cm）	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	甕	ほぼ完形	口―15.2 底―5.8 高―22.2 最―19.6	①白色粒・褐色粒・礫混入 ②良好 ③黄橙色～褐色	丸味のある胴部を有し、頸部「く」の字状に開く。口唇部やや外反する。 外面：口縁部～頸部横撫で。胴部斜位箆削り。 内面：斜位箆撫で。
2	小型甕	口縁部～底部 80％	口―13.2 底―3.0 高―13.8 最―14.6	①白色粒・褐色粒・礫混入 ②良好 ③橙色	丸味のある胴部を有し、頸部「く」の字状に開く。底部周囲に高台状に粘土を貼付。全体的に雑な調整。 外面：口縁部横撫で。胴部雑な斜位箆削り。 内面：口縁部横撫で。胴部斜位基調箆撫で。
3	ミニチュア甕	口縁部～底部 70％	口―(5.9) 底―3.0 高―6.8 最―6.0	①黒色粒混入 ②良好 ③黄橙色	胴部中央部緩やかな「く」の字状に内湾する。 外面：口縁部横撫で。胴部上半横位箆撫で、下半縦位箆撫で後一部に縦位磨き。 内面：口縁部横撫で。胴部横位基調箆撫で。
4	器台	ほぼ完形	口―7.3 底―10.5 高―8.6 最―	①褐色粒・礫混入 ②良好 ③黄橙色	器受部の口縁部やや内湾する。 外面：器受部不整方向箆磨き。脚部縦位箆撫で。端部のみ横撫で後縦位箆撫で。 内面：器受部横位箆撫で。脚部横位基調箆撫で。端部のみ横撫で。

12号住居跡

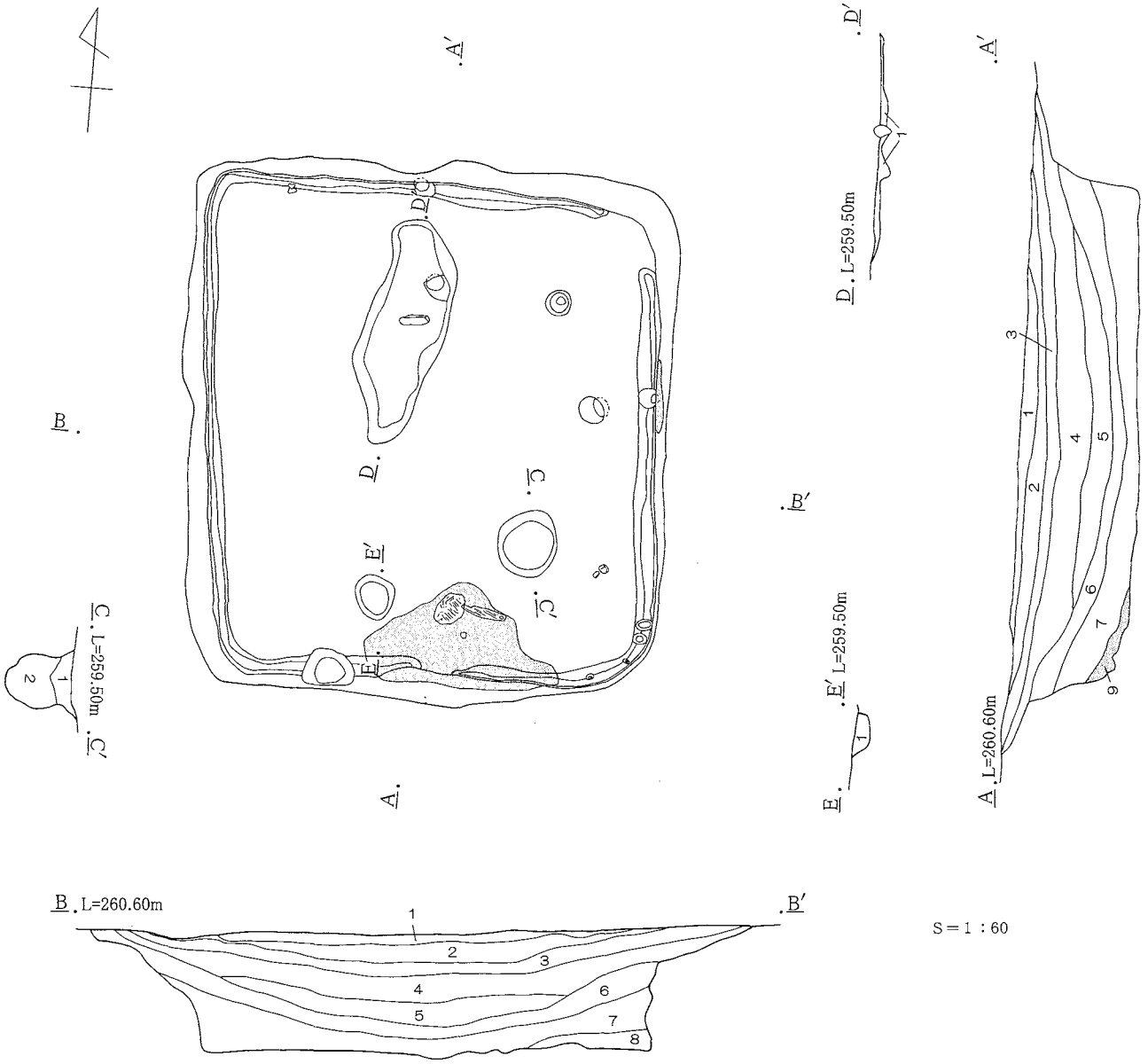
位置　本住居跡は西区住居群の東寄り、猫沢川の支流に向かい緩やかに下る北西斜面上に位置する。

概要　本住居は基本土層のⅣ層まで試掘トレンチを入れた際確認され、トレンチを拡張し調査を行った住居である。覆土はやや粘質の黒褐色土であり、最上部にAs―B軽石（1108年、浅間山給源）がレンズ状に堆積する。

構造　本住居跡のみでなく西区住居群に共通することであるが、住居の掘り込みが非常に深く、床面が基本土層Ⅴ層のローム土まで達している。住居は東側より西側がやや長い隅丸の台形を呈する。壁周溝はほぼ全周する。南の壁中央付近に焼土・炭化物・炭化粒が集中する部分がある。確認された遺物量は少ない。北の壁際中央付近に斜めに穿たれた、径20cm程のピットが確認されている。大きさ・形状の異なるピットが、他に10基ほど検出されているが、その性格については判然としない。

規模　壁周溝から計測できる住居規模は、西側で4.1m、東側で3.7m、東西方向は約3.7mを測る。壁周溝は幅・深さともに10～15cm程度である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面までの壁高は、山側である南側が約110cm、谷側である北側が約90cmを測り、残存度は非常に良好である。南東コーナー付近で確認されたピットは、径60cm、深さ70cmとやや大型であり、貯蔵穴の可能性も考えられる。

遺物　前述のように出土遺物が少ない住居である。小破片のため図示できなかった。



12号住居セクション
第１層：暗褐色土。As-Bパミスを多量に含む。
第２層：明褐色砂質土。As-B。
第３層：黒褐色土。φ数mm程度の白色パミスを全体に含む。やや粘質。
第４層：暗褐色土。φ数mm程度の白色パミスを全体に含む。
第５層：黒褐色土。φ10mm程度の黄色パミスを少量含む。やや粘質。
第６層：暗褐色土。φ数mm～10mm程度の黄色パミスを全体に含む。
第７層：暗褐色土。第６層に近似。含まれる黄色パミスの量が６層より多い。
第８層：暗褐色土。地山であるⅣ層、黄色パミスブロックを含む。
第９層：暗褐色土。焼土粒、炭化物を多く含む。

12号住居C～C′セクション
第１層：黄褐色土。φ数mm～10mm程度の黄色パミスを全体に多量に含む。
第２層：暗褐色土。ローム粒を全体に含む。

12号住居D～D′セクション
第１層：暗褐色土。φ数mm～10mm程度の黄色パミスを全体に多く含む。焼土粒を少量含み、しまりなく、くずれやすい。

12号住居E～E′セクション
第１層：黄褐色土。φ数mm～10mm程度の黄色パミスを全体に多く含む。

第65図　12号住居跡平面図

13号住居跡

位置　本住居跡は西区住居群の東寄り、猫沢川の支流に向かい緩やかに下る北西斜面上に位置する。

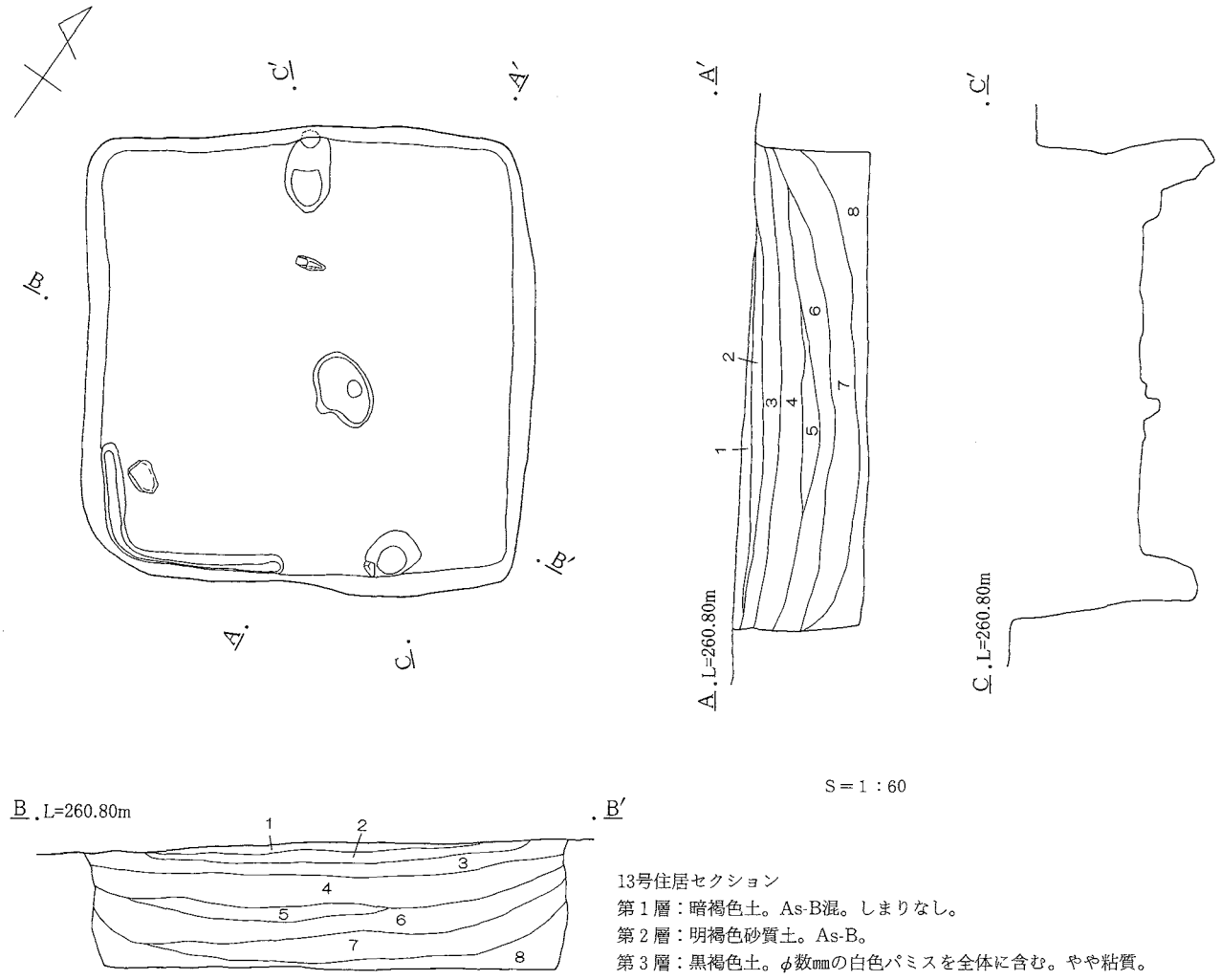
概要　本住居は基本土層のⅣ層まで試掘トレンチを入れた際確認され、トレンチを拡張し調査を行った住居である。覆土はやや粘質の黒褐色土であり、最上部にAs—B軽石（1108年、浅間山給源）がレンズ状に堆積する。西区においては４軒めに検出された住居跡であり、いずれも最上部にAs—B軽石がレンズ状に堆積しているため、同時期の住居群が西方向に展開する可能性が高まった。

よって、この住居以西の調査区全体の表土を掘削し調査を行うことにした。結果、約2300㎡の範囲に、11軒の住居の存在が明らかになった。この住居群は猫沢川の支流に並行するように、さらに南西方向に広がりを持つと考えられる。本住居跡は、今回検出された住居群の中央やや東寄りに位置している。残存度は良好であるが、出土した遺物量は少ない。

構造　本住居跡は隅丸のほぼ正方形を呈する。壁周溝が南西コーナーを中心に約2.4m確認されている。住居内には3基のピットが確認されており、住居中央やや南寄りの浅いピットは、内部に焼土・炭化物を含むため炉跡の可能性が考えられる。他の2基のピットの性格は判然としない。

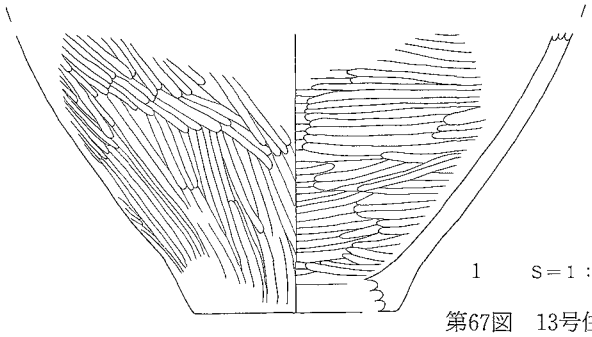
規模　隅丸のほぼ正方形を呈する本住居跡の規模は、東西方向・南北方向ともに約3.4mを測る。壁周溝の径・深さともに約15cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面までの壁高は、山側である南側が約110cm、谷側である北側が約100cmを測り、残存度は非常に良好である。炉跡の可能性が考えられるピットは、南北方向約60cm、東西方向約50cm、深さ約10cmを測る。

遺物　前述のように出土遺物の少ない住居である。甕1点を図示した。



13号住居セクション
第1層：暗褐色土。As-B混。しまりなし。
第2層：明褐色砂質土。As-B。
第3層：黒褐色土。φ数mmの白色パミスを全体に含む。やや粘質。
第4層：暗褐色土。φ数mmの白色パミスを全体に含む。第3層より色調が明るい。
第5層：黒褐色土。第3層に近似。やや粘質。
第6層：暗褐色土。φ10mm程度の黄色パミスを全体に含む。
第7層：暗褐色土。第6層に近似。含まれるパミスの量が多い。
第8層：暗褐色土。ローム粒、φ10mm程度の黄色パミスを含む。

第66図　13号住居跡平面図



1　S＝1：3

第67図　13号住居跡出土遺物

第15表　13号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残度)	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	甕	胴部下位 ～底部 10%	口― 底―(8.0) 高― 最―	①白色粒・褐色粒・黒色粒混入 ②良好 ③黄橙色	外面：上半部斜位、下半部縦位篦磨き。 内面：横位篦磨き。

14号住居跡

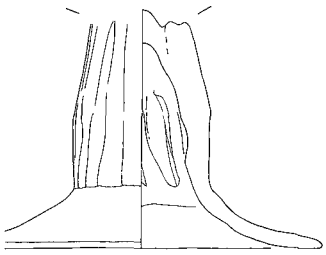
位置　本住居跡は西区住居群のほぼ中央、猫沢川の支流に向かい緩やかに下る北西斜面上に位置する。

概要　本住居跡は、西区住居群の調査のため、基本土層Ⅳ層上面まで表土を掘削した際プランが確認された。西区住居群の他の住居と同様、覆土はやや粘質の黒褐色土であり、最上部にAs―B軽石（1108年、浅間山給源）がレンズ状に堆積する。残存度は良好であるが、出土した遺物量は少ない。調査時に北東部分の壁面を掘り過ぎているが、壁周溝が巡るために形態等は推定できる。

構造　南北方向に長軸を持つ、やや隅丸の長方形を呈した住居跡である。前述のように、一部を掘り過ぎているが、壁周溝が全周するため住居の形態・規模はある程度推定できる。壁周溝内に約30基のピットが確認されている。南側中央付近に比較的大型のピットが１基認められるが、この住居群の他の住居においても、同様のピットを持つものが多い。住居内への昇降施設との関連も考えられる。

規模　全周する壁周溝より計測できる住居規模は、南北方向約4.9m、東西方向約3.3mを測る。壁周溝は幅・深さともに10～20cmを測る。壁周溝内に認められるピットは、径10cm程度のものが多い。南側中央付近のピットは、径25cm、深さ35cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面までの壁高は、山側である南側が約80cm、谷側である北側が約50cmを測り、残存度は非常に良好である。

遺物　出土遺物の少ない住居である。高坏の脚部１点を図示した。

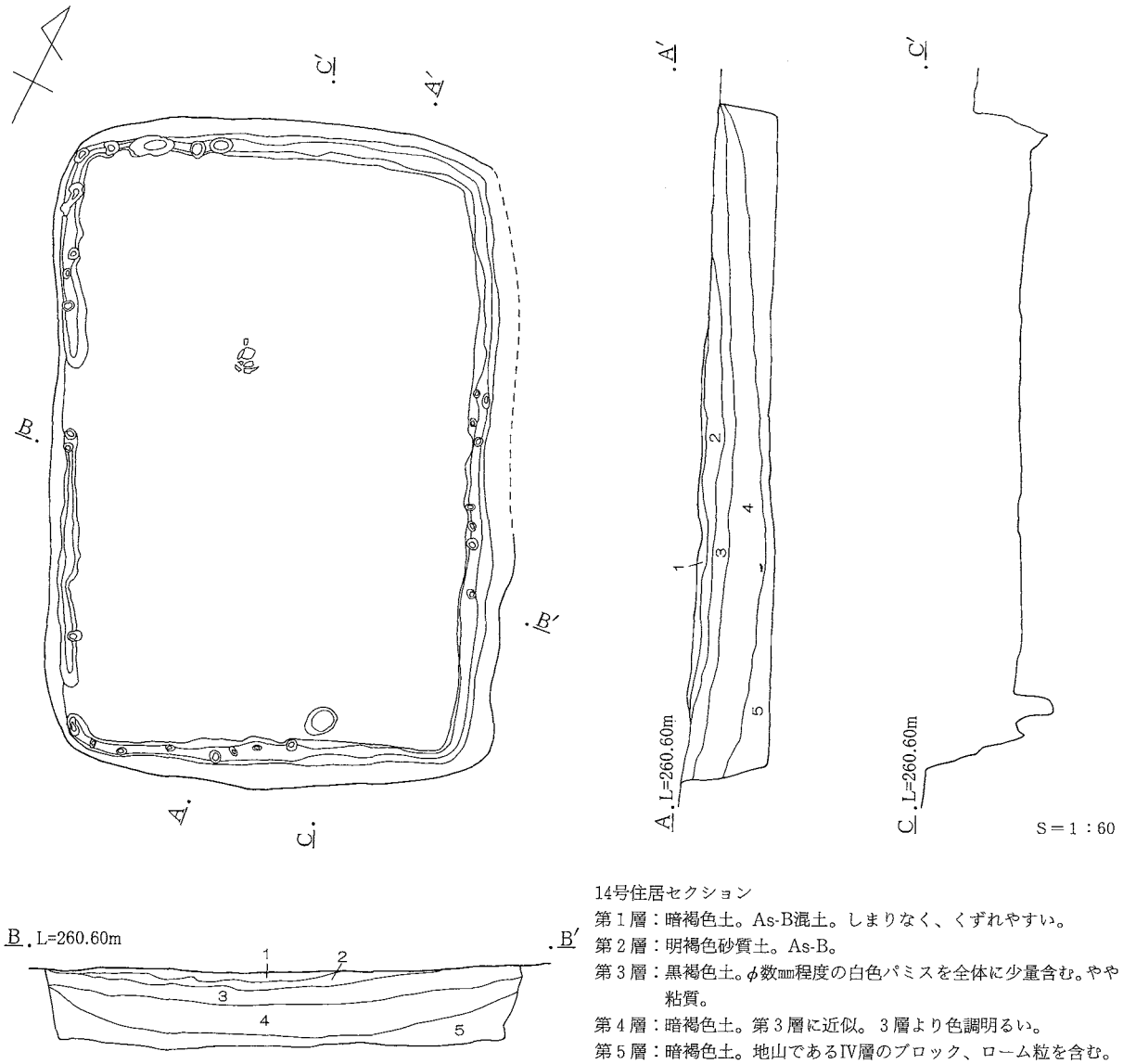


1　S＝1：3

第68図　14号住居跡出土遺物

第16表　14号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残度)	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	高坏	脚部 40%	口― 底―(14.4) 高― 最―	①白色粒・褐色粒・混入 ②良好 ③黄橙色	裾部大きく開く。 外面：上半部縦位のやや雑な篦撫で。端部横撫で。 内面：上半部横位篦撫で。端部横撫で。



第69図　14号住居跡平面図

15号住居跡

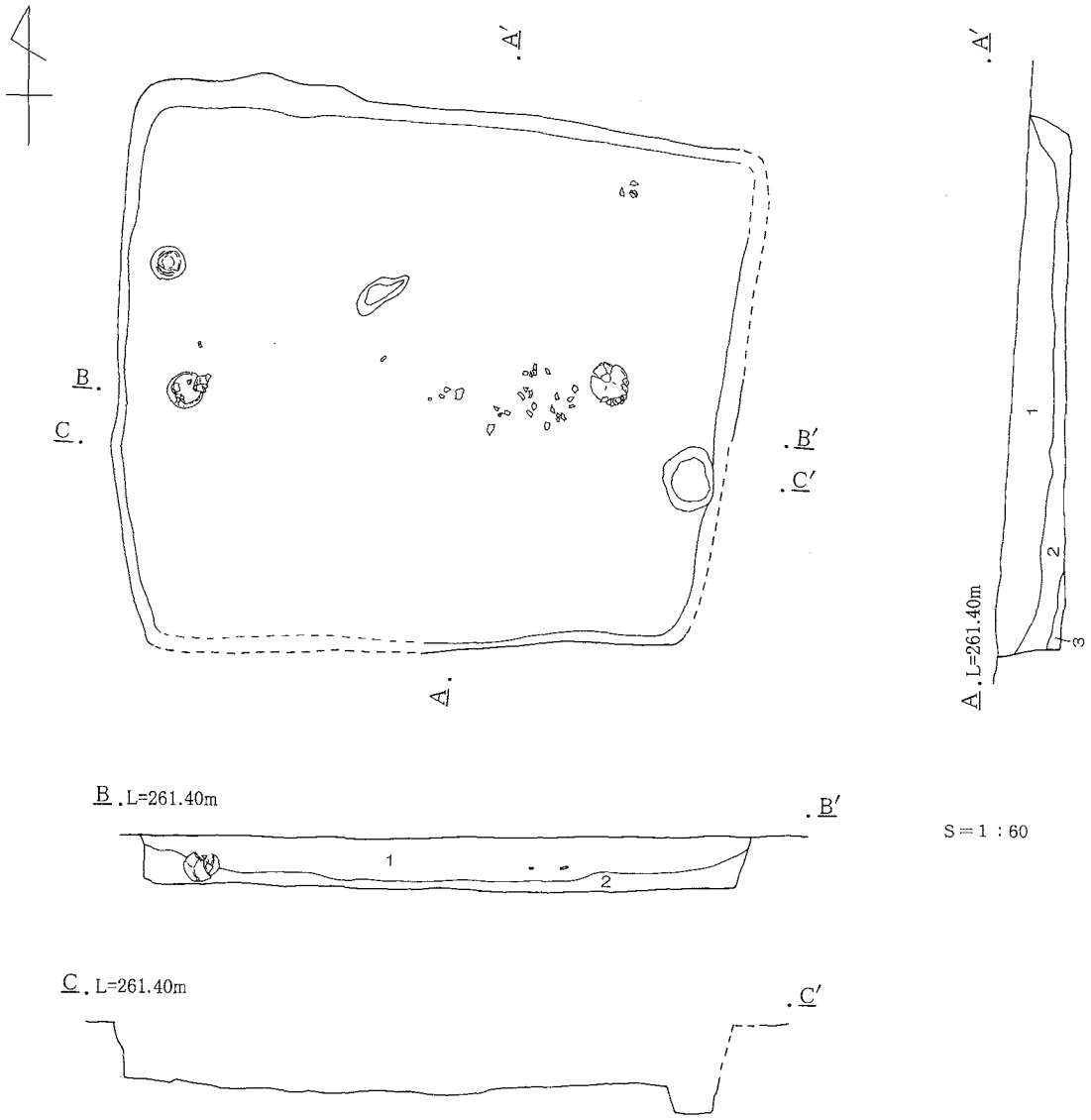
位置　本住居跡は帯状に展開する西区住居群の中央南寄り、猫沢川の支流に向かい緩やかに下る北西斜面上に位置する。

概要　本住居跡は、西区住居群の調査のため、基本土層Ⅳ層上面まで表土を掘削した際プランが確認された。西区住居群の他の住居と同様、覆土はやや粘質の黒褐色土である。西区住居群の中では掘り込みが浅く、地山と覆土の判別がやや困難であったため、住居の一部を掘り過ぎている。出土した遺物量は比較的多い。

構造　前述した理由により一部を掘り過ぎている住居である。したがって土層断面図より形態・規模等を推定している部分もある。推定される平面プランは、西が広く東が狭い、隅丸の変則的な四角形と考えられる。住居内に検出された施設は２基のピットのみである。住居中央やや北西寄りの浅いピットは、炉跡の可能性も考えられる。東側壁際のピットの性格については判然としない。

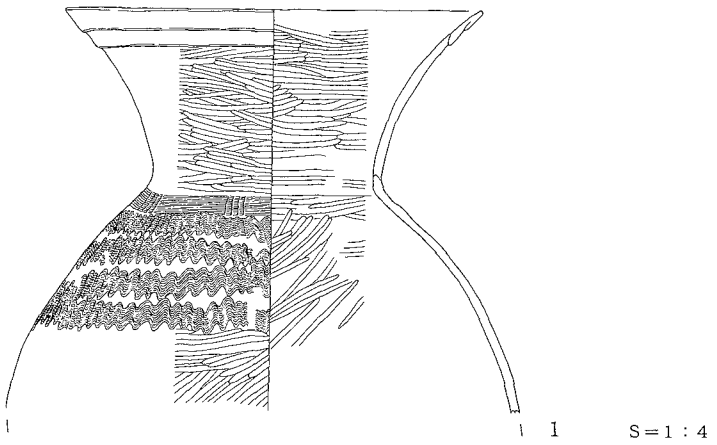
規模　確認された床面より推定される住居規模は、南側4.2m、西側4.2m、北側4.7m、東側3.6mを測る。炉跡の可能性が考えられるピットは変則的な楕円形を呈し、長軸方向50cm、短軸方向20cm、深さ10cmを測る。東側壁際のピットは、径40cm、深さ20cmを測る。壁は開き気味に立ち上がり、確認面までの壁高は、山側である南側が約50cm、谷側である北側が約30cmを測る。

遺物　完形に近い土器を含め比較的多くの土器が出土しているが、床面より高い位置で検出されたものが多い。

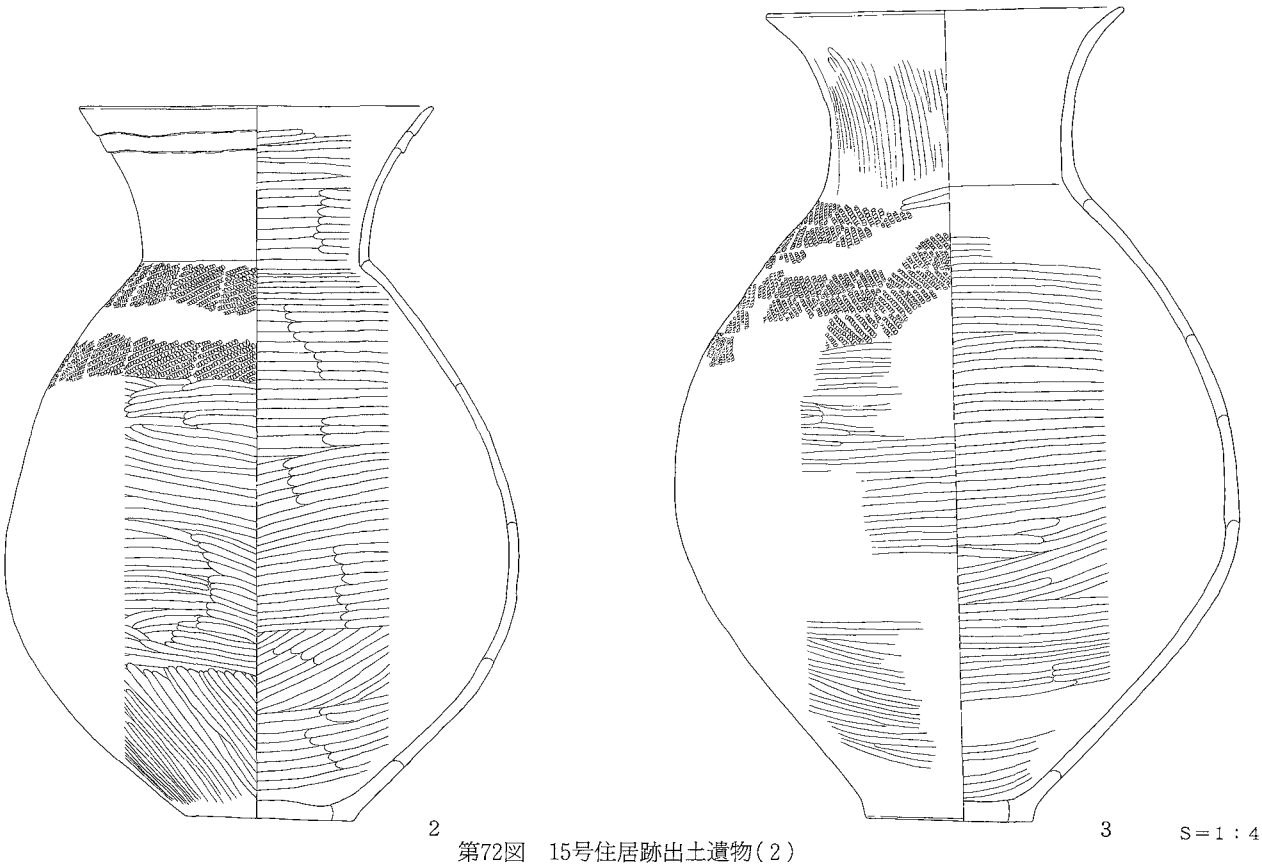


15号住居セクション
第１層：暗褐色土。φ数mm程度の白色パミスを全体に少量含む。
第２層：褐色土。ローム粒、Ⅳ層のブロックを全体に含む。
第３層：明褐色土。Ⅳ層のブロックを多量に含む。

第70図　15号住居跡平面図



第71図　15号住居跡出土遺物（１）



第72図　15号住居跡出土遺物（2）

第17表　15号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 （残度）	法量（cm）	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	壺	口縁部～ 胴部上半 部 50%	口—22.1 底— 高— 最—	①黒色粒・角閃石混入 ②良好 ③黄橙色～褐色	全体に薄手で口唇部下に明瞭な2段の段差を有する。胴部最上位に簾状文、その下に4段の波状文。簾状文は4連止めを主とするが3連止め・5連止めも見られ、間隔も不整。文様部以外外面・内面ともに横位・斜位篦磨き。
2	壺	口縁部～ 底部 80%	口—(18.6) 底—8.9 高—37.6 最—	①白色粒・黒色粒・角閃石混入 ②良好 ③橙色～褐色	全体に薄手で口唇部下に明瞭な2段の段差を有する。胴部上位にLR縄文を横位に2段施す。 外面：口縁部篦撫で？（やや不明瞭）文様下部横位篦磨き。胴部下部縦位篦磨き。 内面：横位基調篦磨き。
3	壺	口縁部～ 底部 80%	口—(18.8) 底—8.8 高—42.9 最—	①白色粒・黒色粒・角閃石混入 ②良好 ③橙色～にぶい橙色	全体に薄手。口縁部上半が大きく外反する。胴部上位にLR縄文を施す。 外面：口縁部縦位、胴部横位篦磨き。 内面：口縁部は剝落し不明。胴部横位篦磨き。

16号住居跡

位置　本住居跡は西区住居群の中央北寄り、猫沢川の支流に向かい緩やかに下る北西斜面上に位置する。

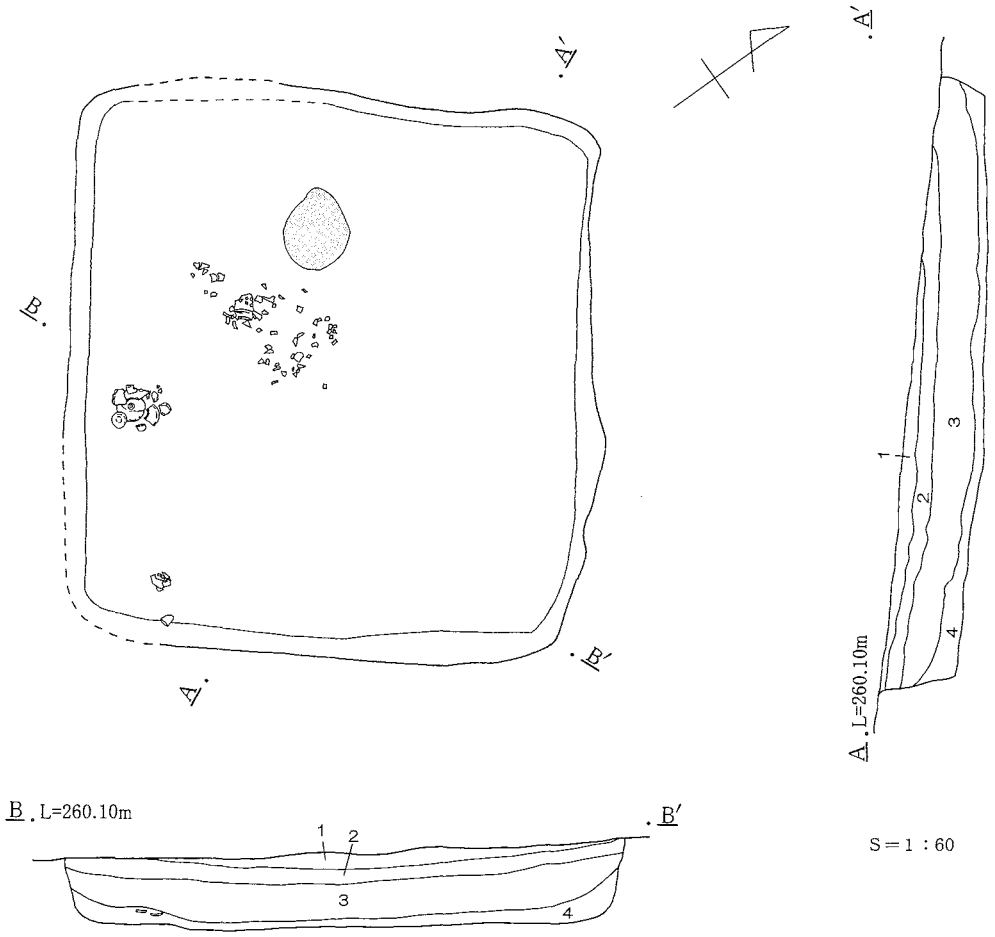
概要　本住居跡は、西区住居群の調査のため、基本土層Ⅳ層上面まで表土を掘削した際プランが確認された。西区住居群の他の住居と同様、覆土はやや粘質の黒褐色土であり、最上部にAs—B軽石（1108年、浅間山給源）がレンズ状に堆積する。残存度は良好であり、床面において比較的多くの遺物が出土している。

構造　本住居跡は、隅丸の方形を呈する。壁周溝・柱穴等の施設は確認されていない。住居中央やや北西寄りに焼土・炭化物の集中する部分があるが、床面を掘り込んではいない。

規模　住居の長軸方向は北西から南東方向となる。長軸方向が約4.0m、短軸方向が3.8mを測り、正

方形に近い住居跡である。壁はやや開き気味に立ち上がり、確認面までの壁高は、山側である南側が約70cm、谷側である北側が約40cmを測る。前述の焼土・炭化物の集中する範囲は、径60cm程の円形を呈する。

遺物　出土遺物は、住居中央より西に集中する傾向が認められる。

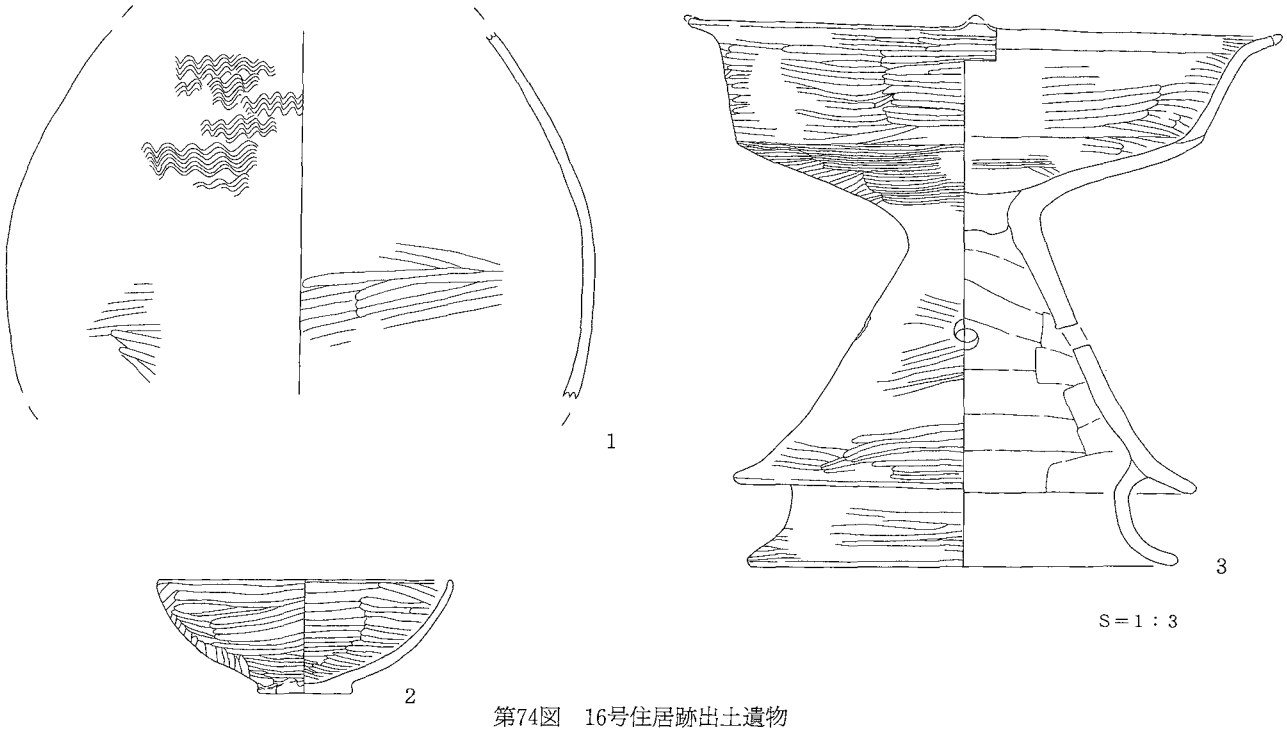


16号住居セクション
第1層：明褐色砂質土。As-B。
第2層：黒褐色土。φ数mm程度の白色パミスを全体に少量含む。やや粘質。
第3層：暗褐色土。第2層に近似。2層より色調明るい。
第4層：暗褐色土。地山であるⅣ層のブロックを全体に含む。

第73図　16号住居跡平面図

第18表　16号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残度)	法量（cm）	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	壺	胴部破片	口― 底― 高― 最―	①白色粒・黒色粒混入 ②良好 ③にぶい橙色	全体に薄手。上半部に波状文を施すがやや不明瞭。 外面：横位基調篦磨き。 内面：横位篦磨き。
2	鉢	完形	口―11.6 底―3.6 高―4.5 最―	①白色粒・黒色粒・角閃石混入 ②良好 ③灰褐色	丸味を帯びた器型。口唇部は内湾気味。 外面：横位・斜位篦磨き。 内面：横位基調篦磨き。
3	高坏	口縁部～底部 80%	口―(23.8) 底―17.1 高―21.6 最―	①黒色粒・角閃石混入 ②良好 ③赤褐色～橙色	口唇部が大きく外反し、4単位の小突起。脚部内面を除き全体に赤彩を施す。 外面：横位篦磨き。 内面：坏部横位篦磨き。脚部横位基調篦撫で。端部横撫で。



第74図　16号住居跡出土遺物

17号住居跡

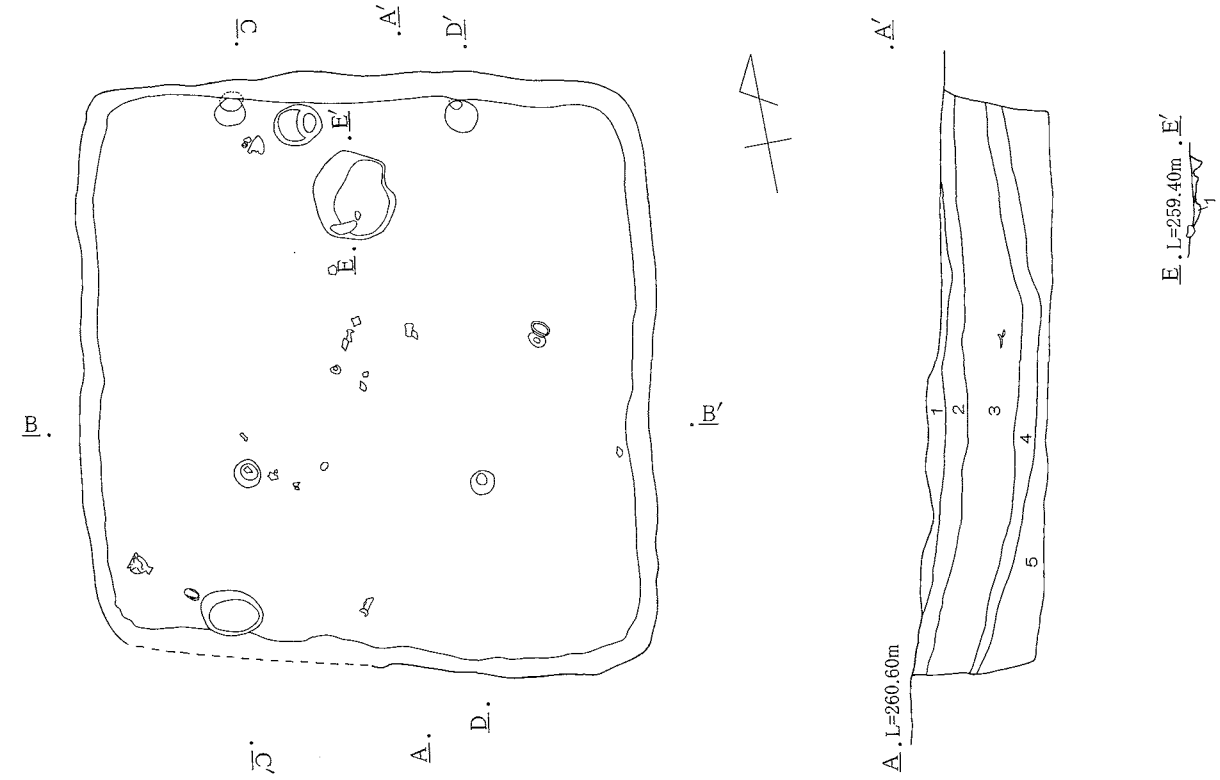
位置　本住居跡は西区住居群の東寄り、猫沢川の支流に向かい緩やかに下る北西斜面上に位置する。

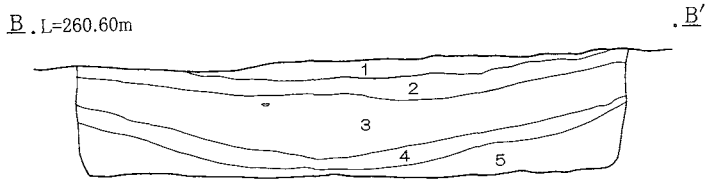
概要　本住居跡は、西区住居群の調査のため、基本土層Ⅳ層上面まで表土を掘削した際プランが確認された。西区住居群の他の住居と同様、覆土はやや粘質の黒褐色土であり、最上部にAs－B軽石（1108年、浅間山給源）がレンズ状に堆積する。残存度は良好である。

構造　本住居跡は隅丸のほぼ正方形を呈する。壁周溝は確認されていない。住居中央北寄りに焼土・炭化物を伴う浅いピットが検出されており、焼けた石も出土していることから炉跡の可能性が高い。住居北側壁際には、若干斜めに穿かれた２基のピットがある。中央南よりの２基のピットとともに主柱穴の可能性も考えられる。南側西寄りのピットについては、14号住居の項で述べたように昇降施設との関連が考えられる。

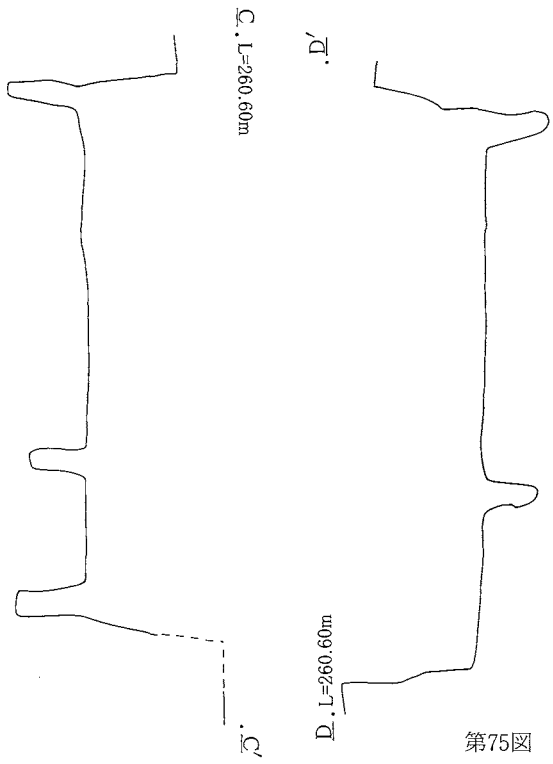
規模　前述したように、１辺が約4.0mのほぼ正方形を呈する住居跡である。炉跡と考えられる浅いピットは径70cmのほぼ円形を呈し、深さは10cmを測る。主柱穴の可能性が考えられるピット４基のうち、北側壁際の２基は、径30cm前後、深さ50cm前後を測り、住居範囲外へ出る方向に若干斜めに穿たれている。住居中央南よりの２基のピットは、径20cm前後、深さ40cm前後を測る。南側西寄りのピットは、東西方向50cm、南北方向35cmの楕円形を呈する。深さは60cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面までの壁高は、山側である南側が約95cm、谷側である北側が約80cmを測る。

遺物　出土した遺物は比較的少なく、住居の中央付近に集中する傾向が認められる。





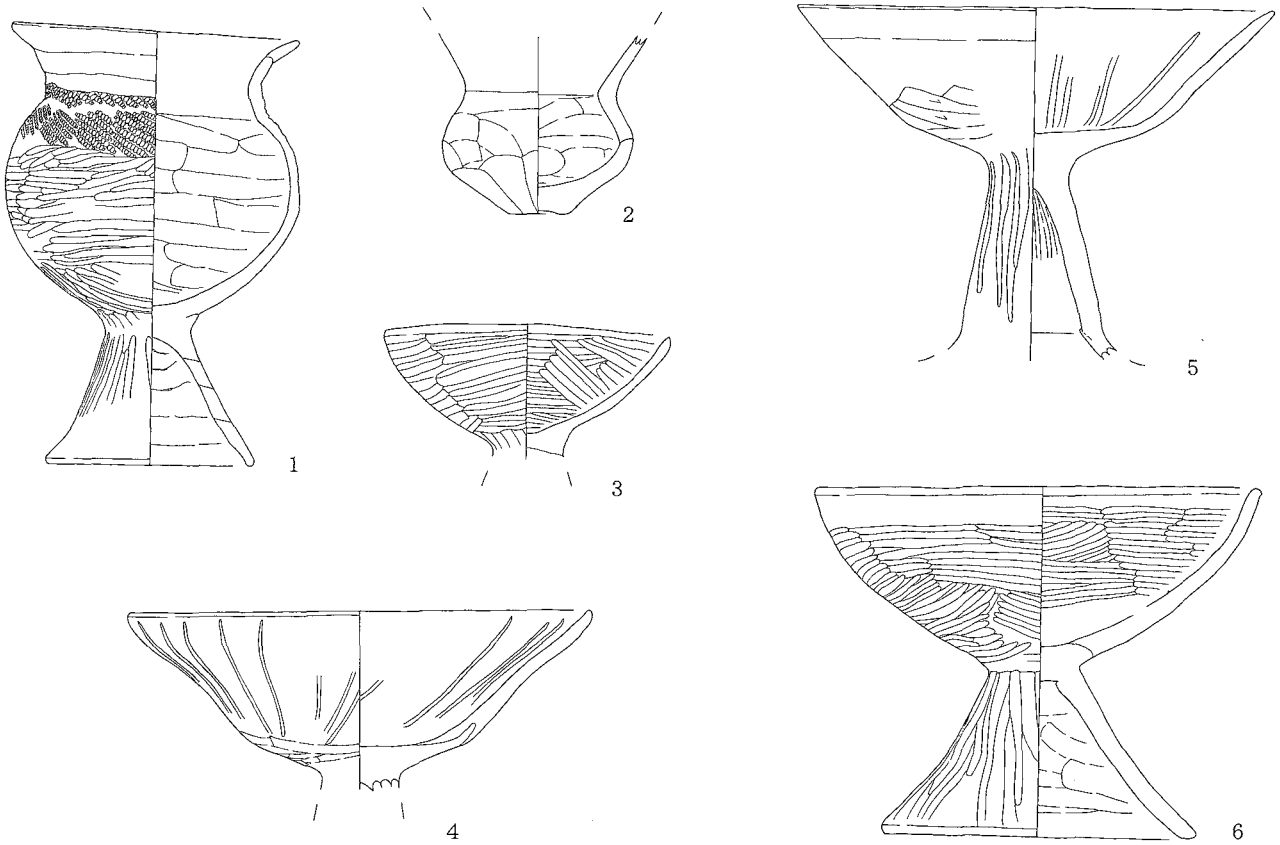
17号住居E～E′セクション
第1層：暗褐色土。焼土粒、炭化物を含む。



17号住居セクション
第1層：明褐色砂質土。As-B。
第2層：黒褐色土。基本土層III層に近似。やや粘質。
第3層：暗褐色土。φ数mm程度の白色パミス、φ5～10mm程度の黄色パミスを少量含む。
第4層：暗褐色土。φ5～10mm程度の黄色パミスを全体に含む。
第5層：褐色土。φ5～10mm程度の黄色パミス、ローム粒を全体に多く含む。

S＝1：60

第75図　17号住居跡平面図



S＝1：3

第76図　17号住居跡出土遺物

第19表　17号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残度)	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	台付甕	口縁部～ 底部 80%	口—11.2 底—8.1 高—17.4 最—11.7	①黒色粒・白色粒・角閃石・石英混入 ②良好 ③赤褐色～灰黄褐色	胴部は丸味を持ち口唇部が外反する。頸部外面に輪積み痕。肩部にRL縄文横位施文。 外面：口縁部横撫で。胴部中位～下位横位箆磨き。脚部上位～中位縦位箆磨き、下位横撫で。 内面：口縁部横撫で。胴部箆撫で。脚部横撫で。
2	坩	口縁部～ 底部 60%	口— 底—2.2 高— 最—7.6	①白色粒・褐色粒・黒色粒混入 ②良好 ③黄橙色～橙色	全体的に雑な調整。 外面：口縁部横撫で。胴部上半箆撫で。下半箆削り。 内面：口縁部横撫で。胴部上半箆撫で。下半撫で。
3	高坏	坏部のみ 50%	口—11.3 底— 高— 最—	①白色粒・黒色粒・礫混入 ②良好 ③黄褐色	外面・内面ともに横位基調箆磨き。
4	高坏	坏部のみ 30%	口—18.2 底— 高— 最—	①白色粒・黒色粒混入 ②良好 ③明赤褐色	外面・内面ともに上位横撫で。下位箆撫で後縦位箆磨き。
5	高坏	坏部～脚部中位 40%	口—(18.8) 底— 高— 最—	①白色粒・黒色粒・礫混入 ②良好 ③黄橙色	外面：坏部口縁部横撫で、中位箆削り、下位箆撫で。 脚部箆撫で後縦位箆磨き。 内面：坏部上位横撫で、中位～下位箆撫で後縦位箆磨き。脚部撫で、端部のみ横撫で。
6	高坏	ほぼ完形	口—17.5 底—12.2 高—13.9 最—	①白色粒・黒色粒・角閃石混入 ②良好 ③赤褐色～橙色	坏部丸味を持って立ち上がり口唇部のみ外反する。脚部外反気味に大きく開く。 外面：坏部横位基調箆磨き。口唇部のみ横撫で。 脚部縦位箆磨き。 内面：坏部横位基調箆磨き。口唇部のみ横撫で。 脚部横位箆撫で。

18号住居跡

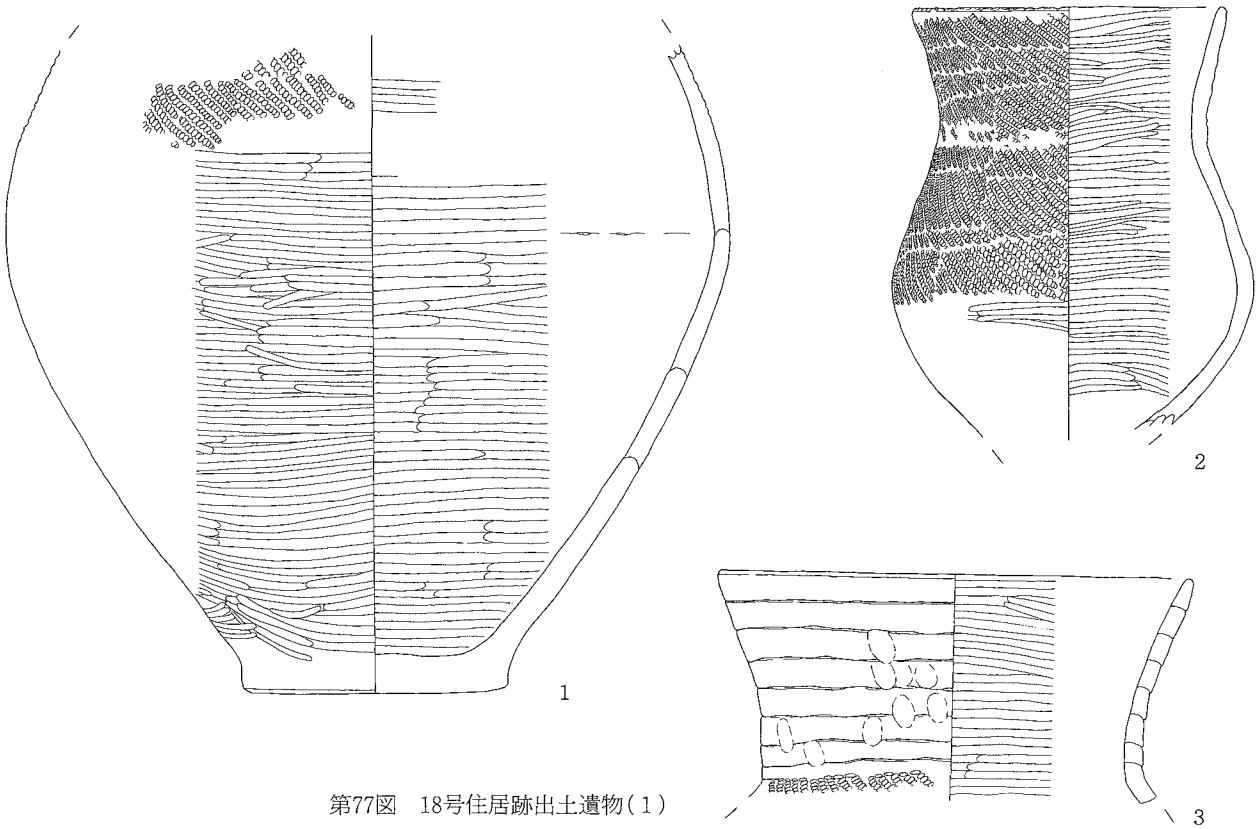
位置　本住居跡は西区住居群の中央南寄り、猫沢川の支流に向かい緩やかに下る北西斜面上に位置する。

概要　本住居跡は、西区住居群の調査のため、基本土層Ⅳ層上面まで表土を掘削した際プランが確認された。西区住居群の他の住居と同様、覆土はやや粘質の黒褐色土であり、最上部にAs—B軽石（1108年、浅間山給源）がレンズ状に堆積する。非常に大型の住居であり、掘り込みも深いため残存度は良好である。床面付近や床下のピット内において、比較的多くの遺物が検出されている。住居付近において２カ所の攪乱が確認されている。どちらの攪乱の覆土にもAs—A軽石（1783年、浅間山給源）が多量に含まれており、最近のものと考えられる。南側の攪乱は平面的には小さいが、南壁の一部を壊している。住居中央西寄りの比較的大型の攪乱は、平面的には住居の範囲内であるので壁は壊していないが、深さがあるため床面の一部を壊している。どちらの攪乱も壊している部分はごく少量であるので、住居の規模・形態等は十分に把握できる。

構造　前述のように、本住居跡は非常に大型で掘り込みの深い住居である。東西方向に長軸を持つ、隅丸の長方形を呈する。壁周溝は確認されていない。住居中央西寄りに焼土・炭化物を伴う浅いピットが検出されており、焼けた石も出土していることから炉跡の可能性が高い。住居東側壁際には、南北に並ぶように２基のピットが確認されている。北のピットの覆土からは遺物が検出されている。

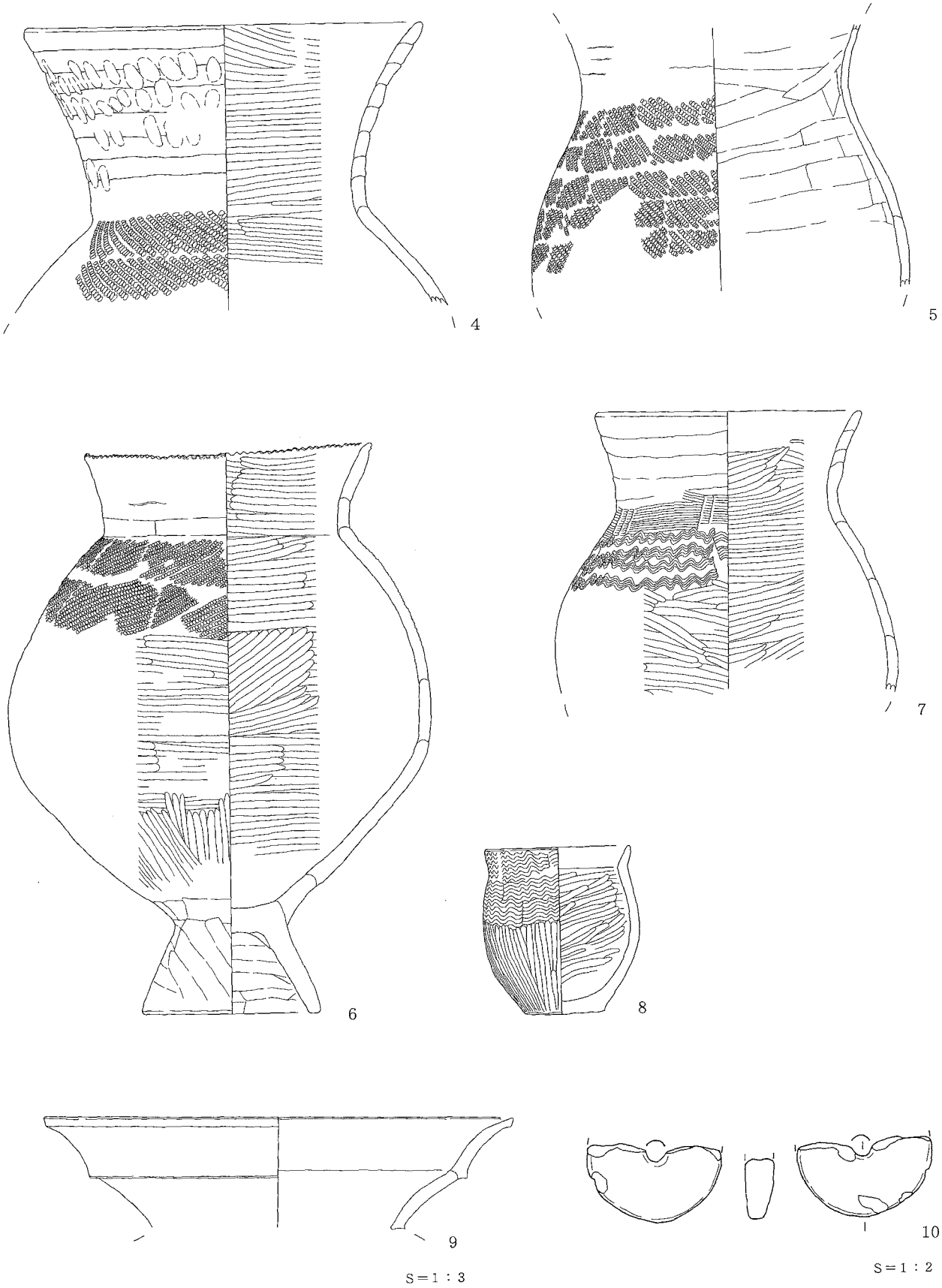
規模　本住居跡は、東西方向約6.3m、南北方向約5.9mを測る大型住居跡である。中央西寄りの炉跡と考えられる浅いピットは、径70cmのほぼ円形を呈し、深さは10cmを測る。東側の壁際に確認された２基のピットは比較的大型であり、貯蔵穴の可能性が考えられる。北のピットが径60cm、深さ50cmを測る。南のピットが径40cm、深さ40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面までの壁高は、山側である南側が約130cm、谷側である北側が約100cmを測る。

遺物　遺物は２基のピットが確認された東側壁際に集中する傾向が認められる。また、ほとんどの遺物が床面付近から出土している。

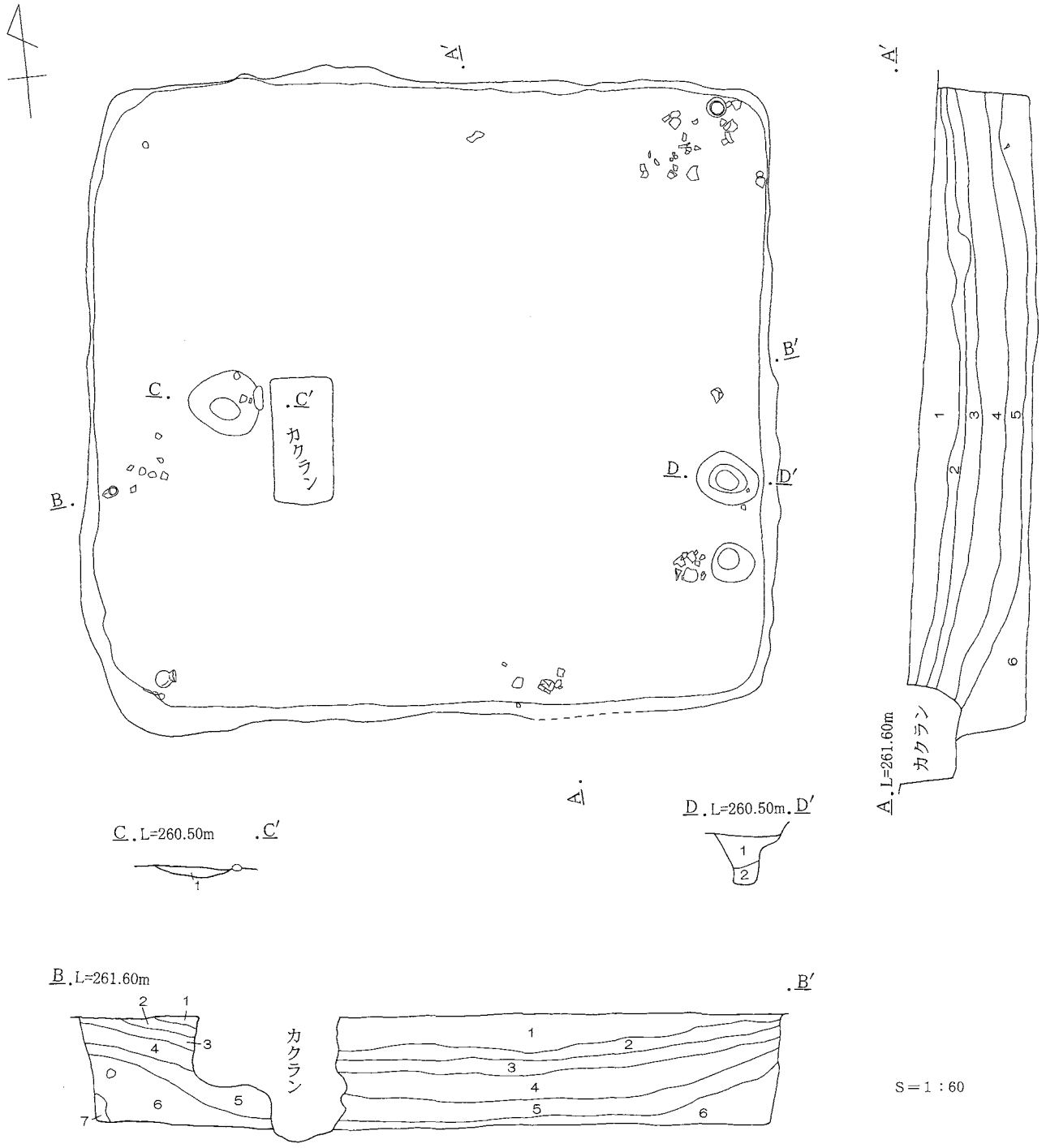


第77図　18号住居跡出土遺物（１）

S＝１：３



第78図　18号住居跡出土遺物（2）



18号住居C～C′セクション
第１層：暗褐色土及びロームが混在する。焼土と炭化物（炭化材）を含む。

18号住居D～D′セクション
第１層：暗褐色土。炭化物と黄色パミスを含む。
第２層：暗褐色土。ロームブロックを含む。やや粘性あり。

18号住居セクション
第１層：暗褐色土。As-Bパミスを全体に多く含む。
第２層：明褐色砂質土。As-B。
第３層：黒褐色土。φ数mm程度の白色パミスを全体に含む。やや粘質。
第４層：暗褐色土。φ数mm程度の白色パミスを全体に含む。第３層に近似。３層より色調明るい。
第５層：暗褐色土。φ数mm～10mm程度の黄色パミスを全体に含む。
第６層：褐色土。φ数mm～10mm程度の黄色パミス、ローム粒を全体に多く含む。下部には炭化物がまだらに混入する。
第７層：暗褐色土。全体にローム粒を含む。やや粘質。

第79図　18号住居跡平面図

第20表　18号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残度)	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	甕	胴部上位 ～底部 40%	口— 底—10.6 高— 最—	①白色粒・黒色粒・混入 ②良好 ③黄橙色	胴部上位にRL縄文施文。 外面・内面ともに横位篦磨き。底部まで丁寧に調整。
2	甕	底部のみ 欠損 ほぼ完形	口—12.3 底— 高— 最—	①白色粒・黒色粒・石英・礫混入 ②良好 ③黄橙色～橙色	口縁部端部に縄文施文。口縁部～胴部上位RL縄文横位施文。 外面：胴部下半横位篦磨き？（やや不明瞭） 内面：横位篦磨き。
3	甕	口縁部～ 胴部上位 10%	口—18.6 底— 高— 最—	①白色粒・黒色粒・混入 ②良好 ③橙色	頸部～口縁部に顕著な輪積み痕。胴部上位にRL縄文施文。 外面：口縁部～頸部撫で。顕著な指頭痕あり。 内面：横位篦磨き。
4	甕	口縁部～ 胴部 20%	口—20.8 底— 高— 最—	①白色粒・黒色粒混入 ②良好 ③黄橙色	頸部～口縁部に顕著な輪積み痕。胴部上位にRL縄文施文。 外面：口縁部～頸部撫で。顕著な指頭痕あり。 内面：横位篦磨き。
5	甕	口縁部～ 胴部 20%	口— 底— 高— 最—	①褐色粒・角閃石混入 ②良好 ③にぶい黄橙色～灰褐色	全体的に薄手。胴部上半にRL縄文施文。 外面：口縁部横撫で。胴部下半撫で。 内面：篦撫で。
6	台付甕	口縁部～ 底部 80%	口—15.0 底—9.2 高—30.0 最—22.4	①白色粒・黒色粒・礫混入 ②良好 ③黄褐色～橙色	口縁部末端に刻みあり。 外面：口縁部横撫で。胴部上位にLR縄文施文。中位横位篦磨き。下位縦位篦磨き。台部篦撫で。 内面：口縁部～胴部横位篦磨き。台部篦撫で。
7	甕	口縁部～ 胴部 60%	口—13.7 底— 高— 最—18.3	①黒色粒・白色粒・褐色粒混入 ②良好 ③赤褐色～橙色	口縁部に輪積み痕。胴部上位に簾状文（2連止め・3連止め交互）、その下に波状文を施す。口縁部の外面は撫で。その他文様部以外は外面・内面ともに横位基調篦磨き。
8	小型甕	完形	口—7.5 底—4.1 高—8.8 最—8.2	①白色粒・褐色粒混入 ②良好 ③黄橙色～橙色	外面：口縁部～胴部上半部簾状文。胴部下半部縦位篦磨き。 内面：横位基調篦磨き。
9	壺	口縁部 10%	口—24.8 底— 高— 最—	①白色粒・褐色粒混入 ②良好 ③橙色	口唇部大きく開く。口唇部中位に顕著な稜を持つ。 外面・内面ともに横撫で。
挿図番号 図版番号	種　別 器　種	部　位 (残度)	計測値 (cm ／ g)		特　徴　等
10	石製品 紡錘車	50%	直径：4.8　幅　： 厚さ：1.0　重さ：12.5		石材は軽石質凝灰岩

19号住居跡

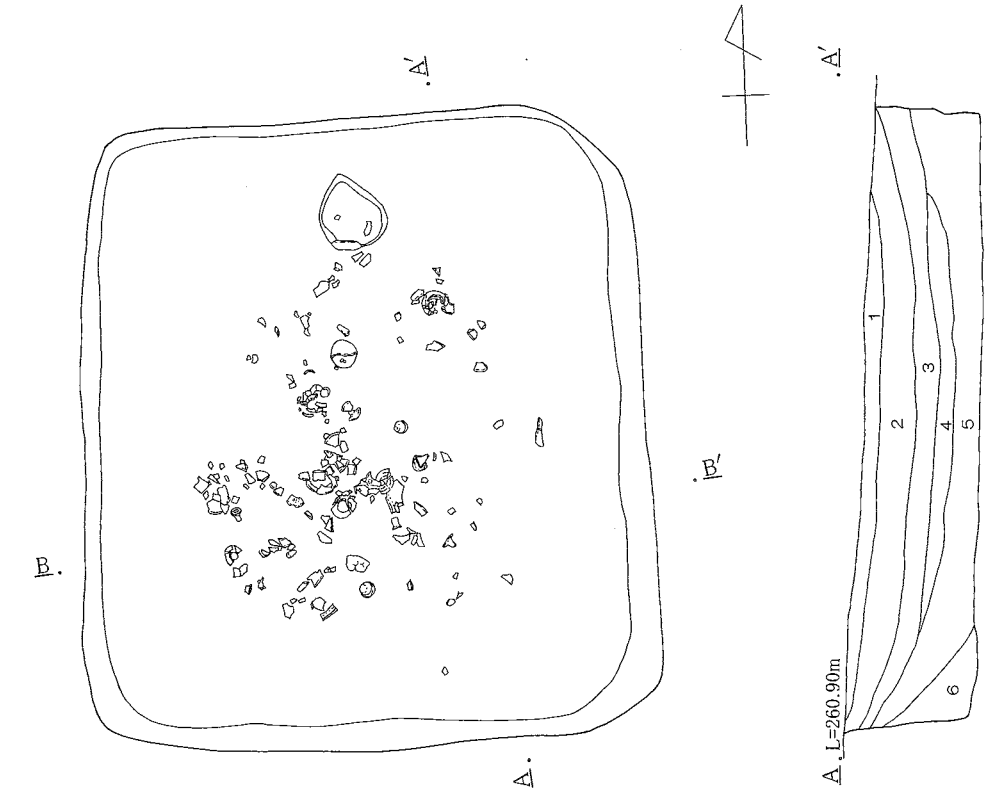
位置　本住居跡は西区住居群の西端、猫沢川の支流に向かい緩やかに下る北西斜面上に位置する。

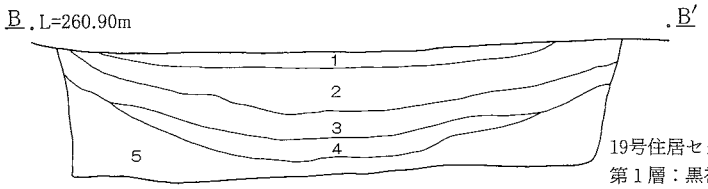
概要　本住居跡は、西区住居群の調査のため、基本土層Ⅳ層上面まで表土を掘削した際プランが確認された。西区住居群の他の住居と同様、覆土はやや粘質の黒褐色土であり、最上部にAs—B軽石（1108年、浅間山給源）がレンズ状に堆積する。残存度は良好であり、出土した遺物量も非常に多い。ただし、床面で検出された遺物は比較的少なく、レンズ状に堆積する覆土中から検出されたものが多い。前述したように、本住居跡が今回の調査で確認された西端の住居であるが、周囲の地形・西側の調査区外で表採できる遺物が、さらなる住居群の広がりを予想させる。

構造　本住居跡は隅丸の南北にやや長い長方形を呈する。壁周溝は確認されていない。住居北壁付近に焼土・炭化物を伴う浅いピットが検出されており、焼けた石も出土していることから炉跡の可能性が高い。住居北側壁際には、若干斜めに穿かれた2基のピットがある。中央南よりの2基のピットとともに主柱穴の可能性も考えられる。南側西寄りのピットについては、14号住居の項で述べたように昇降施設との関連が考えられる。全体的な住居の構造が17号住居に酷似している。

規模　前述したように、南北にやや長い長方形を呈する住居跡である。南北方向が約4.6m、東西方向が約3.9mを測る。住居北壁付近の炉跡と考えられる浅いピットは、径60cmのほぼ円形を呈し、深さは10cmを測る。主柱穴の可能性が考えられるピット４基のうち、北側壁際の２基は、径20cm前後、深さ70cm以上（その形状から完掘できなかった。）を測り、住居範囲外へ出る方向に若干斜めに穿たれている。住居中央南よりの２基のピットは、径20cm前後、深さ70cm以上（その形状から完掘できなかった。）を測る。南側西寄りのピットは、東西方向40cm、南北方向30cmの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面までの壁高は、山側である南側が約100cm、谷側である北側が約80cmを測る。

遺物　住居内全体から、非常に多くの土器が出土しているが、床面付近において確認されたものは少量である。よって、図示した遺物の時期と住居の使用時期とが一致しない可能性が高い。





S＝1：60

19号住居セクション

第１層：黒褐色土。φ数mm程度の白色パミスを全体に少量含む。基本土層Ⅲ層に近似。やや粘質。

第２層：第１層に近似。１層より色調明るい。

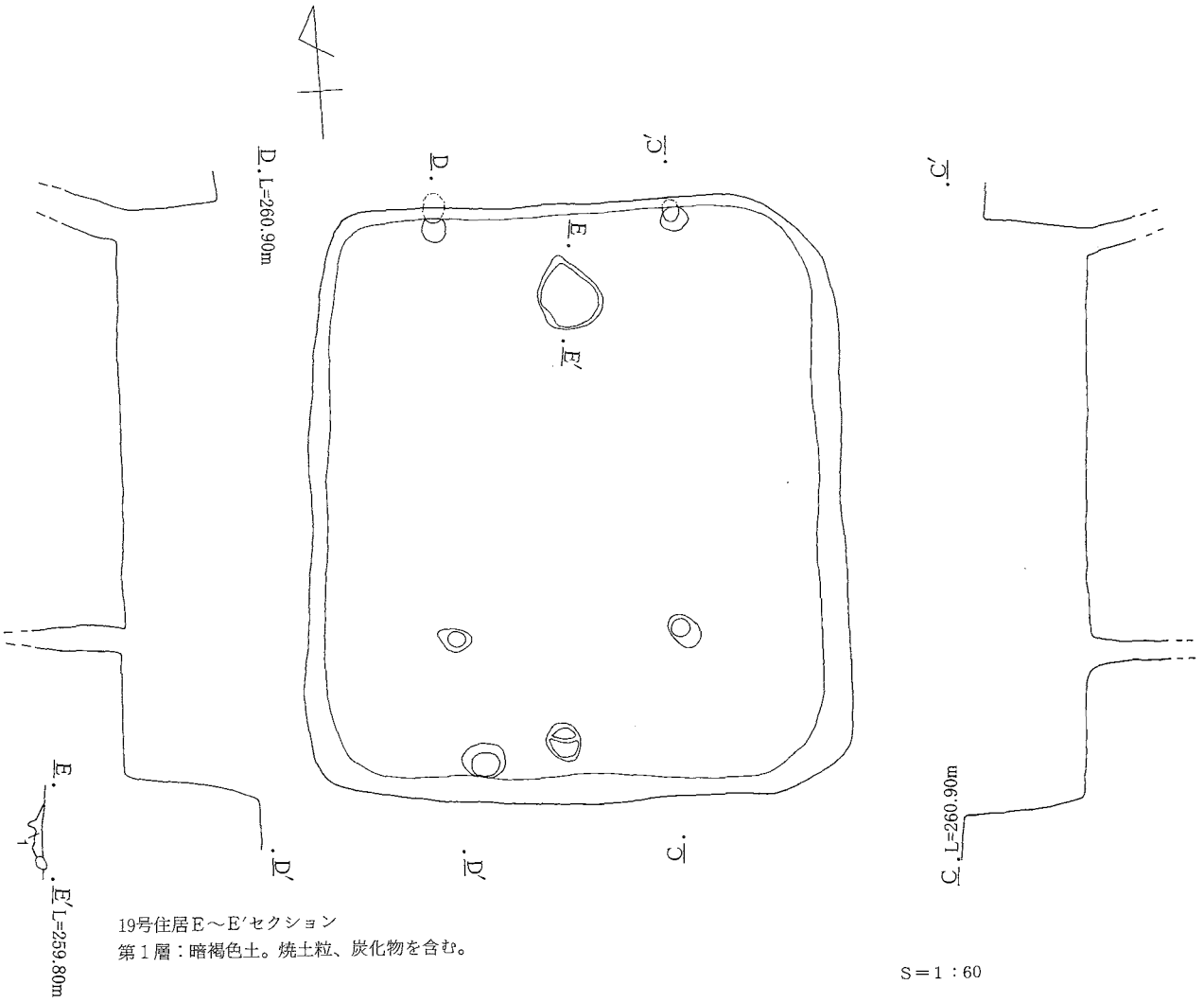
第３層：暗褐色土。φ数mm程度の白色パミス、φ５～10mm程度の黄色パミスを全体に少量含む。

第４層：暗褐色土。φ５～10mm程度の黄色パミスを全体に含む。

第５層：黄褐色土。φ５～20mm程度の黄色パミス、ローム粒を全体に多く含む。

第６層：暗褐色土。ローム粒、地山のⅣ層のブロックを含む。

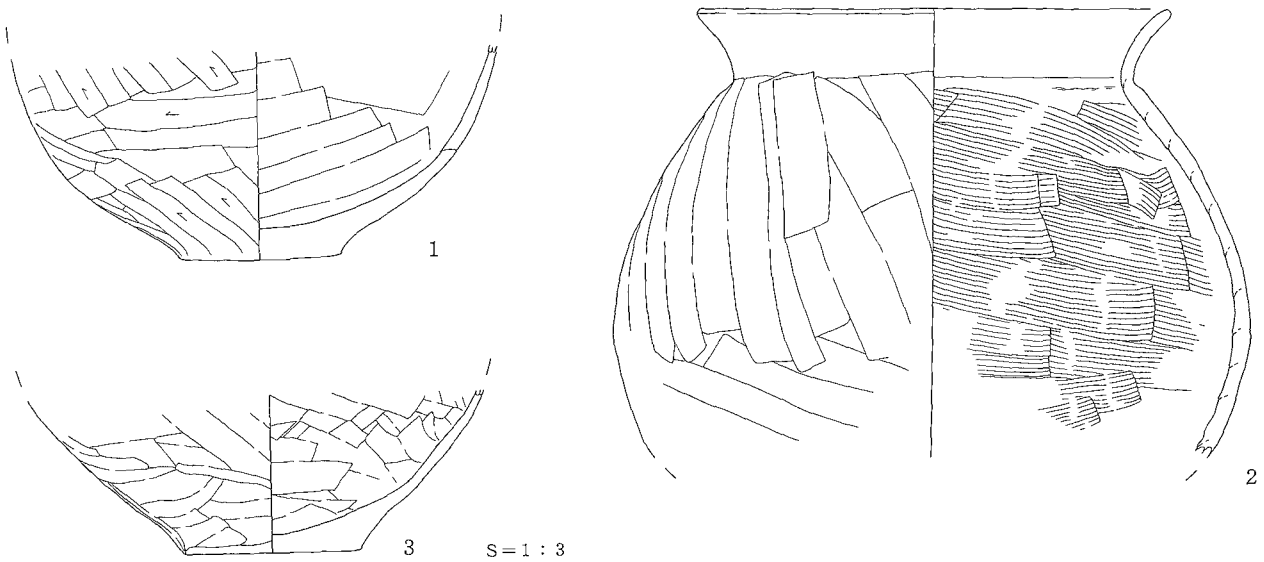
第80図　19号住居跡平面図（１）



19号住居E～E′セクション
第１層：暗褐色土。焼土粒、炭化物を含む。

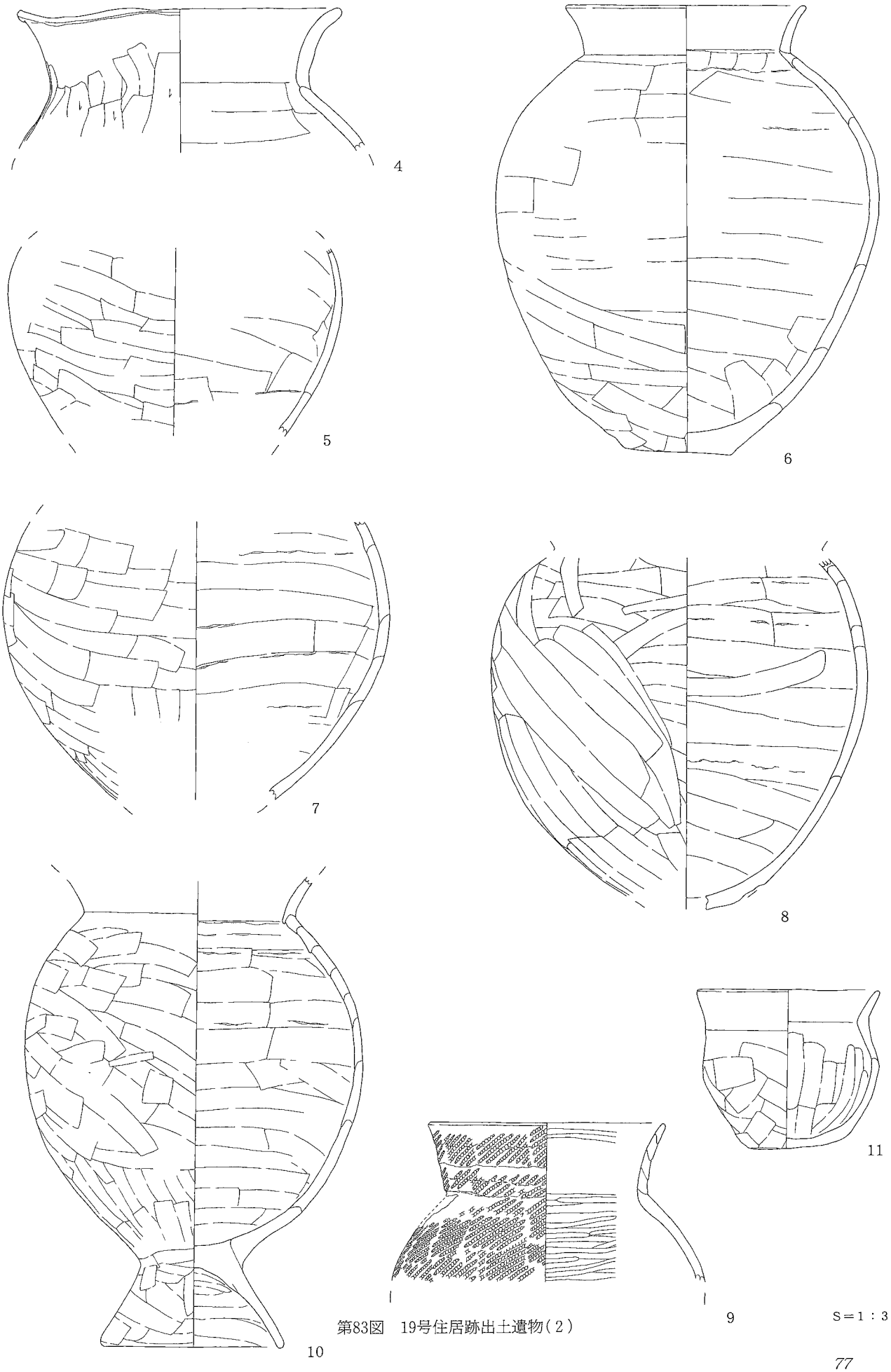
S＝1：60

第81図　19号住居跡平面図（２）



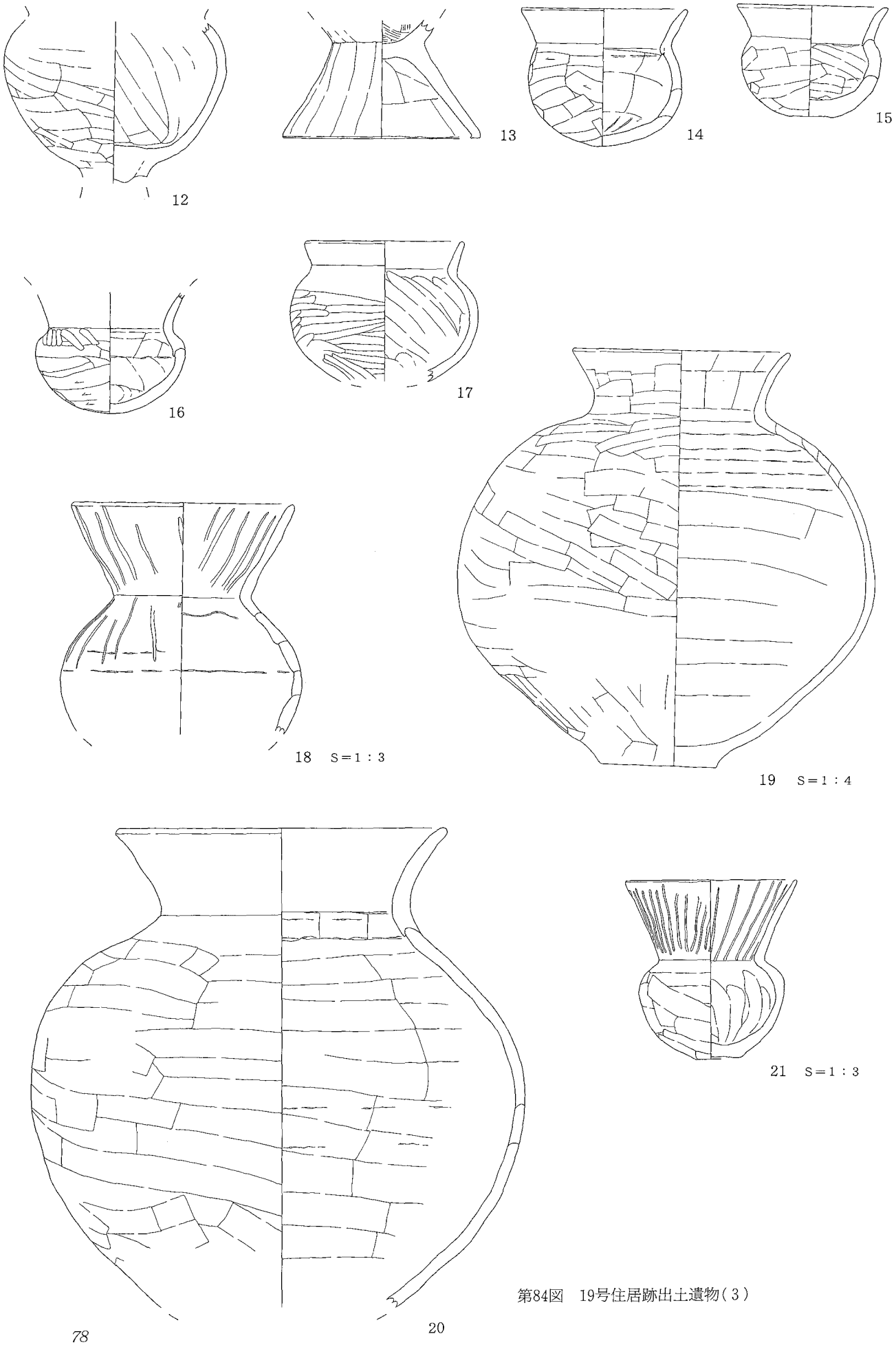
S＝1：3

第82図　19号住居跡出土遺物（１）

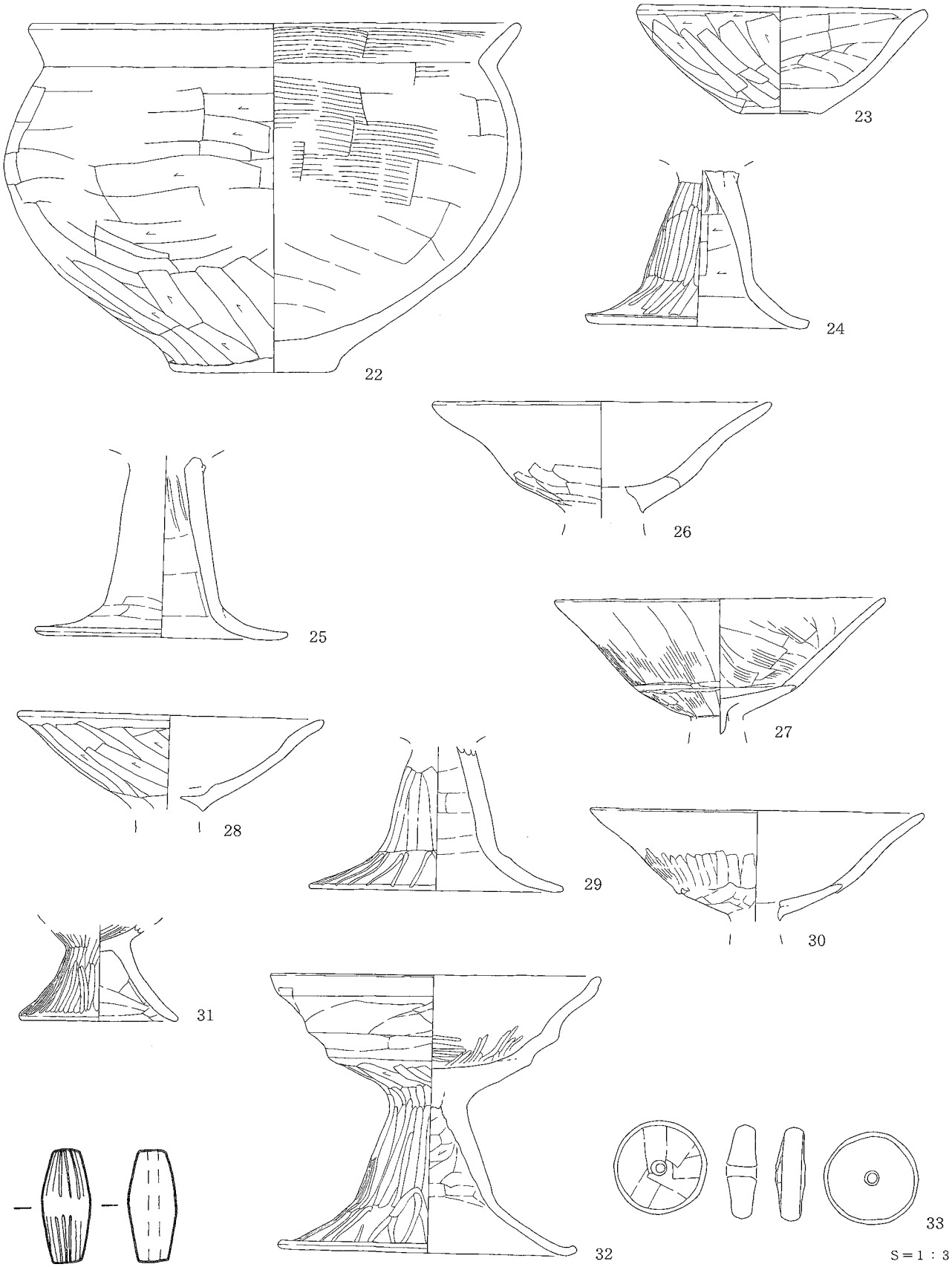


第83図　19号住居跡出土遺物（２）

S＝１：３



第84図　19号住居跡出土遺物（3）



34　S＝1：1

第85図　19号住居跡出土遺物（4）

第21表　19号住居跡出土遺物観察表(1)

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残度)	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	甕	底部 20%	口— 底—6.4 高— 最—	①褐色粒・礫混入 ②良好 ③黄橙色	全体に薄手。 外面・内面ともに不整方向箆撫で。
2	甕	口縁部～ 胴部 30%	口—18.6 底— 高— 最—(25.3)	①白色粒・礫混入 ②良好 ③黄橙色～黒褐色	外面：口縁部横撫で。胴部上半斜位箆撫で、下半斜位箆削り。 内面：口縁部横撫で。胴部横位基調箆撫で。
3	甕	胴部下半 ～底部 30%	口— 底—6.9 高— 最—	①白色粒・礫混入 ②良好 ③黄橙色～褐色	外面：不整方向箆削り。 内面：箆撫で。
4	甕	口縁部～ 胴部上位 20%	口—17.9 底— 高— 最—	①白色粒・褐色粒・礫混入 ②良好 ③灰褐色～黒褐色	外面：口縁部横撫で。頸部横撫で後縦位箆撫で。脚部縦位箆削り。 内面：口唇部～頸部横撫で。胴部横位箆撫で。
5	甕	胴部 20%	口— 底— 高— 最—(19.0)	①褐色粒・礫混入 ②良好 ③黄橙色	外面・内面ともに横位・斜位箆撫で。
6	甕	口縁部～ 底部 60%	口—(13.3) 底—6.0 高—25.4 最—21.7	①白色粒・褐色粒・礫混入 ②良好 ③黄橙色	全体に薄手。最大径を胴部上位に有する。 外面・内面ともに口縁部横撫で。胴部横位基調箆撫で。
7	甕	胴部 30%	口— 底— 高— 最—(22.0)	①黒色粒・白色粒・石英・礫混入 ②良好 ③褐色～黒褐色	外面・内面ともに横位基調箆撫で。
8	甕	胴部 70%	口— 底— 高— 最—21.4	①白色粒・褐色粒・礫混入 ②良好 ③褐色～黒褐色	胴部下位の剝離の仕方から、台付甕の可能性もある。 外面：不整方向箆撫で。 内面：横位基調箆撫で。
9	甕	口縁部～ 胴部 40%	口—13.3 底— 高— 最—	①白色粒・褐色粒・黒色粒混入 ②良好 ③黄橙色～黒褐色	口縁部直立気味に立ち上がる。口縁部に顕著な輪積み痕を有する。 外面：残存部全面にLR縄文を施す。 内面：横位箆磨き。
10	台付甕	頸部～台 部 90%	口— 底—10.2 高— 最—19.1	①黒色粒・礫混入 ②良好 ③黄橙色～橙色	全体に薄手。 外面：不整方向箆撫で。 内面：横位箆撫で。
11	小型甕	完形	口—10.2 底—4.8 高—9.0 最—	①白色粒・角閃石混入 ②良好 ③橙色	全体に雑な調整 外面・内面ともに口縁部横撫で。胴部箆撫で。
12	小型台付 甕	胴部 60%	口— 底— 高— 最—(12.8)	①白色粒・褐色粒・礫混入 ②良好 ③黒褐色	丸味を帯びた胴部を有する。口縁部の形状は不明だが、「く」の字状に外反すると予想される。 外面：横位基調箆撫で。 内面：斜位基調箆撫で。
13	台付甕	胴部下位 ～台部 20%	口— 底—11.4 高— 最—	①褐色粒・礫混入 ②良好 ③黄橙色	外面：縦位箆撫で。 内面：不整方向箆撫で。
14	小型壺	ほぼ完形	口—9.4 底— 高— 最—8.9	①黒色粒・白色粒・礫混入 ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外反気味に開く。胴部下半が丸味を帯び底部範囲がはっきりしない。 外面：口縁部横撫で。胴部不整方向箆削り。 内面：口縁部横撫で。胴部箆撫で。
15	小型壺	口縁部一 部欠損 90%	口—8.5 底—2.5 高— 最—8.0	①白色粒・礫混入 ②良好 ③橙色	口縁部外反気味に開く。全体に雑な調整。 外面：口縁部横撫で。胴部横位基調箆撫で。 内面：口縁部横撫で。胴部箆撫で。
16	小型壺	口縁部～ 底部 30%	口— 底— 高— 最—	①白色粒・黒色粒混入 ②良好 ③黄橙色	胴部下位が丸味を帯び底部範囲がはっきりしない。 外面：口縁部横撫で。胴部上位縦位基調箆磨き、中位～下位箆削り。 内面：口縁部横撫で。胴部箆撫で。

第22表　19号住居跡出土遺物観察表(2)

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残度)	法量(cm)	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
17	小型壺	口縁部～ 胴部中位 40%	口―(9.0) 底― 高― 最―(10.8)	①黒色粒・白色粒・褐色粒・混入 ②良好 ③橙色～褐色	外面：口縁部～胴部上位横撫で。胴部中位～下位横位基調篦磨き。 内面：口縁部横撫で。胴部篦撫で。
18	壺	口縁部～ 胴部 30%	口―(12.7) 底― 高― 最―(14.0)	①白色粒・褐色粒混入 ②良好 ③橙色	外面：口縁部横撫で後縦位の篦磨き。胴部上半撫で後縦位の篦磨き、下半撫で。 内面：口縁部横撫で。胴部横位基調篦撫で。
19	壺	口縁部～ 底部 80%	口―16.5 底―9.0 高―31.8 最―32.2	①白色粒・黒色粒・角閃石混入 ②良好 ③黄橙色	外面・内面ともに横位基調篦撫で。
20	壺	口縁部～ 胴部下位 70%	口―18.8 底― 高― 最―28.6	①褐色粒・礫混入 ②良好 ③黄橙色	口縁部外反する。 外面・内面ともに口縁部横撫で。胴部横位基調篦撫で。
21	坩	完形	口―9.8 底―2.6 高―10.3 最―	①角閃石混入 ②良好 ③黄橙色	胴部上位が「く」の字状に屈折する。底部中央やや窪む。外面・内面ともに口縁部横撫で後放射状篦磨き。胴部篦撫で。
22	鉢	口縁部～ 底部 60%	口―(26.0) 底―8.5 高―18.6 最―27.6	①白色粒・褐色粒・礫混入 ②良好 ③橙色	外面：口縁部縦位篦撫で後横撫で。胴部上位撫で、中位横位篦削り、下位縦位基調篦削り。 内面：縦位基調篦撫で。
23	坏	口縁部～ 底部 80%	口―15.1 底―4.4 高―5.7 最―	①白色粒・褐色粒・雲母・礫混入 ②良好 ③橙色～灰褐色	外面：口縁部横撫で。胴部縦位基調篦削り。底部篦撫で。 内面：横位基調篦撫で。
24	高坏	脚部 50%	口― 底―12.0 高― 最―	①白色粒・黒色粒混入 ②良好 ③にぶい黄橙色	裾部が大きく開く。 外面：縦位篦磨き。 内面：横位篦削り。端部のみ横撫で。
25	高坏	脚部 40%	口― 底―(13.6) 高― 最―	①白色粒・褐色粒・角閃石混入 ②良好 ③橙色	裾部が大きく開き末端はやや上方に反る。 外面：上位撫で。屈曲部篦撫で。脚部下位横撫で。 内面：上位篦撫で。脚部下位横撫で。
26	高坏	坏部 50%	口―17.9 底― 高― 最―	①白色粒・黒色粒混入 ②良好 ③橙色	坏部中位が緩やかに「く」の字状に屈曲し外反する。 外面：上位横撫で。下位篦撫で。 内面：横撫で。
27	高坏	坏部 40%	口―17.6 底― 高― 最―	①白色粒・黒色粒・礫混入 ②良好 ③赤褐色	中間部にやや顕著な段差を有する。 外面：口縁部横撫で。中位～下位縦位篦撫で。 内面：篦撫で。
28	高坏	坏部 40%	口―16.2 底― 高― 最―	①白色粒・黒色粒混入 ②良好 ③黄橙色～橙色	やや丸味を持ち口唇部のみ外反して開く。口唇部外面に小さな段差を有する部分あり。 外面：縦位～斜位篦削り。 内面：篦撫で。
29	高坏	脚部 50%	口― 底―13.4 高― 最―	①白色粒・礫混入 ②良好 ③暗灰褐色	下位にて屈曲し裾部が大きく開く。 外面：上位～中位縦位基調篦撫で。脚部撫で後放射線状篦磨き。 内面：上位～中位横位篦撫で。脚部下位横撫で。
30	高坏	坏部 50%	口―17.7 底― 高― 最―	①黒色粒・白色粒・礫混入 ②良好 ③赤褐色～黒色	中間部に顕著な段差を有する。 外面：口縁部横撫で。中位縦位篦撫で。段差より下位は不整方向篦撫で。 内面：口縁部横撫で。下位撫で。
31	高坏	坏部下位 ～脚部 40%	口― 底―8.6 高― 最―	①白色粒・角閃石混入 ②良好 ③黄橙色～灰褐色	外面：坏部・脚部ともに縦位篦磨き。 内面：坏部篦磨き。脚部篦撫で。
32	高坏	ほぼ完形	口―17.4 底―16.0 高―14.9 最―	①白色粒・黒色粒・礫・雲母混入 ②良好 ③赤褐色	坏部に2段の顕著な段差を有する。口唇部やや内湾気味。脚部裾部は大きく開き末端はやや上方に上がる。 外面：坏部上半部横位基調篦撫で、下半部斜位篦削り。 脚部縦位篦磨き。 内面：坏部横撫で後篦磨き。脚部上位篦削り、中位篦撫で、下位横撫で。

第23表　19号住居跡出土遺物観察表(3)

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残度)	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
33	紡錘車	完形	最径—5.0 厚　—1.6 孔径—0.8 重—37.0g	①白色粒・黒色粒混入 ②良好 ③にぶい横褐色	中央部がやや厚い。上面は篦撫で。下面は調整不明瞭。
挿図番号 図版番号	種　別 器　種	部　位 (残度)	計測値 (cm ／ g)		特　　徴　　等
34	石製品 管玉	完形	長さ：2.0　　幅　：0.8 厚さ：　　重さ：2.2		石材は淡緑色軟質鉱物

20号住居跡

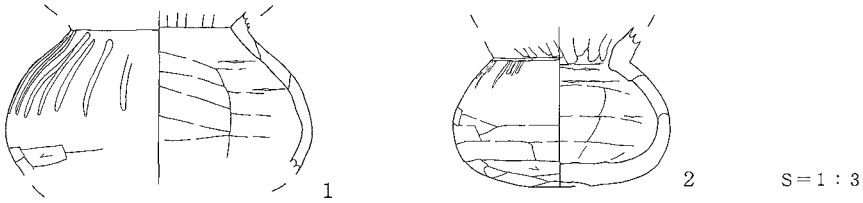
位置　本住居跡は西区住居群の南端、猫沢川の支流に向かい緩やかに下る北西斜面上に位置する。今回確認された西区住居群の中では、1番標高の高い場所に位置する。

概要　本住居跡は、西区住居群の調査のため、基本土層Ⅳ層上面まで表土を掘削した際プランが確認された。西区住居群の他の住居と同様、覆土はやや粘質の黒褐色土である。西区の住居群の中では掘り込みが浅く、周囲の住居跡で確認できたAs—B軽石(1108年、浅間山給源)の堆積もない。台地の上部に近いため、後世の耕作等により住居跡上部が壊されている可能性がある。検出された遺物量は比較的少ない。

構造　本住居跡は隅丸の東西に細長い長方形を呈する。西区住居群の他の住居が、正方形または正方形に近い長方形を呈する中で、本住居跡だけは長軸方向と短軸方向の長さの差が大きい。壁周溝・主柱穴等の施設は確認されていない。住居中央北寄りに焼土・炭化物を伴う浅いピットが検出されており、炉跡の可能性が高い。住居の南東隅に比較的大きなピットが確認されている。その規模・形態、住居の出土遺物のほとんどがこのピットの周囲や内部から検出されていることから、貯蔵穴の可能性が考えられる。

規模　本住居跡は東西方向に長い長方形を呈し、東西方向約6.0m、南北方向約3.4mを測る住居北壁付近の炉跡と考えられる浅いピットは、径60cmのほぼ円形を呈し、深さは10cmを測る。住居南東隅の貯蔵穴の可能性が考えられるピットは、径95cm、深さ40cmを測る。

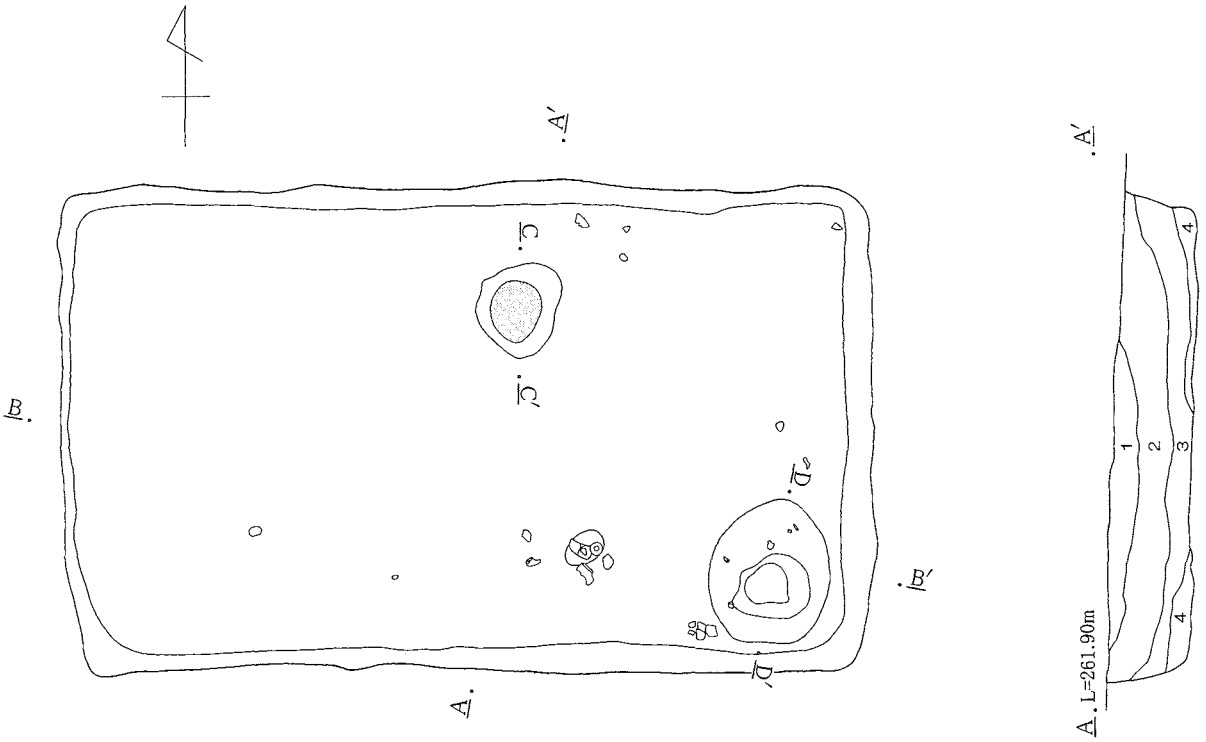
遺物　出土した遺物は比較的少ない。前述のように、出土遺物の多くは南東コーナー付近から出土している。

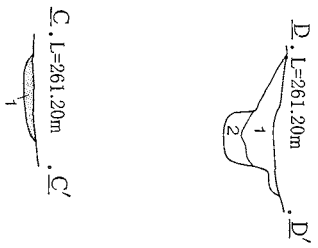


第86図　20号住居跡出土遺物

第24表　20号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 （残度）	法量（cm）	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	坩	胴部 10%	口— 底— 高— 最—	①白色粒・褐色粒混入 ②良好 ③黄橙色	外面：胴部上半篦撫で後縦位篦磨き。下半横位篦削り。 内面：口縁部縦位篦磨き。胴部横位篦撫で。
2	坩	口縁部下位～底部 80%	口— 底—2.5 高— 最—8.7	①白色粒・褐色粒・石英・雲母混入 ②良好 ③橙色～赤褐色	底部中央が窪む。 外面：口縁部～胴部上位縦位篦磨き。中位横位篦撫で。下位篦削り。 内面：口縁部縦位篦磨き。胴部横位基調篦撫で。





20号住居セクション
第１層：黒褐色土。φ数mm程度の白色パミスを少量含む。やや粘質。
第２層：暗褐色土。φ数mm程度の白色パミス、φ５～10mm程度の黄色パミスを全体に含む。
第３層：暗褐色土。地山のⅣ層のブロックをまだらに含む。φ数mm～10mm程度の黄色パミスを全体に含む。
第４層：暗褐色土。焼土粒、炭化物を全体に含む。

20号住居C～C′セクション
第１層：暗褐色土。焼土（大きなブロック状）を多く含む。

20号住居D～D′セクション
第１層：暗褐色土。ロームブロック、焼土粒、炭化物を含む。
第２層：暗褐色土。黄色パミス、ロームブロックを含む。

第87図　20号住居跡平面図

（2） 土　　坑

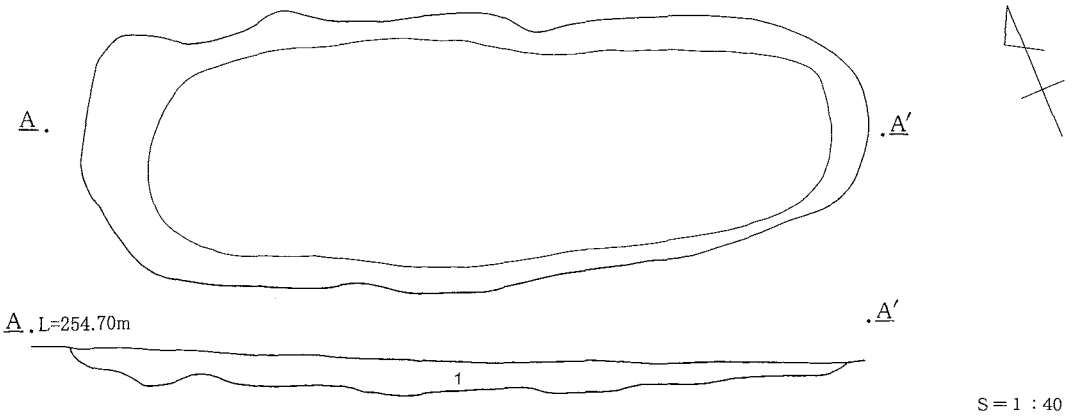
23号土坑

位置　本土坑は東区北端に位置する。

概要　本土坑は基本土層Ⅳ層上面まで試掘トレンチを入れた際プランが確認された。覆土はしまりのない黒褐色土であり、全体に炭化物、炭化粒を含む。当初住居跡の可能性も考えたが、規模・形態から土坑と判断した。長軸方向を北西に持つ楕円形を呈する。わずかに小破片の土師器が出土している。

規模　長軸425cm、短軸125cmを測る楕円形を呈する。平坦な底部を持ち、確認面から底面までの深さは15cmを測る。

遺物　遺物が小破片のため図示できなかった。



23号土坑セクション
第１層：暗褐色土。しまりなく、くずれやすい。炭化物を多く含む。

第88図　23号土坑平面図

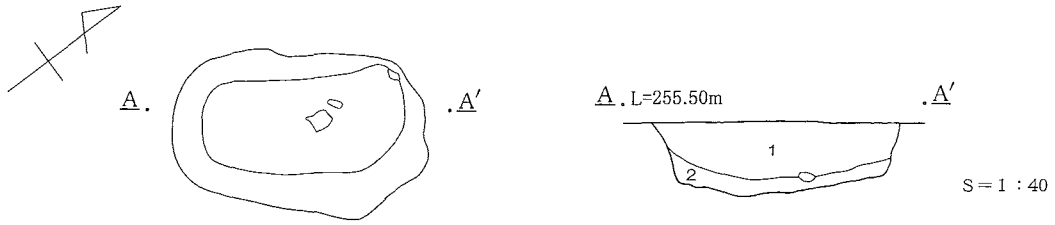
27号土坑

位置　本土坑は東区の北寄りに位置する。

概要　東区の北部の一部を、基本土層Ⅳ層の上面まで掘削した時に検出された土坑である。北東方向に長軸を持つ楕円形を呈する。覆土はやや粘質の黒褐色土である。壁は開き気味に立ち上がり、底部は比較的平坦である。出土遺物がないため時期の特定はできないが、遺構の確認面・覆土より古墳時代の所産と考えられる。

規模　長軸135cm、短軸80cmを測る楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは40cmを測る。

遺物　出土遺物なし。



27号土坑セクション
第１層：暗褐色土。基本土層Ⅲ層に近似。やや粘質。
第２層：暗褐色土。地山であるⅣ層のブロックを含む。

第89図　27号土坑平面図

28号土坑

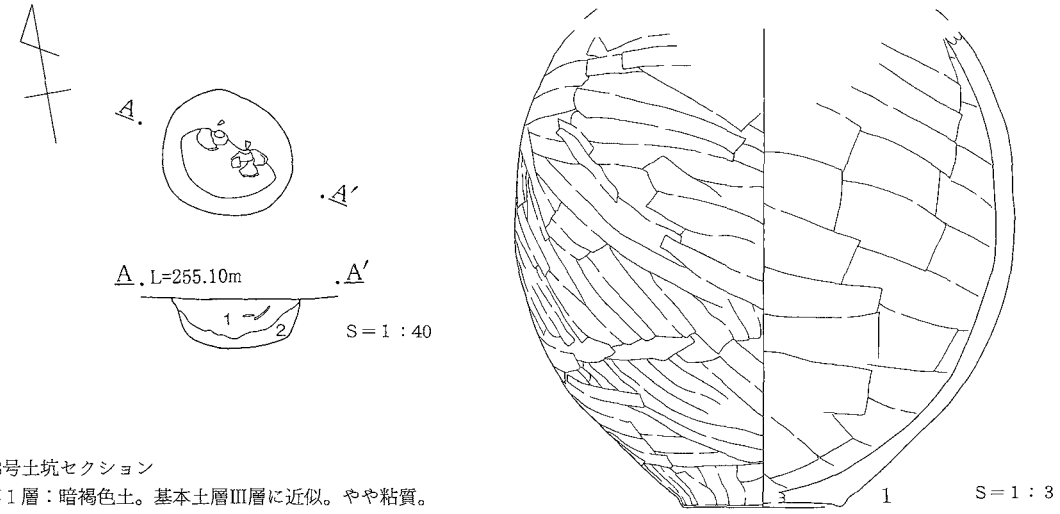
位置　本土坑は東区の北寄りに位置する。

概要　東区の北部の一部を、基本土層Ⅳ層の上面まで掘削した時に検出された土坑である。ほぼ円形

を呈し、断面形はやや深いすり鉢状である。覆土はやや粘質の黒褐色土である。数点の遺物が出土しており、遺構の確認面・覆土と合わせ古墳時代の所産と考えられる。

規模　径約70cmの円形を呈し、確認面から底面までの深さは25cmを測る。

遺物　覆土中より出土した甕１点を図示した。



28号土坑セクション
第１層：暗褐色土。基本土層Ⅲ層に近似。やや粘質。
第２層：暗褐色土。地山であるⅣ層のブロックを含む。

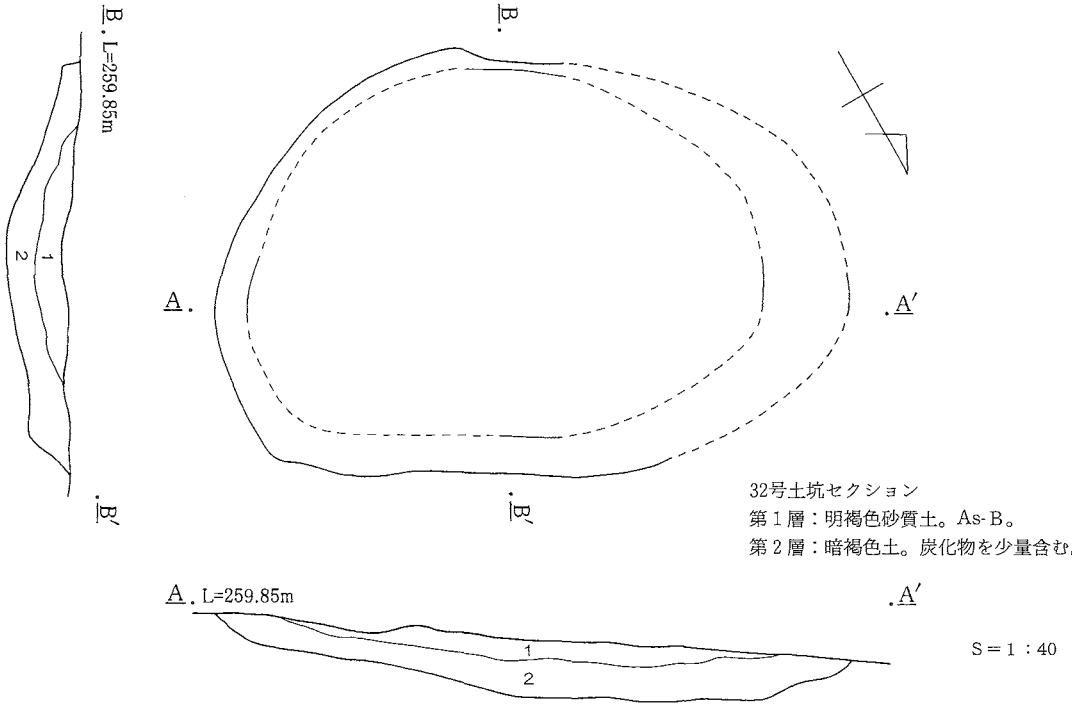
第90図　28号土坑平面図・出土遺物

第25表　28号土坑出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残度)	法量（cm）	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	甕	胴部～底部 20%	口― 底―6.3 高― 最―(19.9)	①褐色粒・角閃石混入 ②良好 ③黄橙色～黒褐色	外面：斜位基調箆撫で。 内面：横位基調箆撫で。

32号土坑

位置　本土坑は西区住居群の中央北寄り、猫沢川の支流に向かい緩やかに下る北西斜面上に位置する。



第91図　32号土坑平面図

概要　本土坑は、西区住居群の調査のため、基本土層Ⅳ層上面まで表土を掘削した際プランが確認された。西区住居群の住居と同様、覆土はやや粘質の黒褐色土であり、最上部にAs－B軽石（1108年、浅間山給源）がレンズ状に堆積する。地山である基本土層Ⅳ層と覆土の判別が困難であったため、周囲を大幅に掘り過ぎてしまっている。残したベルトの土層断面図から推定される土坑の形態は、北西方向に長軸を持つ楕円形である。断面形は浅いすり鉢状を呈すると推定される。出土遺物と覆土より古墳時代の所産と考えられる。

規模　土層断面図から推定される規模は、長軸335cm、短軸215cmを測る楕円形を呈し、長軸方向を北西に持つ。確認面から底面までの深さは30cmを測る。

遺物　口縁部の小破片が１点出土しているが、図示しなかった。

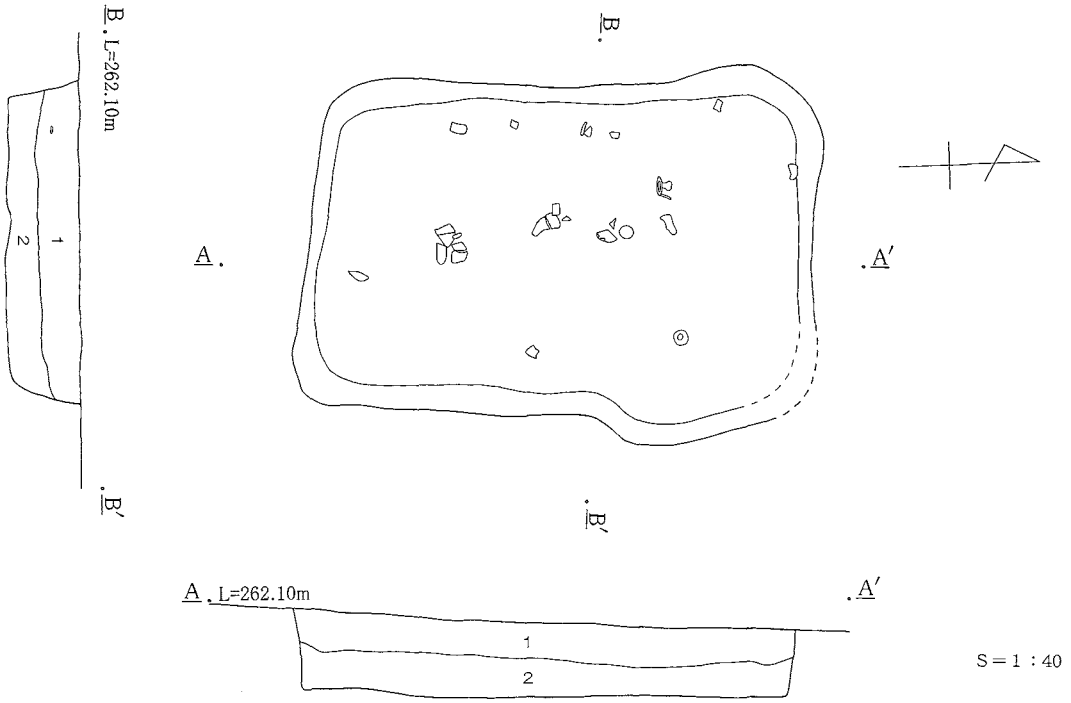
33号土坑

位置　本土坑は西区住居群の南端、猫沢川の支流に向かい緩やかに下る北西斜面上に位置する。

概要　本土坑は、西区住居群の調査のため、基本土層Ⅳ層上面まで表土を掘削した際プランが確認された。西区住居群の住居と同様、覆土はやや粘質の黒褐色土であり、最上部にAs－B軽石（1108年、浅間山給源）がレンズ状に堆積する。長軸方向を南北に持つ隅丸の長方形を呈する。出土遺物は比較的少ないが、その形態から住居の可能性も捨てきれない。住居にしては規模が小さいこと、西区住居群の住居に見られるような炉跡がないこと、他の住居と比較して出土遺物が少ないことから、ここでは土坑として報告する。なお、北東コーナーからの突出部は掘り過ぎている部分であり、カマド跡ではない。出土遺物より古墳時代の所産と考えられる。

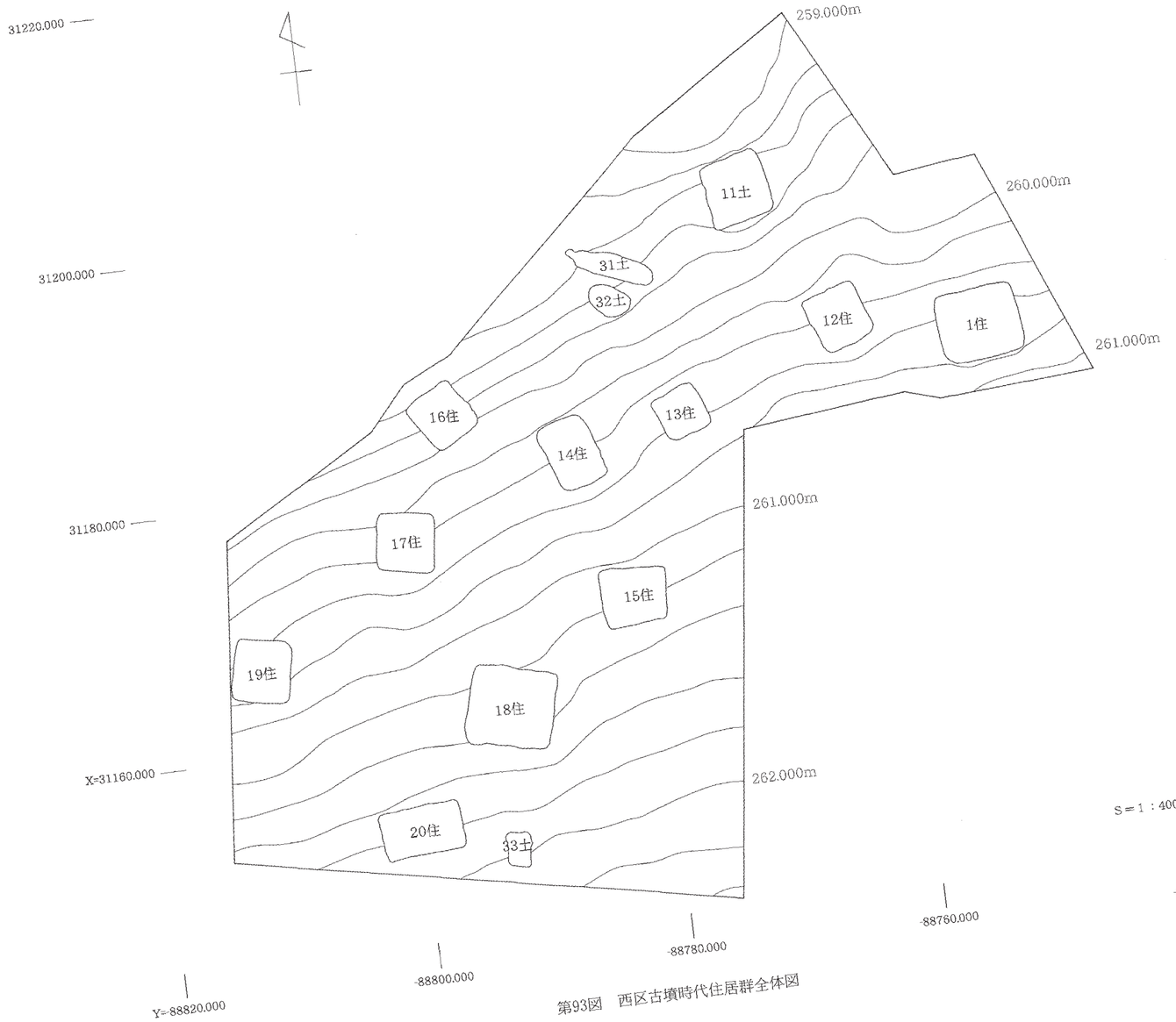
規模　長軸260cm、短軸175cmを測る隅丸方形を呈し、長軸方向を南北に持つ。確認面から底面までの深さは40cmを測る。

遺物　数点の遺物が出土しているが図示しなかった。

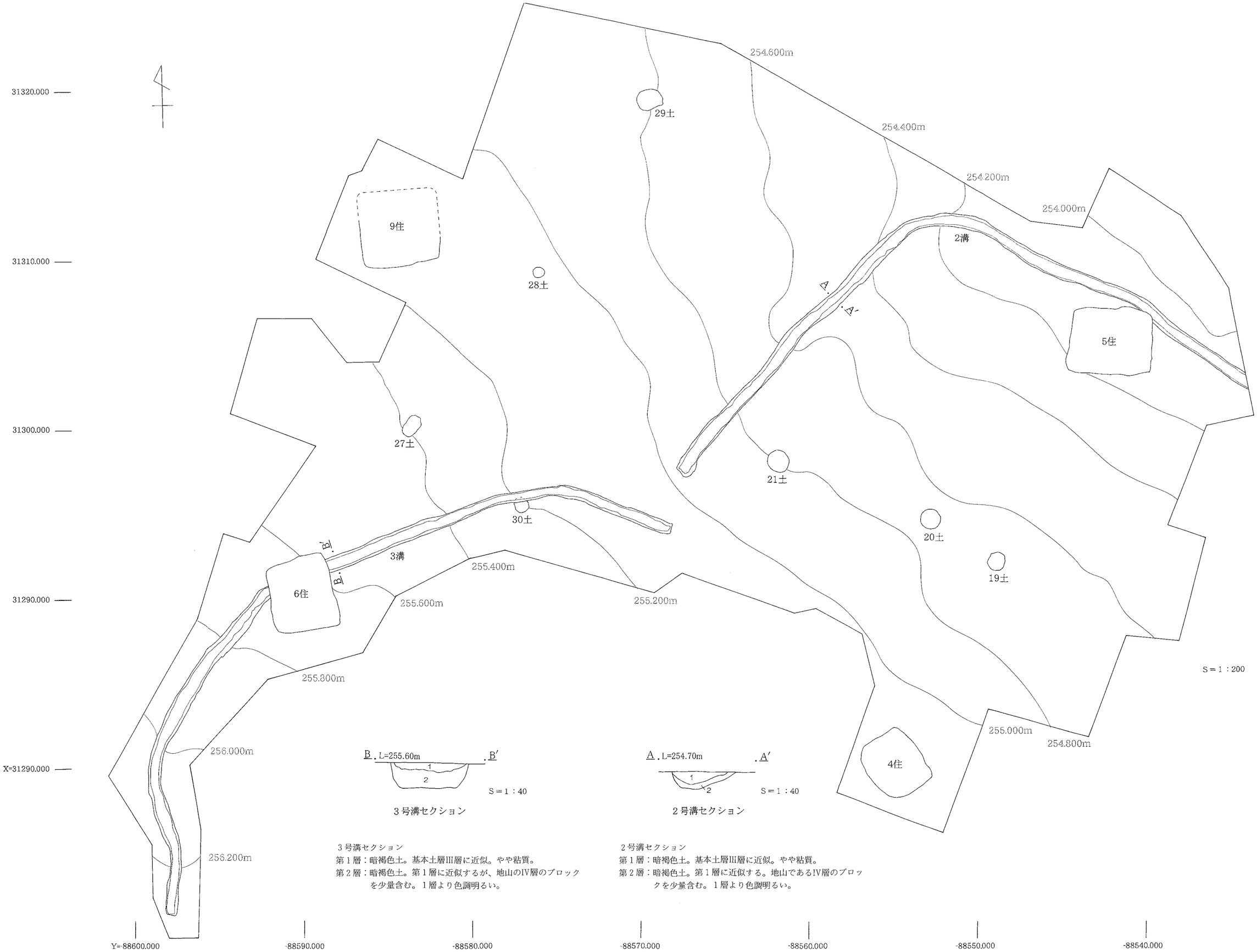


33号土坑セクション
第１層：暗褐色土。φ数mm程度の白色パミスを全体に少量含む。
φ５～10mm程度の黄色パミスをごく少量含む。
第２層：黄褐色土。ローム粒、地山のⅣ層のブロックを全体に多く含む。

第92図　33号土坑平面図



第93図　西区古墳時代住居群全体図



第94図　2号・3号溝平面図

（3） 溝状遺構

2号溝

位置　本溝は東区の北寄りに位置する。南東部分の一部を5号住居（古墳時代）に壊されている。

概要　東区の北部の一部を、基本土層Ⅳ層の上面まで掘削した時に検出された溝である。北の屈曲点から南東・南西方向へ延びる「く」の字状を呈する。断面形はU字状を呈する。覆土はやや粘質の黒褐色土である。少量であるが遺物が検出されている。時期の断定は難しいが、遺物・覆土より、5号住居とはさほどの時期差がないと考えられる。

規模　中央の屈曲点より南東方向へ約21m、南西方向へ約21m、全体で42mを測る。ただし南東方向は調査区外へさらに延びていく様相を呈している。幅は80～90cm程度、深さは20cm程度を測る。

遺物　小破片のため図示できなかった。

3号溝

位置　本溝は東区の北寄りに位置する。中央部分を6号住居（古墳時代）に壊されている。

概要　東区の北部の一部を、基本土層Ⅳ層の上面まで掘削した時に検出された溝である。北東から南西へ、北に緩やかに膨らむ弧状を呈する。断面形はU字状を呈する。覆土はやや粘質の黒褐色土である。少量であるが遺物が検出されている。時期の断定は難しいが、遺物・覆土より、6号住居とはさほどの時期差がないと考えられる。

規模　全長約50m、幅80～90cm程度を測る。深さは北東部分で約30cm、南西に向かうほど浅くなり、最後は確認面との差がなくなる。

遺物　小破片のため図示できなかった。

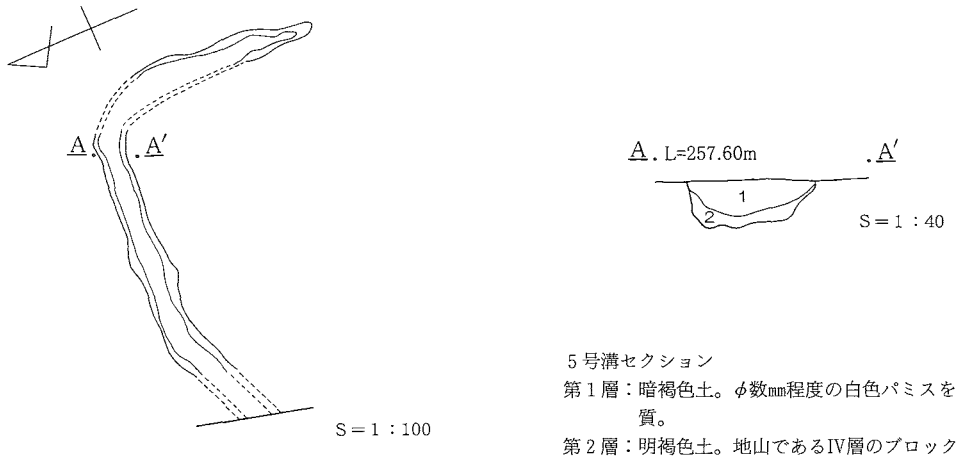
5号溝

位置　本溝は東区の中央部の西に位置している。東側15mに縄文時代前期土坑群がある。

概要　東区の中央部分に試掘トレンチを入れた際、検出された溝である。北東隅の屈曲点より西と南に延びる「く」の字状を呈する。断面形はU字状を呈し、覆土はやや粘質の黒褐色土である。遺物が検出されていないために時期の断定は難しいが、覆土・確認面より古墳時代の所産と考えられる。

規模　中央の屈曲点より西方向へ約8m、南方向へ約6m、全体で14mを測る。ただし西方向は調査区外へさらに延びていく様相を呈している。幅は80cm程度、深さは屈曲点より西で30cm程度を測り、屈曲点から南は次第に浅くなり、最後は確認面との差がなくなる。

遺物　出土遺物なし。



5号溝セクション

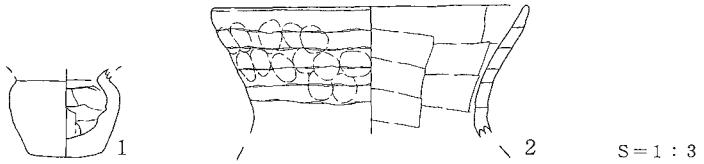
第1層：暗褐色土。φ数mm程度の白色パミスを少量含む。やや粘質。

第2層：明褐色土。地山であるⅣ層のブロックを含む。

第95図　5号溝平面図

（4） 遺構外出土遺物

遺構外からの遺物の出土量は、調査面積の割りに少なく小破片が多い。土器２点を図示した。



第96図　遺構外出土遺物

第26表　遺構外出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 （残度）	法量（cm）	①胎土②焼成③色調	器形及び成・整形技法の特徴等
1	ミニチュア甕	頸部～ 底部 70%	口― 底―3.1 高― 最―4.4	①白色粒・礫混入 ②良好 ③黄橙色	外面：篦撫で 内面：撫で。 東区５号住居周辺より出土。
2	甕	口縁部～ 頸部 20%	口―12.4 底― 高― 最―	①白色粒・黒色粒混入 ②良好 ③赤褐色	外面：篦撫で。頸部に顕著な輪積み痕と指頭痕。 内面：篦撫で。 西区古墳時代住居群周辺より出土。

第５節　奈良・平安時代

（1） 土　　坑

16号土坑

位置　本土坑は東区の南東端付近に位置する。南１m弱のところに４号溝（古墳時代）がある。また、東に17号土坑が隣接する。確認面では17号土坑との重複はないが、もっと高いレベルでプランが確認できたならば、重複する、あるいは１基の土坑となる可能性も考えられる。出土遺物はないが、確認面・覆土より奈良・平安時代の所産と考えられる。

概要　東西方向に長軸を持つ楕円形を呈する。断面形はすり鉢状であり、覆土はやや粘質の黒褐色土である。

規模　長軸160cm、短軸120cmを測る楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは35cmを測る。

遺物　出土遺物なし。

17号土坑

位置　本土坑は東区の南東端付近に位置する。南１m弱のところに４号溝（古墳時代）がある。また、西に16号土坑が隣接する。出土遺物はないが、確認面・覆土より奈良・平安時代の所産と考えられる。

概要　東西方向に長軸を持つ不整楕円形を呈する。断面形はすり鉢状であり、覆土はやや粘質の黒褐色土である。

規模　長軸140cm、短軸110cmを測る。確認面から底面までの深さは約35cmを測る。

遺物　出土遺物なし。

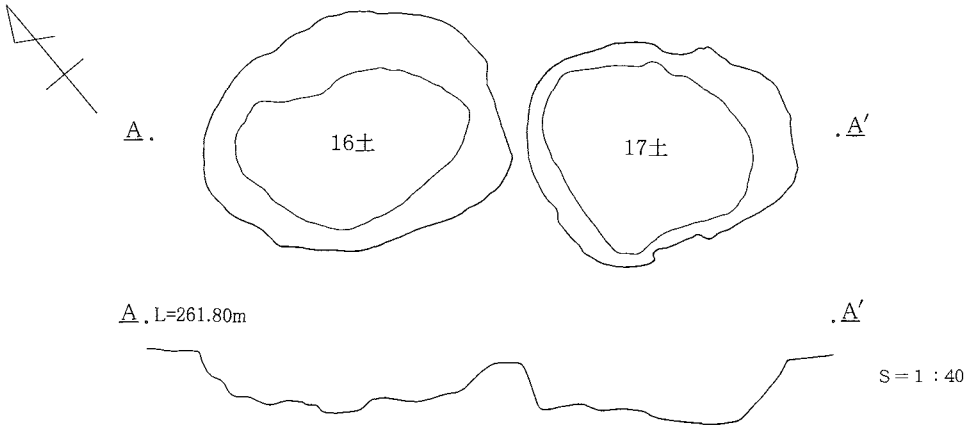
19号土坑

位置　本土坑は東区北端の緩やかに北に下る台地上に位置する。

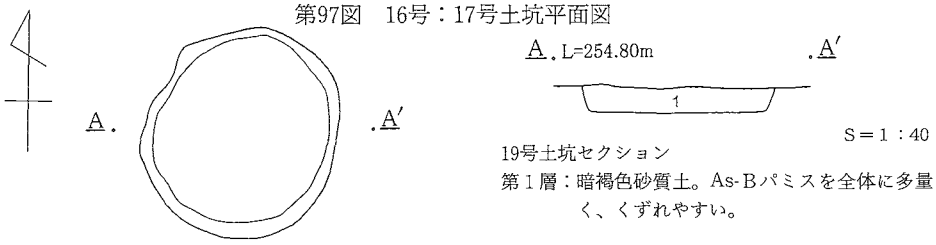
概要　東区北端部分に古墳時代の遺構が集中するため、付近約1800m²の表土を基本土層Ⅳ層上面まで掘削した結果検出された土坑である。覆土はAs―Ｂ軽石（1108年、浅間山給源）のほぼ純層である。ほぼ円形を呈し、壁は垂直の立ち上がり、非常に平坦な底部を持つ。出土遺物がないため時期の判別は困難であるが、覆土から平安時代末の可能性が高い。

規模　径105cmのほぼ円形を呈する。確認面から底面までの深さは15cmを測る。

遺物　出土遺物なし。



第97図　16号：17号土坑平面図



19号土坑セクション
第１層：暗褐色砂質土。As-Bパミスを全体に多量に含む。もろく、くずれやすい。

第98図　19号土坑平面図

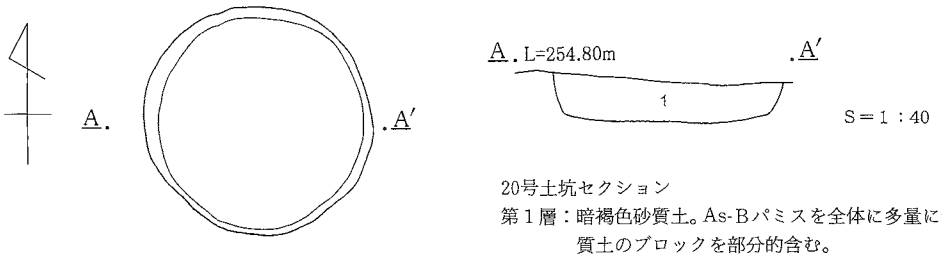
20号土坑

位置　本土坑は東区北端の緩やかに北に下る台地上に位置する。

概要　東区北端部分に古墳時代の遺構が集中するため、付近約1800m²の表土を基本土層Ⅳ層上面まで掘削した結果検出された土坑である。覆土はAs－B軽石（1108年、浅間山給源）のほぼ純層である。円形を呈し、壁は垂直に立ち上がり、非常に平坦な底部を持つ。

規模　径120cmのほぼ円形を呈する。確認面から底面までの深さは20cmを測る。

遺物　出土遺物なし。



20号土坑セクション
第１層：暗褐色砂質土。As-Bパミスを全体に多量に含む。黒色粘質土のブロックを部分的含む。

第99図　20号土坑平面図

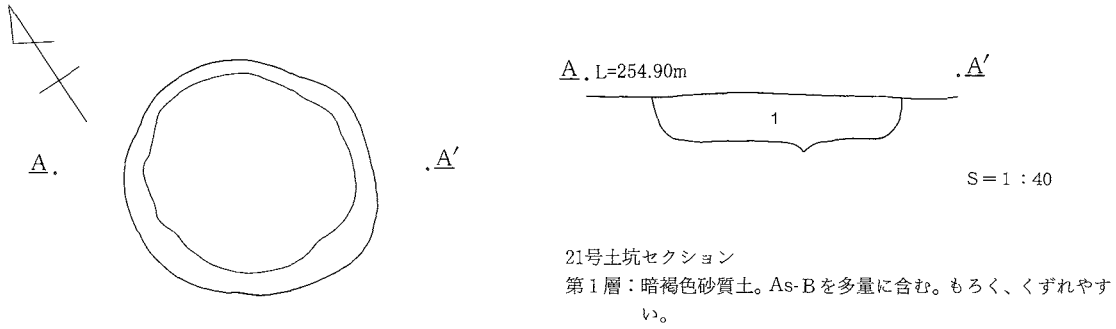
21号土坑

位置　本土坑は東区北端の緩やかに北に下る台地上に位置する。同時期の所産と考えられる19号土坑・20号土坑が南西方向にあり、本土坑を含めた３基の土坑はほぼ直線上に並ぶ。

概要　東区北端部分に古墳時代の遺構が集中するため、付近約1800m²の表土を基本土層Ⅳ層上面まで掘削した結果検出された土坑である。覆土はAs－B軽石（1108年、浅間山給源）のほぼ純層である。一部掘り過ぎてはいるが、平面形は円形を呈すると考えられる。壁は垂直に立ち上がり平坦な底部を持つ。19号土坑・20号土坑・本土坑は、規模・形態・覆土が酷似しており、同時期の所産と考えられる。

規模　径125cmのほぼ円形を呈する。確認面から底面までの深さは25cmを測る。

遺物　出土遺物なし。



第100図　21号土坑平面図

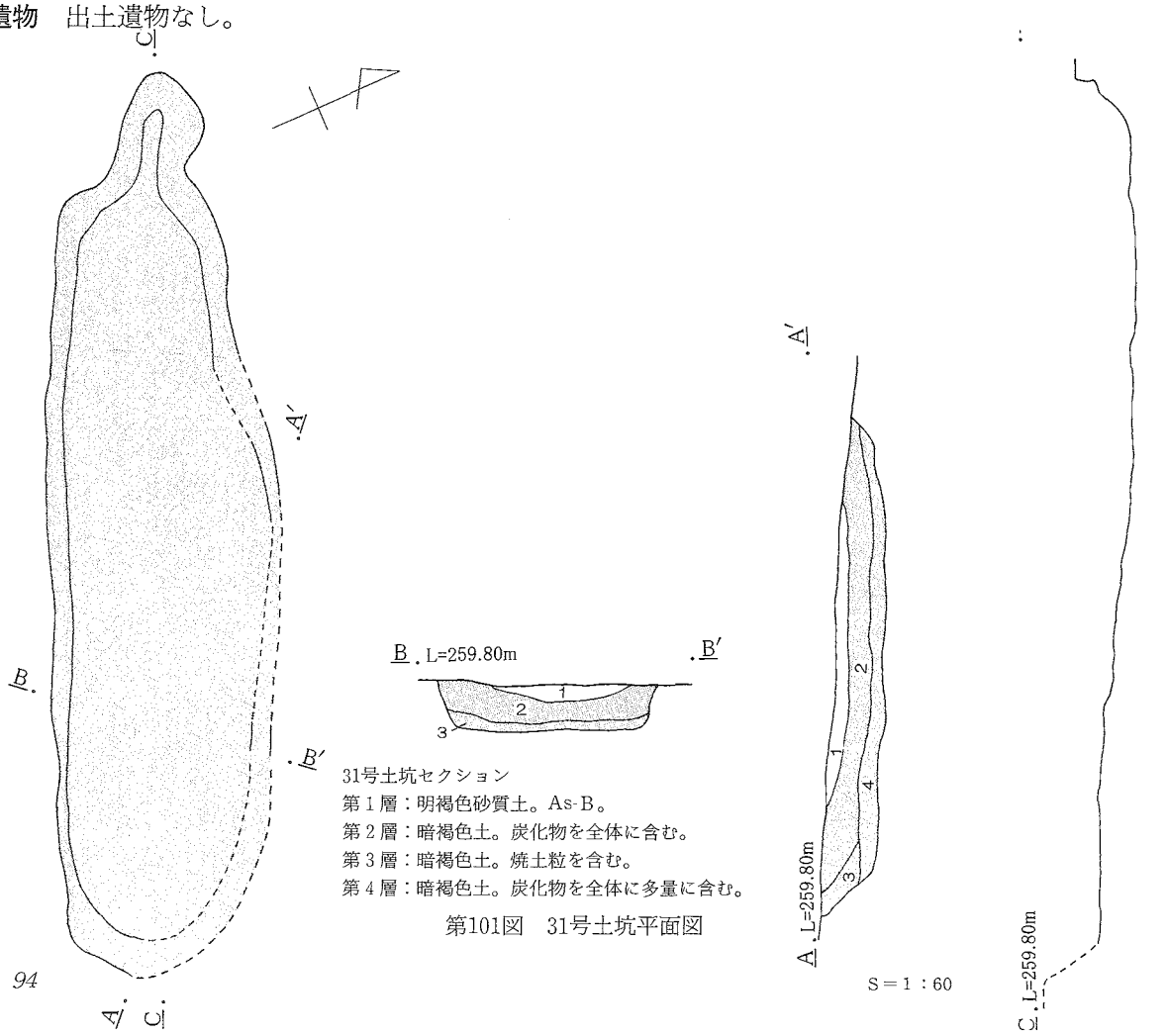
31号土坑

位置　本土坑は西区住居群の中央北寄り、猫沢川の支流に向かい緩やかに下る北西斜面上に位置する。

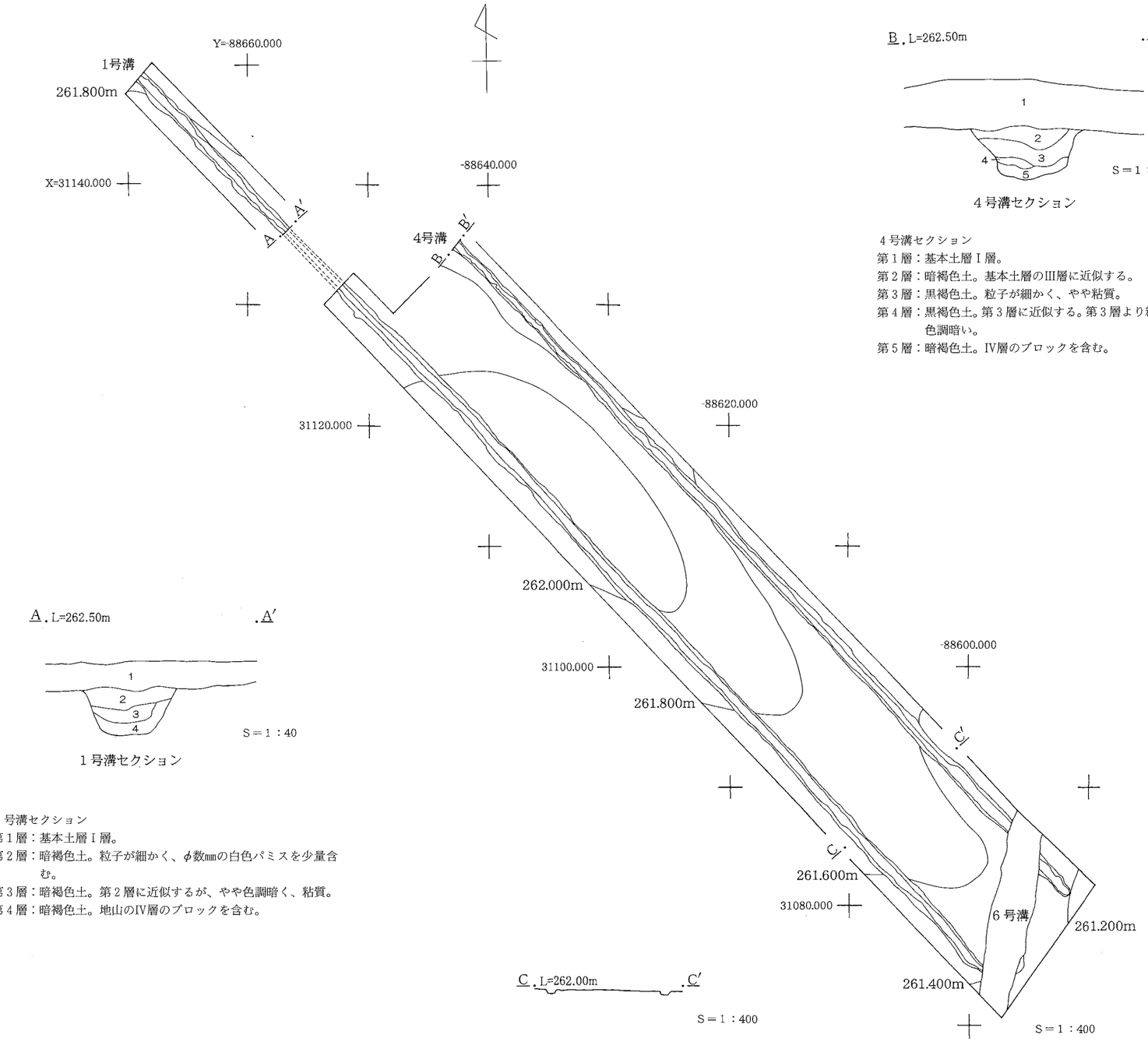
概要　本土坑は、西区住居群の調査のため、基本土層Ⅳ層上面まで表土を掘削した際プランが確認された。西区住居群の住居と同様、覆土はやや粘質の黒褐色土であり、最上部にAs－B軽石（1108年、浅間山給源）がレンズ状に堆積する。地山である基本土層Ⅳ層と覆土の判別が困難であったため、南東部分の一部を掘り過ぎてしまっている。残したベルトの土層断面図と北東部分から推定される土坑の形態は、北西方向に長軸を持つ楕円形であり、北西部分の先端に突出部を持つ。断面形は浅いすり鉢状を呈すると推定され、非常に多くの炭化物が検出された。遺物が出土しておらず、時期の判別は困難であるが、覆土等より奈良・平安時代の所産であると考える。

規模　北西部分先端の突出部を含めて長軸730cm、短軸180cmを測る。確認面から底面までの深さは45cmを測る。

遺物　出土遺物なし。

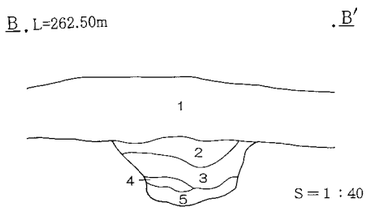


第101図　31号土坑平面図



1号溝セクション

1号溝セクション
第1層：基本土層Ⅰ層。
第2層：暗褐色土。粒子が細かく、φ数mmの白色パミスを少量含む。
第3層：暗褐色土。第2層に近似するが、やや色調暗く、粘質。
第4層：暗褐色土。地山のⅣ層のブロックを含む。



4号溝セクション

4号溝セクション
第1層：基本土層Ⅰ層。
第2層：暗褐色土。基本土層のⅢ層に近似する。
第3層：黒褐色土。粒子が細かく、やや粘質。
第4層：黒褐色土。第3層に近似する。第3層より粒子が細かく、色調暗い。
第5層：暗褐色土。Ⅳ層のブロックを含む。

第102図　1号・4号溝平面図

B′

S＝1：40

丘似する。
や粘質。
第３層より粒子が細かく、

含む。

１号溝
第１層
第２層
第３層
第４層
61.200m

00

（2） 溝状遺構

1号溝・4号溝（道路遺構？）

位置 本遺構は東区の南東端に位置する。松井田町・安中市・妙義町の3市町が接している東区の南東端より、2条の溝が北西方向へ並行する。両溝とも松井田町・安中市の境界に沿うように確認された6号溝（中世）に壊されている。

概要 本遺構は東区南部に試掘トレンチを入れていた際、基本土層Ⅳ層上面において確認された。当初は2条の別の溝と認識し調査を行っていた。両溝の全容がほぼ明らかになる頃、本遺跡を視察に来られた境町教育委員会の坂爪氏、安中市教育委員会の大工原氏より、本遺構は両側に側溝を持つ道路遺構ではないかというご指摘をいただいた。調査の結果、2条の溝は約75mにわたり、心々距離9.5mを保ちながら並行することが明らかになった。等高線図から考えると、両溝とも中間付近に台地の最高地点（碓氷川・高田川の分水嶺）が位置している。周囲の地形と考え合わせても、水路としての機能を有する溝である可能性は極めて低い。遺構の規模・形状が、県内の平野部で確認されている東山道に酷似していることから、律令体制期の道路（駅路ではなく伝路か。）遺構の可能性を考え、ここでは1つの遺構という視点から報告する。両溝とも北西方向へは調査区外へ延びていく様相を呈している。南西方向へは、4号溝が安中市において約4m確認されただけで、妙義町においては両溝とも確認されていない。両溝間で遺物が確認されているが、この遺構に伴うものであるかは定かでない。覆土より奈良・平安時代の所産と考えられる。

規模 前述のように2条の並行する溝である。南側の1号溝が約100m、北側の4号溝が約75m（安中市で確認された4mを含む。）確認されている。両溝の心々距離は9.5mを測る。両溝とも断面形は浅いU字状を呈し、幅100cm前後、深さ35cm前後を測る。

遺物 溝内からの出土遺物はなし。

第6節 中　　世

（1） 土　坑

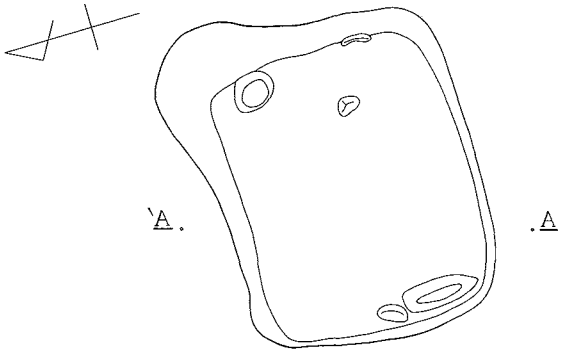
25号土坑

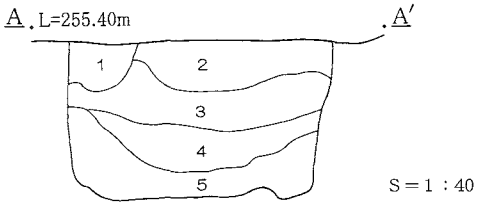
位置 本土坑は東区北部の西寄りに位置する。

概要 本土坑は、東区の試掘トレンチにより西側の一部が確認されたため、全体を調査したものである。北西に長軸を持つ隅丸の長方形を呈する。覆土はAs－B軽石（1108年、浅間山給源）を全体に含む暗褐色土である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、平坦な底部を持つ。遺物が出土していないため時期の断定はできないが、覆土より中世の所産と考えられる。

規模 長軸170cm、短軸140cmを測る隅丸の長方形を呈し、長軸方向を北西に持つ。確認面から底面までの深さは80cmを測る。

遺物 出土遺物なし。





25号土坑セクション
第1層：暗褐色土。As-Bを全体に含む。しまりなく、やや粘質。
第2層：暗褐色土。As-Bを全体に少量含む。
第3層：暗褐色土。As-B、ローム粒、黄色パミスを全体に含む。2層より色調明るい。
第4層：暗褐色土。地山のⅣ層のブロックを含む。
第5層：暗褐色土。地山のⅣ層のブロックを少量含む。

第103図　25号土坑平面図

（2） 溝状遺構

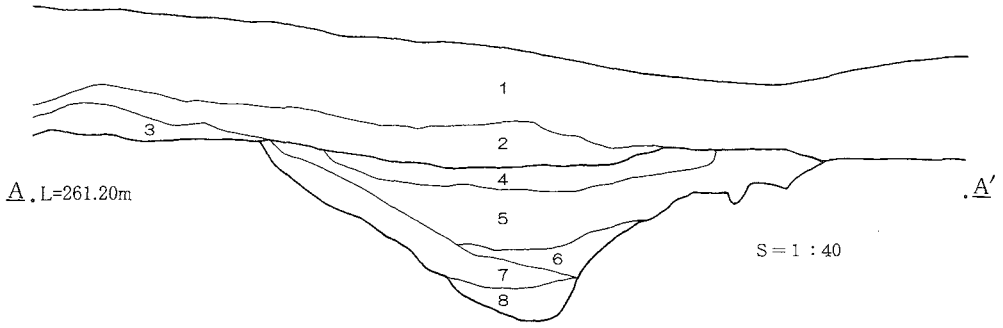
6号溝

位置　本溝は東区の東端、安中市との境界線に沿うように検出された。1号溝・4号溝を壊して構築されている。調査期間の関係上、東区南東部分の約15mだけを調査したが、同時期に調査をしていた妙義町の調査結果より、南へ延びていくことが分かっている。また、北へもほぼ安中市との境界線に沿って延びていくものと推定される。

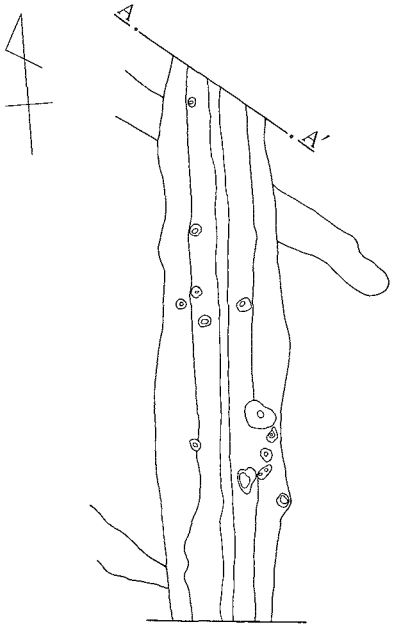
概要　1号溝・4号溝を南東方向へ安中市との境界線まで確認していった結果、両溝を壊す形で検出されたのが本溝である。ほぼ南北方向を指向し、断面形は緩やかなV字形を呈する。覆土はAs—B軽石（1108年、浅間山給源）を全体に含む暗褐色土である。壁の中段付近に径30cm前後のピットが10数基確認されている。ほぼ同レベルに並ぶため、溝に関わる何かしらの施設の跡である可能性が考えられる。遺物が出土していないため時期の断定は難しいが、覆土・遺構の切り合い関係から中世の所産と考えられる。

規模　幅は270cm～350cmを測る。確認面からの深さは約80cmを測る。

遺物　出土遺物なし。



6号溝セクション
第1層：褐色土。As-Aを多量に含む。
第2層：暗褐色土。基本土層II層に近似。
第3層：暗褐色土。2層に近似。色調やや明るい。
第4層：暗褐色土。第3層に近似。ややしまっている。
第5層：暗褐色土。As-Bを全体に少量含む。
第6層：暗褐色土。As-Bをごく少量含む。
第7層：暗褐色土：基本土層III層に近似。やや粘質。
第8層：褐色土。ロームブロックをまだらに含む。



第104図　6号溝平面図

第5章　ま　と　め

はじめに

今回の発掘調査により、人見大谷津遺跡は縄文時代前期から中世までの複合遺跡であることが明らかになった。残存状況が良好な縄文時代前期の住居跡、質・量ともに町内随一と言っても過言ではない古墳時代前期住居群、古代律令体制下において構築されたと考えられる道路遺構等の発見は、松井田町の歴史を解明していく上で非常に貴重な成果である。ここでは各時代ごとに、本遺跡を代表する特徴的な遺構について若干の考察を加えまとめとしたい。

縄文時代

今回の調査において、住居跡５軒・土坑21基が検出された。住居跡は４軒が前期関山式期、１軒が中期加曽利Ｅ式期である。特に前期の住居跡（２号・４号・７号・８号）から良好な資料が得られた。これらの住居跡からの出土土器は、いずれも関山II式を主体としており、ほぼ同時期の所産と推定される。４号・７号・８号住居跡は、10数ｍの間隔をおいてほぼ直線上に位置している。２号住居跡は、８号住居跡から約30ｍ離れた位置で検出されているが、同一集落と考えて大過ないであろう。また、２号・７号・８号住居跡においては、関山II式土器と神ノ木式土器が共伴している。神ノ木式土器は、分布域の中心を長野県にもつ、櫛歯状工具や束の縄文等を施文具とする土器である。今回の調査により、神ノ木式土器と関山II式土器が併行することが追認できた意義は大きい。さらに、約16ｍの距離をおいて検出された７号住居跡・８号住居跡から、同一個体あるいは同一原体により施文された神ノ木式土器が出土していることを指摘しておく（７号住居跡-33と８号住居跡-38）。同一丘陵上で、西北西約5.0kmに位置する八城二本杉東遺跡では、当該期の住居群25軒が検出されている。大部分の住居跡は、平面形態が隅丸長方形で壁柱穴列を有するなど類似点が多く、本遺跡も含めて当該期の典型的な形態・構造の住居跡と言えよう。また、西区南東部を中心に後期初頭～前葉の土器群が出土している。今回の調査では遺構の検出には至らなかったが、今後の周辺の調査に期待したい。

古墳時代

西区において古墳時代前期の住居跡11軒が検出された。当該期の集落としては町内のこれまでの調査において最大規模である。また本文中において述べたように、この住居群はさらに南西方向に広がりを見せると予想される。これらの住居跡は、いずれも深い竪穴部分を有しており、残存度は良好である。ほとんどの住居の覆土は自然堆積を示し、上部にAs―Ｂ軽石（1108年、浅間山給源）がレンズ状に堆積している。深い竪穴部分が完全に埋没するまで、1000年前後の年月が必要であったことがうかがえる。

西区で検出された各住居の形態上の類似性をまとめると次のようになる。

①平面形態は隅丸の正方形あるいは長方形を呈し、長軸方向は南北又は東西である。
②壁周溝を有しないものが多い。
③炉跡は北寄り中央又は西寄り中央で、浅い掘り込みのものが多い。
④南側又は東側の壁際に１基、又は２基のピットを有するものが多い。
⑤柱穴の在り方については類似性が認められないが、住居南側に２つのピットを有し、北側の壁際に斜めに穿たれた２基、又は１基のピットを有するものがある（11号・17号・19号住居跡等）。

①～③については、当該期の周辺遺跡でも認められる特徴であると言える。④については昇降施設との関連が考えられよう。⑤については北西約1.0kmの位置に所在する人見東原遺跡の調査において類例が見られる。人見東原遺跡では、古墳時代前期の住居跡３軒が調査されたが、うち２軒の住居跡では、住居北寄りに２基のピットが、南側壁際に数基のピットが確認されている。南北方向が逆ではあるが、17号・19号住居跡と構造上の類似性が認められる。当該期の住居跡においては、圧倒的に４本柱穴を有するものが多いと理解しているが、本地域に特徴的に見られる構造である可能性も捨てきれず、今後類例を検討していきたい。

出土遺物には、樽式土器の系譜を引く土器群と、吉ヶ谷・赤井戸式土器の系譜を引く土器群がある。中には15号・18号住居跡のように、両系譜の土器が共伴する場合もある。また、18号住居跡－７のように両方の特徴を併せ持つ土器も出土している。

同一丘陵上における当該期の住居跡は、前述の人見東原遺跡の他に、西北西約4.5kmに位置する行田二本杉遺跡においても３軒確認されている。時期的には行田二本杉遺跡が若干先行すると考えられるが、いずれも一時的に居住域に選地された非継続的小規模集落といえる。本住居群は、行田二本杉遺跡の住居群に後続し、規模的にはこれらの遺跡より大きいものの、同様の性格を有する住居群と言えよう。

奈良・平安時代

１号溝・４号溝は、形状・規模において県内平野部で確認されている東山道に酷似している。年代については、遺物の出土が全体に少ない上、遺構に確実に伴うと考えられる遺物が皆無のため断定はできないが、覆土の状況や他の遺構との切り合い関係から、奈良・平安時代の所産であることは確実である。また両遺構とも、今回調査された部分の中心付近に遺構の最高標高点を持つ。つまり、西横野丘陵の分水嶺を中心に、碓氷川・高田川に向かい緩やかに下るように溝が構築されている。周囲の地形と合わせて考えてみても、水を流すための溝でないことは明らかである。覆土の堆積状況は自然堆積を示しているので、何かしらの区画を目的とした溝であり、使用されなくなり放棄された可能性が高い。

延喜式には上野国の東山道の５駅が記載されている。即ち、坂本・野後・群馬・佐位・新田の５駅であり、東山道はほぼ県内を東西に横断すると考えられる。この中の坂本の駅家は、松井田町西部に存在していたと推定されており、昭和63年の高速道路建設に伴う発掘調査により発見された原遺跡の大型掘立柱建物跡を坂本の駅家跡とする考えもある。近年、県内外において古代律令体制期道路遺構の発掘調査例が急増しており、当時の駅路の構造・規模、維持管理等について次第に明らかになりつつある。しかし、それらは平野部においての成果であり、山間部の道路形態・規模については未だに不明な部分が多いのが現状である。山間部が多い本町においては、前述の坂本の駅家と、899年に設置された碓氷坂の関についてはその位置が推定されている。また、やはり高速道路建設に伴う発掘調査により、五料稲荷谷戸遺跡で溝状の遺構が検出されており、この溝を東山道とする考えもある。いずれにしても、本町における律令体制下の道路については、推定の域を出ず考古学的実証がなされていないのが実情である。

１号溝・４号溝は、約9.5mの心々距離をおいて並行して検出されている。確認された長さは１号溝が約100m、４号溝が約75mであり、両溝とも走行方位はN－44°－Wである。北西方向へは調査区外へ延びていく様相を呈している。南東方向へは、安中市において４号溝が４m程確認されているだけで、１号溝については、松井田町・安中市・妙義町の境界付近で確認できなくなってしまう。両溝とも、確認面であるⅣ層上面が、南東方向に向かうにつれて下がっていくため、相対的に溝が浅くなり、最終的に確認面との標高差が無くなるという様相を呈している。よって、本来そこで溝が終わるのではなく、後世の耕作等によって破壊されている可能性も捨てきれない。ただ、同時に調査を行っていた妙義町教育委員会が、妙義町調査区内において溝の延長線上を調査したが、溝は検出されていない。

一方、北西方向への延長線上で、道路の可能性が指摘されている遺構がある。本遺跡から北西方向約2.0km、古墳～平安時代の大集落である松井田工業団地遺跡の西に所在する人見大王寺遺跡である。人見大王寺遺跡は、平成９年度より県道磯部停車場妙義山線のバイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査が行われた。この調査の中で、古代に帰属すると推定される溝が１条検出されている。調査区内で検出された溝は１条であるが、溝の北側の調査区外に、同時期同規模の溝がもう１条存在することが土層断面図より読み取れる。人見大王寺遺跡のこの遺構は、１号溝・４号溝とは走行方位・溝間心々距離が若干異なるが、両遺跡の間には標高差25～30mを測る急峻な斜面が存在するので、この斜面を境に、走行方位・溝間心々距離が変わっている可能性は考えられる。

人見大谷津遺跡の１号溝・４号溝と、人見大王寺遺跡の遺構が一連の道路遺構であると考えた場合、

北西方向へさらに延長していくと安中市と松井田町の境界付近で碓氷川を渡河することになる。松井田町から安中市にかけての碓氷川左岸側は、20m前後の垂直の断崖となっている場所が多い。険しい地形が多い左岸側において、両市町の境界付近は比較的緩やかに碓氷川に下ることができる。近世の事例ではあるが、妙義神社へ参拝するための妙義道がこの付近で碓氷川を渡っていることからも、碓氷川の渡河地点として、この付近が適していることが理解できよう。。

一方、本遺構を南東方向へ延長していくと鏑川水系の谷に向かう。鏑川の支流である高田川へ下るには急峻な斜面を下らなければならない。そのため直線状に下らず路線の屈曲点がある可能性が高いが、直線で下ると仮定すれば、妙義町大字新光寺を通過し、高田川沿いに一ノ宮方面へ向かう。一ノ宮付近から東方は谷筋が開け、鏑川沿いに東進すれば多胡郡・緑埜郡方面に至る。当該地域は、県内でも古墳や奈良・平安時代の遺跡が集中している場所である。このような状況を総合的に考えた時、本遺構は駅路である東山道から分岐し、多胡郡・緑埜郡方面へ向かう伝路と考えるのが合理的ではないだろうか。

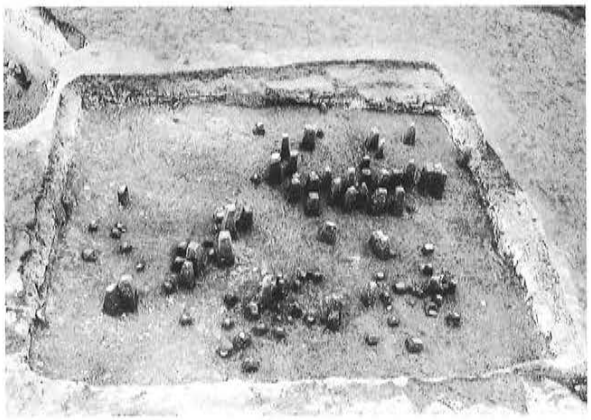
以上、人見大谷津遺跡で検出された道路遺構に関連して、仮説の上に推論を展開してきた。考古学的確証が乏しい推論ではあるが、１つの可能性として指摘しておきたい。今後、町内外で類例の調査が実施され、古代律令体制期の道路の姿が明らかになっていくことを望み、まとめとしたい。

参考文献

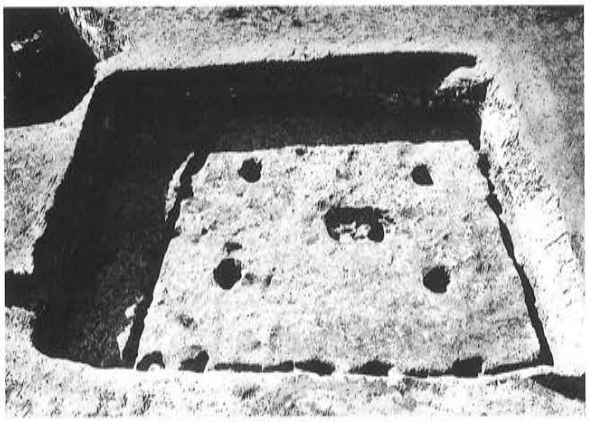
松井田町教育委員会・群馬県企業局　1990年　『松井田工業団地遺跡』
松井田町遺跡調査会　1997年　『行田二本杉遺跡』
松井田町遺跡調査会　1997年　『八城二本杉東遺跡・行田大道北遺跡』
松井田町遺跡調査会　1997年　『横川大林遺跡・横川萩の反遺跡・原遺跡・西野牧小山平遺跡』
松井田町遺跡調査会　1997年　『五料平遺跡・五料野ヶ久保遺跡・五料稲荷谷戸遺跡』
松井田町埋蔵文化財調査会　1998年　『人見東原遺跡』
松井田町教育委員会　2001年　『人見中の條・人見中の條２遺跡、人見大王寺・人見正寺田遺跡』
雄山閣　1997年　『日本土器事典』
古代交通研究会　2001年　『古代交通研究』
（武部健一「高速道路から見る古代駅路の路線位置の検討」）

写 真 図 版

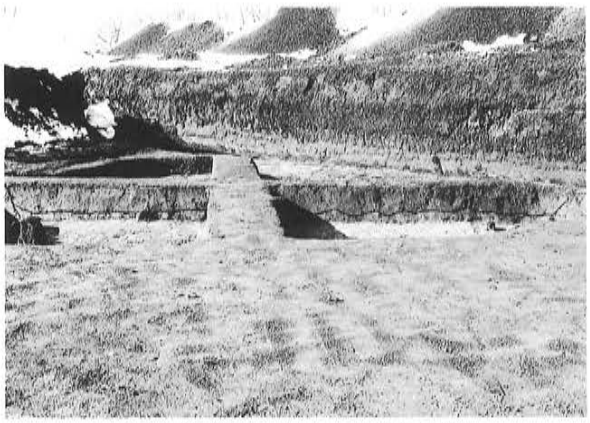
２号住居跡セクション（東より）



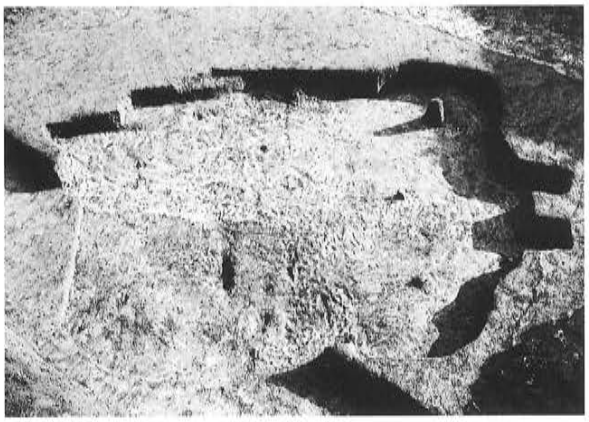
２号住居跡遺物出土状況（東より）



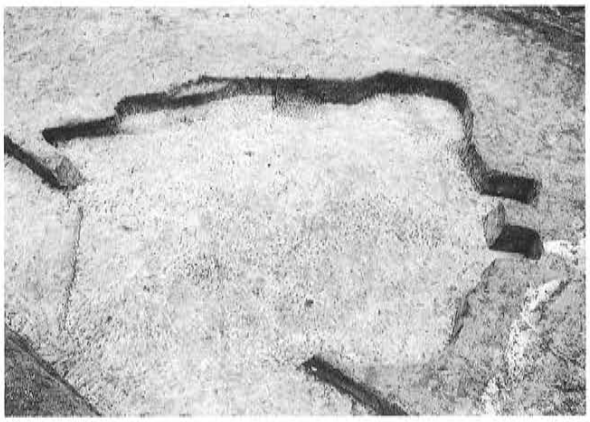
２号住居跡完掘状況（東より）



４号住居跡セクション（東より）



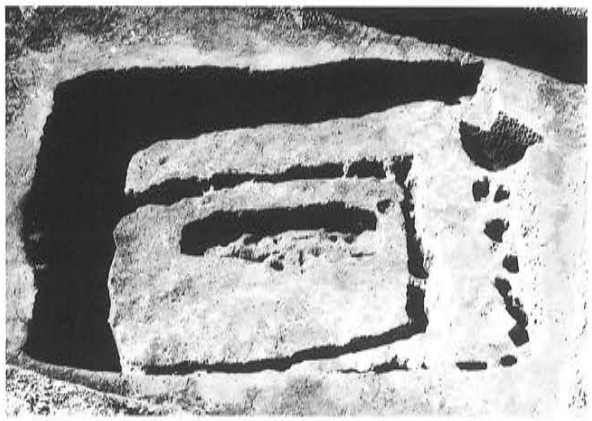
４号住居跡遺物出土状況（西より）



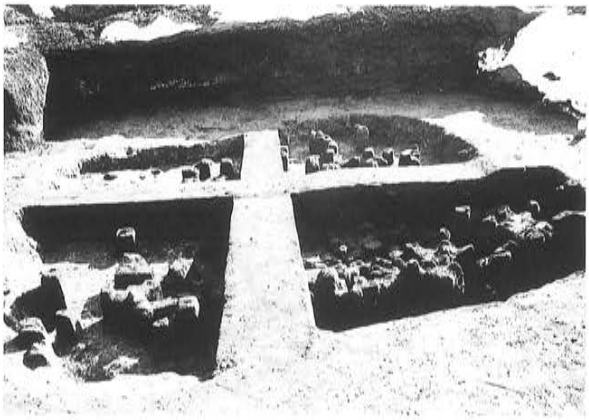
４号住居跡完掘状況（西より）

７号住居跡セクション（南より）

７号住居跡遺物出土状況（東より）

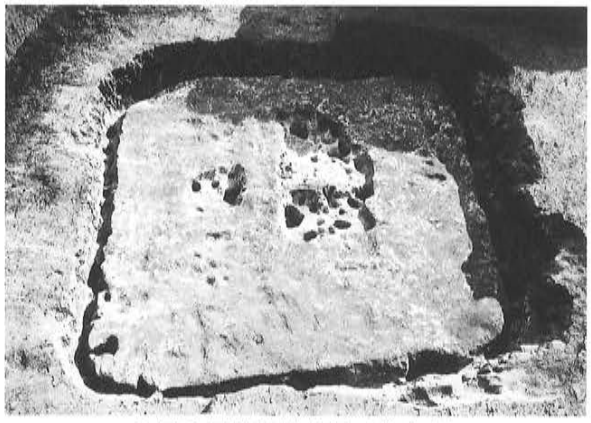


7号住居跡完掘状況（東より）



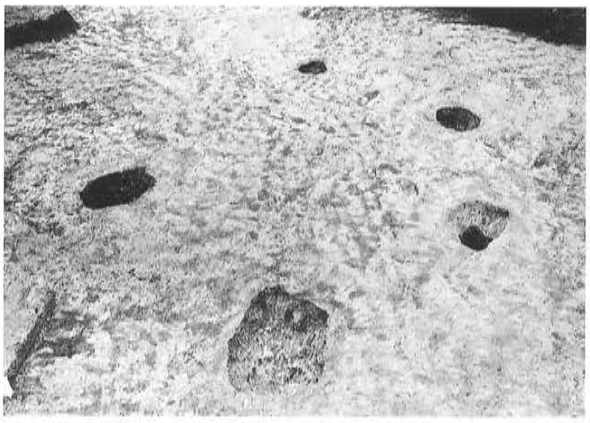
8号住居跡セクション（西より）

8号住居跡遺物出土状況（南より）

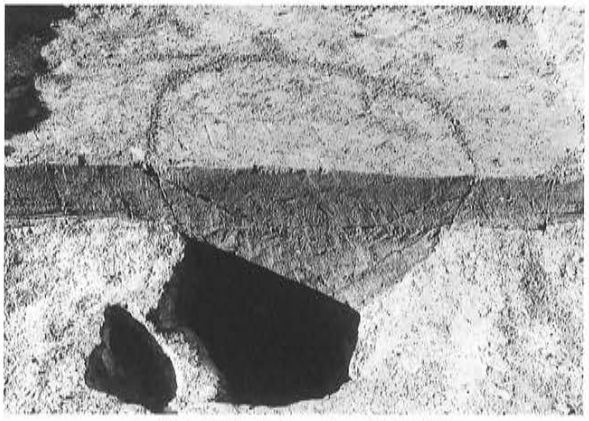


8号住居跡完掘状況（北より）

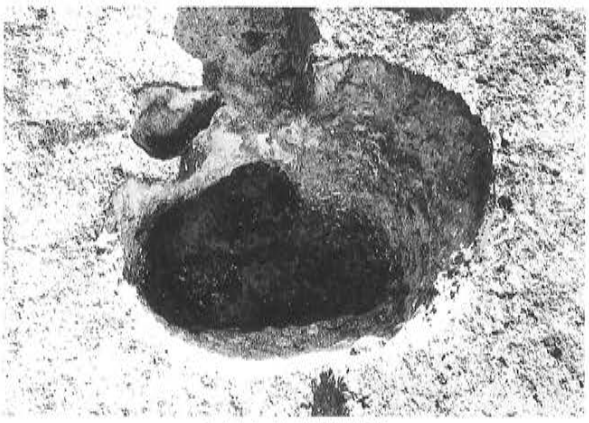
10号住居跡遺物出土状況（南より）



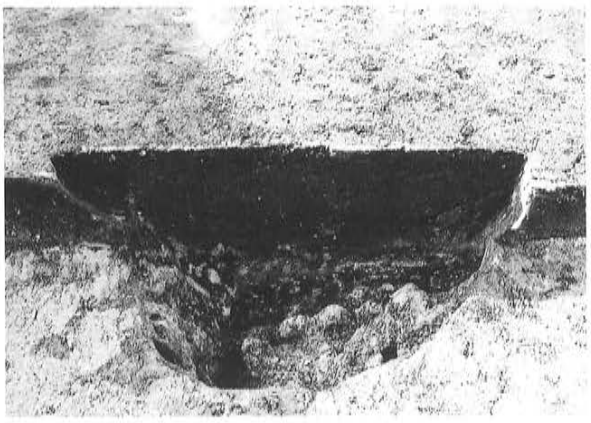
10号住居跡完掘状況（北より）



1号土坑セクション（東より）

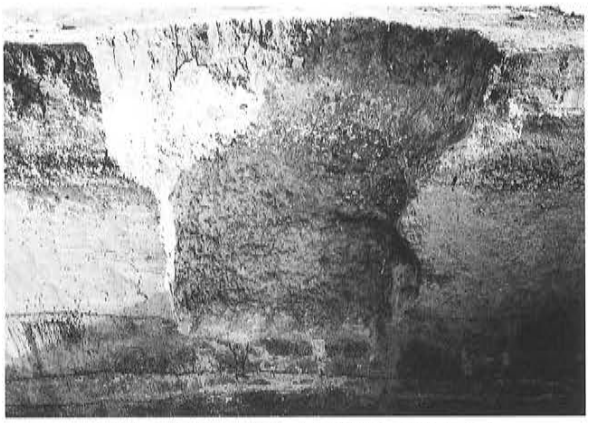


1号土坑完掘状況

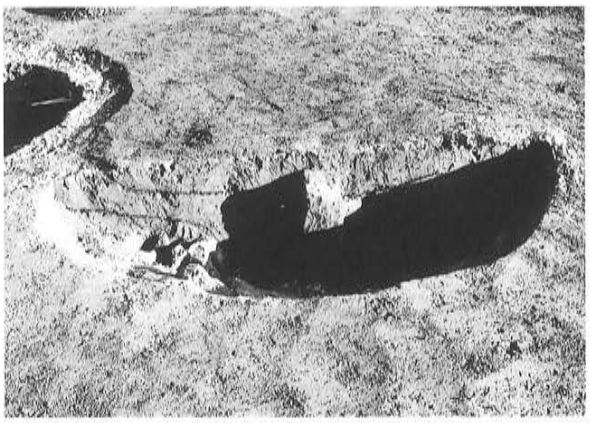


２号土坑セクション（東より）

２号土坑完掘状況

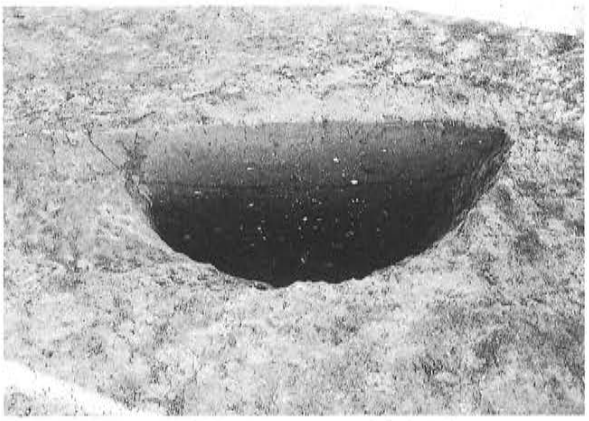


３号土坑断ち割り土層断面（南より）

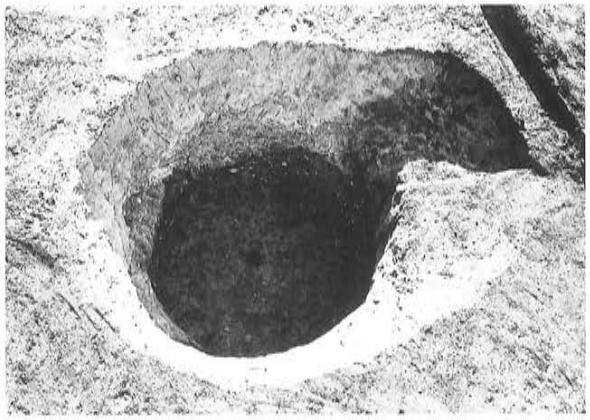


４号土坑セクション（西より）

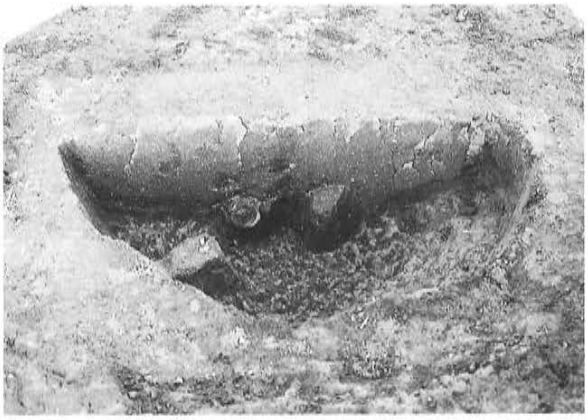
４号土坑完掘状況



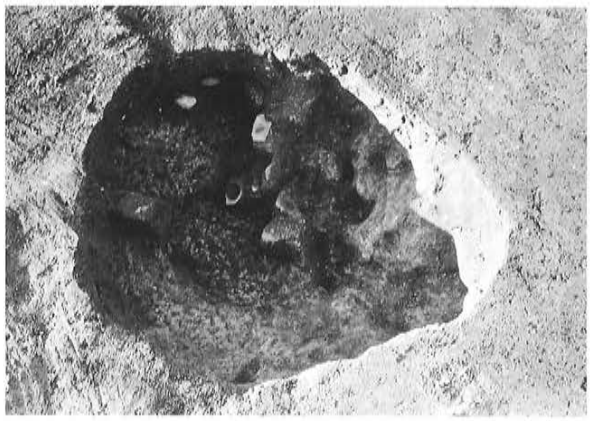
５号土坑セクション（南より）



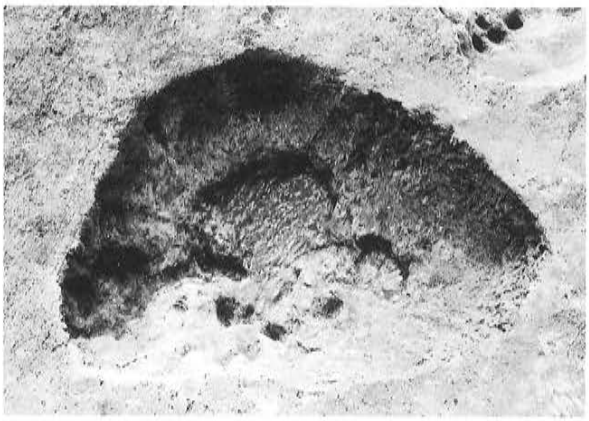
５号土坑完掘状況



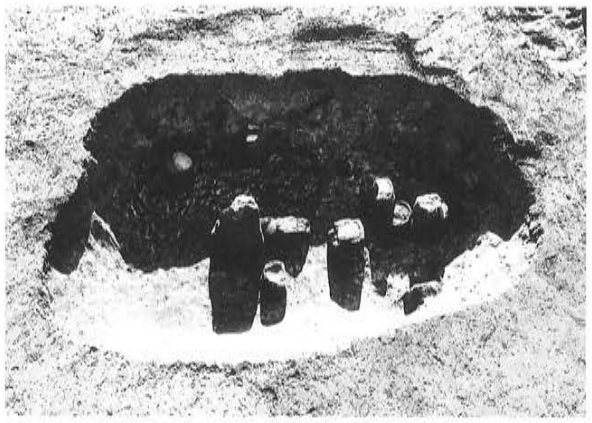
６号土坑セクション（南より）



６号土坑遺物出土状況



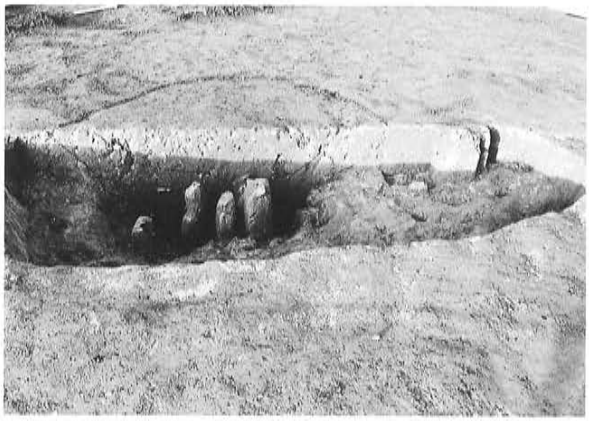
６号土坑完掘状況



７号土坑遺物出土状況(1)

７号土坑遺物出土状況(2)

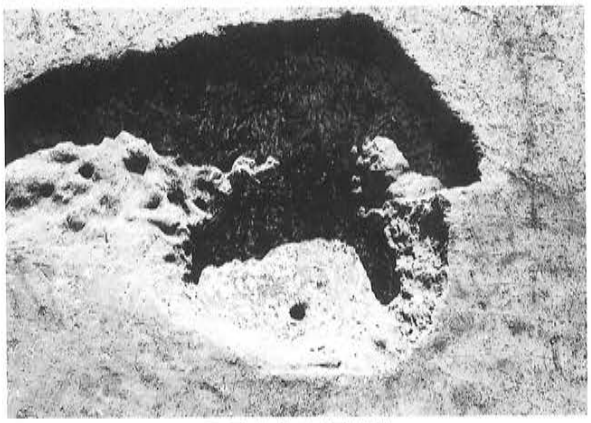
７号土坑完掘状況



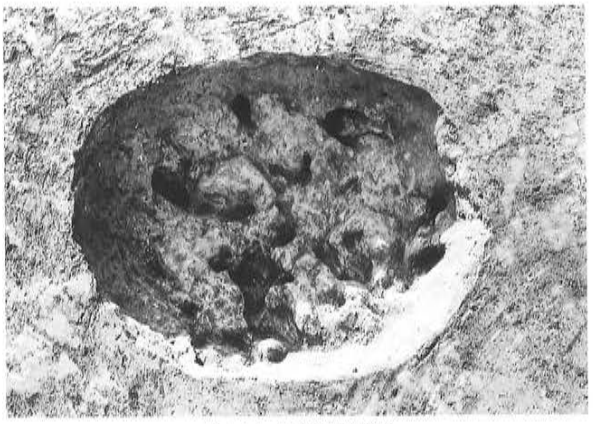
８号土坑セクション（南より）

８号土坑遺物出土状況(1)

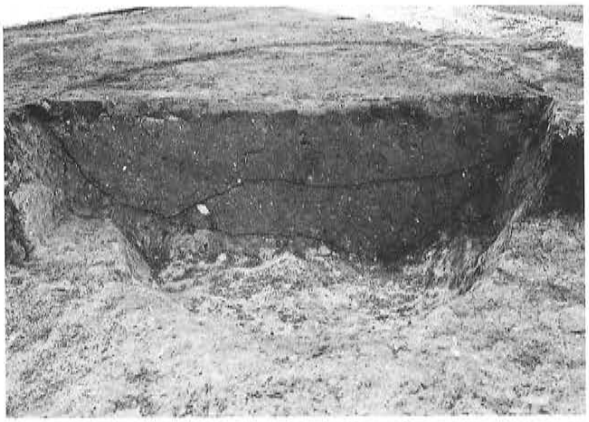
８号土坑遺物出土状況(2)



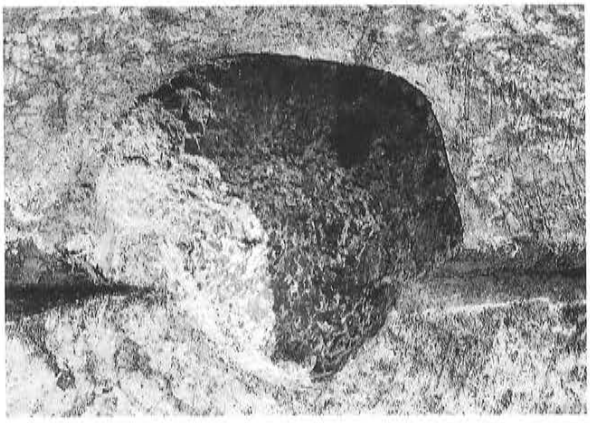
8号土坑完掘状況



9号土坑完掘状況

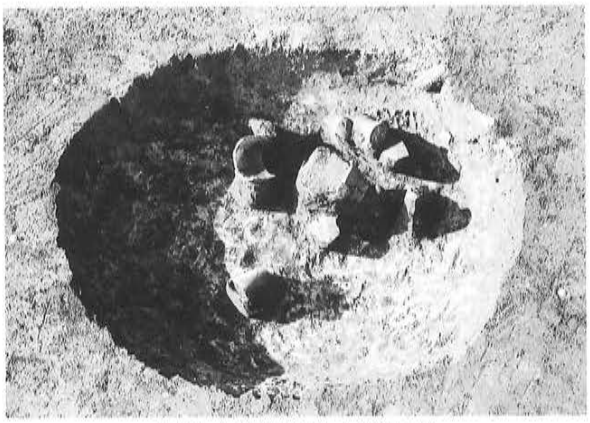


10号土坑セクション（西より）



10号土坑完掘状況

11号土坑セクション（西より）

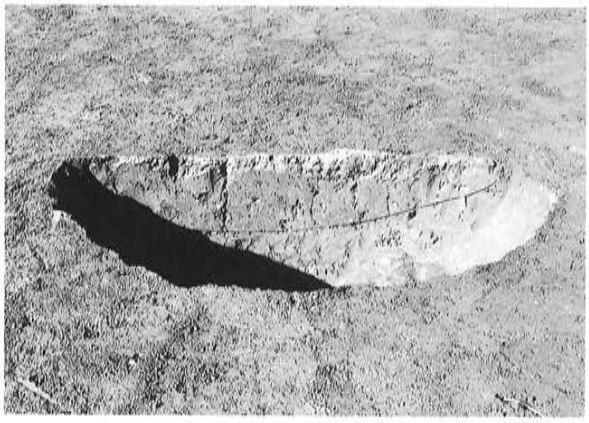


11号土坑遺物出土状況(1)

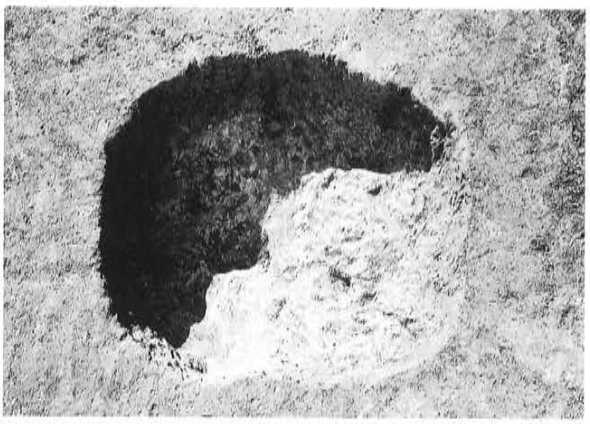
11号土坑遺物出土状況(2)

11号土坑完掘状況

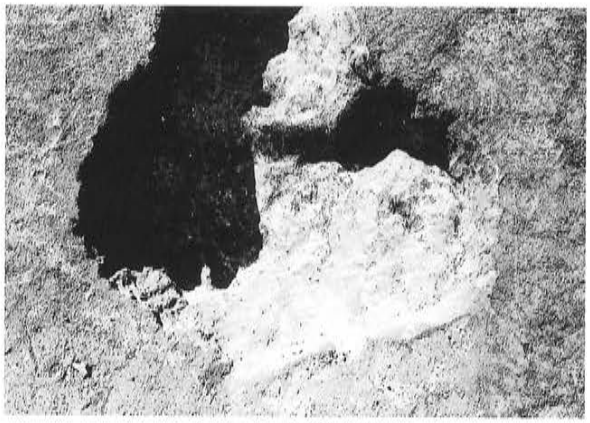
PL. 6



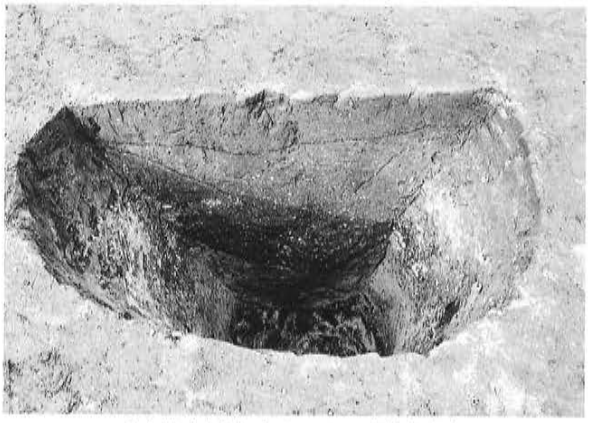
12号土坑セクション（東より）



12号土坑完掘状況

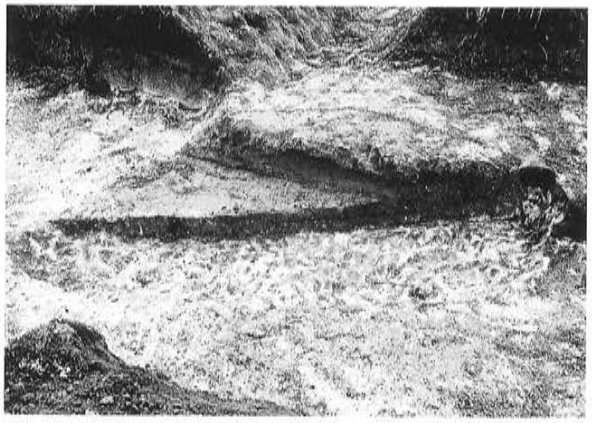


13号土坑完掘状況

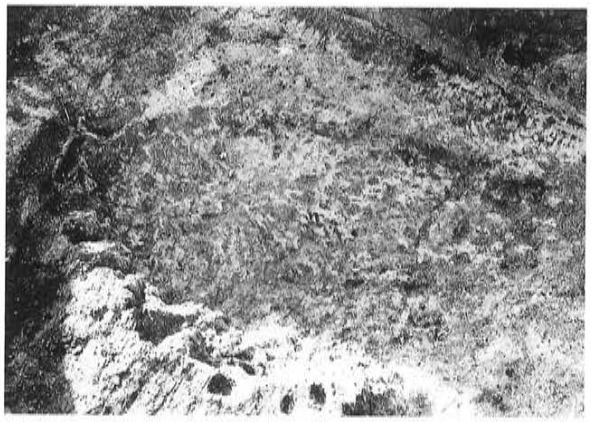


14号土坑セクション（東より）

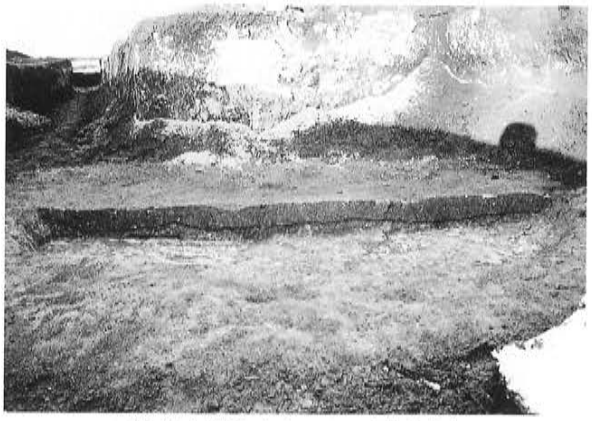
14号土坑完掘状況



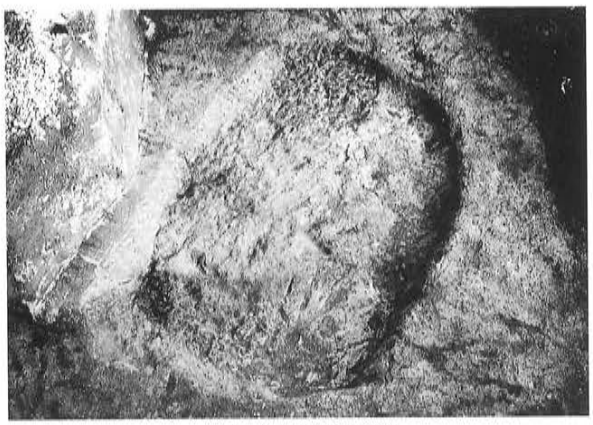
15号土坑セクション（西より）



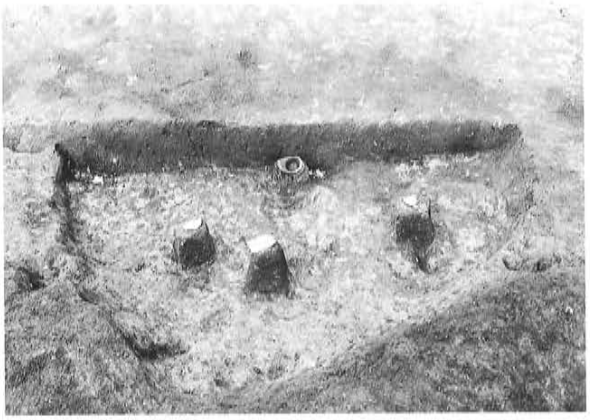
15号土坑完掘状況



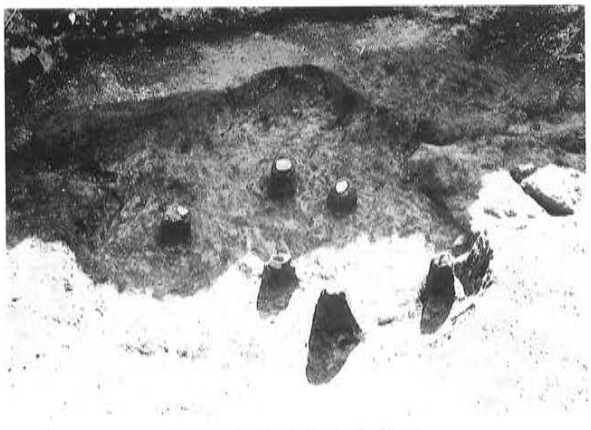
18号土坑セクション（南より）



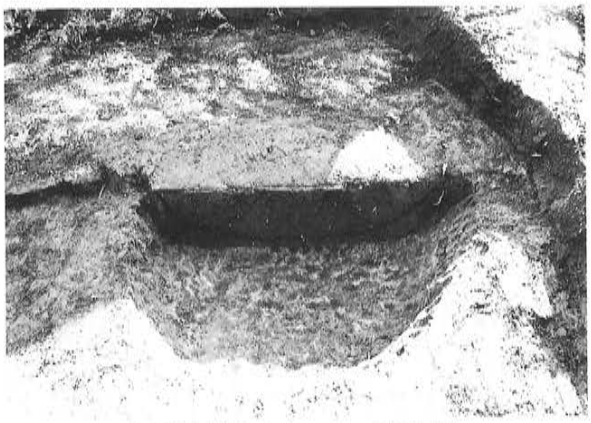
18号土坑完掘状況



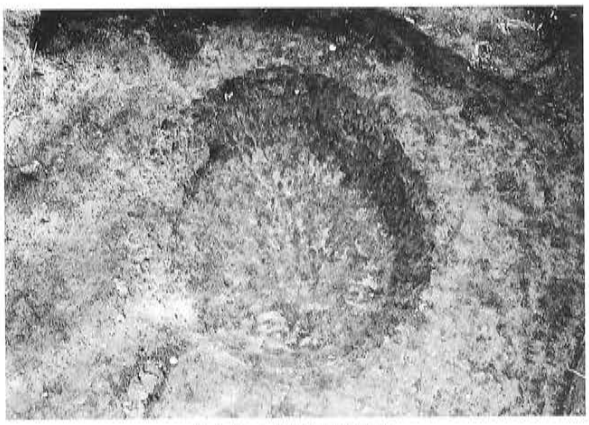
22号土坑セクション（南より）



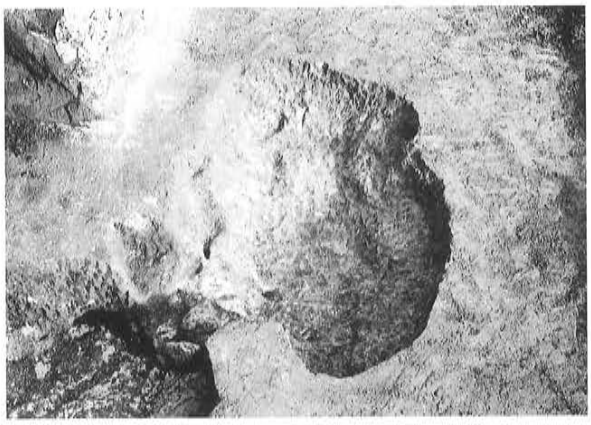
22号土坑遺物出土状況



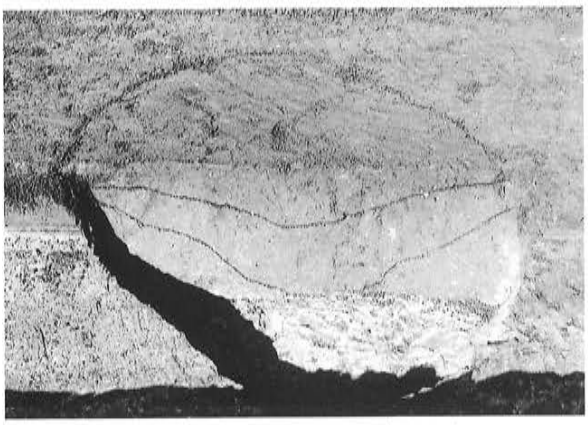
24号土坑セクション（西より）



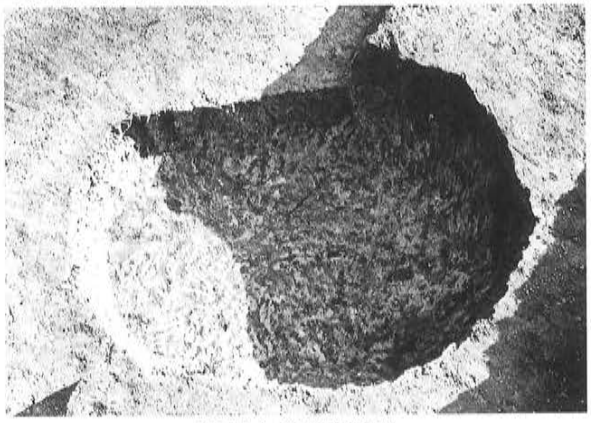
24号土坑完掘状況



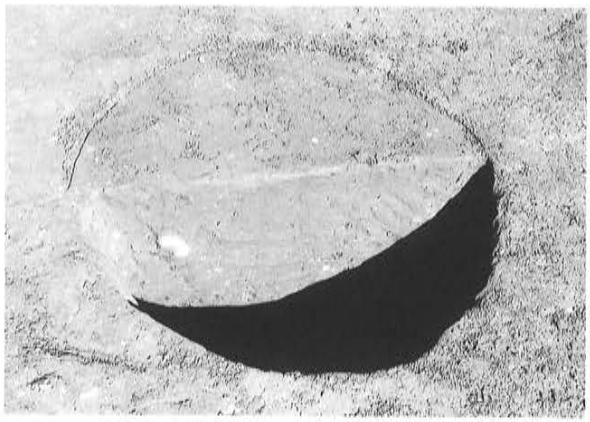
26号土坑完掘状況



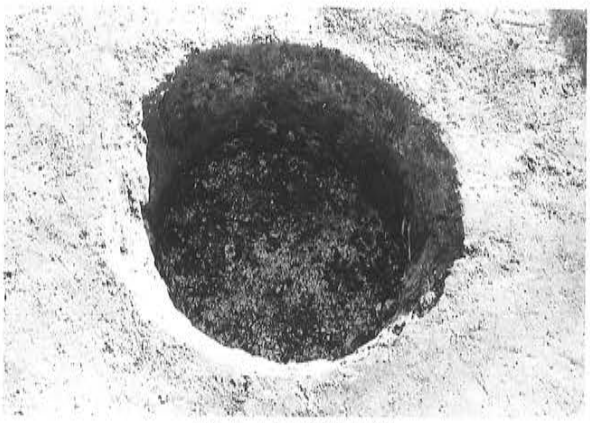
29号土坑セクション（東より）



29号土坑完掘状況



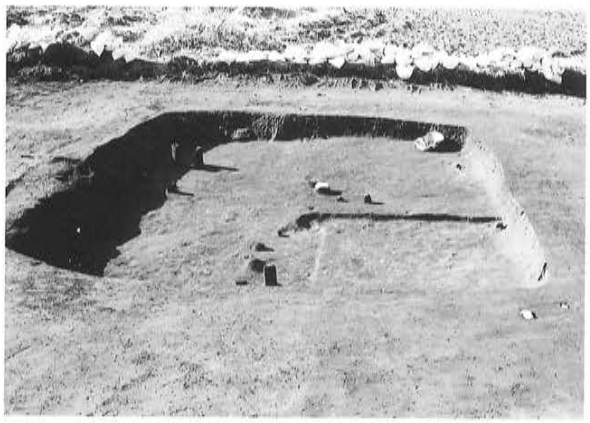
30号土坑セクション（南より）



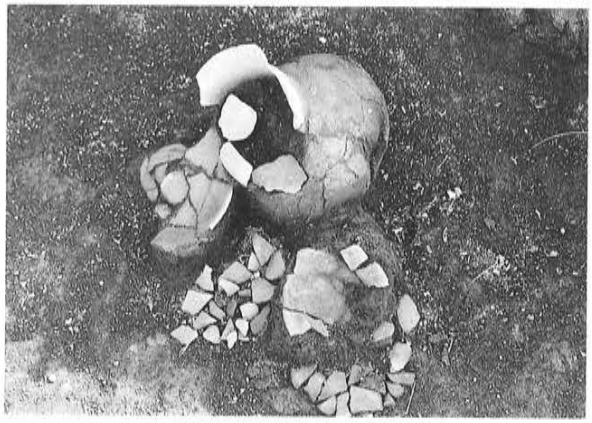
30号土坑完掘状況

遺構外－９出土状況

１号住居跡セクション（東より）

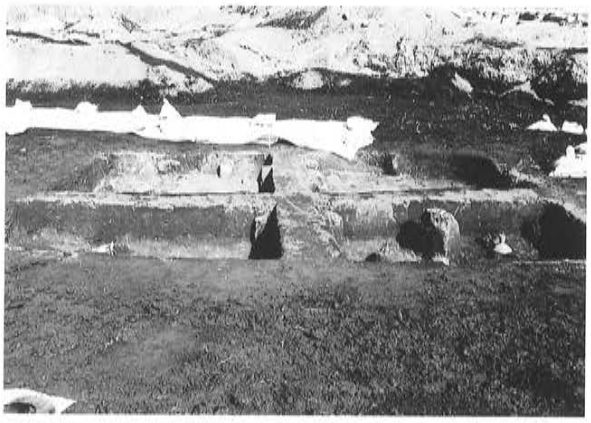


１号住居跡遺物出土状況(1)（東より）



１号住居跡遺物出土状況(2)

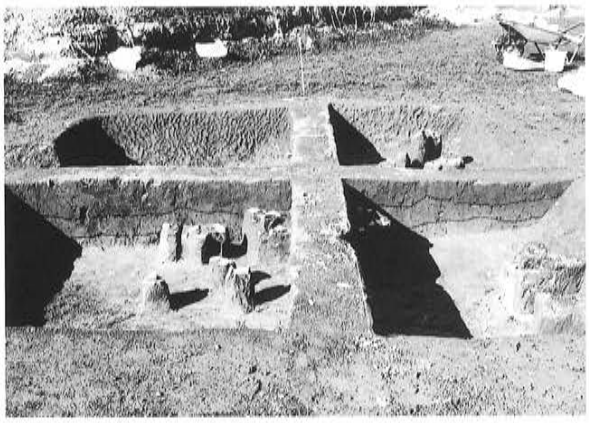
１号住居跡完掘状況（東より）



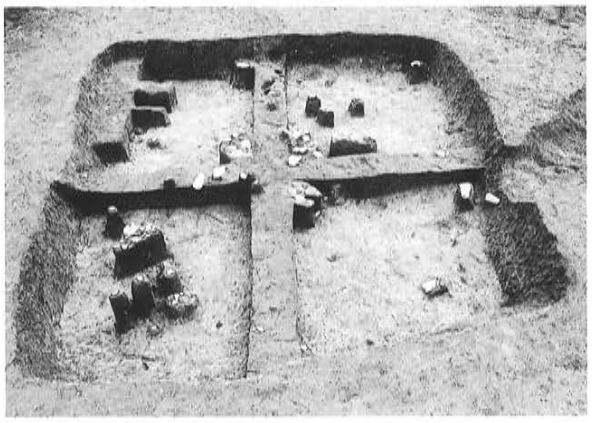
５号住居跡セクション（南より）

５号住居跡遺物出土状況（北より）

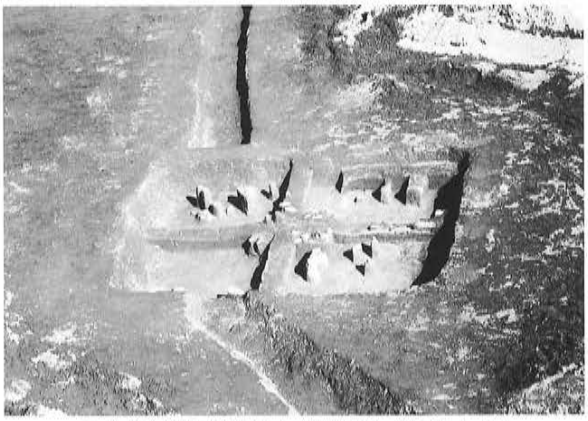
５号住居跡完掘状況（北より）



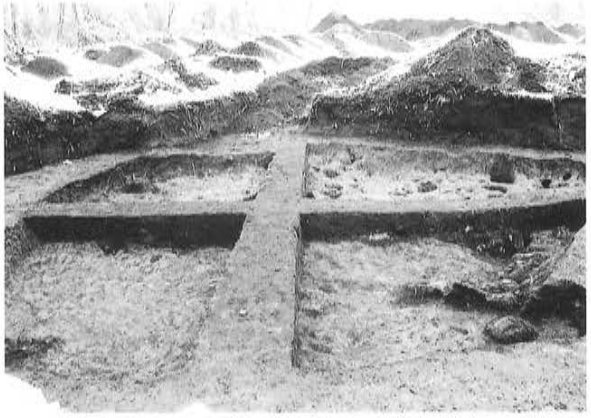
６号住居跡セクション（南より）



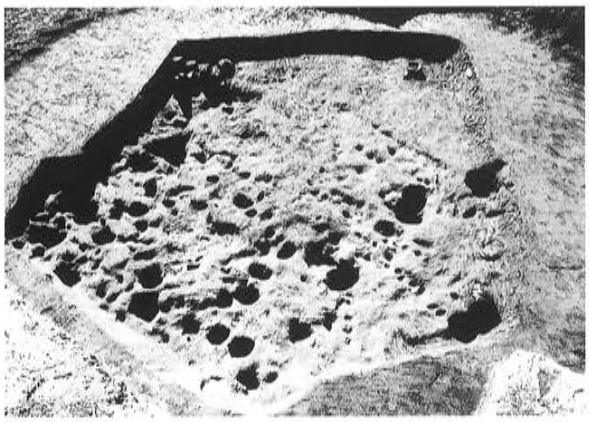
６号住居跡遺物出土状況(1)（北より）



６号住居跡遺物出土状況(2)（南西より）

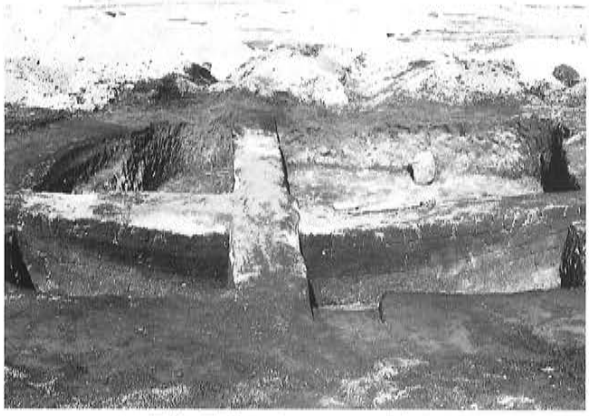


９号住居跡セクション（南より）

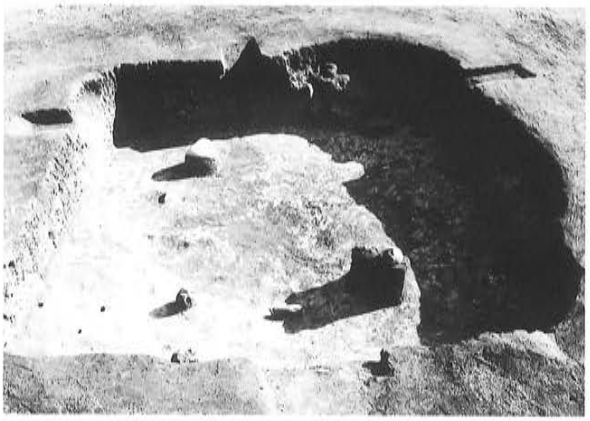


９号住居跡遺物出土状況（北より）

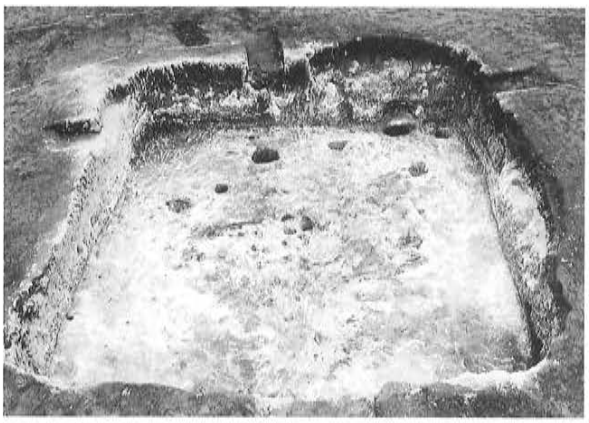
９号住居跡完掘状況（北より）



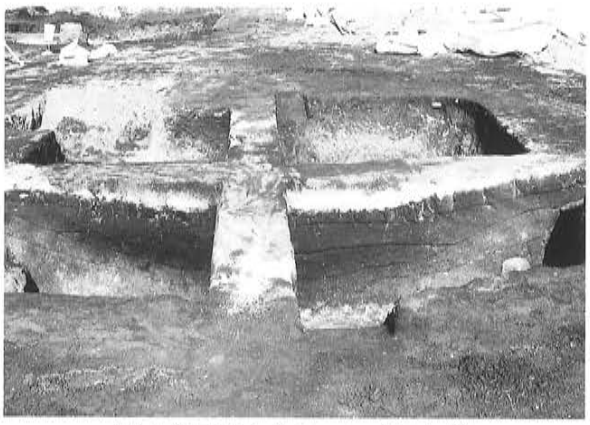
11号住居跡セクション（南より）



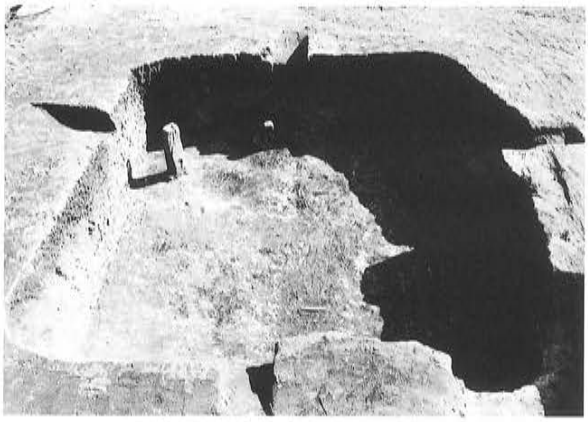
11号住居跡遺物出土状況



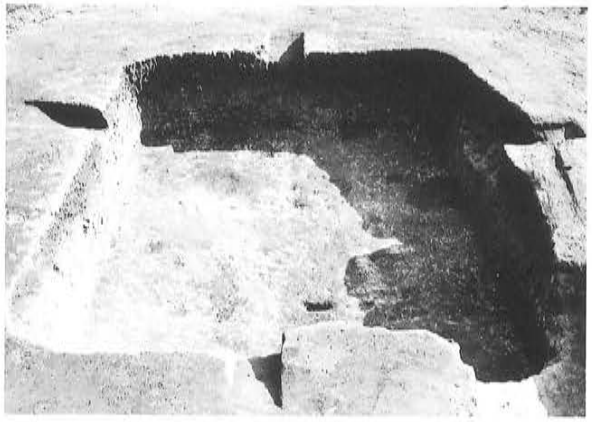
11号住居跡完掘状況（北より）



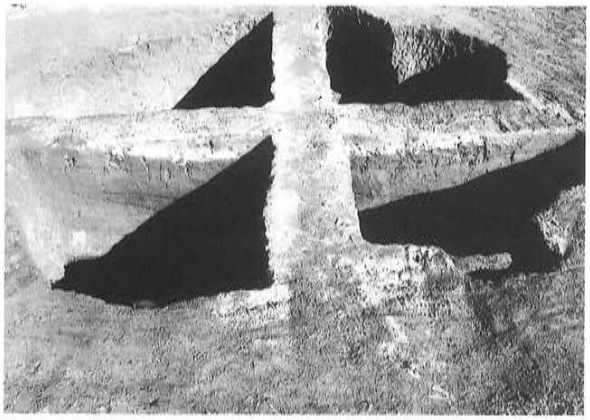
12号住居跡セクション（南より）



12号住居跡遺物出土状況（北より）

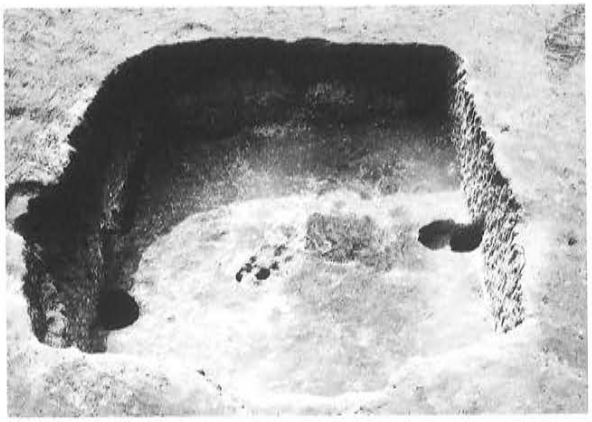


12号住居跡完掘状況（北より）



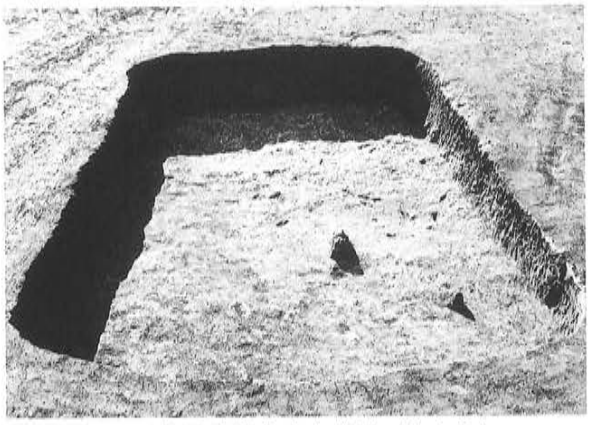
13号住居跡セクション（南より）

13号住居跡遺物出土状況（北より）

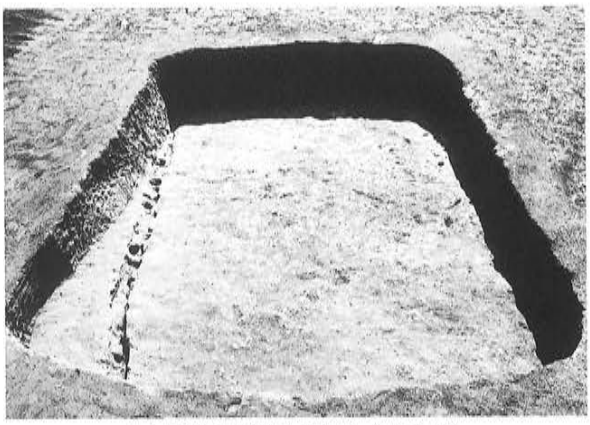


13号住居跡完掘状況（東より）

14号住居跡セクション（南より）

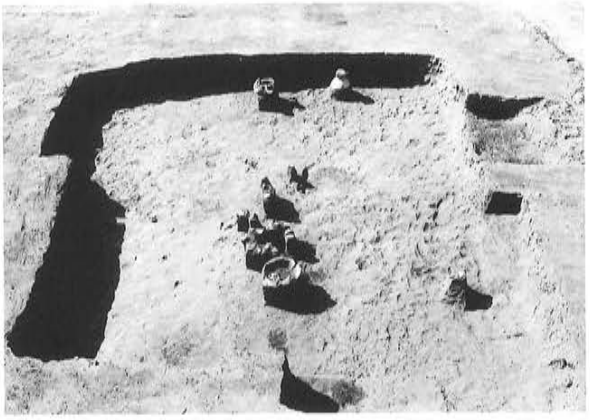


14号住居跡遺物出土状況（北より）

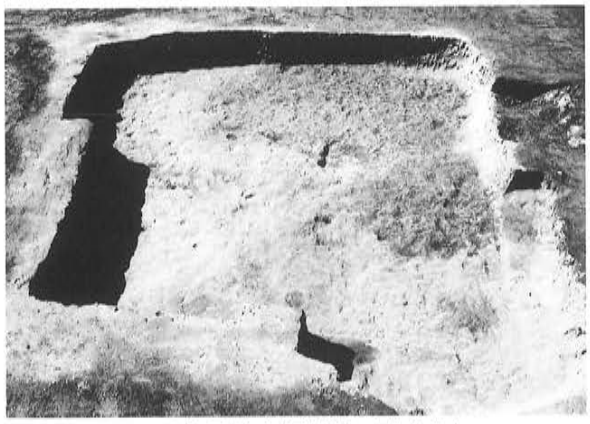


14号住居跡完掘状況（北より）

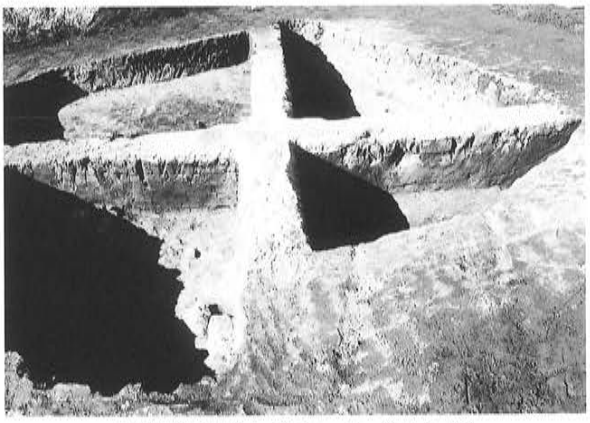
15号住居跡セクション（南より）



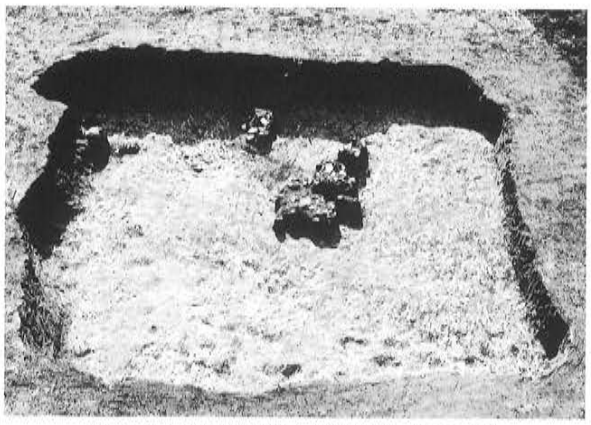
15号住居跡遺物出土状況（東より）



15号住居跡完掘状況（東より）

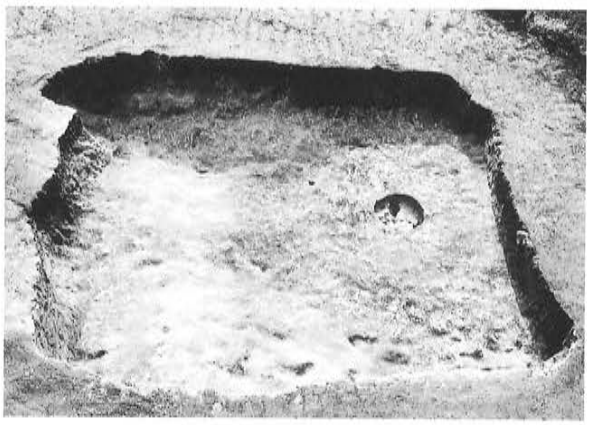


16号住居跡セクション（南より）

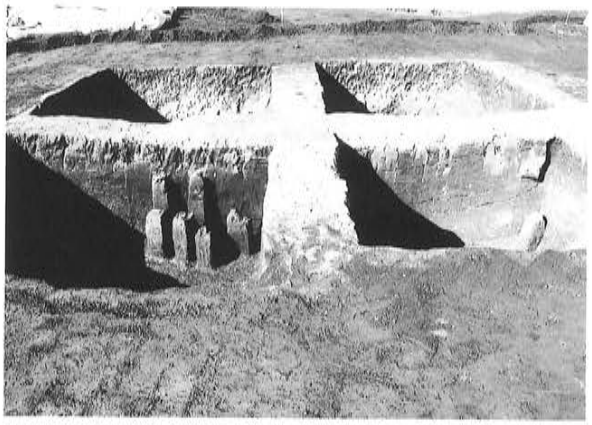


16号住居跡遺物出土状況(1)（東より）

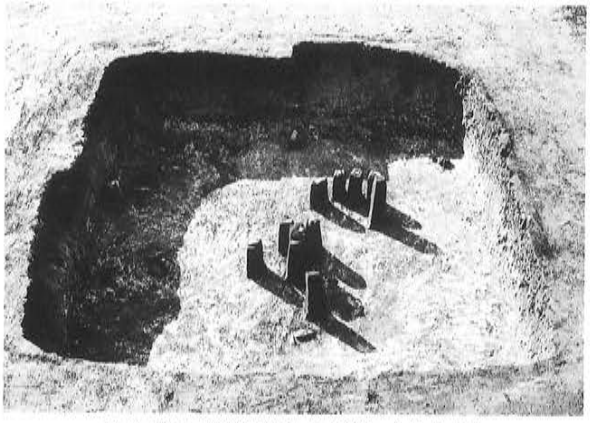
16号住居跡遺物出土状況(2)



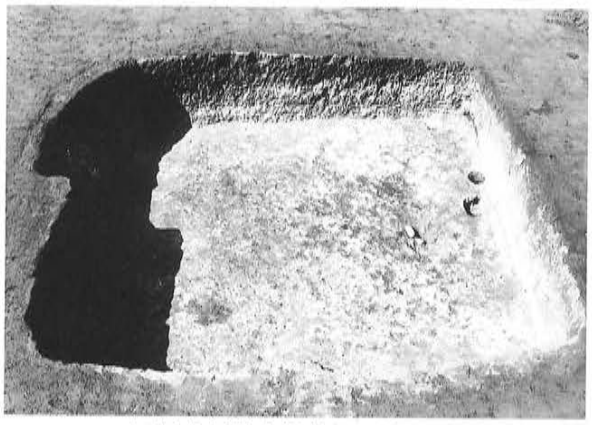
16号住居跡完掘状況（東より）



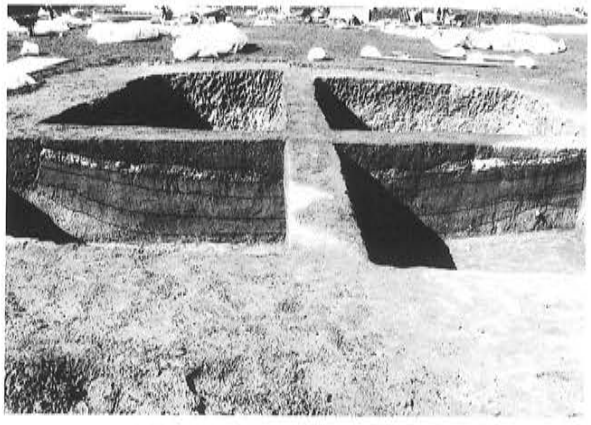
17号住居跡セクション（南より）



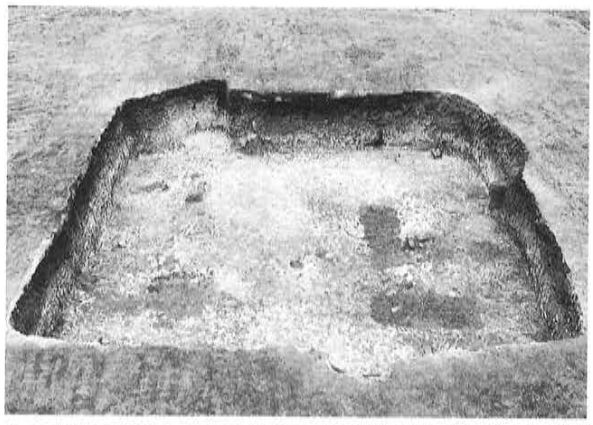
17号住居跡遺物出土状況（北より）



17号住居跡完掘状況（東より）

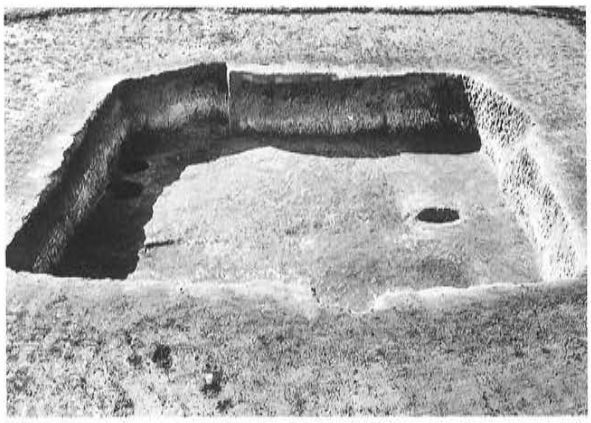


18号住居跡セクション（東より）



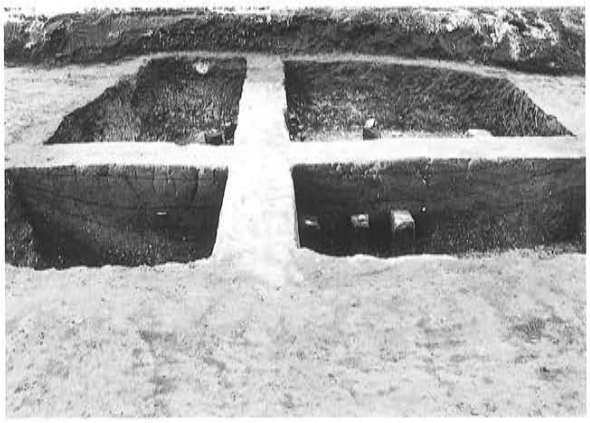
18号住居跡遺物出土状況(1)（北より）

18号住居跡遺物出土状況(2)



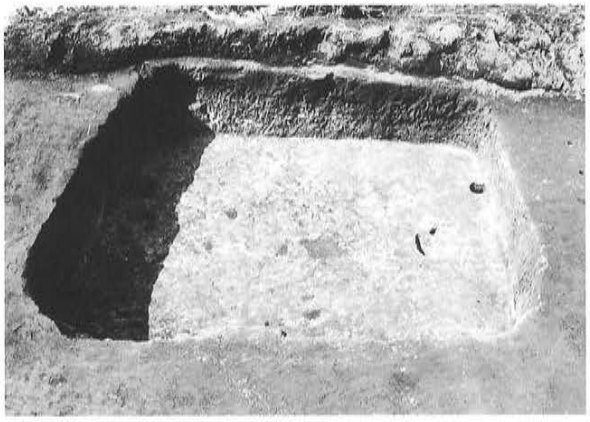
18号住居跡完掘状況(1)（北より）

18号住居跡完掘状況(2)（東より）



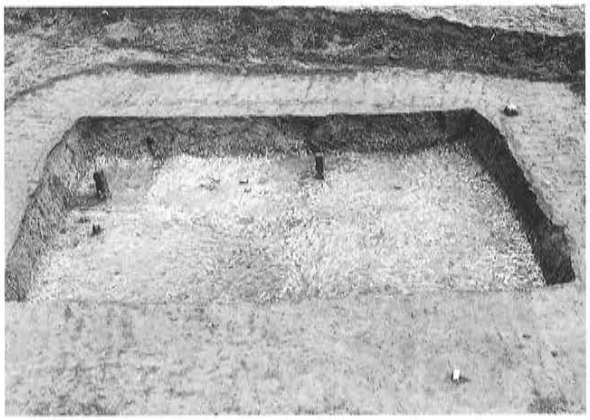
19号住居跡セクション（東より）

19号住居跡遺物出土状況（北より）



19号住居跡完掘状況（東より）

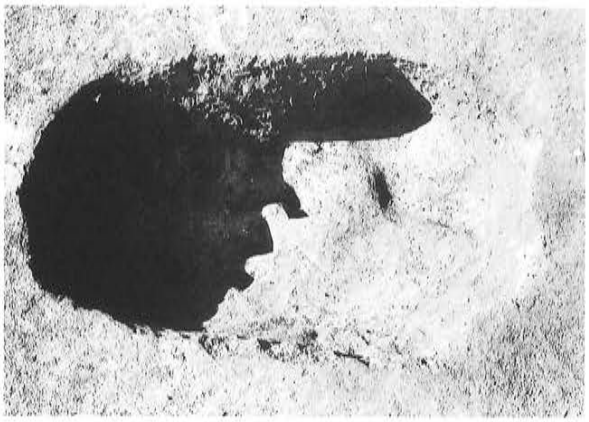
20号住居跡セクション（東より）



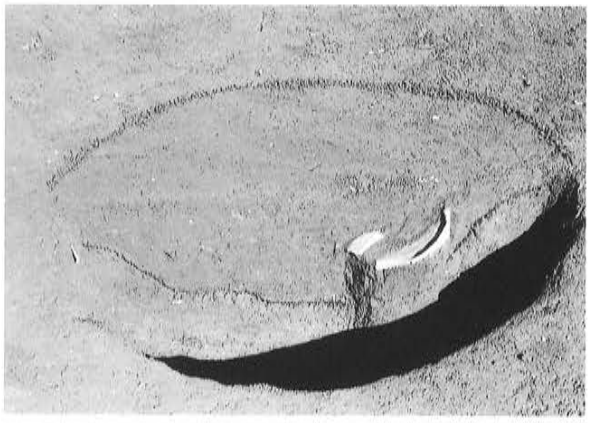
20号住居跡遺物出土状況（北より）

20号住居跡完掘状況（北より）

27号土坑セクション（東より）

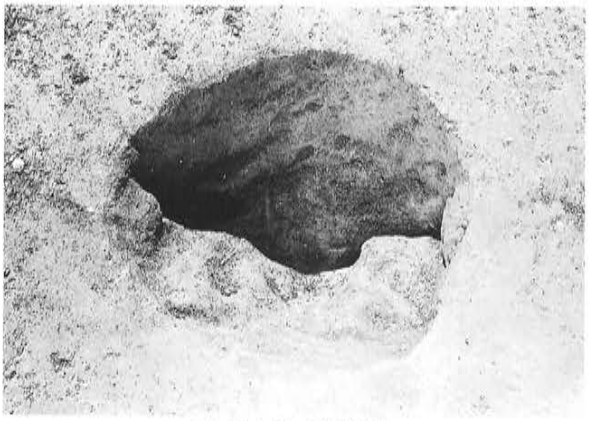


27号土坑完掘状況



28号土坑セクション（南より）

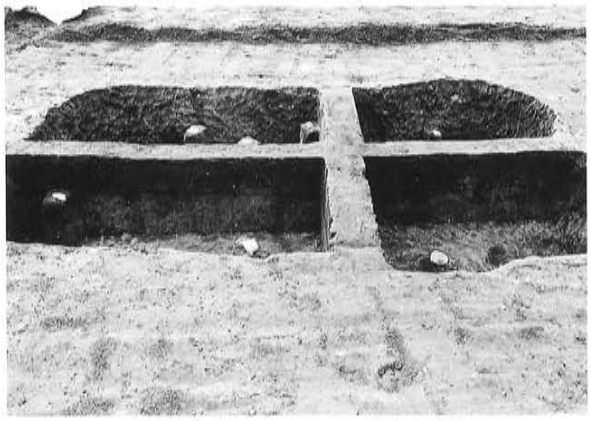
28号土坑遺物出土状況



28号土坑完掘状況

32号土坑セクション（南より）

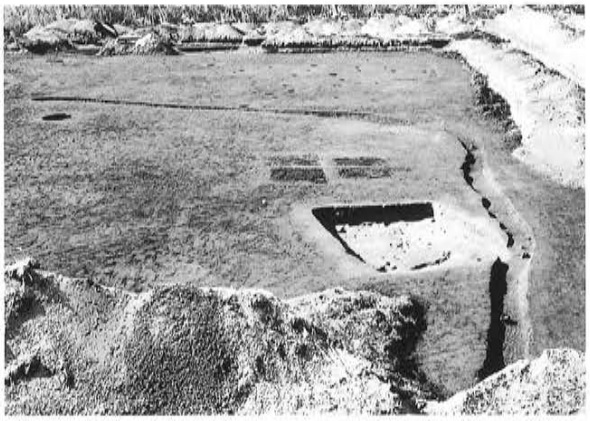
32号土坑完掘状況（南より）



33号土坑セクション（東より）

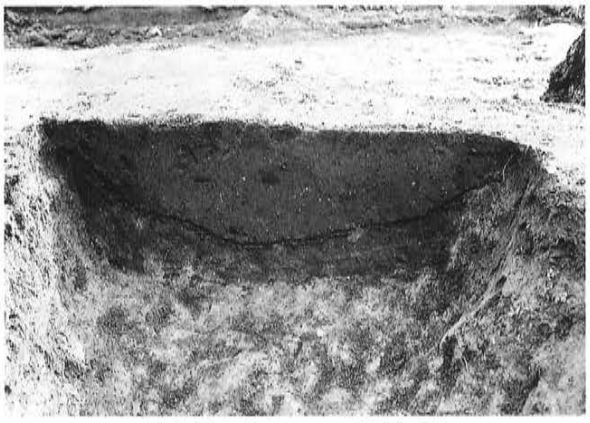
33号土坑遺物出土状況（東より）

２号溝セクション（南より）

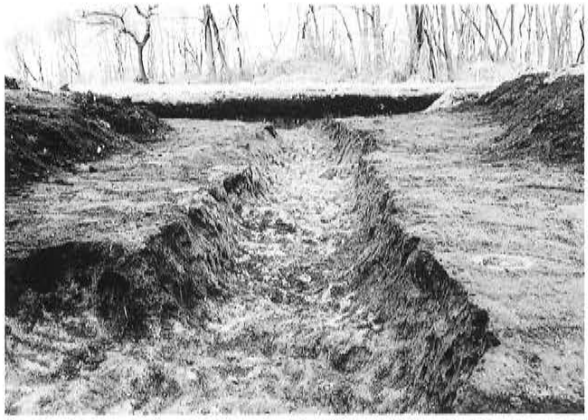


５号住居跡・２号溝全景（東より）

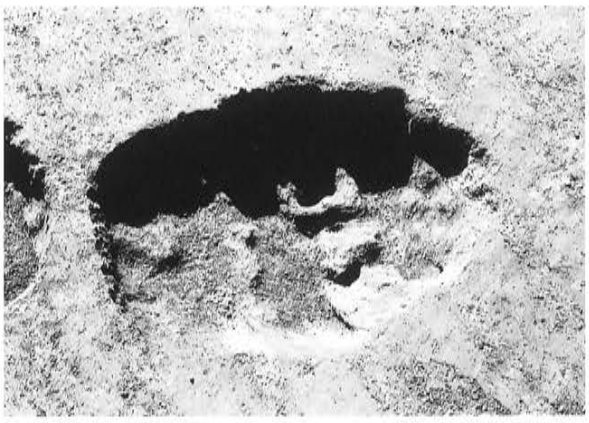
６号住居跡・３号溝全景（南西より）



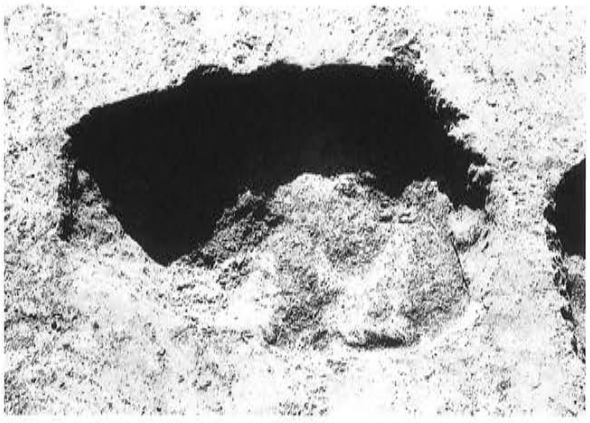
５号溝セクション（西より）



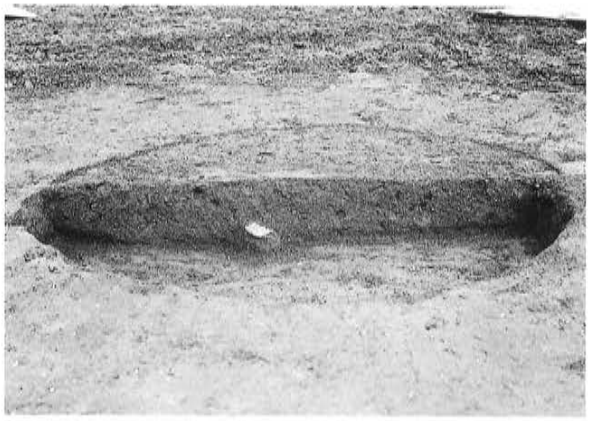
５号溝完掘状況



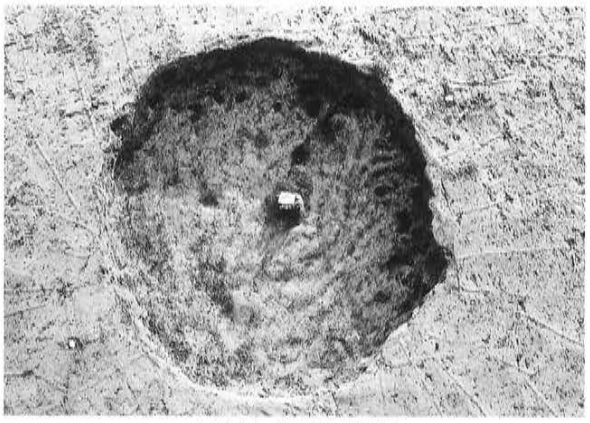
16号土坑完掘状況



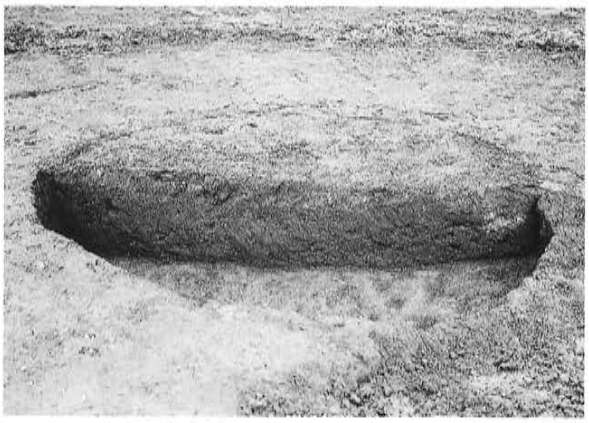
17号土坑完掘状況



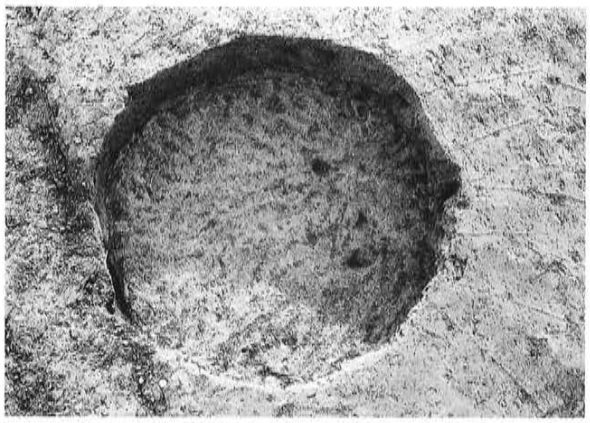
19号土坑セクション（南より）



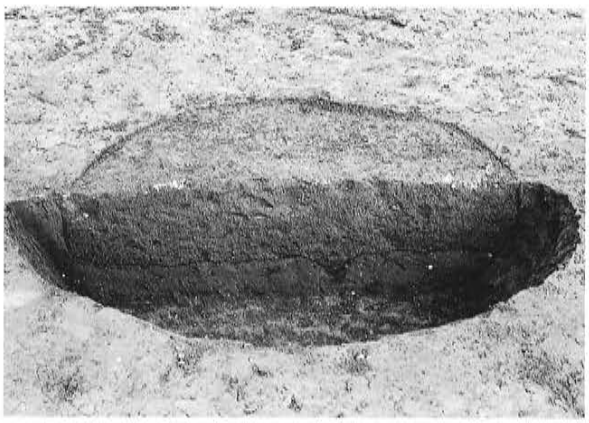
19号土坑完掘状況



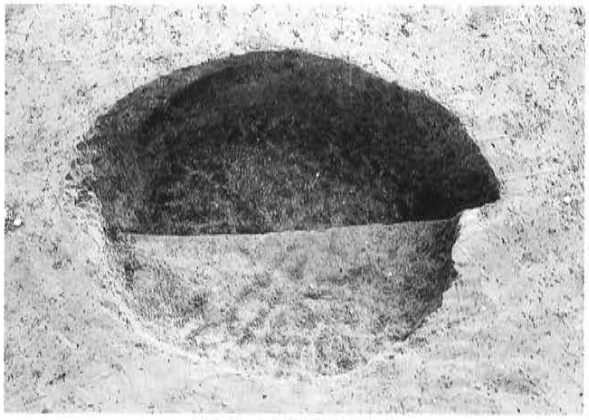
20号土坑セクション（南より）



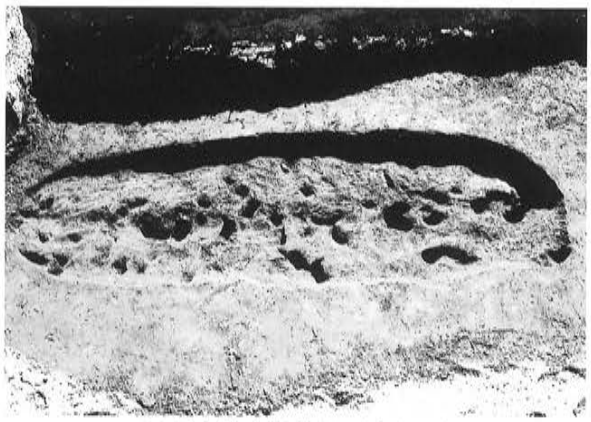
20号土坑完掘状況



21号土坑セクション（南より）



21号土坑完掘状況



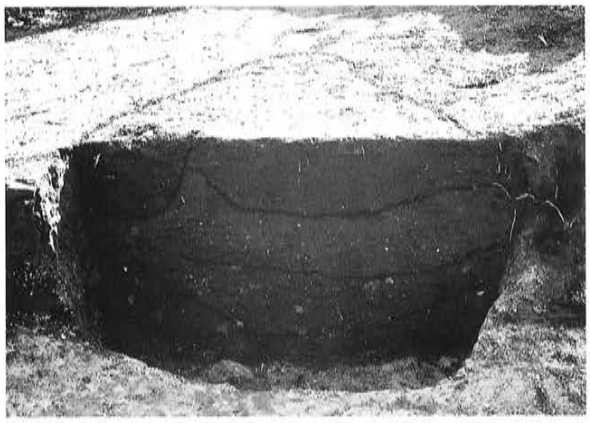
23号土坑完掘状況（南より）

31号土坑セクション（南より）

31号土坑完掘状況

1号溝・4号溝（道路遺構）、6号溝全景（南東より）

4号溝セクション（北西より）

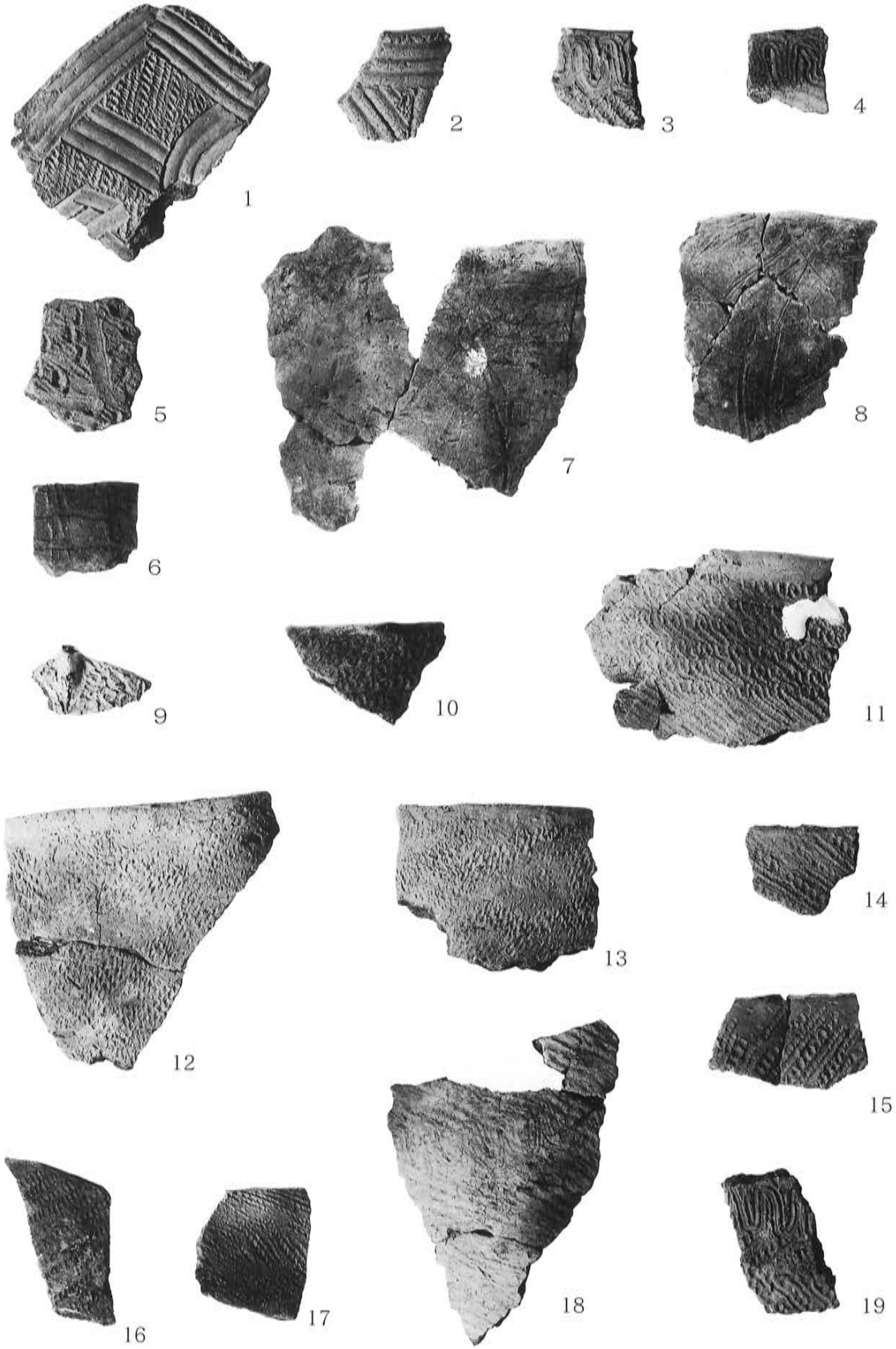


25号土坑セクション（西より）

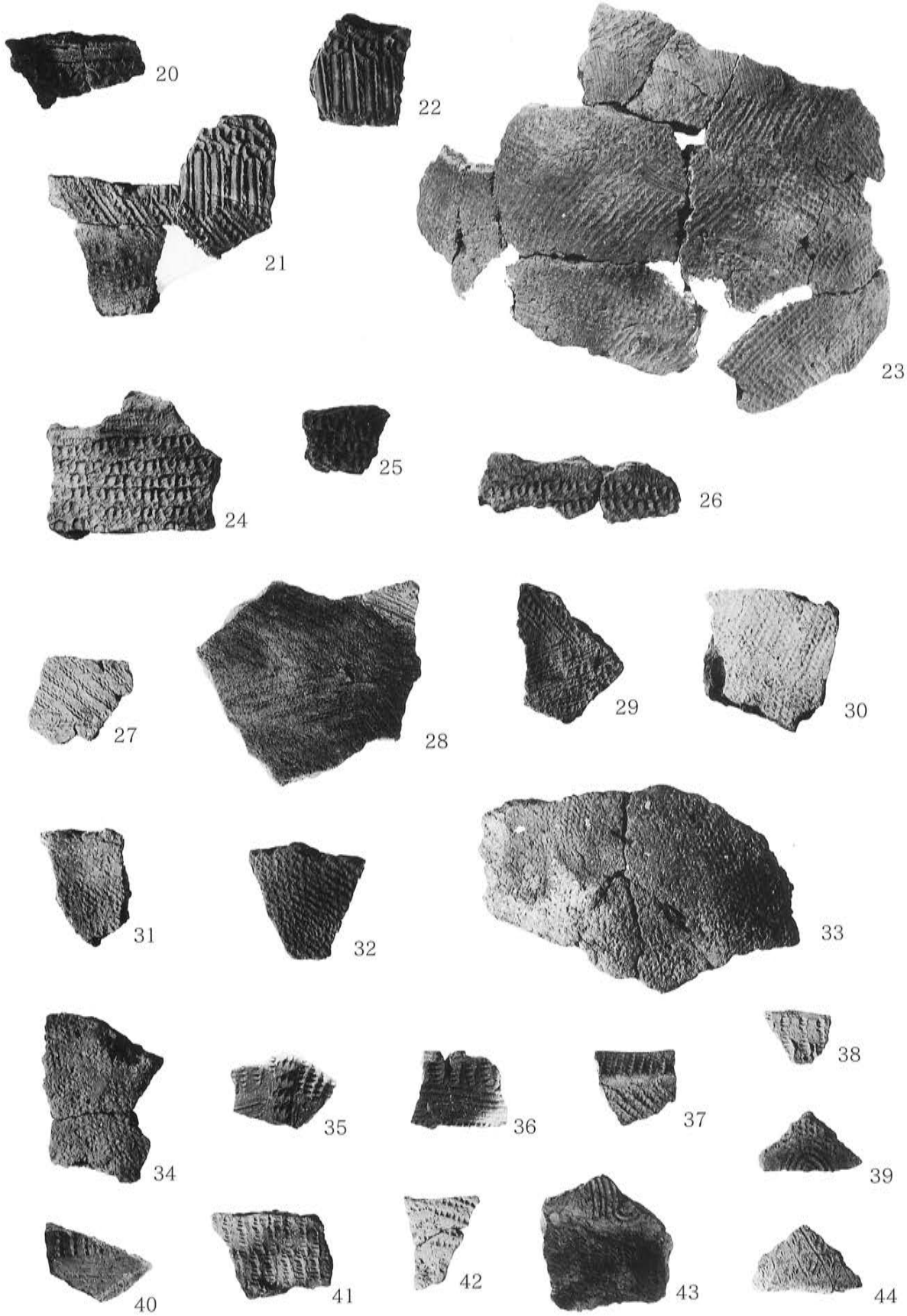
25号土坑完掘状況

6号溝セクション（南より）

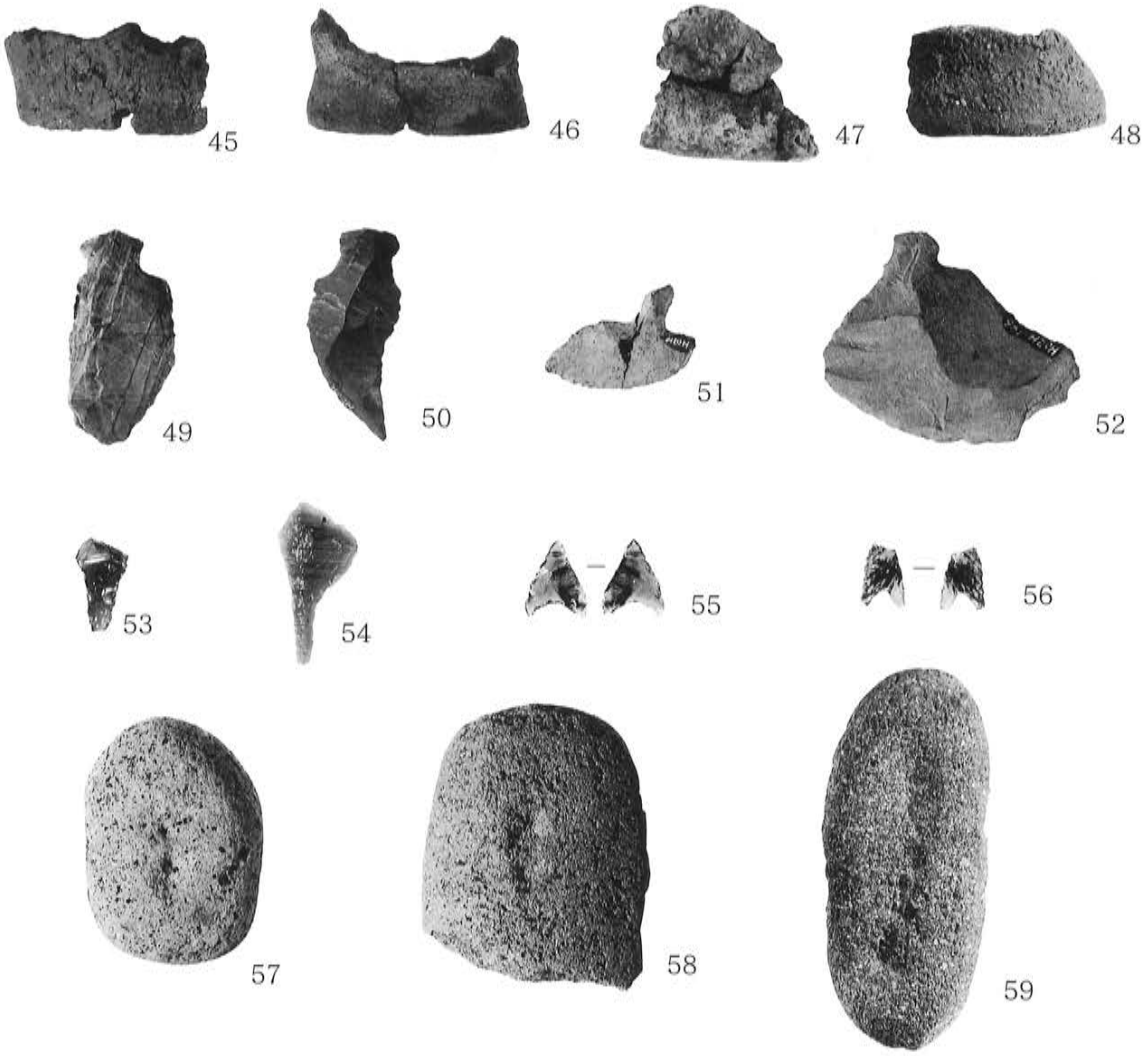
6号溝完掘状況（南より）



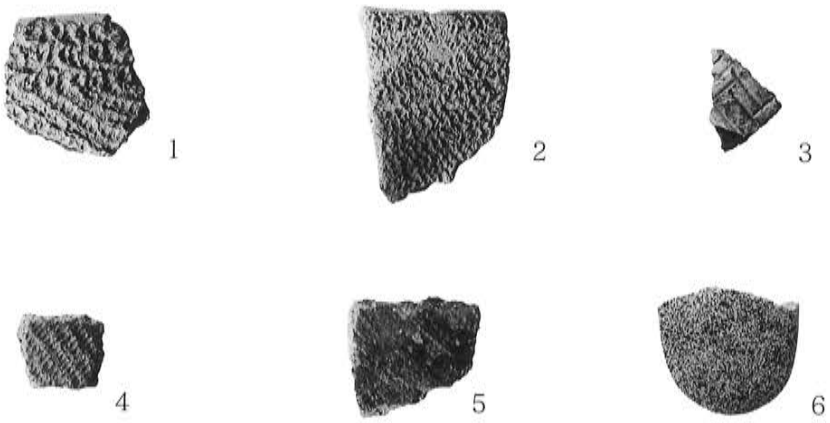
２号住居跡出土遺物(1)


20
22
21
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

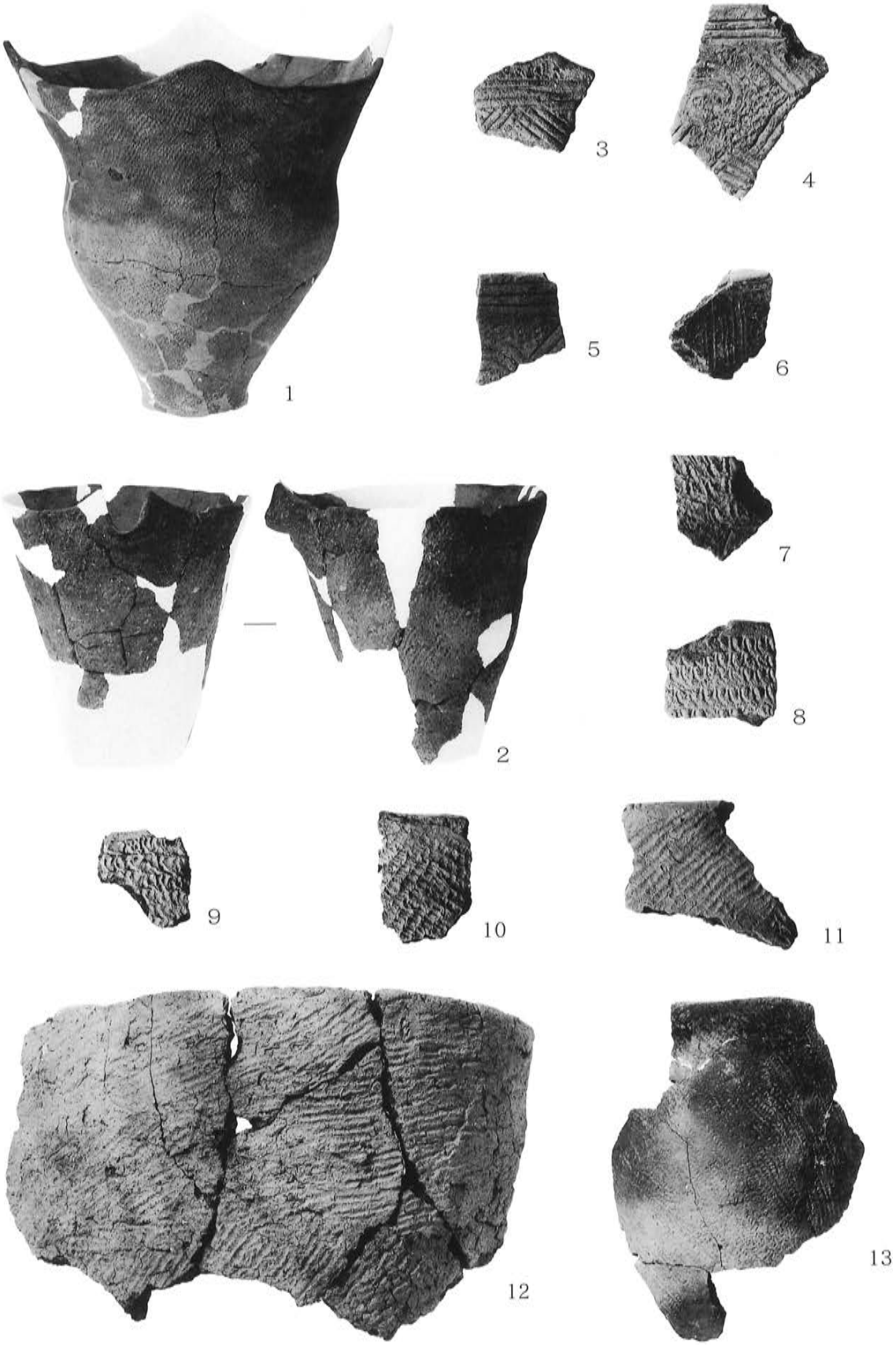
２号住居跡出土遺物(2)



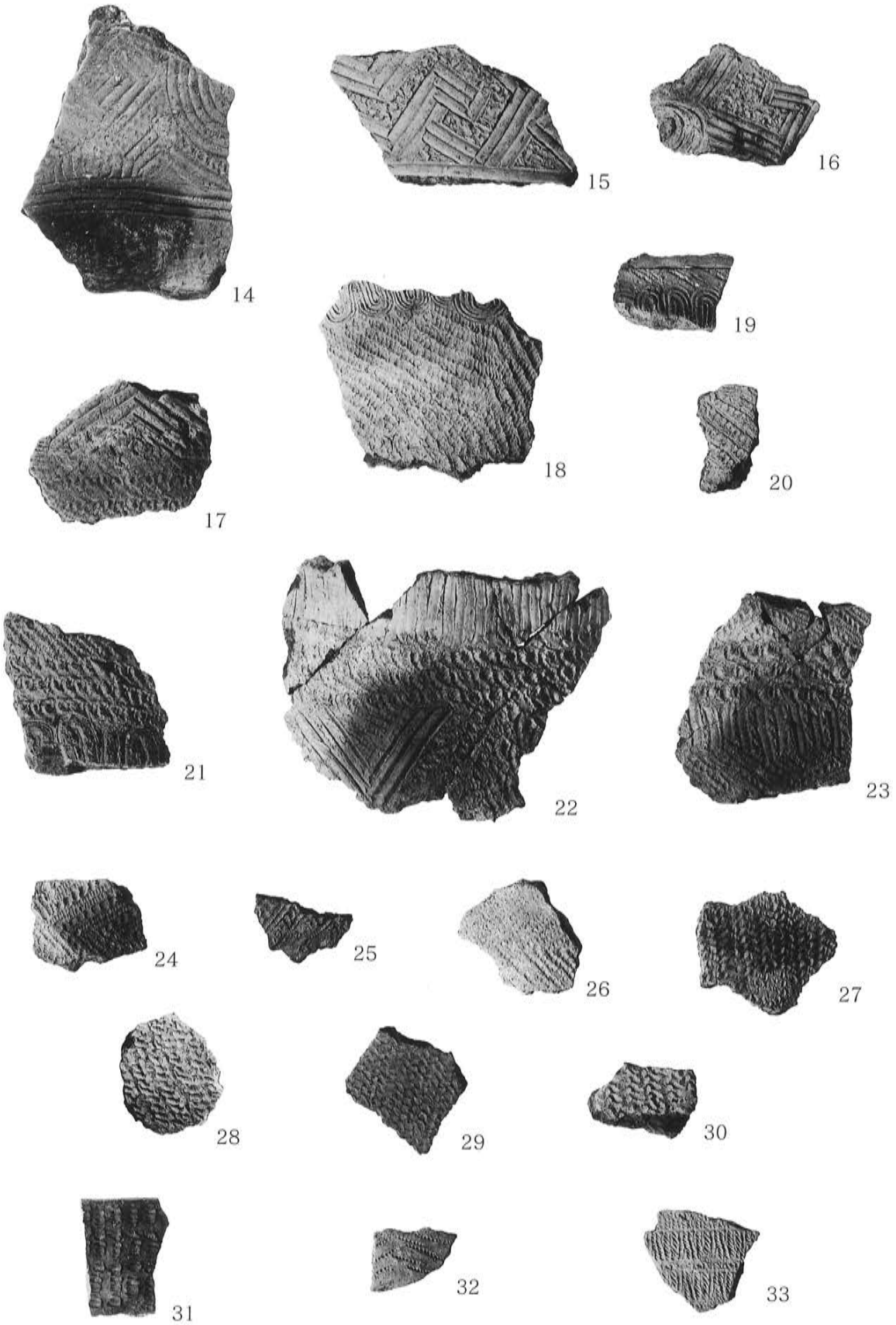
２号住居跡出土遺物(3)



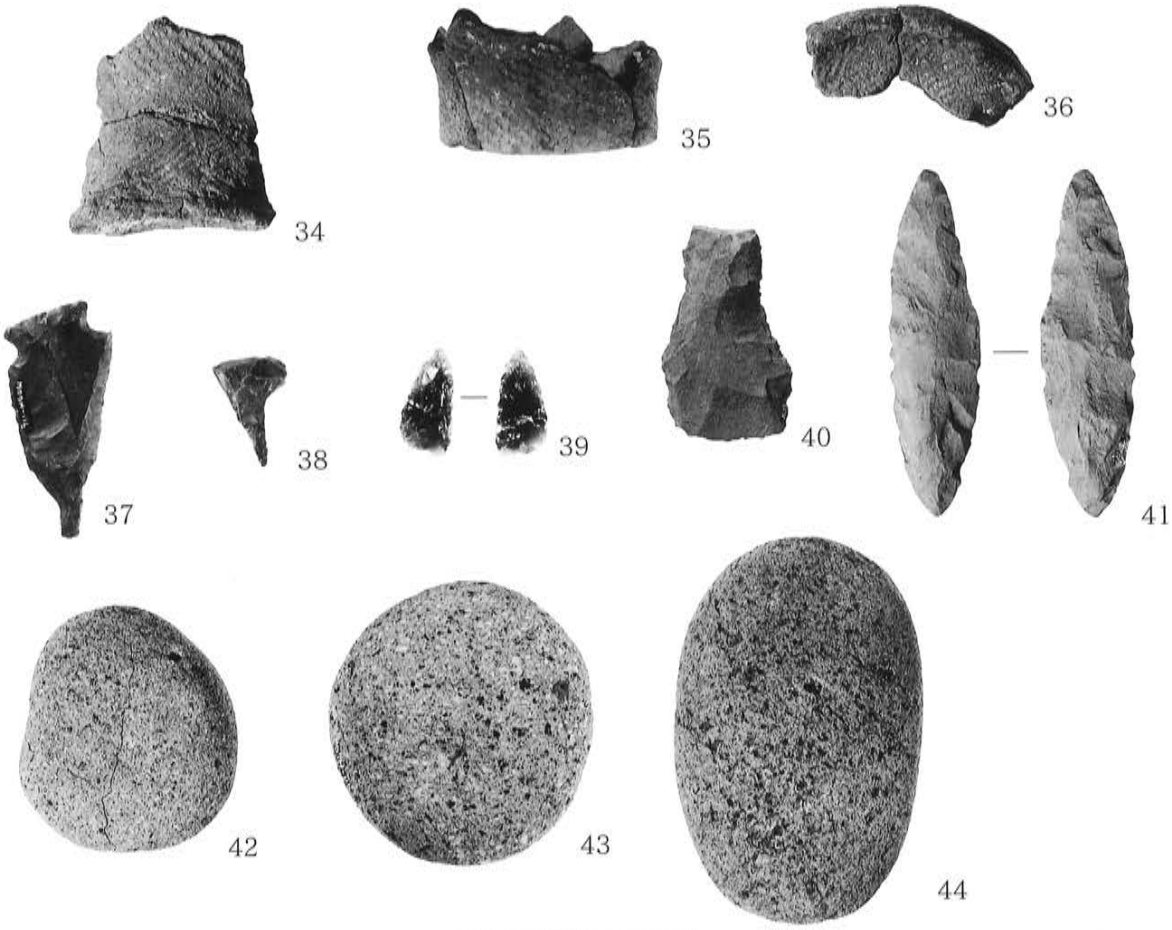
４号住居跡出土遺物



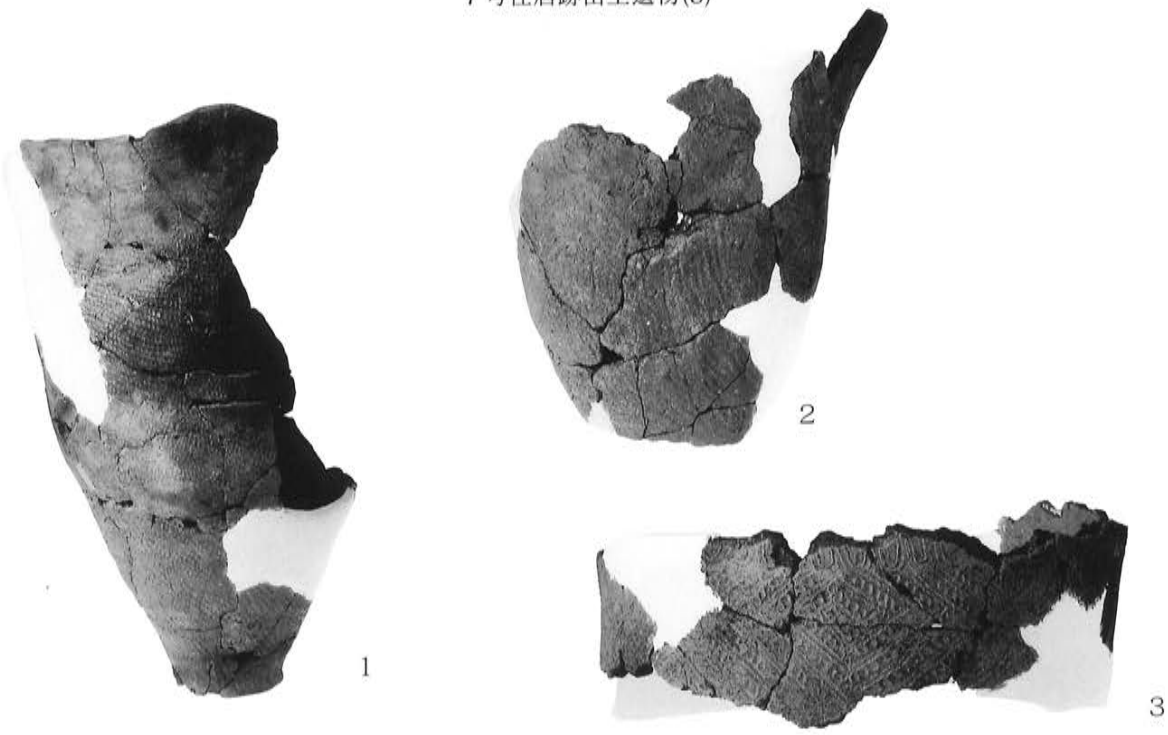
7号住居跡出土遺物(1)



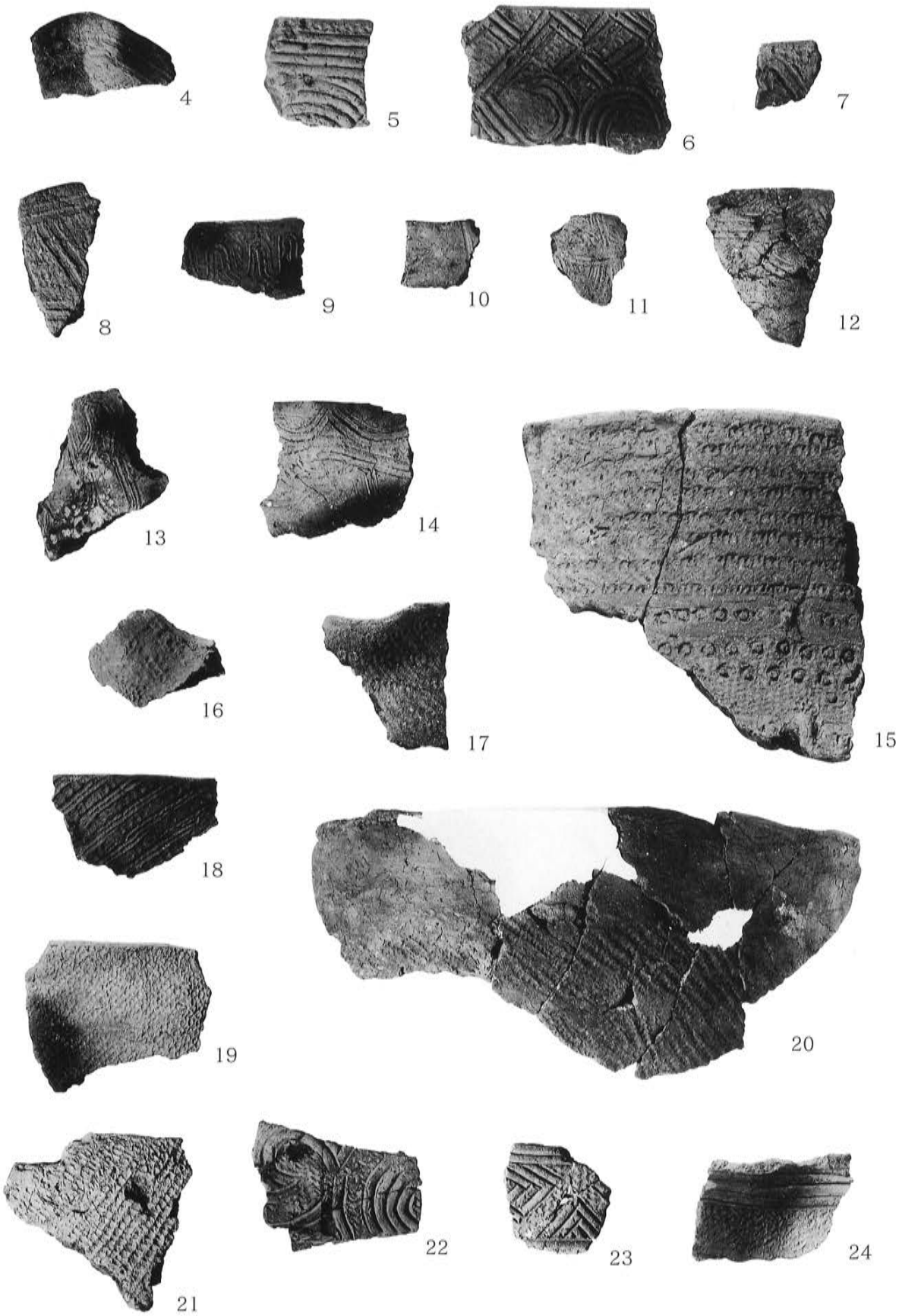
7号住居跡出土遺物(2)



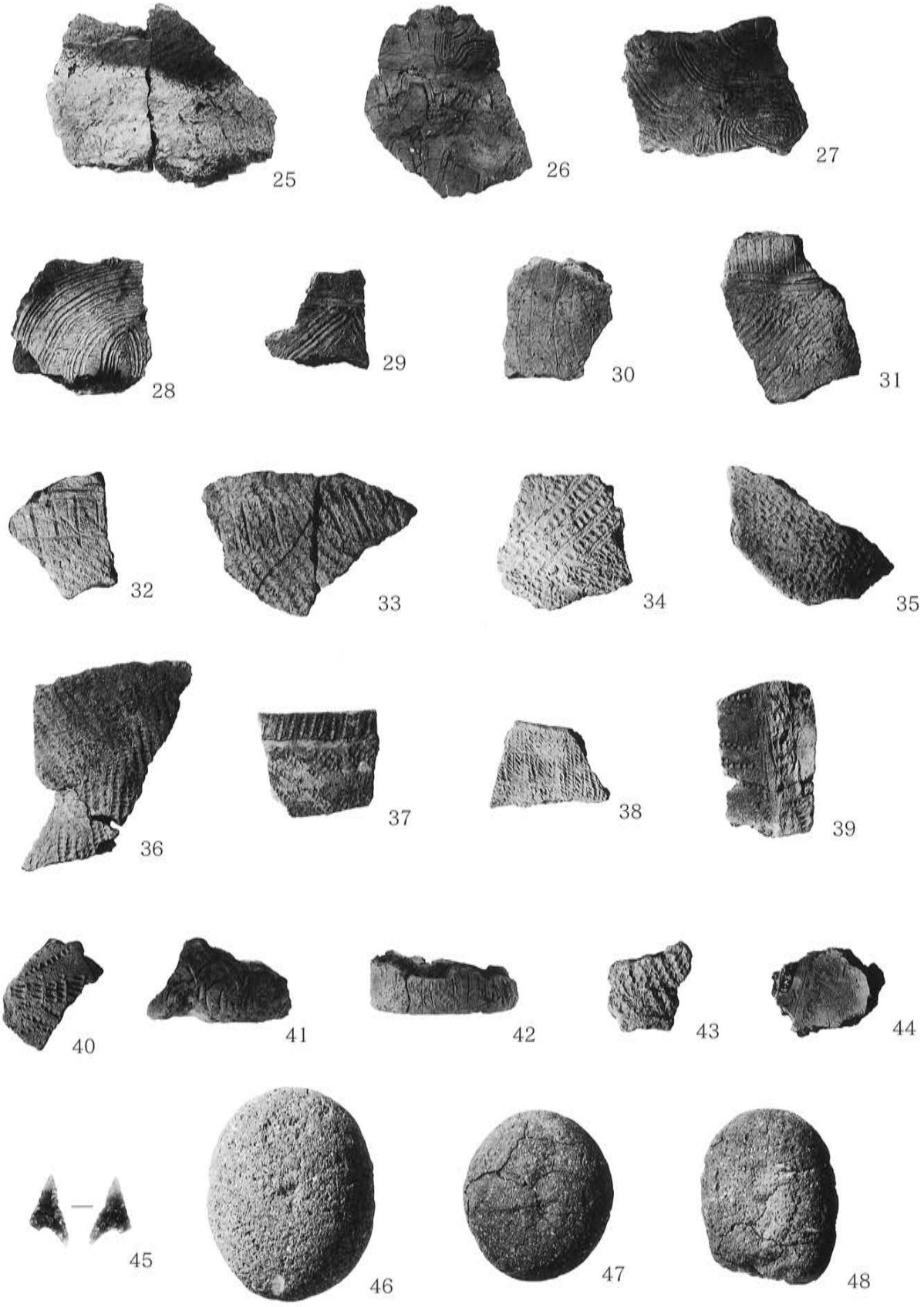
7号住居跡出土遺物(3)



8号住居跡出土遺物(1)

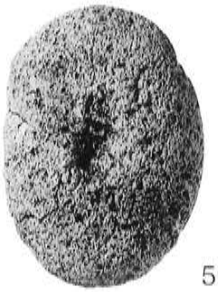


8号住居跡出土遺物(2)



8号住居跡出土遺物(3)

49


50

51

8号住居跡出土遺物(4)

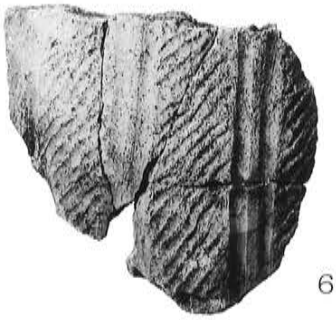
1

2

3

4

5


6

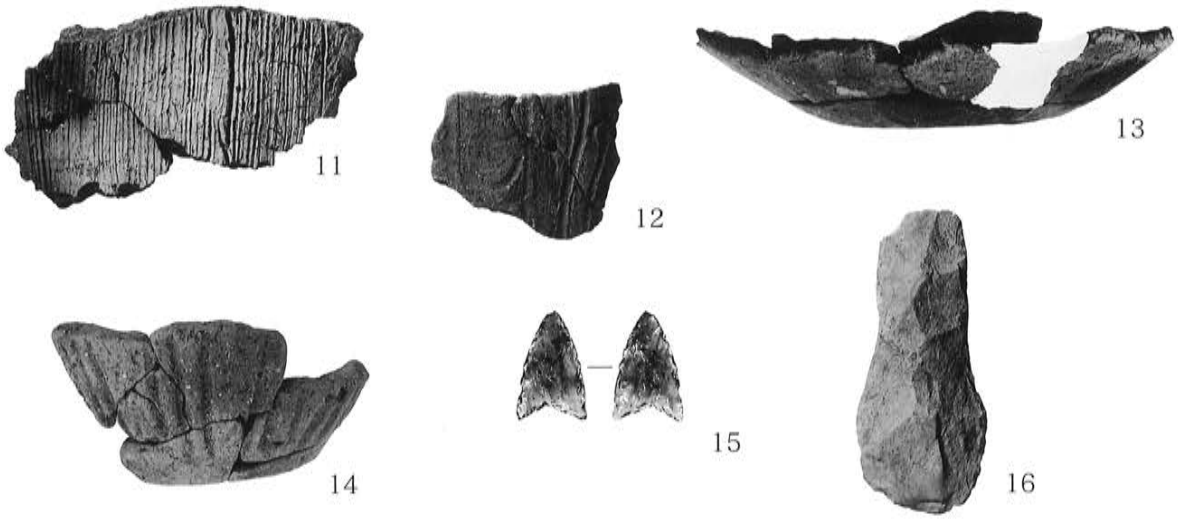
7

8

9

10

10号住居跡出土遺物(1)

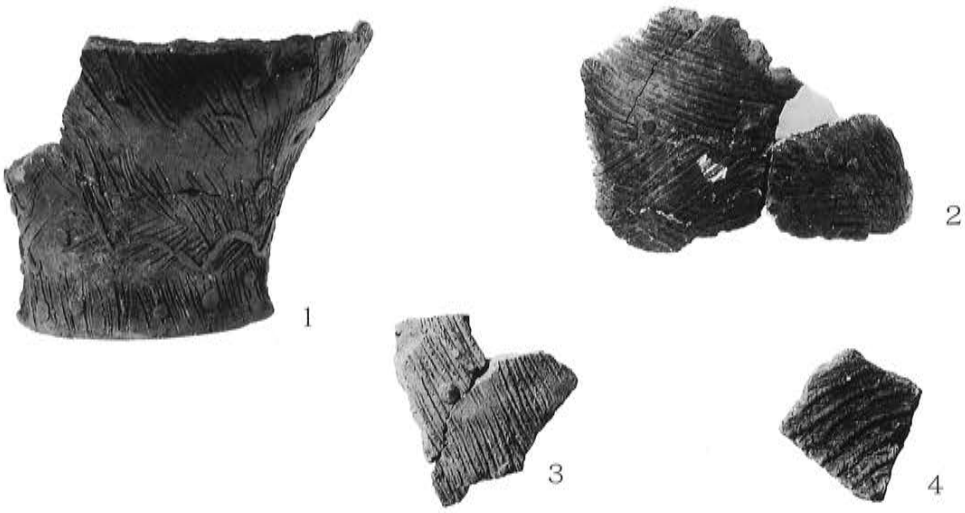


10号住居跡出土遺物(2)

4号土坑出土遺物

5号土坑出土遺物

6号土坑出土遺物



7号土坑出土遺物

8号土坑出土遺物

1

2

3

4

11号土坑出土遺物

1

2

12号土坑出土遺物

1

2

3

4

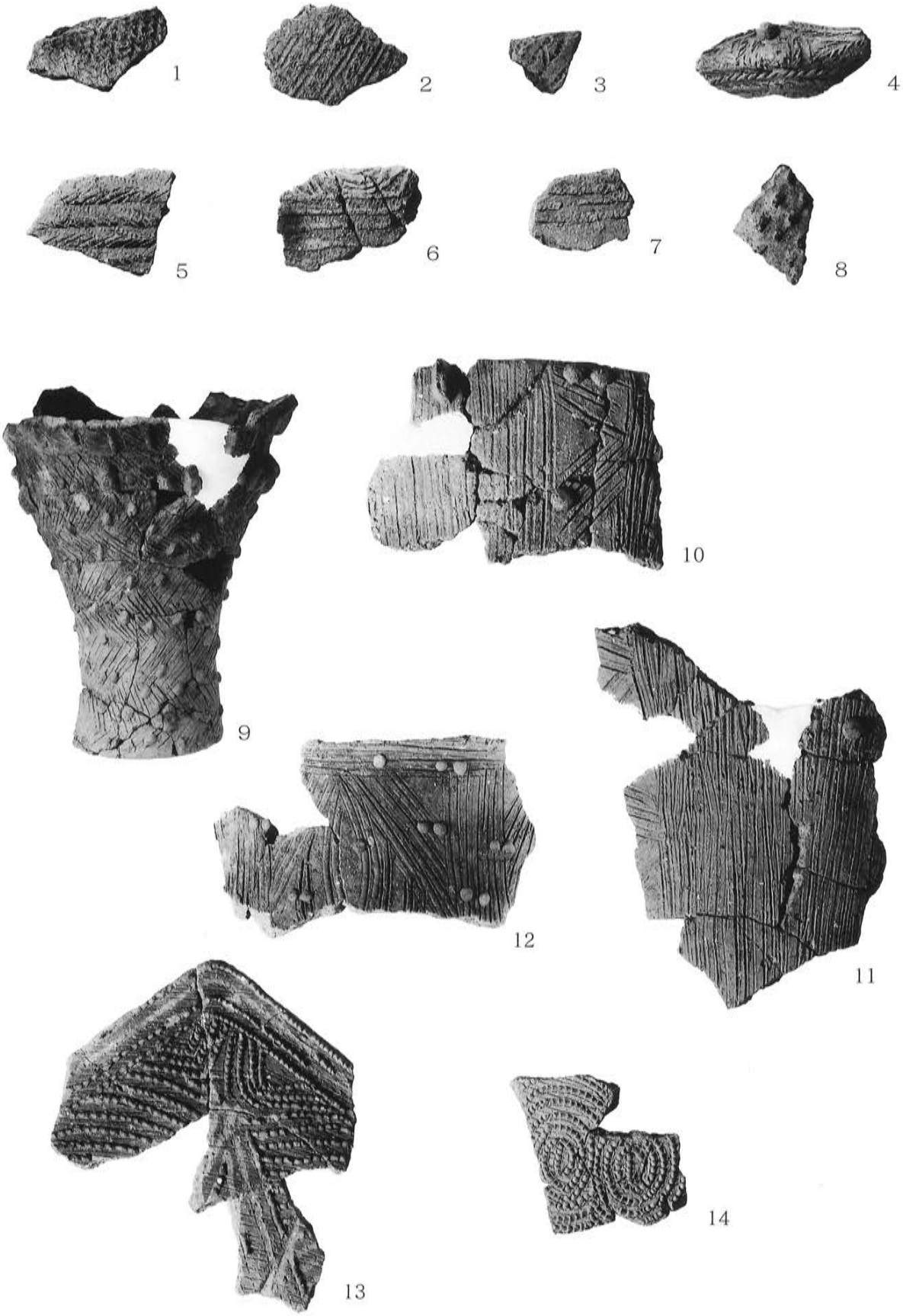
14号土坑出土遺物

1

2

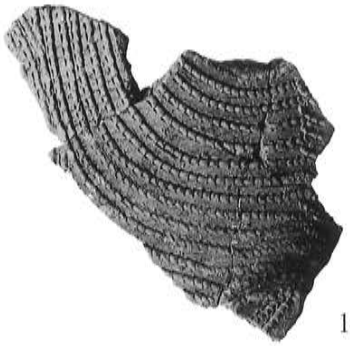
3

22号土坑出土遺物

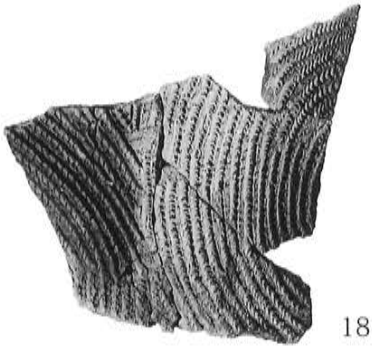


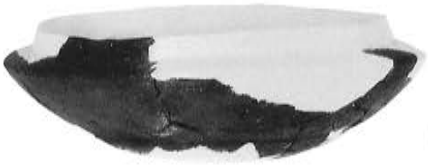
遺構外出土遺物(1)

15


16

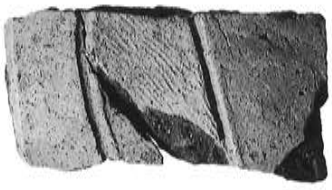
17

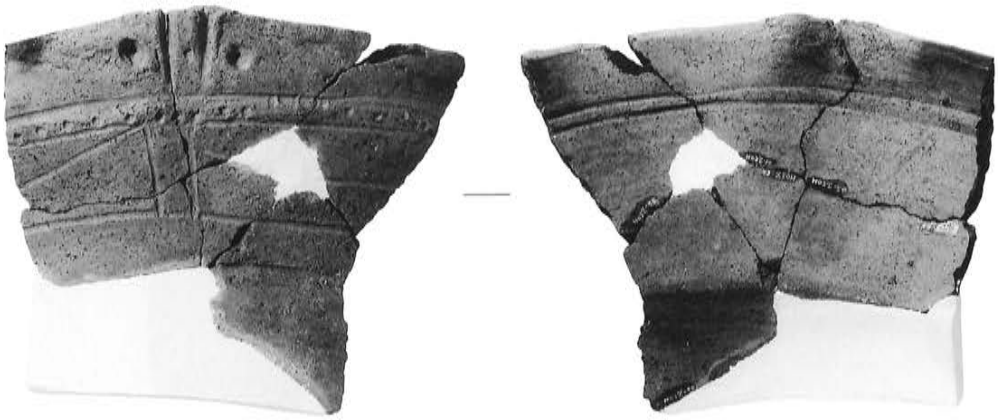

18


19

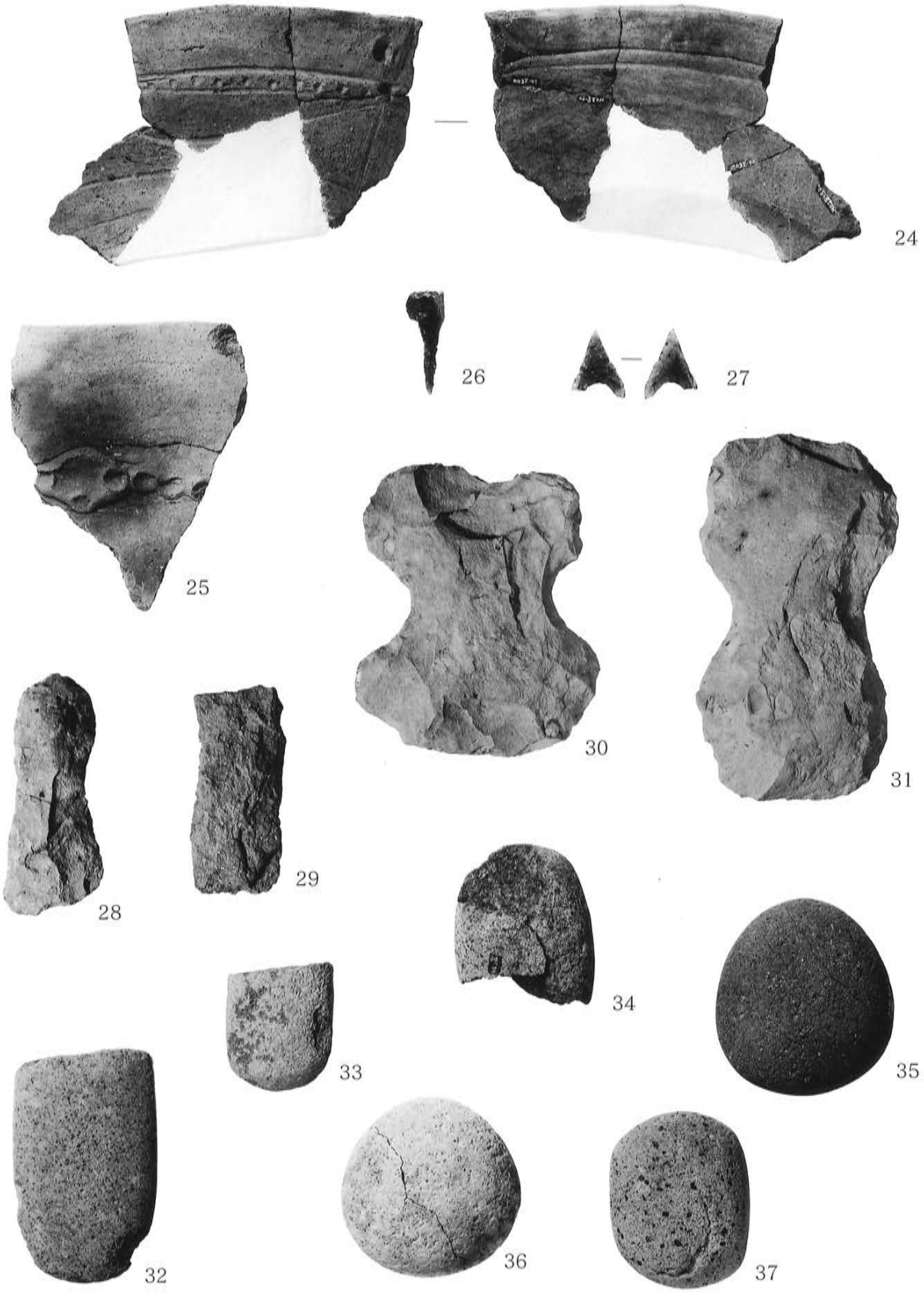
20

21

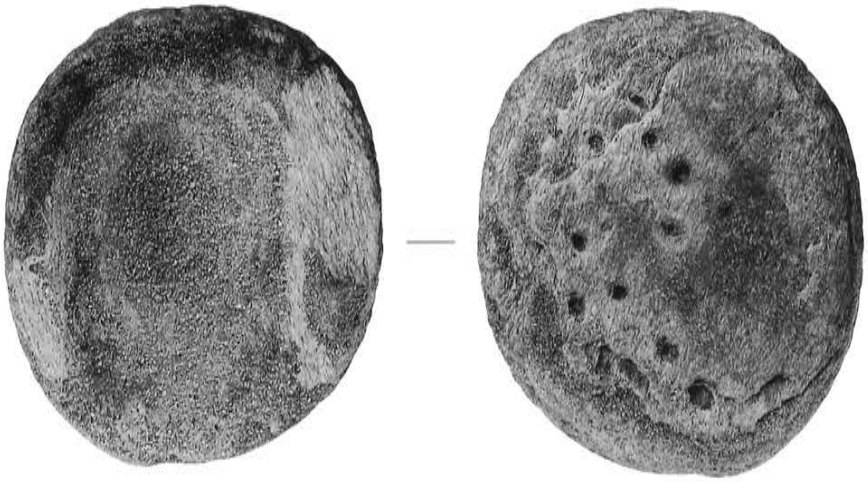

22


23

遺構外出土遺物(2)

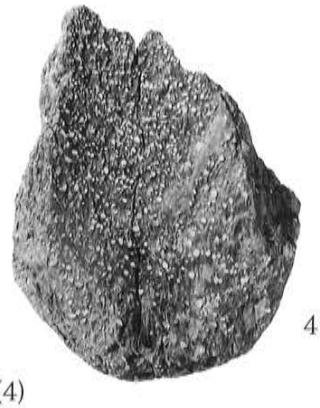


遺構外出土遺物(3)



38

39



40

遺構外出土遺物(4)

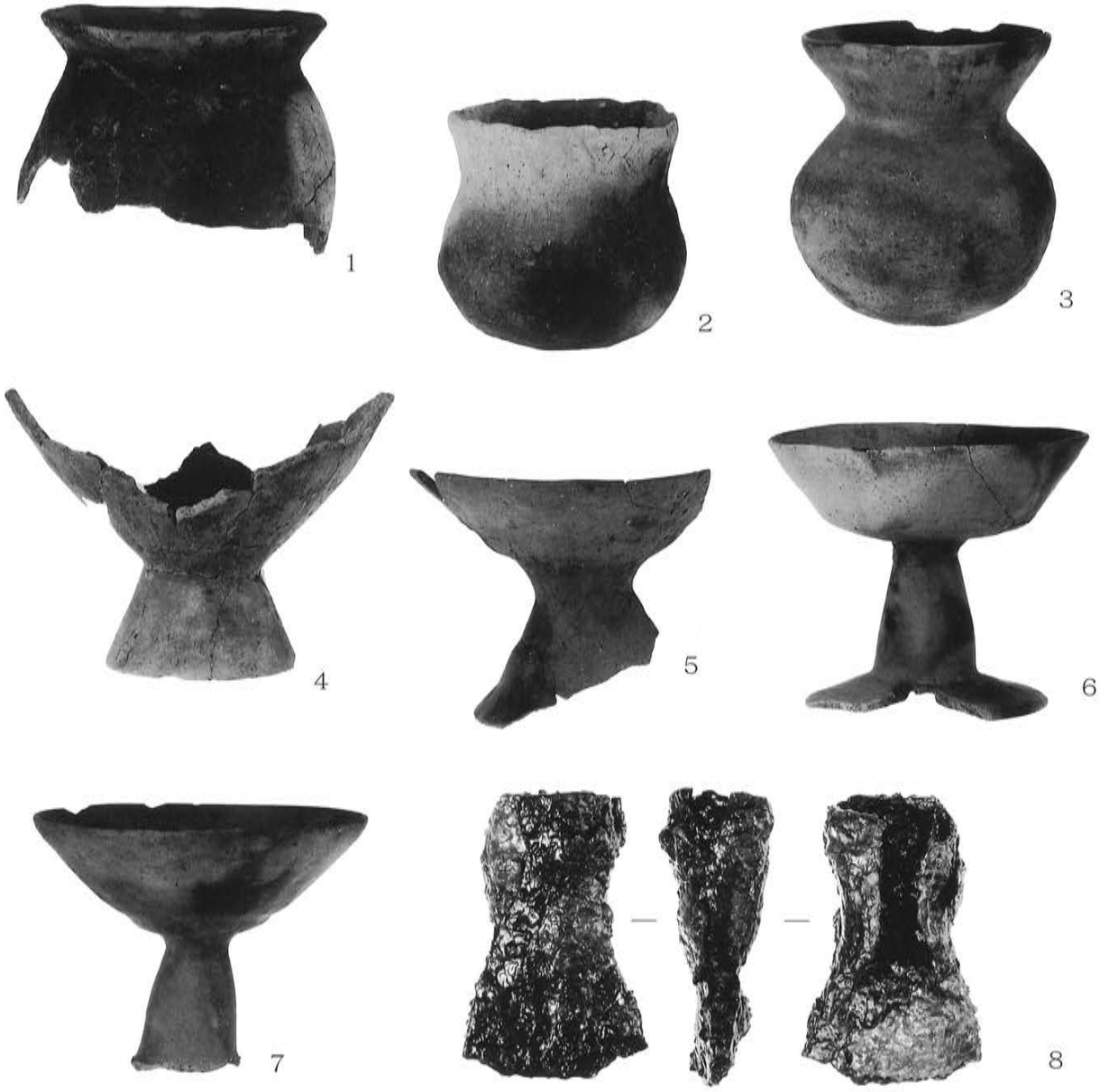
1

2

3

4

1号住居跡出土遺物



5号住居跡出土遺物

6号住居跡出土遺物(1)

3

4

6号住居跡出土遺物(2)

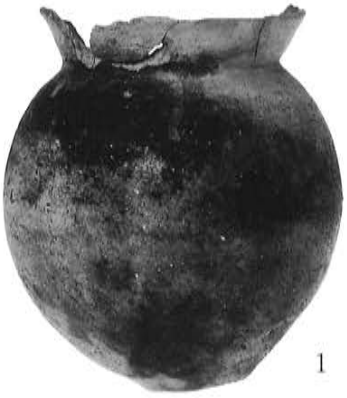
1

2

3

4

9号住居跡出土遺物



1

2

11号住居跡出土遺物(1)

3

4

11号住居跡出土遺物(2)

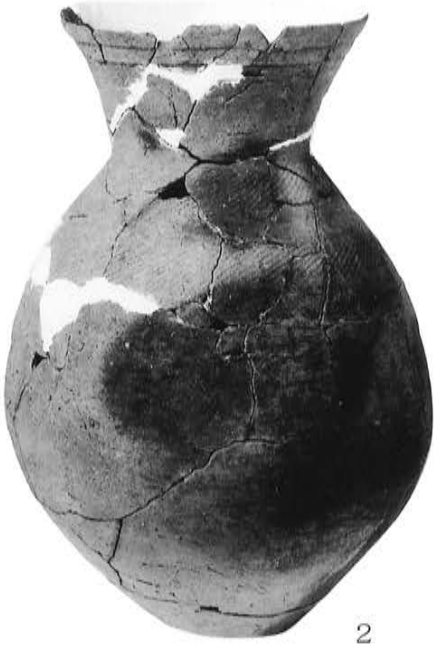
1

13号住居跡出土遺物

1

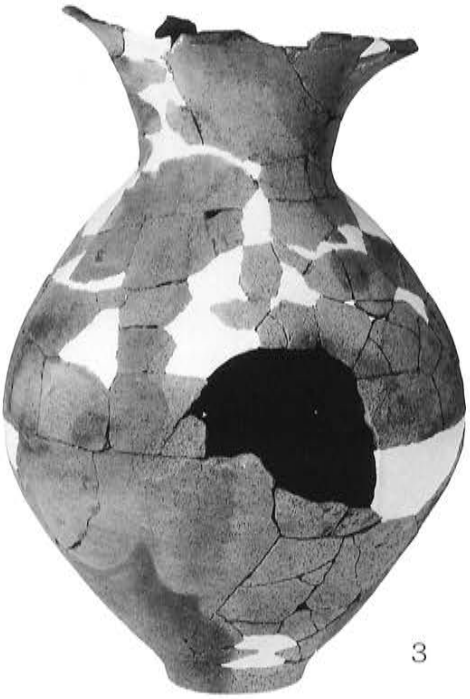
14号住居跡出土遺物

1



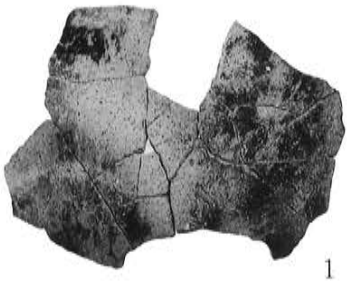
2

15号住居跡出土遺物(1)



3

15号住居跡出土遺物(2)



1

2

3

16号住居跡出土遺物

1

2

3

4

17号住居跡出土遺物(1)

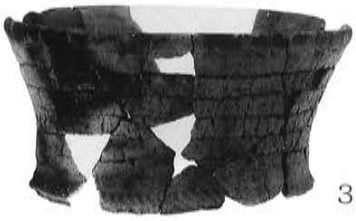
5

6

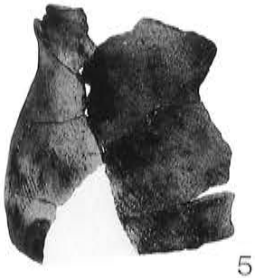
17号住居跡出土遺物(2)

1

2



3

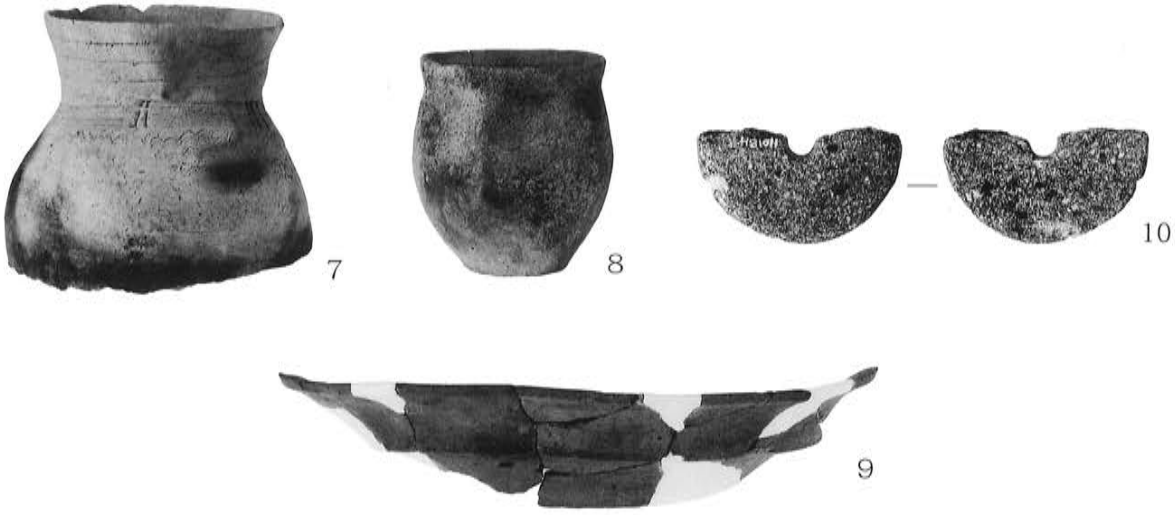


5

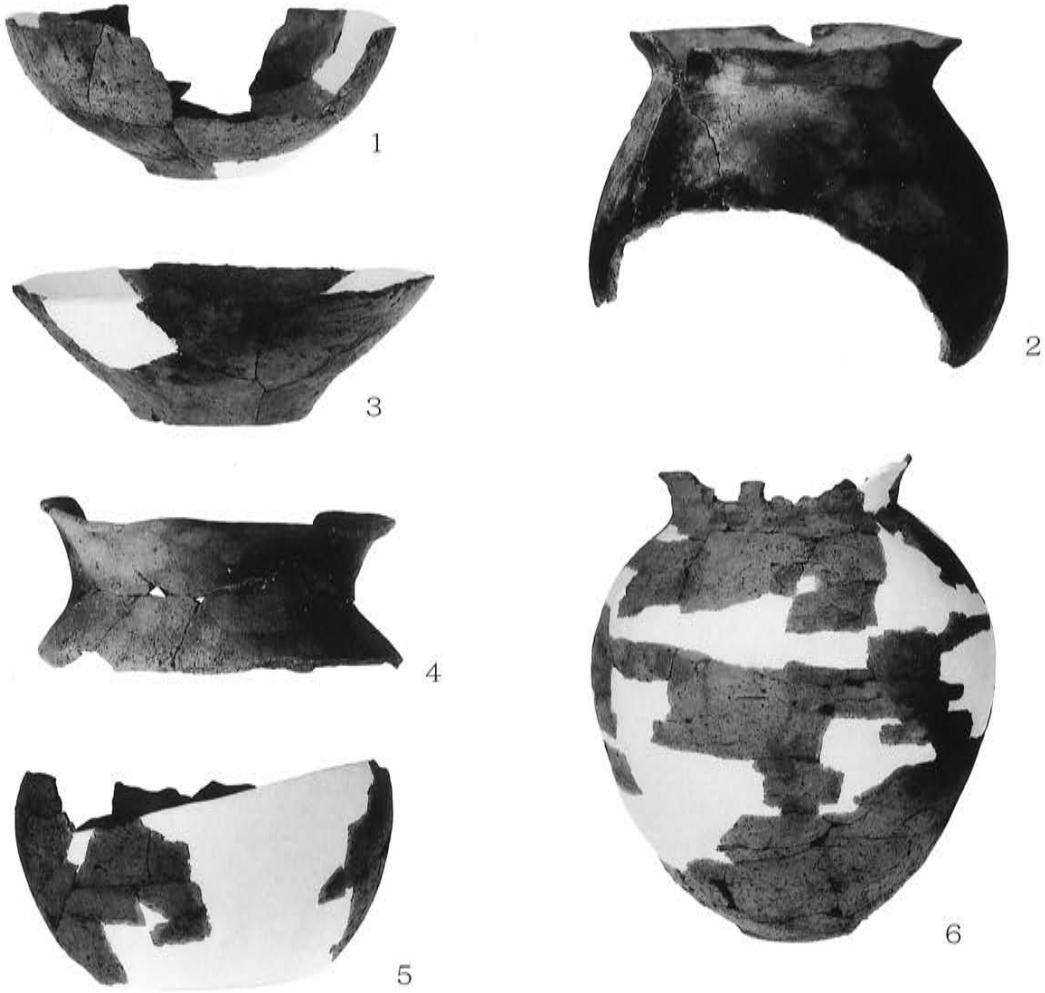
6

4

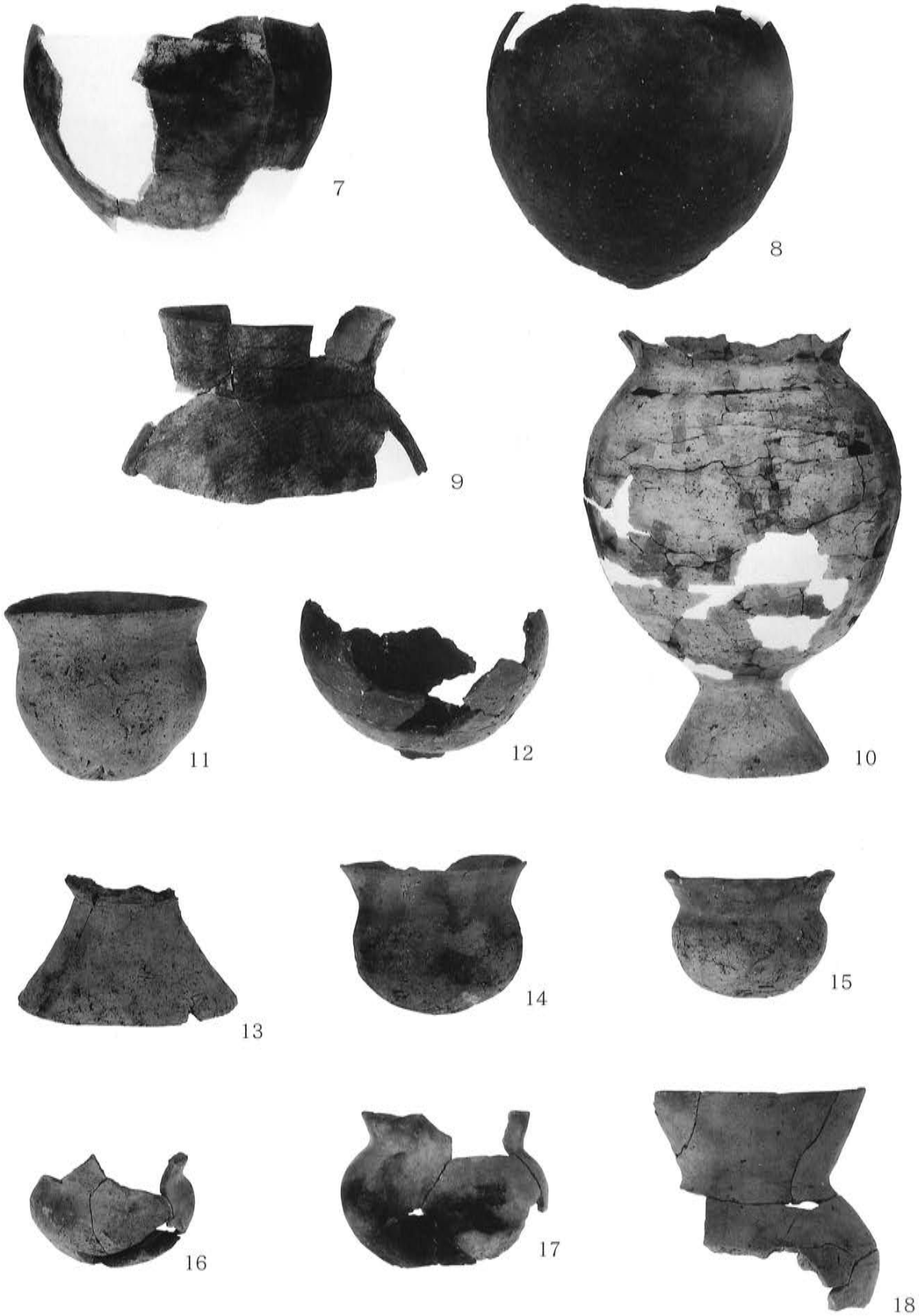
18号住居跡出土遺物(1)



18号住居跡出土遺物(2)



19号住居跡出土遺物(1)



19号住居跡出土遺物(2)

19

20

21

22

23

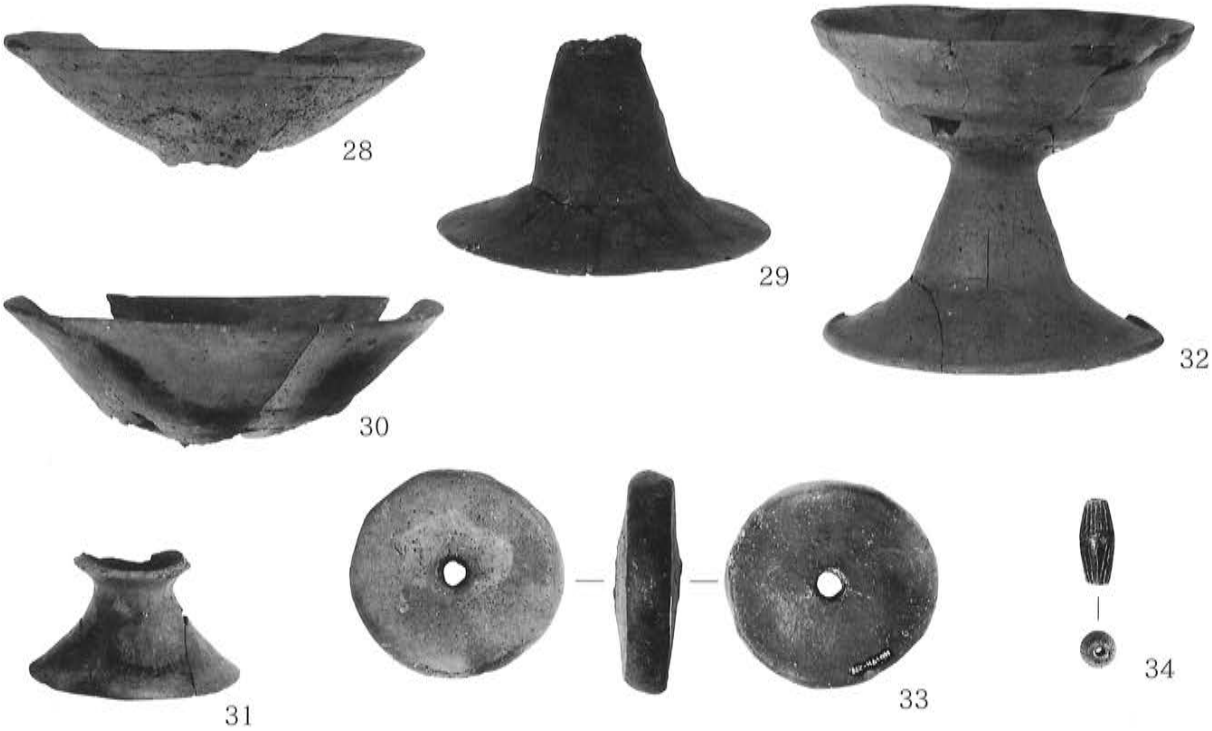
24

25

26

27

19号住居跡出土遺物(3)



19号住居跡出土遺物(4)

20号住居跡出土遺物

28号土坑出土遺物

遺構外出土遺物

抄　　録

フリガナ	ヒトミオオヤツ　イセキ
書名	人見大谷津遺跡
副書名	県営畑地帯総合土地改良事業横野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	―――
シリーズ名	松井田町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編集者名	壁　伸明
編集機関	松井田町教育委員会
発行機関	松井田町教育委員会
編集機関所在地	〒379―0292　群馬県碓氷郡松井田町大字新堀245　　Tel027―393―1111
発行年月日	西暦2002年3月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひとみおおやついせき 人見大谷津遺跡	ぐんまけんうすいぐんまついだまち 群馬県碓氷郡松井田町 おおあざひとみあざおおやつ 大字人見字大谷津 3190-18他	104019 40-0204	36°16′37″	138°50′48″	20000928 ～ 20020325	6420m²	土地改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
人見大谷津遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代 中世	竪穴住居跡 土坑 溝 道路遺構	縄文土器・石器 土師器甕・高坏	縄文時代前期の良好な土器資料。 古墳時代前期の集落。 奈良・平安時代の道路遺構。

松井田町埋蔵文化財調査報告書第12集

人見大谷津遺跡

―県営畑地帯総合土地改良事業横野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成14年3月20日　印刷
平成14年3月25日　発行

編集・発行／松井田町教育委員会

〒379-0292　群馬県碓氷郡松井田町大字新堀245

Tel027―393―1111(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社